# 立木南遺跡

1988

千葉市教育委員会
財団法人 千葉市文化財調査協会

# 立木南遺跡

1988

千葉市教育委員会
財団法人 千葉市文化財調査協会

# 序

房総半島は豊かな食糧資源と住み良い自然環境に支えられ、古くから多くの人間が住んできました。先人の生活の痕跡は今、発掘調査という手段を経て「遺跡」という形で我々の目前に鮮やかに蘇っております。

この房総半島の中程に位置し、東京湾に面する千葉市も例にもれず膨大な数の遺跡が確認されております。特に東京の周辺都市として開発が盛んになった時期はちょうど埋蔵文化財に対する人々の意識の高まりとも重なり、それ以降今日に至るまで数多くの遺跡が明らかにされてきました。

立木南遺跡のある加曽利町周辺は、現在の市街地の縁辺に接しており、本年4月の都市モノレールの暫定開業などにより、新たな市街化の波が押し寄せている地域です。

この付近には、我が国最大の貝塚遺跡として著名な加曽利貝塚や滑橋貝塚などがあり、縄文時代の遺跡について、古くからその所在が知られてきました。しかし今回の調査によって、古墳時代から平安時代の遺跡についても良好な資料を得る事ができ、地域の歴史をたどる上で大きな成果をあげることが出来ました。

今回の発掘成果を報告することにより、単に学術資料というだけでなく、この地域での私達の祖先の生活の一端を明らかにする郷土の資料と成りえたならば、望外の喜びであります。

最後に、発掘調査から本書の刊行にいたるまでの間、ご指導・ご協力いただいた千葉県教育委員会・千葉市教育委員会・千葉市役所・千葉市立加曽利中学校の方々および地元の皆様方に対し心から厚くお礼申し上げます。

昭和63年3月

財団法人 千葉市文化財調査協会
理事長 吉田治郎

# 例　　言

1．本書は、千葉市立加曽利中学校の体育館新築事業に先立ち事前調査した千葉市加曽利町959－1 外に所在する立木南遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、昭和60年12月２日より昭和61年３月31日まで第１次調査、昭和61年６月13日より８月23日までを第２次調査として実施した。

3．発掘調査の実施は、千葉市の依頼により、千葉県教育委員会および千葉市教育委員会の指導を受け、財団法人千葉市文化財調査協会が行った。

4．整理作業は、昭和62年10月１日より昭和63年２月29日まで実施した。

5．発掘調査およびに整理作業の担当職員は次のとおりである。

| | | |
|---|---|---|
| 発掘調査 | 第１次調査（昭和60年度） | 倉田　義広 |
| | 第２次調査（昭和61年度） | 田中　英世・菊池　健一 |
| 整理作業 | 第１次調査分 | 倉田　義広 |
| | 第２次調査分 | 田中　英世・菊池　健一 |

6．本書の編集および執筆は、調査年次毎に各調査担当者が分担して行った。
　なお、石器類の実測・トレースは築瀬裕一の協力を得た。

7．本書に用いた遺構写真は、各担当者が撮影したものであり、遺物写真については日本大学学生、中島孝徳氏の撮影によるものである。

8．本書における航空写真は、沢本吉則写真事務所に委託したものである。

9．本書に収録した立木南遺跡の出土資料ならびに調査記録は、すべて千葉市埋蔵文化財調査センターで収蔵・保管している。

10．発掘調査から報告書刊行にいたるまで、ご指導を戴いた千葉県教育庁文化課、千葉市教育委員会文化課をはじめ、千葉市役所教育営繕課、千葉市立加曽利中学校などの関係諸機関各位にご協力をいただいた。深く感謝の意を表する。また現地での発掘作業から出土遺物の整理の過程でご協力いただいた多数の方々に感謝の意を表します。

# 凡　　例

1．遺構の縮尺は竪穴住居跡・掘立柱建物跡では１／60、カマドは１／30、土壙は１／40、溝跡は１／60と１／90を基本とし、その旨を各図に表示した。

2．遺構実測図中の方位はすべて磁北である。

3．遺構の主軸方位は、竪穴住居跡ではカマドを有するものについてのみ記載し、その方法はカマドを通る住居跡の中軸線が、磁北から何度傾くかを示した。掘立柱建物跡では、磁北に対する棟の方向を示したものである。土壙と溝跡については、長軸方向の示す角度である。

4．遺構実測図中における土層説明については、農林省農林水産技術会議事務局監修の1976年発行「新版 標準土色帖」を用いて表記した。

5．カマド実測図においては、旧状をとどめると考えられる粘土範囲について、図上にスクリントーンを貼ることで明確にした。

6．遺構説明において、カマドに対面する壁直下の柱穴を第５ピットと呼称し、柱穴位置の説明の簡便化を図った。

7．遺構図中における遺物番号を、遺物実測図、図版の遺物番号と一致させたため、図版中の番号に欠番等を生じた。また遺構図に見いだせない番号の遺物は出土位置不明のものである。

8．遺構図における●は土器、▲は鉄器、■は石器、□は紡錘車を示す。

9．遺物の縮尺は、土器１／４、土製品・石製品・鉄製品１／２を基本とし、その旨各図に表示した。

10．遺物の観察表における法量値は、推定復元値のみ（　　）をつけて示した。

11．土器に対する類別および赤色・黒色処理は、観察表に記載するとともに実測図にも加筆およびスクリントーンの貼り付けを行った。

12．遺物観察表中における土器の色調については、農林省農林水産技術会議事務局監修の1976年発行「新版 標準土色帖」を用いて表記した。

13．なお、本書中において使用した遺構番号は、現地作業に際してもちいたものを改訂している。その変更した遺構名の対照は別表に示す通りである。

# 目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
Ⅰ．調査にいたる経緯 …… 1
Ⅱ．遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅲ．調査の概要 …… 3
　1．遺跡の概要 …… 3
　2．調査の経過と方法 …… 4
Ⅳ．遺構と遺物 …… 7
　1．竪穴住居跡 …… 7
　2．掘立柱建物跡 …… 124
　3．土　壙 …… 137
　4．溝　跡 …… 153
Ⅴ．まとめ …… 156

# 挿　図　目　次

第1図　立木南遺跡と主な周辺遺跡分布図　2
第2図　立木南遺跡周辺の旧地形図 …… 2
第3図　立木南遺跡周辺地形図 …… 3
第4図　遺構配置図 …… 5
第5図　第1号住居跡遺物実測図 …… 7
第6図　第1号住居跡とカマド実測図 …… 8
第7図　第2号住居跡とカマド実測図 …… 10
第8図　第2号住居跡遺物実測図 …… 11
第9図　第3号住居跡実測図 …… 12
第10図　第3号住居跡カマド実測図 …… 13
第11図　第3号住居跡遺物実測図(1) …… 15
第12図　第3号住居跡遺物実測図(2) …… 16
第13図　第4号住居跡実測図 …… 18
第14図　第4号住居跡カマド実測図 …… 19
第15図　第4号住居跡遺物実測図 …… 20
第16図　第5号住居跡とカマドと遺物実測図22
第17図　第6号住居跡と遺物実測図 …… 24
第18図　第7・15号住居跡実測図 …… 25
第19図　第7・15号住居跡カマド実測図 … 26
第20図　第8号住居跡遺物実測図 …… 27
第21図　第8・9号住居跡と第8号住居跡カマド実測図 …… 28
第22図　第10号住居跡とカマド実測図 …… 30
第23図　第10号住居跡遺物実測図 …… 31

第24図　第11号住居跡実測図 …… 33
第25図　第11号住居跡遺物実測図 …… 34
第26図　第11号住居跡カマド実測図 …… 35
第27図　第12号住居跡とカマドと遺物実測図36
第28図　第13号住居跡とカマド実測図 …… 38
第29図　第13号住居跡遺物実測図 …… 39
第30図　第14・16号住居跡実測図 …… 40
第31図　第14・16号住居跡カマド実測図 … 41
第32図　第14号住居跡遺物実測図 …… 42
第33図　第15号住居跡遺物実測図 …… 43
第34図　第16号住居跡遺物実測図 …… 44
第35図　第17・18号住居跡実測図 …… 46
第36図　第17・18号住居跡カマド実測図 … 47
第37図　第19号住居跡と遺物実測図 …… 48
第38図　第20号住居跡実測図 …… 49
第39図　第20号住居跡カマドと遺物実測図· 50
第40図　第21号住居跡とカマド実測図 …… 51
第41図　第21号住居跡遺物実測図 …… 52
第42図　第22・23号住居跡と第23号住居跡カマド実測図 …… 55
第43図　第22・23号住居跡遺物実測図 …… 56
第44図　第24号住居跡とカマド実測図 …… 57
第45図　第24号住居跡遺物実測図 …… 58
第46図　第25号住居跡カマド実測図 …… 59
第47図　第25号住居跡実測図 …… 60
第48図　第25号住居跡遺物実測図 …… 61
第49図　第26号住居跡カマド実測図 …… 62
第50図　第26号住居跡実測図 …… 63
第51図　第26号住居跡遺物実測図 …… 64
第52図　第27号住居跡とカマド実測図 …… 66
第53図　第27号住居跡遺物実測図 …… 67
第54図　第28号住居跡カマド実測図 …… 68
第55図　第28号住居跡と遺物実測図 …… 69
第56図　第29号住居跡とカマドと遺物実測図70
第57図　第30号住居跡カマドと遺物実測図 71
第58図　第30号住居跡実測図 …… 72
第59図　第30·31·32号住居跡実測図 …… 73
第60図　第31号住居跡カマドと遺物実測図 74
第61図　第32号住居跡カマド実測図 …… 76
第62図　第32号住居跡遺物分布図 …… 77
第63図　第32号住居跡遺物実測図 …… 78
第64図　第33号住居跡実測図 …… 80
第65図　第33号住居跡カマド実測図 …… 81
第66図　第33号住居跡遺物実測図…… 82
第67図　第34号住居跡とカマド実測図 …… 84
第68図　第34号住居跡遺物実測図 …… 85
第69図　第35号住居跡とカマド実測図 …… 87
第70図　第35号住居跡遺物実測図 …… 88
第71図　第36号住居跡とカマド実測図 …… 90
第72図　第36号住居跡遺物実測図 …… 91
第73図　第37・38号住居跡実測図 …… 93
第74図　第37号住居跡カマド実測図 …… 94
第75図　第37・38号住居跡遺物分布図 …… 95
第76図　第37号住居跡遺物実測図 …… 96
第77図　第39号住居跡と炉実測図 …… 98
第78図　第40号住居跡とカマド実測図 …… 99
第79図　第39・40号住居跡遺物分布図 ……100
第80図　第39号住居跡遺物実測図 ……100
第81図　第40号住居跡遺物実測図 ……101
第82図　第41号住居跡カマド実測図 ……102
第83図　第41号住居跡実測図 ……103
第84図　第41号住居跡遺物実測図 ……104
第85図　第42号住居跡実測図 ……106
第86図　第42号住居跡カマドと遺物実測図 107

第 87 図　第44号住居跡と炉と遺物分布図 109
第 88 図　第44号住居跡遺物実測図(1) ……110
第 89 図　第44号住居跡遺物実測図(2) ……111
第 90 図　第45号住居跡と炉と遺物実測図 115
第 91 図　第46号住居跡と炉と遺物実測図 117
第 92 図　第47号住居跡実測図 ……119
第 93 図　第47号住居跡遺物跡実測図……121
第 94 図　第１号掘立柱建物跡実測図……124
第 95 図　第２号掘立柱建物跡実測図……125
第 96 図　第３号掘立柱建物跡実測図 ……126
第 97 図　第４号掘立柱建物跡実測図 ……127
第 98 図　第５号掘立柱建物跡実測図 ……128
第 99 図　第６号掘立柱建物跡実測図 ……130
第 100 図　第７号掘立柱建物跡実測図 ……131
第 101 図　第8･9･10号掘立柱建物跡実測図 133
第 102 図　第11・12号掘立柱建物跡実測図 134
第 103 図　第13・14号掘立柱建物跡実測図 136
第 104 図　第１号土壙実測図 ……137
第 105 図　第２号土壙実測図 ……138
第 106 図　第３号土壙と遺物実測図 ……139
第 107 図　第５号土壙と遺物実測図……140
第 108 図　第６・７・13号土壙と遺物実測図 142
第 109 図　第８・９号土壙と遺物実測図 …144
第 110 図　第10号土壙と遺物実測図 ……145
第 111 図　第11号土壙と遺物実測図 ……147
第 112 図　第12号土壙と遺物実測図 ……149
第 113 図　4F･4Gグリッド土壙群実測図151･152
第 114 図　第１・３号溝跡実測図 ……154
第 115 図　第２号溝跡実測図 ……155

# 図　版　目　次

ＰＬ１　第Ⅰ次調査区航空写真
　　第Ⅱ次調査区航空写真
ＰＬ２　第１号住居跡
　　第２号住居跡
ＰＬ３　第３号住居跡
　　第４号住居跡
ＰＬ４　第５号住居跡
　　第６号住居跡
ＰＬ５　第７号住居跡
　　第８号・第９号竪穴遺構
ＰＬ６　第10号住居跡
　　第11号住居跡
ＰＬ７　第12号住居跡
　　第13号住居跡
ＰＬ８　第14号住跡カマド
　　第15号住居跡カマド
ＰＬ９　第16号住居跡
　　第17・18号住居跡
ＰＬ10　第19号・第20号住居跡
　　第21号住居跡
ＰＬ11　第24号住居跡
　　第25号住居跡
ＰＬ12　第26号住居跡
　　第27号・第28号・第29号住居跡
ＰＬ13　第30号住居跡
　　第30号・第31号・第32号住居跡
ＰＬ14　第33号住居跡
　　第34号住居跡

PL15 第35号住居跡
第36号住居跡
PL16 第37号住居跡
第38号・第39号住居跡
PL17 第40号・第41号住居跡
第42号住居跡
PL18 第44号住居跡
第44号住居跡遺物出土状況
PL19 第45号住居跡
第46号住居跡
PL20 第47号住居跡
第Ⅱ次調査風景
PL21 第1号掘立柱建物跡
第2号掘立柱建物跡
PL22 第3号掘立柱建物跡
第4号掘立柱建物跡
PL23 第5号掘立柱建物跡
見学会風景
PL24 第7号掘立柱建物跡
第8号・9号・10号掘立柱建物跡
PL25 第12号掘立柱建物跡
第13号掘立柱建物跡
PL26 第1号土壙
第2号土壙
第3号土壙
PL27 第5号土壙
第6号土壙
第7号土壙
PL28 第8号土壙
第10号土壙
第12号土壙
PL29 第11号土壙
PL29 第11号土壙遺物出土状況
第13号土壙
PL30 第1号住居跡出土遺物
第2号住居跡出土遺物
第3号住居跡出土遺物
PL31 第3号住居跡出土遺物
PL32 第3号住居跡出土遺物
第4号住居跡出土遺物
PL33 第4号住居跡出土遺物
第5号住居跡出土遺物
第6号住居跡出土遺物
第8号住居跡出土遺物
PL34 第10号住居跡出土遺物
第11号住居跡出土遺物
PL35 第11号住居跡出土遺物
第12号住居跡出土遺物
第13号住居跡出土遺物
PL36 第14号住居跡出土遺物
第15号住居跡出土遺物
第16号住居跡出土遺物
PL37 第21号住居跡出土遺物
第23号住居跡出土遺物
第24号住居跡出土遺物
PL38 第25号住居跡出土遺物
第26号住居跡出土遺物
第28号住居跡出土遺物
PL39 第27号住居跡出土遺物
第31号住居跡出土遺物
第32号住居跡出土遺物
第33号住居跡出土遺物
PL40 第33号住居跡出土遺物
第34号住居跡出土遺物

PL40　第35号住居跡出土遺物
PL41　第35号住居跡出土遺物
　　第36号住居跡出土遺物
　　第37号住居跡出土遺物
PL42　第37号住居跡出土遺物
　　第39号住居跡出土遺物
　　第40号住居跡出土遺物
　　第42号住居跡出土遺物
PL43　第44号住居跡出土遺物(1)
PL44　第44号住居跡出土遺物(2)
PL45　第45号住居跡出土遺物
　　第47号住居跡出土遺物
PL46　第5号土壙出土遺物
　　第7号土壙出土遺物
　　第8号土壙出土遺物
　　第10号土壙出土遺物
PL47　第11号土壙出土遺物
　　第12号土壙出土遺物

# I　調査に至る経緯

千葉市立加曽利中学校の体育館老朽化に伴い千葉市役所教育営繕課では、学校敷地の一画を予定地とする新築工事を計画した。該当地における埋蔵文化財の有無を市文化課を通じて千葉県教育庁文化課に問い合わせた結果、遺跡が所在する旨の回答が為された。これを受けて県教育庁文化課・市教育委員会文化課および市教育営繕課の３者による協議が為されたものの、当初の予定地の他に適当な場所が無く、やむなく発掘調査をして記録保存をすることになり、発掘調査は、財団法人千葉市文化財調査協会が行うことになった。

調査は、昭和60・61年の２年度に別けて行うこととし、昭和60年12月２日から約1,800㎡の第１次調査を、翌61年の６月13日から約1,000㎡の第２次調査を行った。

# II　遺跡の位置と環境

立木南遺跡は、千葉市立加曽利中学校の敷地内に位置し千葉市加曽利町959－1外を代表地番とする。千葉市及び千葉県発行の埋蔵文化財分布地図による立木南遺跡の位置は、今回の調査地からやや隔った西側に示される。しかし今回の調査地とは基本的に同じ台地を共有し、また遺物等の採集状況等からも遺跡としての連続性をもつことから、今回の調査地も立木南遺跡の一部に含めて報告する。

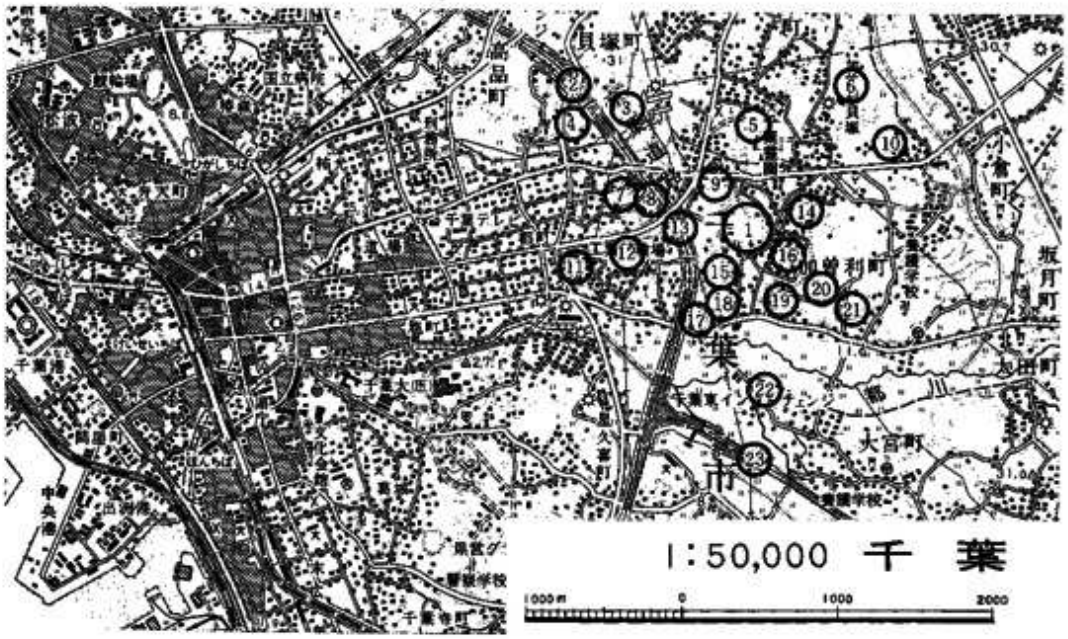
調査地は、この台地の東側縁辺部にあたる都川の支谷に面した緩斜面を対象とした。

都川は千葉市東南の誉田付近に源をもち、市街地を東西に横切って東京湾へと注ぐ市内有数の河川である。多部田方向から西へ下る都川の本谷は、市街地にさしかかる手前の星久喜の付近で、鎌取方向からの支谷と合流する。この合流部のほぼ真北に、小さく北上する支谷があり、この支谷に突き出した標高27～30ｍの舌状台地上に遺跡は立地する。

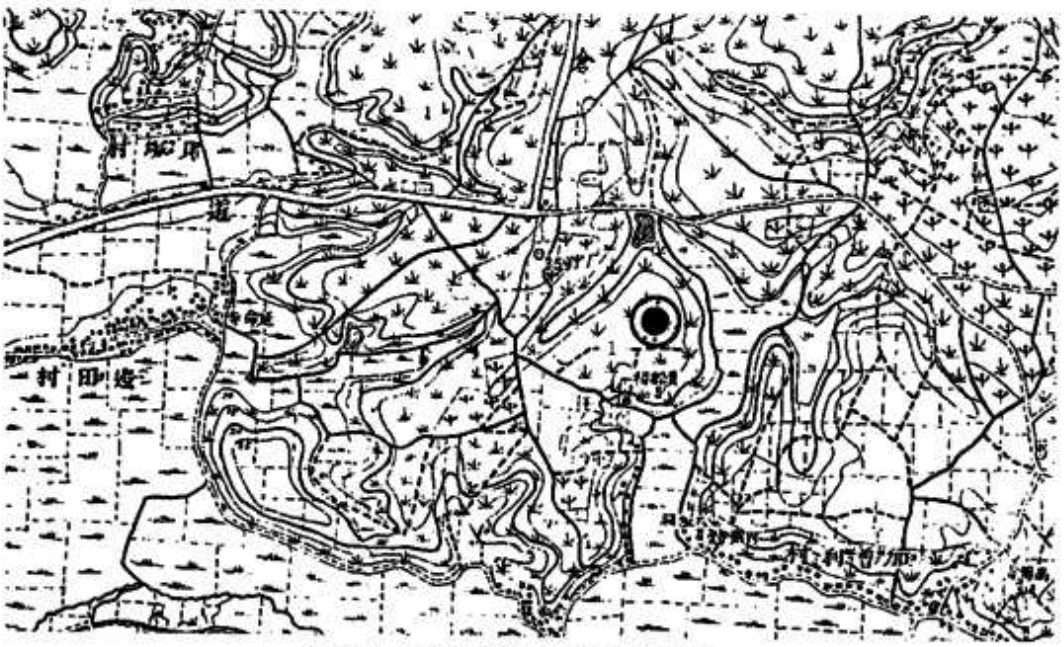
調査地は、その中央部に東側の支谷に向けて開口する緩やかな谷が入り、この谷の縁沿いに遺構が広がる。調査地北側は、土砂採取によると思われる削平をうけ、現在は崖となっている。

周辺には、縄文時代の加曽利貝塚や荒屋敷貝塚などの遺跡が所在し、また本遺跡で検出されたような古墳から平安時代についても新山古墳群や立木遺跡などの諸遺跡が河川に面した台地上にかなり濃密に分布していることが、分布調査の結果等により明らかとなっている。

なお今回の調査では、遺構こそ検出されなかったが、かつてのグランド造成のおりに縄文時代中期の土器などが多数出土したと言われており、本台地上にも周辺の貝塚遺跡と同時期の集落が営まれていたことは疑いない。




**第1図　立木南遺跡と主な周辺遺跡分布図**



**第2図　立木南遺跡周辺の旧地形図**　　1：20,000

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1．立木南遺跡 | 2．荒屋敷貝塚 | 2．東辺田遺跡 | 4．台門貝塚 |
| 5．大作遺跡 | 6．加曽利貝塚 | 7．天神台遺跡 | 8．山王遺跡 |
| 9．立木遺跡 | 10．古山遺跡 | 11．向ノ台遺跡 | 12．松原遺跡 |
| 13．聖人塚古墳 | 14．花輪貝塚 | 15．田向遺跡 | 16．花輪遺跡 |
| 17．和田遺跡 | 18．田向南遺跡 | 19．新山古墳群 | 20．姫宮遺跡 |
| 21．台畑遺跡 | 22．下和田西遺跡 | 23．城之腰遺跡 | |

# Ⅲ 調 査 の 概 要

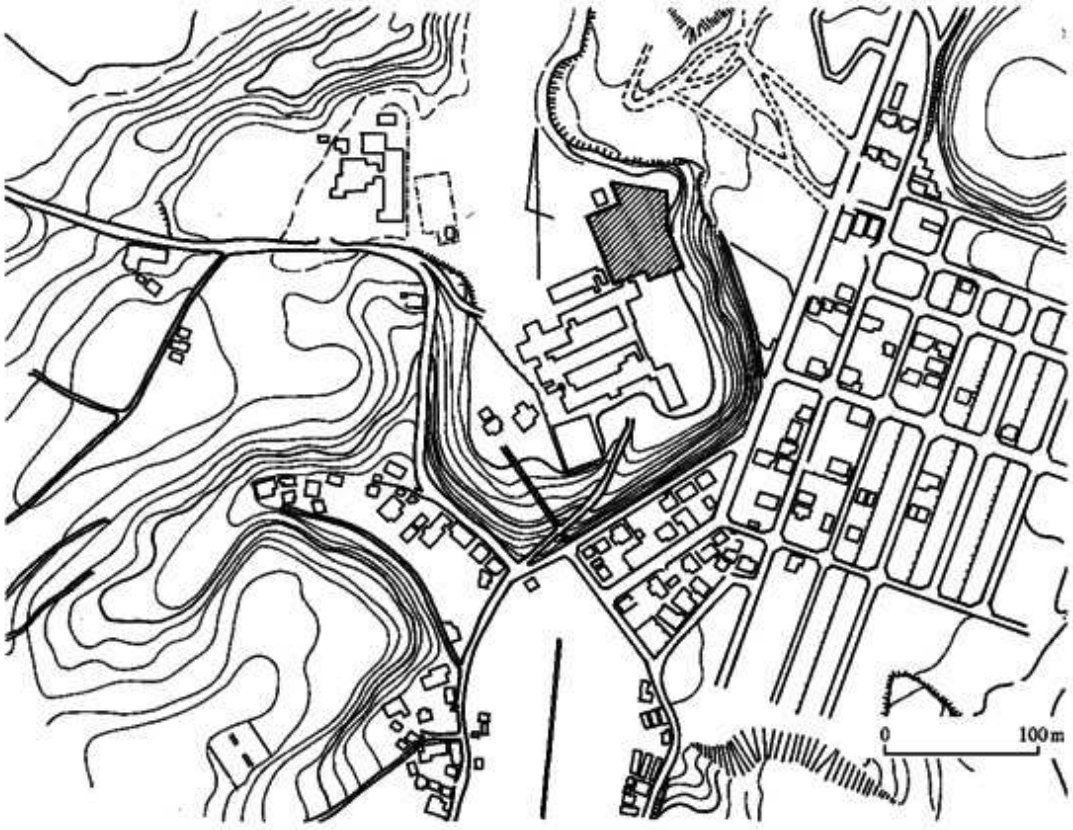
## 1．遺跡の概要

本遺跡は、都川の本谷から分岐して北上する小支谷に面した舌状台地の東側緩斜面に立地する。

遺跡としての広がりは、調査地西側に接し現在グランドとなっている台上平坦部と、土砂採集のため消失してはいるが北側にも延びていたと考えられる。

本遺跡での遺構は、調査地中央にある東に向けて開口する緩やかな谷の縁辺に広がり、特に住居跡群は、台上から南向きの緩斜面にかけて集中する。

本遺跡で検出された主な遺構は、古い時期から古墳時代前期五領期の竪穴住居跡４軒、後期鬼高期の竪穴住居跡３軒、奈良時代の竪穴住居跡10軒、平安時代竪穴住居跡21軒、他に時期不明の竪穴住居跡８軒と掘立柱建物跡13棟である。遺物としては前期及び中期の縄文式土器片も出土したが、それに伴う遺構は検出されなかった。




第３図　立木南遺跡周辺地形図

## 2．調査経過と方法

関係諸機関との協議の結果、建設予定地を谷津に面した東側緩斜面側と西側平坦面との２地区に分け、それぞれ昭和60年度と翌61年度の２年度に分けて調査することとした。

調査によって生じる排土は、将来の建設工事に際し整地用として不可欠であり、また付近に適当な土砂置き場も確保できないことから２地区に分けた調査区のうちの調査のおよばない片方に盛り土することにした。

調査は、該当地が遺構の所在が確実視され、また面積も比較的小規模なことから確認調査の手順を省略して当初から本調査を実施することとした。

昭和60年12月２日から昭和60年度分調査地約1800㎡全域の表土を重機によって除去した。除去作業の終了をまって作業員を随時投入し全域におよぶ清掃作業を行い、確認された遺構から順次遺構調査を開始した。この段階で当初の予想に反して遺構相互の重複関係も複雑でありかつ遺構総数もかなりオーバーすることが判明したため、昭和61年２月に入ると専従の調査員を増員して対応した。

決められた狭い範囲のなかでの排土の移動は、盛り土の高さが増すとともに困難な作業となった。しかし周囲の校舎等とのからみから土砂置き場を容易に拡張することもままならず調査の進捗を妨げる大きな原因となった。

３月も半ばを過ぎてようやく調査終了のめどがたち、遺構全体図の作成と遺跡の全景を航空撮影により完了させ、３月31日をもって第１次調査を終了した。

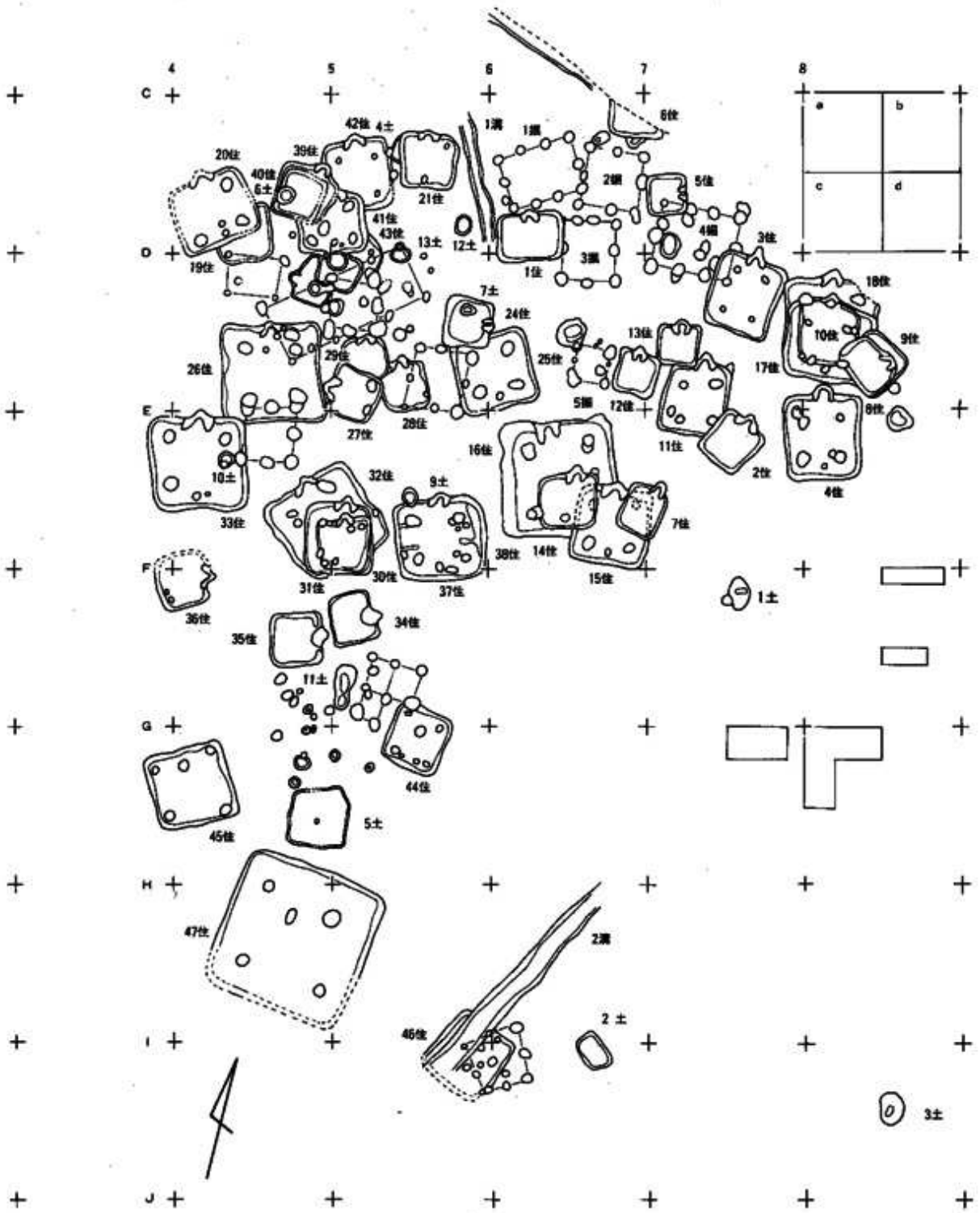
第２次調査は、昭和61年６月13日から約1000㎡を対象として実施した。

前年度に問題となった土砂の置き場は、前の調査範囲が利用できることから今回は比較的余裕をもって対応することが出来た。また前回の結果から複雑な重複関係、あるいは遺構の数量についてかなりの規模を予想することが出来たため、当初より専従調査員２人体制で調査に臨んだ。

この地区は旧校舎が建てられていた場所にあたり、基礎工事が深部にまでおよんでいたため、多くの遺構が撹乱を受けていた。また最も西側ではグランドの造成工事に因ると見られるソフトローム面にまでおよぶ大規模な削平も認められた。

調査は８月23日をもって総ての作業を終了した。

調査の単位は、調査地全域に10×10ｍの方眼をかけ、北から南に向かってＡ，Ｂ，Ｃ，……の順番にアルファベットの大文字の記号を与えた。次に西から東に向けて１，２，３，……ゲ算用数字を与えた。これによって設定されたグリッドを大グリッドと呼び、この中をさらに５×５ｍの小グリッド４個に細分し、アルファベットの小文字で北西グリッドをａ、以下北東をｂ南西をｃとして各区別した。すなわち１小グリッドは、北西杭を基準として例えば、「３Ａ-


4
5
6
7
8
C
D
E
F
G
H
I
J
a
b
c
d
1溝
2溝
1掘
2掘
3掘
4掘
5掘
1住
2住
3住
4住
5住
6住
7住
8住
9住
10住
11住
12住
13住
14住
15住
16住
17住
18住
19住
20住
21住
24住
25住
26住
27住
28住
29住
30住
31住
32住
33住
35住
36住
37住
38住
39住
40住
41住
42住
43住
44住
45住
46住
47住
1土
2土
3土
4土
5土
6土
7土
9土
10土
11土
12土
13土

第4図　遺構配置図

d区」としてあらわした。

ここで設定されたグリッド杭をもって、遺物の取り上げおよびに遺構の調査を進める上での基準とした。

遺構の掘り下げにあたっては、遺構中央に十文字ないし一文字の土層観察用畦を残して掘り下げ、遺物は基本的に全点を記録して調査した。

基本層序は第1層が表土、第2層が褐色土層で古墳時代から奈良・平安時代におよぶ遺物包含層である。第3層は黒色土層で縄文時代遺物の包含層である。しかし第3層は遺跡全体で認められるものではなく谷津部分においてのみ認められ、僅かばかりの縄文式土器を包含することが確認された。第4層はソフトローム層である。

# Ⅳ 遺構と遺物

立木南遺跡では、第１次調査において奈良時代から平安時代前半を中心とする竪穴住居跡、掘立柱建物跡からなる遺構群が検出された。しかし確実に古墳時代にさかのぼりうる遺構は、第３号土壙の例を除くと、第16号竪穴住居跡にその可能性が考えられたものの断定するに足る資料の検出がなく、その後の調査に期待がもたれた。

その後第２次調査を行った結果、古墳時代後期の鬼高期の竪穴住居跡ばかりでなくさらにさかのぼった古墳時代前期五領期の竪穴住居跡を検出するに至り、また新しい時代の方でもより良好な竪穴住居跡や土壙の資料を加えることができた。

しかし第２次調査では調査区北半部で竪穴住居跡相互の切り合いと、さらに掘立柱建物跡などからなる遺構の重複が激しく、またその上に旧校舎の基礎工事に伴う撹乱が縦横に入り乱れて、検出作業をおよそ容易ならざるものとしていた。

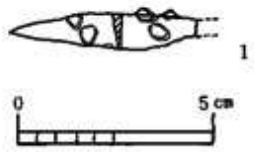
## １．竪穴住居跡

竪穴住居跡は第１次調査において奈良時代から平安時代前半を中心とする18軒が検出された。第２次調査では古墳時代前期の五領期の竪穴住居跡4軒と後期鬼高期から平安時代にかけての25軒を検出した。

**第１号住居跡**（第５図・第６図）

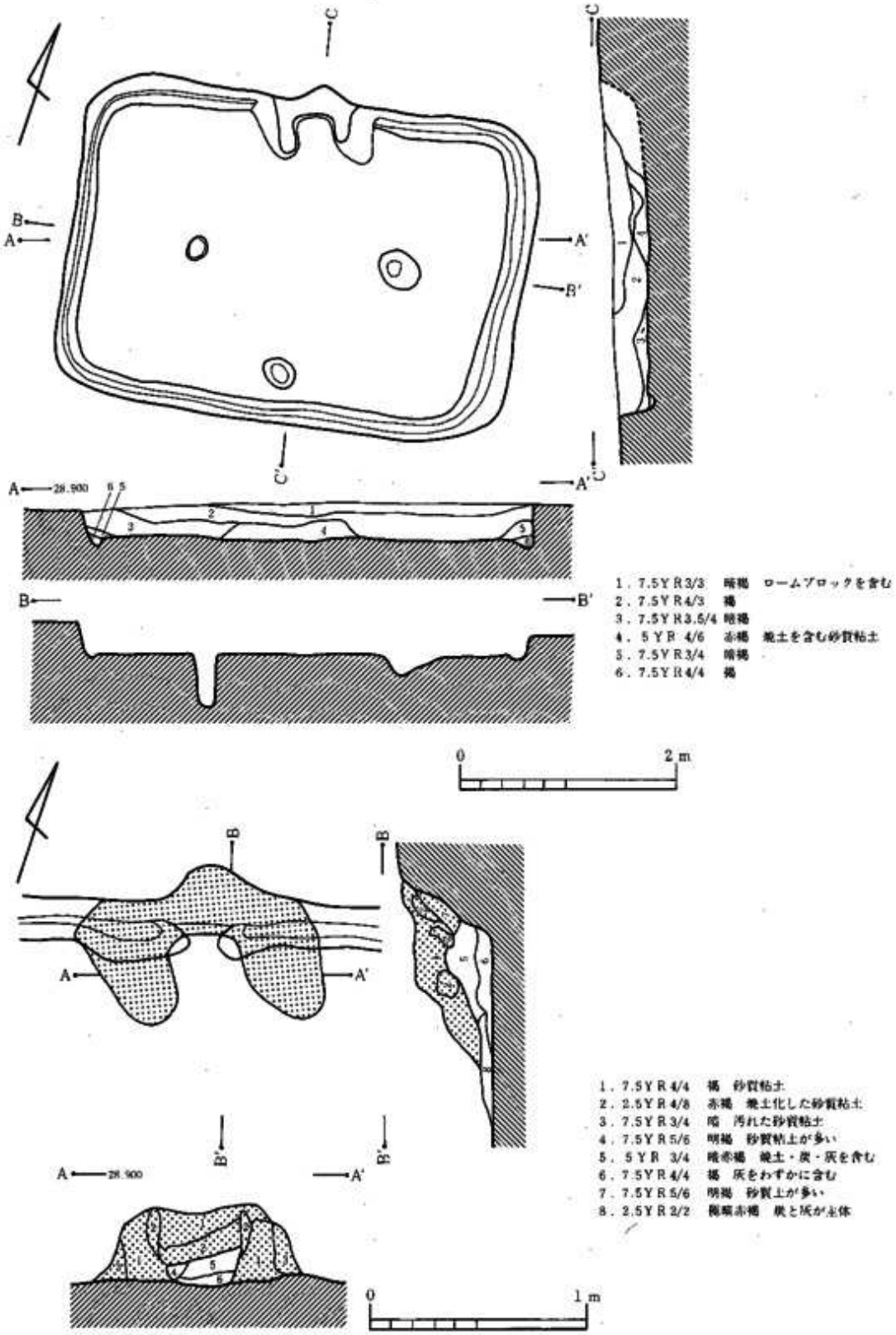
本住居跡は、調査区北西の６Ｃ－ｃグリッドに位置する。北を第１号掘立柱建物跡に、東を第２号掘立柱建物跡に接するが、重複部分が少ないため明確な新旧はつけられない。規模は3.1×4.2ｍと横長の長方形を呈し、主軸方位はＮ－15°10′－Ｗである。壁高は30cmを測る。周溝は、幅20cm前後、深さ10cmでカマドの両袖下まで巡っている。柱穴は、竪穴中央の東西に径20～40cmの主柱穴２本と、カマドに対面する南壁直下のいわゆる第５ピット１本の計３本が検出された。第５ピットは径30cm、深さ30cmを測る。床面はハードローム中に作られ竪固である。カマドは、北壁中央に位置し、主軸長70cm、幅90cmと小型である。袖は幅40cmの砂質粘土により構築されている。火床の焼けは弱い。カマド構築に際しては煙道部のみ壁を掘り込んでいる。

出土遺物は極めて少なく、かつ小破片である。図示し得たのは刀子１点にとどまる。




**第５図**

**第１号住居跡遺物実測図**



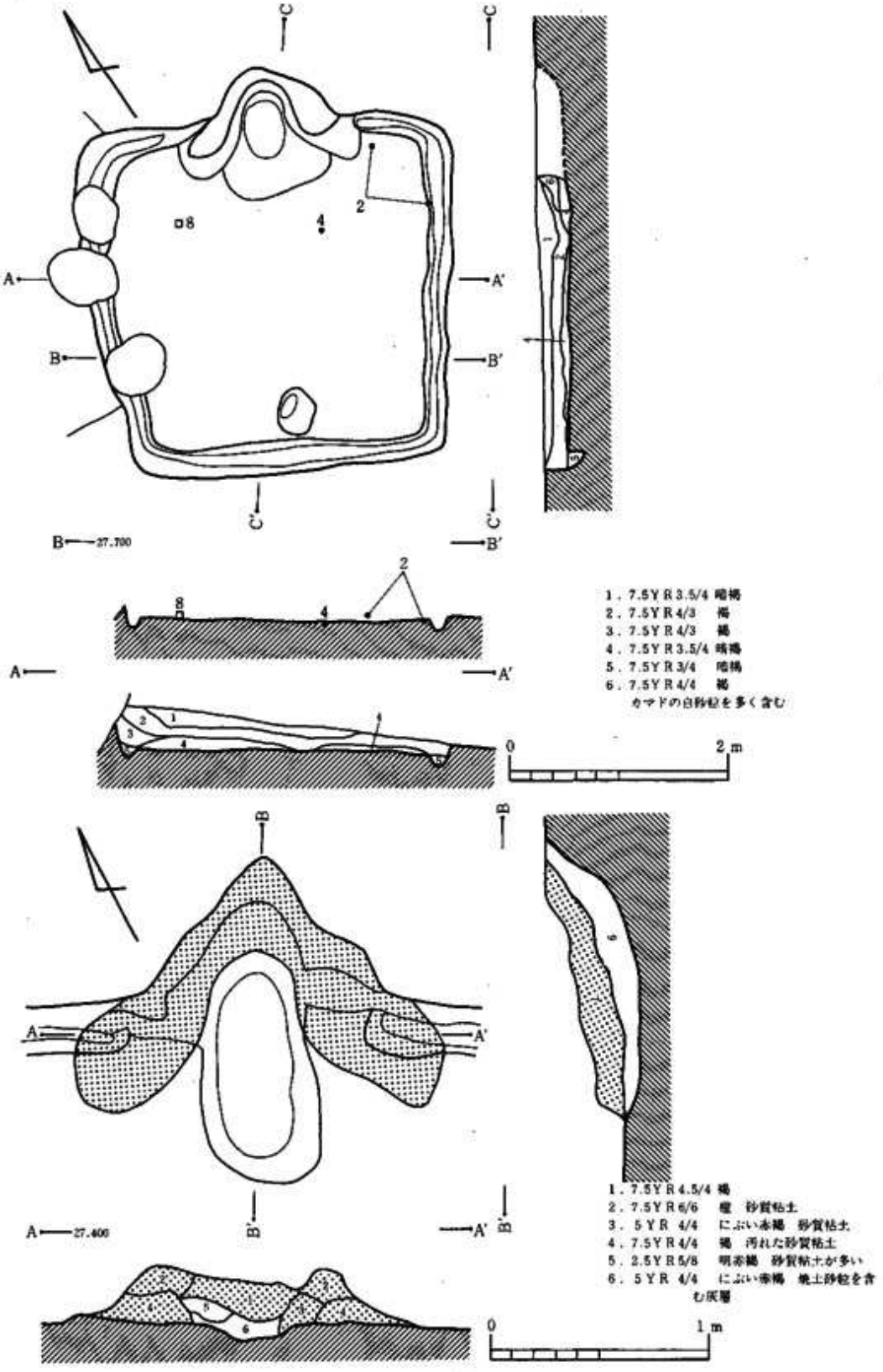

**第6図　第1号住居跡とカマド実測図**

**第２号住居跡**

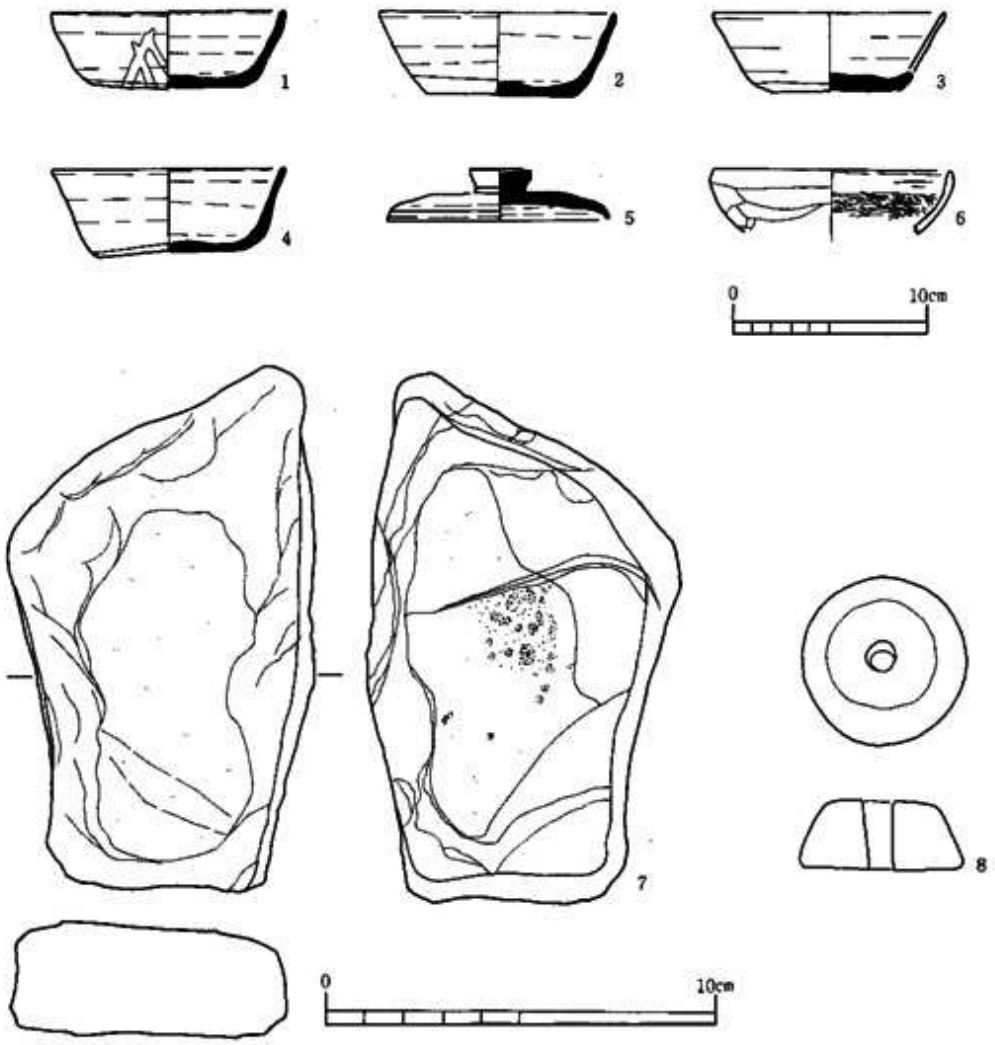
本住居跡は、６Ｅ－ａおよび６Ｅ－ｄグリッドにまたがる。西壁は第11号竪穴住居跡を切っており本住居跡の方が新しい。規模は3.2×3.2ｍの方形を呈するが、北壁に比べて南壁の長さがわずかに短い。主軸方位はＮ－29°30′－Ｅである。壁高は30cmを測る。周溝は、幅10cm前後、深さ10cmでカマド下を除いて全周する。柱穴は、カマドに対面する南壁直下の第５ピット１本が検出され、径40cm、深さ20cmを測る。床面はソフトローム中に作られ軟弱である。カマドは、北壁中央に位置し主軸長1.40ｍ・幅1.50ｍである。袖は幅40cmの砂質粘土により構築され、火床の焼けは弱い。壁を大きく掘りくぼめてカマドを構築する。

遺物には、須恵器杯および蓋、土師器杯と石製紡錘車と不明石製品があり、そのうち本住居跡に伴うのは、須恵器杯№２～４と蓋および石製紡錘車である。須恵器杯はいずれも篦切りにより切り離され、その後の調整には回転篦削りを行う杯№２と手持ち篦削りの杯№３・４の両者がみられる。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL- 30 | 須恵器<br>杯 | 口径 12.2<br>器高 4.0<br>底径 8.1 | 開きながら立ち上がった体部は、口縁部でわずかに屈曲する。回転篦切り後体部下端と底部周縁を回転篦削り。 | 白色微砂粒<br>石英粒・長石粒多量含有 | 良好 | 10ＹＲ<br>2/5<br>灰黄褐 | 2/3遺存 |
| 2<br>PL 30 | 須恵器<br>杯 | 口径 12.4<br>器高 4.3<br>底径 7.7 | 直線的に大きく開く体部をもつ。回転篦切り後体部下端と底部周縁を回転篦削り。 | 石英粒・長石粒多量、赤褐色粒少量含有 | 良好<br>硬質 | 2.5Ｙ Ｒ<br>4/7<br>赤褐 | 4/5遺存 |
| 3<br>PL- 30 | 須恵器<br>杯 | 口径 12.2<br>器高 4.1<br>底径 6.6 | 直線的に大きく開く体部をもつ。回転篦切り後体部下端と底部周縁を手持ち篦削り。 | 白色微砂粒<br>石英粒・長石粒多量含有 | 良好 | 2.5Ｙ Ｒ<br>7/2<br>灰黄 | 3/4欠損 |
| 4<br>PL 30 | 須恵器<br>杯 | 口径 12.2<br>器高 4.3<br>底径 7.7 | 直線的に大きく開く体部をもつ。回転篦切り後体部下端と底部周縁を手持ち篦削り。 | 白色微砂粒多量、赤褐色粒少量含有 | 良好<br>硬質 | 7.5Ｙ Ｒ<br>6/4<br>にぶい橙 | 体部の2/3遺存<br>底部外面に「○」の篦記号 |
| 5<br>PL- 30 | 須恵器<br>蓋 | つまみ径3.3<br>器高 4.3<br>底径 7.7 | つまみは、中央がやや凹む偏平。体部は小径で口縁で小さく折れ曲る。 | 白色微砂粒、石英粒・長石粒多量含有 | 良好 | 2.5Ｙ Ｒ<br>5/1<br>黄灰 | カマド内<br>4/5欠損 |
| 6<br>PL- 30 | 土師器<br>杯 | 口径 12.4<br>現存高<br>3.2 | 内反して立ち上がる体部をもち、口縁は小さく内傾して体部との境に稜を有す。 | 赤褐色粒少量含有 | 良好 | 2.5Ｙ Ｒ<br>5/8<br>明褐色 | |




**第7図　第2号住居跡とカマド実測図**

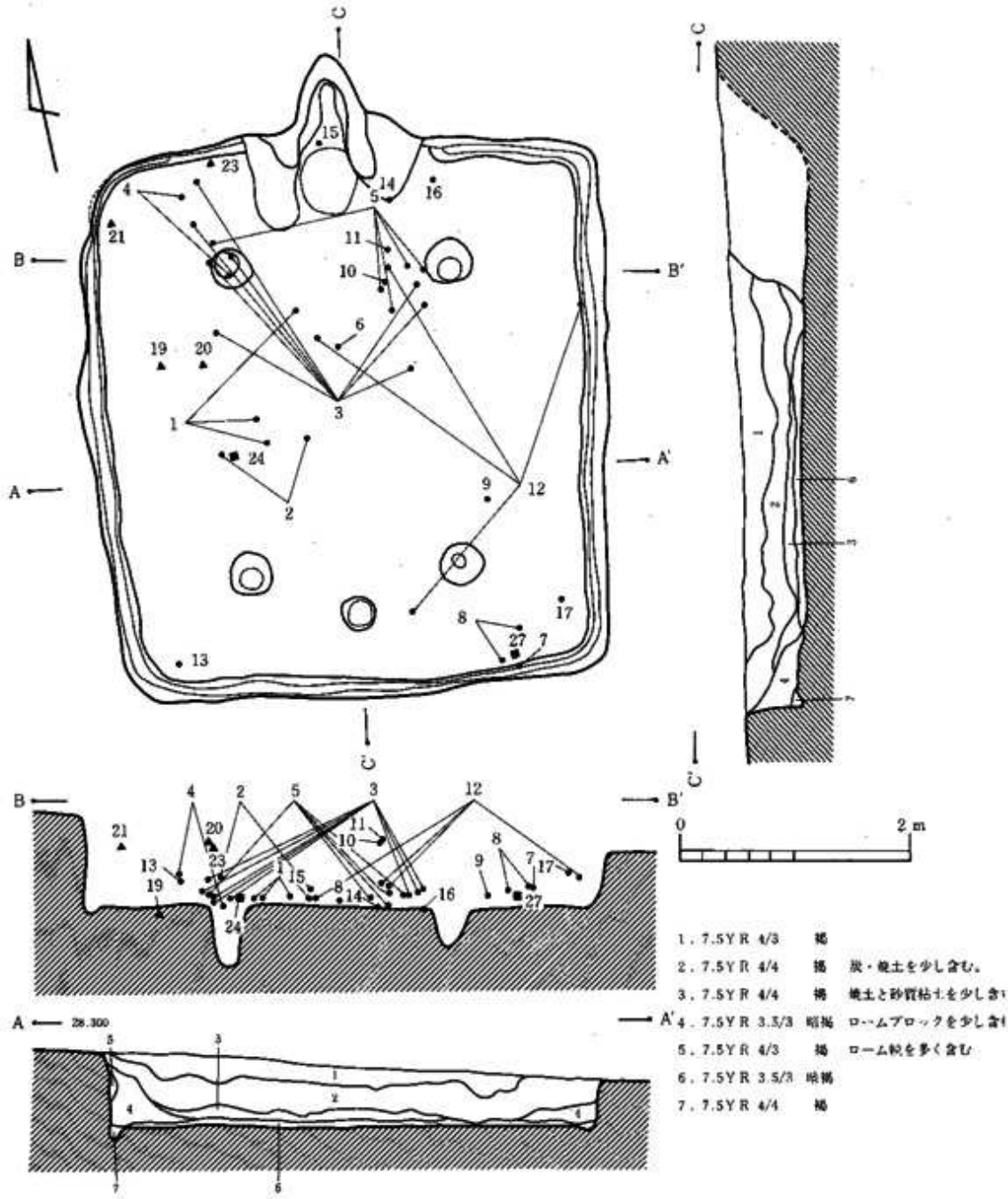



**第8図　第2号住居跡遺物実測図**

**第3号住居跡**

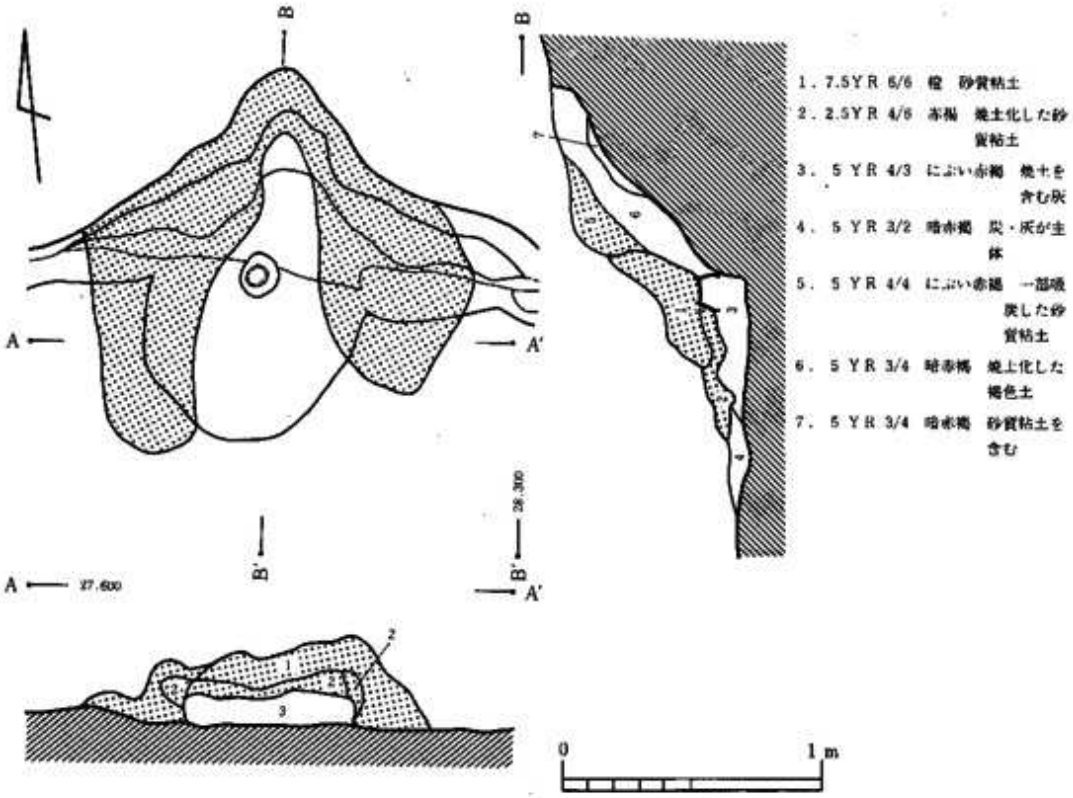
本住居跡は、7D－bグリッドに中心を持つ。規模は4.75×4.5mの方形を呈し、主軸方位はN－19°30′－Eである。壁高は遺存の良い西壁で80cmと深い。周溝は、幅15cm、深さ5cm前後でカマド下を除いて全周する。柱穴は、径35～40cm、深さ30～50cmの主柱穴4本と、径30cm、深さ28cmの第5ピット1本の計5本が検出された。床面はハードローム中に作られ堅固である。カマドは北壁中央に位置し主軸長1.40cm、幅1.40cmである。袖は幅40cmの砂質粘土により構築され、火床は良く焼けている。壁を大きく緩やかに掘りくぼめカマド構築面とする。燃焼部に土師器高台付き杯No.15を逆さに置き支脚として用いていた。

遺物は、須恵器甕2点と杯10点、土師器甕2点、杯2点、支脚に転用されていた高台付き杯




**第9図　第3号住居跡実測図**

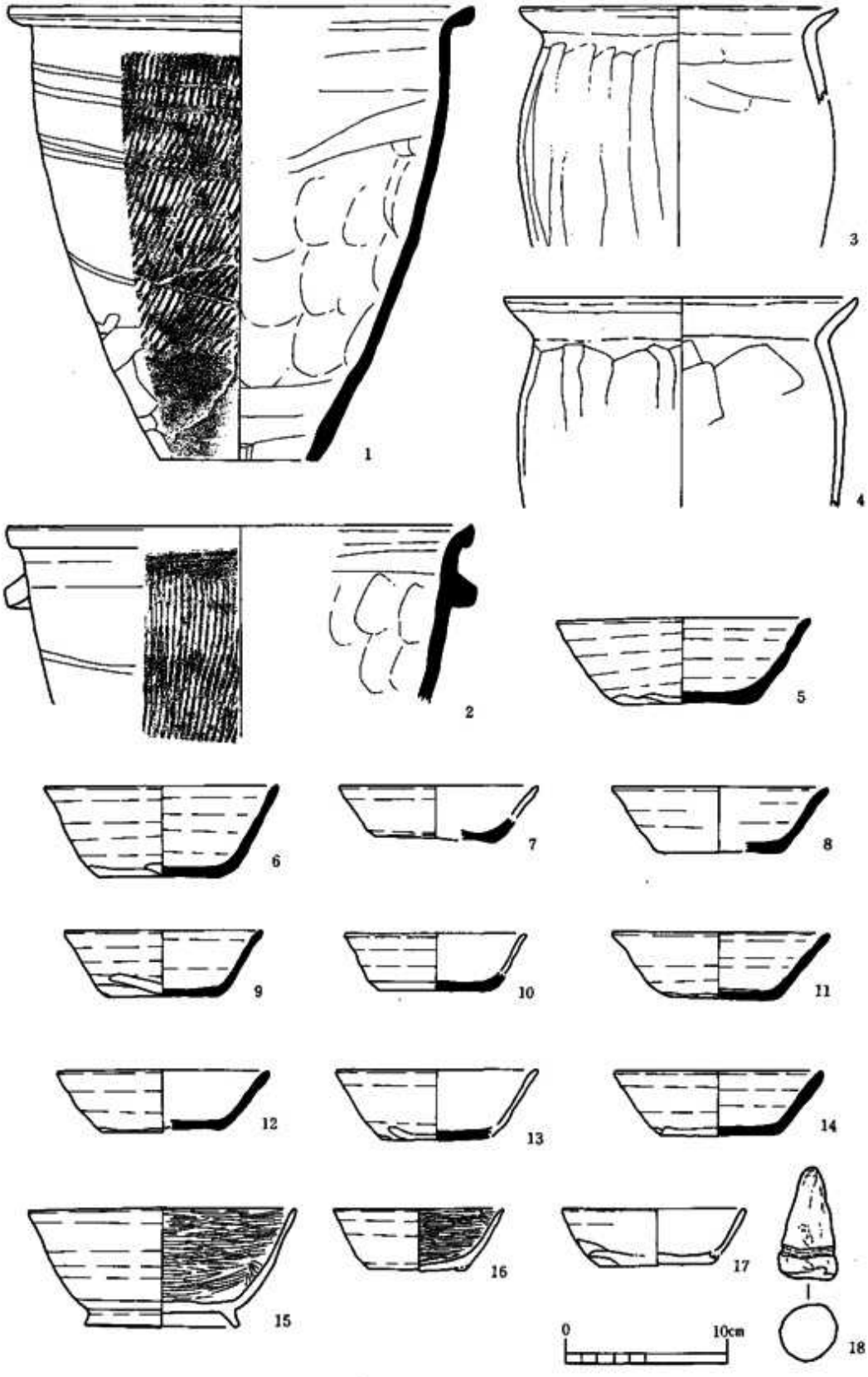
1点、不明土製品1点、刀子2点、鉄鏃1点、不明鉄製品2点、研石3点他である。



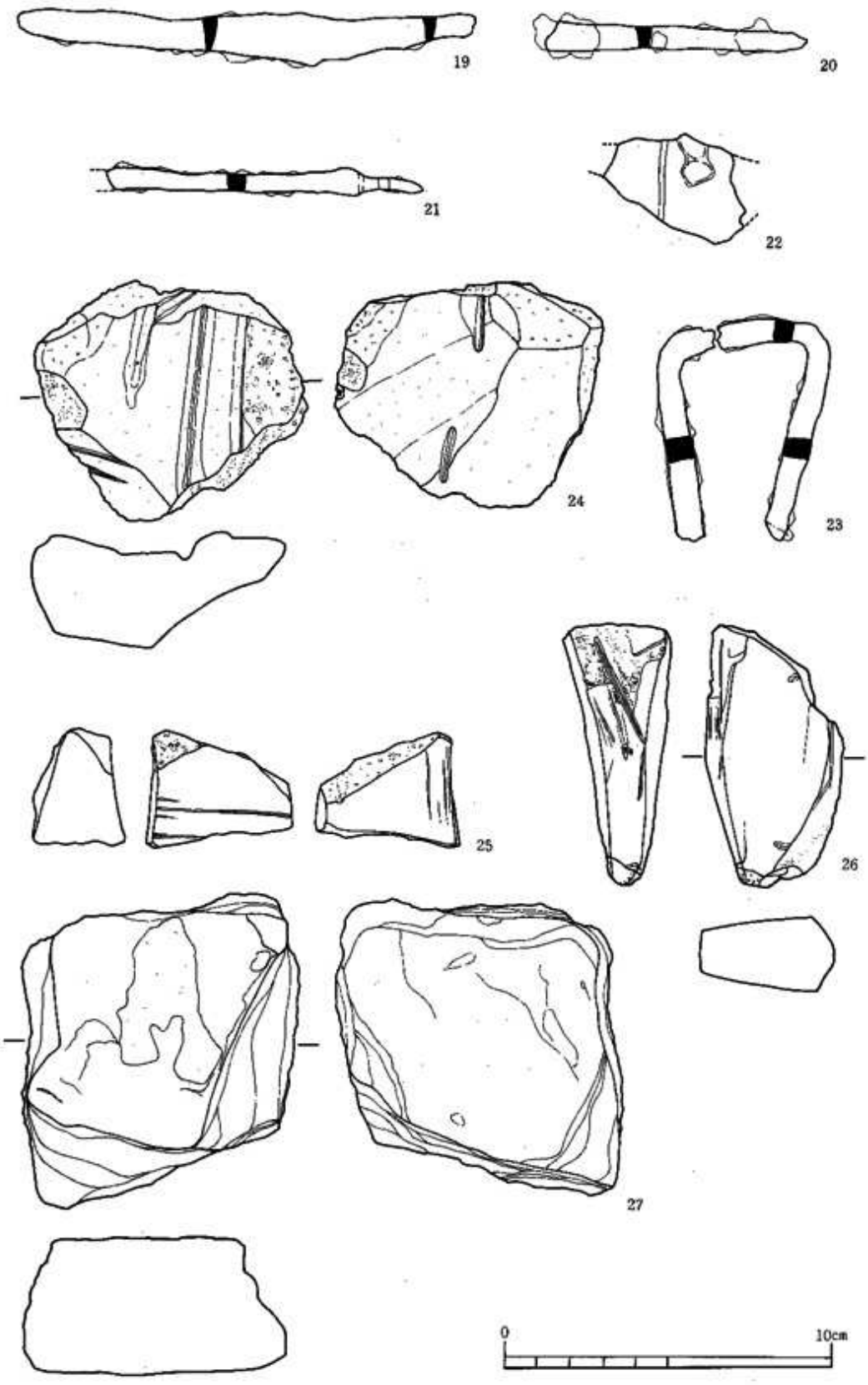

**第10図　第３号住居跡カマド実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL- 30 | 須恵器<br>甕 | 口径(29.0)<br>器高 28.0<br>底径(10.0) | 内反気味に大きく開いて立ち上がり、頸部で急激に外傾させる。口縁は折り返しにより肥厚させる。つまみは不明 | 白色微砂粒<br>石英粒・赤褐色粒 | 良好<br>硬質 | 5YR<br>5/6<br>明赤褐 | 2/3欠損 |
| 2<br>PL- 30 | 須恵器<br>甕 | 口径(28.6)<br>現存高11.0 | 開きながら立ち上がり、頸部で急激に外傾させ、口唇をわずかにつまみ上げる。口縁は折り返しにより肥厚させる。肩上部に面取りをしたつまみをもつ。 | 白色微砂粒<br>石英粒、赤褐色粒 | 良好<br>やや軟質 | 2.5Y<br>6/2<br>灰黄 | 上半部の1/3遺存 |
| 3<br>PL- 31 | 土師器<br>碗 | 口径 19.6<br>現存高15.0 | 緩やかに内反して弧状を呈した胴部は、頸部で急激に外傾する。 | 石英粒 | 良好 | | 上半部の3/4遺存 |
| 4<br>PL- 31 | 土師器<br>碗 | 口径(22.0)<br>現存高13.0 | 緩やかに内反して弧状を呈した胴部は、頸部で急激に外傾する。 | 石英粒・赤褐色粒・金雲母少量 | 良好 | 10YR<br>6/4<br>にぶい黄橙 | 上半部の1/4遺存<br>胴部内面に炭化物付着 |
| 5<br>PL- 31 | 須恵器<br>坏 | 口径 16.0<br>器高 4.4<br>底径 7.6 | 直線的に大きく開く体部をもつ。底部全面と体部下端を手持箆削りする。 | 赤褐色粒 | 良好 | 2.5YR<br>5/8<br>明赤褐 | ロクロ目が強い<br>ほぼ完形 |
| 6<br>PL- 31 | 須恵器<br>坏 | 口径 14.7<br>器高 5.5<br>底径 7.5 | 直線的に開く体部をもつ。回転糸切り後体部下端と底部周縁を手持ち箆削り。 | 白色微砂粒<br>石英粒 | 良好 | 5Y<br>4.5/1<br>灰 | 1/2欠損 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 7<br>PL- 31 | 須恵器<br>坏 | 口径(12.4)<br>器高 3.3<br>底径 7.6 | 直線的に大きく開く体部をもつ。底部全面を手持ち箆削り。 | 石英粒・金雲母 | 酸化炎 | 7.5YR<br>8/2<br>灰白 | 1/2欠損 |
| 8<br>PL- 31 | 須恵器<br>坏 | 口径(13.4)<br>器高 4.0<br>底径 (8.0) | 直線的に大きく開く体部は、口縁部でわずかに外反する。底部全面を手持箆削り。 | 石英粒 | 良好 | 5Y<br>7/1<br>灰白 | 1/2欠損 |
| 9<br>PL- 31 | 須恵器<br>坏 | 口径(12.3)<br>器高 4.1<br>底径 (7.0) | 直線的に大きく開く体部は、口縁部でわずかに外反する。回転箆切り後体部下端と底部周辺を手持箆削り。 | 白色微砂粒 | 良好 | N<br>4/0<br>灰 | 体部の2/3欠損 |
| 10<br>PL- 31 | 須恵器<br>坏 | 口径(11.4)<br>器高 3.5<br>底径 6.8 | 直線的に開く体部は、口縁部でわずかに外反する。底部全面と体部下端を回転箆削り。 | 白色微砂粒<br>赤褐色粒・白色針状物質 | 良好<br>酸化炎 | 5YR<br>6/6<br>橙 | 体部の1/4欠損 |
| 11<br>PL- 31 | 須恵器<br>坏 | 口径 13.5<br>器高 4.0<br>底径 6.5 | 直線的に大きく開く体部をもつ。底部全面と体部下端を手持箆削り。 | 白色微砂粒<br>緻密 | 良好 | 10YR<br>2/2<br>黒褐 | 3/4遺存 |
| 12<br>PL- 31 | 須恵器<br>坏 | 口径 13.2<br>器高 3.9<br>底径 7.5 | 直線的に大きく開く体部をもつ。底部全面と体部下端を手持箆削り。 | 白色微砂粒 | 良好 | 7.5YR<br>6/1<br>褐灰 | 体部の1/2欠損 |
| 13<br>PL- 31 | 須恵器<br>坏 | 口径 12.8<br>器高 4.3<br>底径 6.8 | 直線的に大きく開く体部をもつ。回転箆切り後体部下端と底部周辺を手持ち箆削り。 | 石英粒・白色微砂粒 | 良好 | 7.5YR<br>6/1<br>褐灰 | 体部の1/3欠損 |
| 14<br>PL- 31 | 須恵器<br>坏 | 口径 13.0<br>器高 4.0<br>底径 7.3 | 直線的に大きく開く体部をもつ。体部下端と底部周辺を手持箆削り。 | | 良好 | 5Y<br>2/2<br>黒 | ほぼ完形 |
| 15<br>PL- 31 | 土師器<br>椀 | 口径 6.7<br>高台径 9.7<br>高台径 9.7 | 回転糸切り後回転箆削り。内面を箆磨き。付け高台<br>内反気味に開く体部をもつ。 | 長石粒・赤褐色粒 | 良好 | 5YR<br>6/8<br>橙 | 高台を欠損 |
| 16<br>PL- 31 | 土師器<br>高台付<br>坏 | 口径 10.8<br>現存高 3.8<br>底径 6.2 | 内反気味に開く体部は、口縁で小さく外反する。内面を箆磨き、付け高台。 | 石英粒・赤褐色粒・金雲母<br>緻密 | 良好 | 2.5YR<br>5/8<br>明赤褐 | 2/3遺存 |
| 17<br>PL- 31 | 土師器<br>坏 | 口径(11.5)<br>器高 3.6<br>底径 7.2 | 内反気味に開く体部をもつ。回転糸切り後体部下端と底部周辺を手持ち箆削り。 | 石英粒・白色微砂粒・赤褐色粒 | 良好 | 5YR<br>6/8<br>橙 | 2/3遺存 |




第11図　第３号住居跡遺物実測図（１）




第12図　第３号住居跡遺物実測図(２)

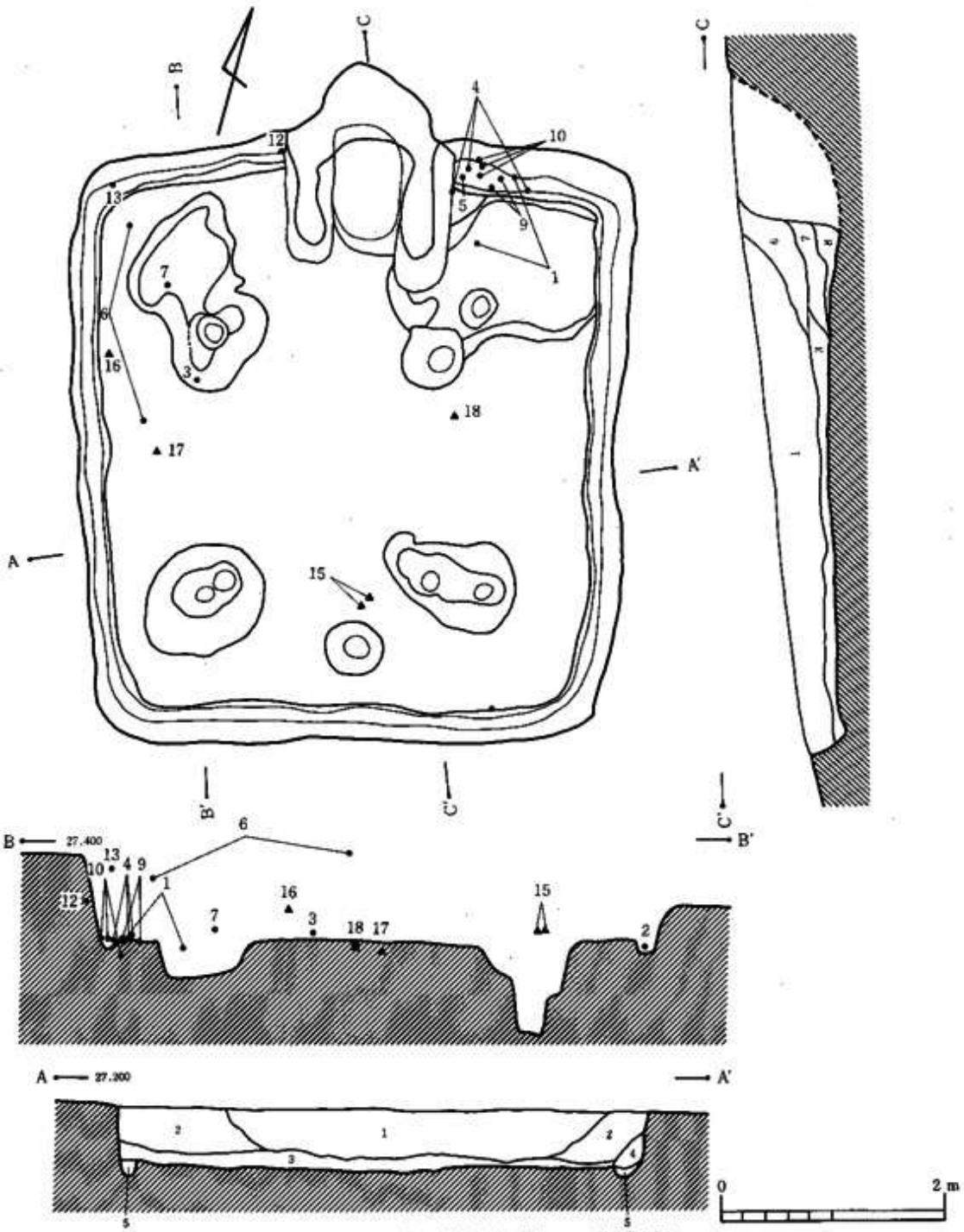
**第４号住居跡**

本住居跡は、８Ｅ－ａグリッドに中心を持つ。規模は5.3×4.9ｍの方形を呈し、主軸方位はＮ－11°30′－Ｅである。壁高は西壁で80cmを測る。周溝は、幅15cm、深さ10cm前後で明確な掘り込みを持ちカマド下を除いて全周する。柱穴は、主柱穴はいずれも２度の立て替え痕跡を持ち新らしい柱穴は径50～80cm、深さ30～80cm、古い柱穴の方は径50cm前後、深さ30～70cmを測る。さらに径45cm、深さ25cmの第５ピット１本が検出された。床面はハードローム中に作られ堅く踏み固められ堅固である。カマドは北壁中央に位置し、主軸長1.80cm、幅1.40cmを測る。袖は幅40cm、の砂質粘土により構築され、また壁のロームを一部掘り残して袖の芯材に用いている。

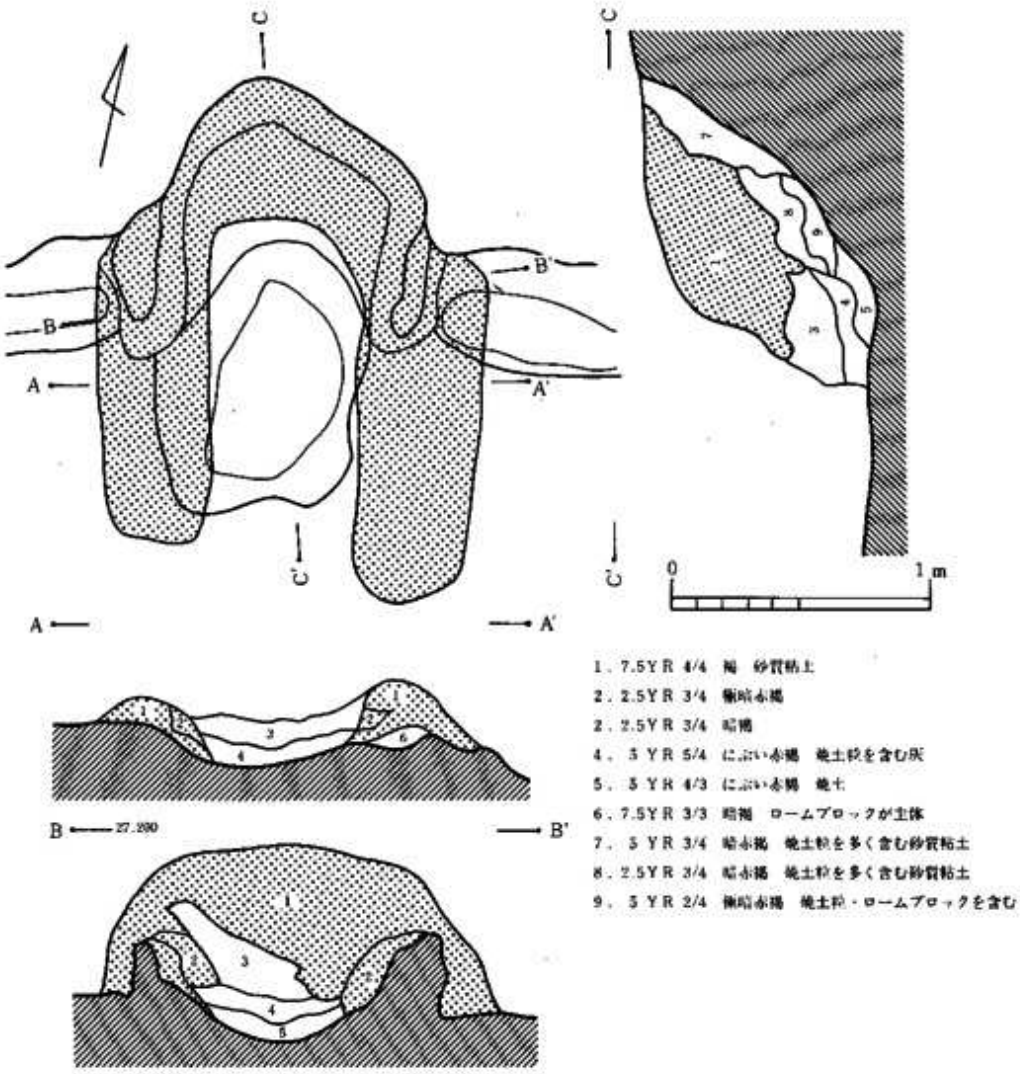
遺物は、須恵器高台付杯１点、杯２点、蓋１点、土師器では小型の甕と壺各１点、ロクロ使用の杯７点、ロクロ未使用の杯１点がある。他に刀子２点とＴ字状を呈する不明鉄製品などがある。

土師器のロクロ使用の杯のうちNo.７・11～13の４点は内外面に赤彩を施してある。また杯No.14は内面の底部にラセン状暗文を、体部に直放射と斜放射からなる斜格子状暗文を刻み、外面には上部に横位の、下部から底部外面にかけては斜位の篦磨きを施しており、胎土の特徴から見て飛鳥IIに比定できる畿内産土師器である。しかし、他の遺物が示す年代感との間に大差

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL-32 | 土師器<br>小甕 | 口径 12.7<br>器高 7.0<br>底径 5.7 | 弧状を呈した胴部は、頸部で小さく直立し、緩やかに外反したロ縁につづき、口唇部でわずかに内反させる。 | 白色微砂粒<br>石英粒少量含有 | 良好 | 2.5YR<br>5/6<br>明赤褐 | 上半部の1/2欠損 |
| 2<br>PL-32 | 土師器<br>小甕 | 口径 8.8<br>現存高 4.4 | 緩やかな弧状の胴部は、頸部で強く外傾し、短い口縁を形作る。 | 石英粒・長石粒・赤褐色粒少量含有 | 良好 | 10YR<br>7/4<br>にぶい黄橙 | 上半部の1/2遺存 |
| 3<br>PL-32 | 須恵器<br>高台付椀 | 口径 17.0<br>器高 7.2<br>高台径11.8 | 大ぶりで器厚が厚く、直線的に開く体部をもつ。高台は、外方に張り出す。 | 微細銀雲母<br>軽石粒少量含有 | 良好 | 2.5YR<br>6/1<br>黄灰 | 床面直上<br>ほぼ完形 |
| 4<br>PL-32 | 須恵器<br>坏 | 口径 14.0<br>器高 4.1<br>底径 8.0 | 直線的に大きく開く体部をもつ。体部下端と底部全面を手持ち篦削り。 | 雲母・軽石<br>粒少量含有 | 良好 | 5YR<br>1/6<br>灰 | ほぼ完形 |
| 5<br>PL-32 | 須恵器<br>坏 | 口径 14.0<br>器高 4.0<br>底径 7.8 | 直線的に大きく開く体部をもつ。回転篦切り後体部下端と底部周縁を回転篦削り。 | 白色微砂粒<br>少量含有<br>緻密 | 良好<br>硬質 | 2.5YR<br>2/6<br>灰黄 | 2/3欠損 |
| 6<br>PL-32 | 須恵器<br>蓋 | 天井径(6.0)<br>現存高 2.5<br>口径(13.6) | 天井部から緩やかに下がった体部は下端で真下に向け小さく突出する。 | 白色微砂粒<br>少量含有 | 良好 | 10YR<br>5/1<br>褐灰 | つまみおよび体部の一部欠損 |

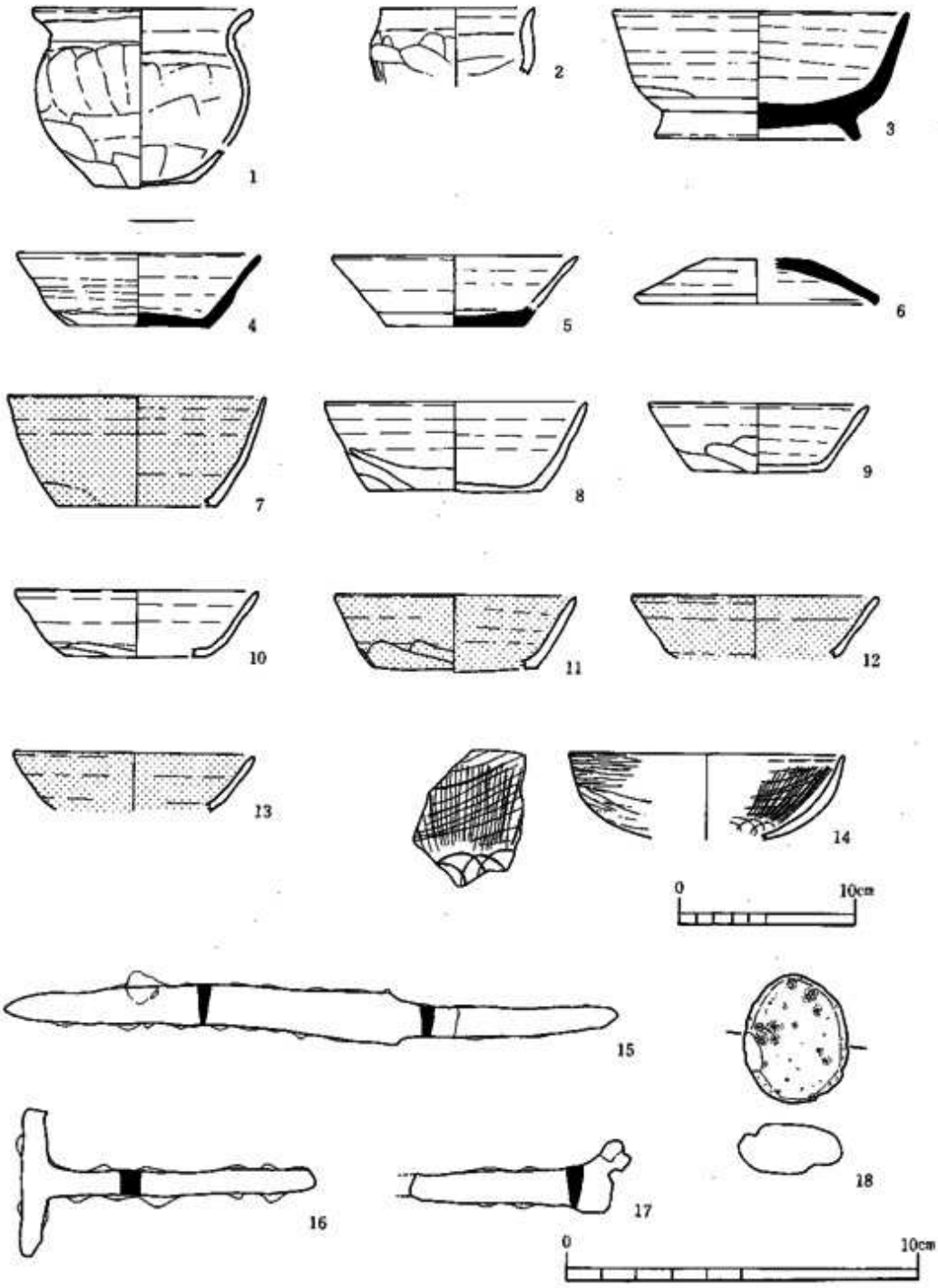



**第13図　第４号住居跡実測図**




**第14図　第4号住居跡カマド実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 7<br>PL-32 | 土師器<br>坏 | 口径(14.8)<br>器高 6.3<br>底径 (9.2) | 底部から、やや内反気味に急激に立ち上がる。体部下端手持ち箆削り。 | 赤褐色粒少量含有。緻密 | 良好 | 生地5YR<br>3/8<br>淡橙 | 赤彩<br>体部1/4遺存 |
| 8<br>PL-32 | 土師器<br>坏 | 口径(15.0)<br>器高 5.1<br>底径(10.0) | 直線的に立ち上がる体部をもつ。静止糸切り後体部下端と底部周縁を手持ち箆削り。 | 白色微砂粒少量含有 | 良好 | 2.5YR<br>5/6<br>明赤褐 | 2/3欠損 |
| 9<br>PL-32 | 土師器<br>坏 | 口径(12.6)<br>器高 3.9<br>底径 (7.8) | 直線的に大きく開く体部をもつ。体部下端と底部全面手持ち箆削り。 | 白色微砂粒<br>石英粒・黒褐色粒少量含有 | 良好 | 2.5YR<br>5/6<br>明赤褐 | 1/2欠損 |
| 10<br>PL-32 | 土師器<br>坏 | 口径(14.0)<br>器高 3.9<br>底径( 8.2) | 底部から内反気味に立ち上がった体部は、中央部でわずかに屈曲をもつ。体部下端と底部を手持箆削り。 | 石英粒・長石粒含有 | 良好 | 2.5YR<br>5/6<br>明赤褐 | 体部1/4遺存 |




**第15図　第４号住居跡遺物実測図**

があり本住居跡には伴わない混入したもとのと考えられる。

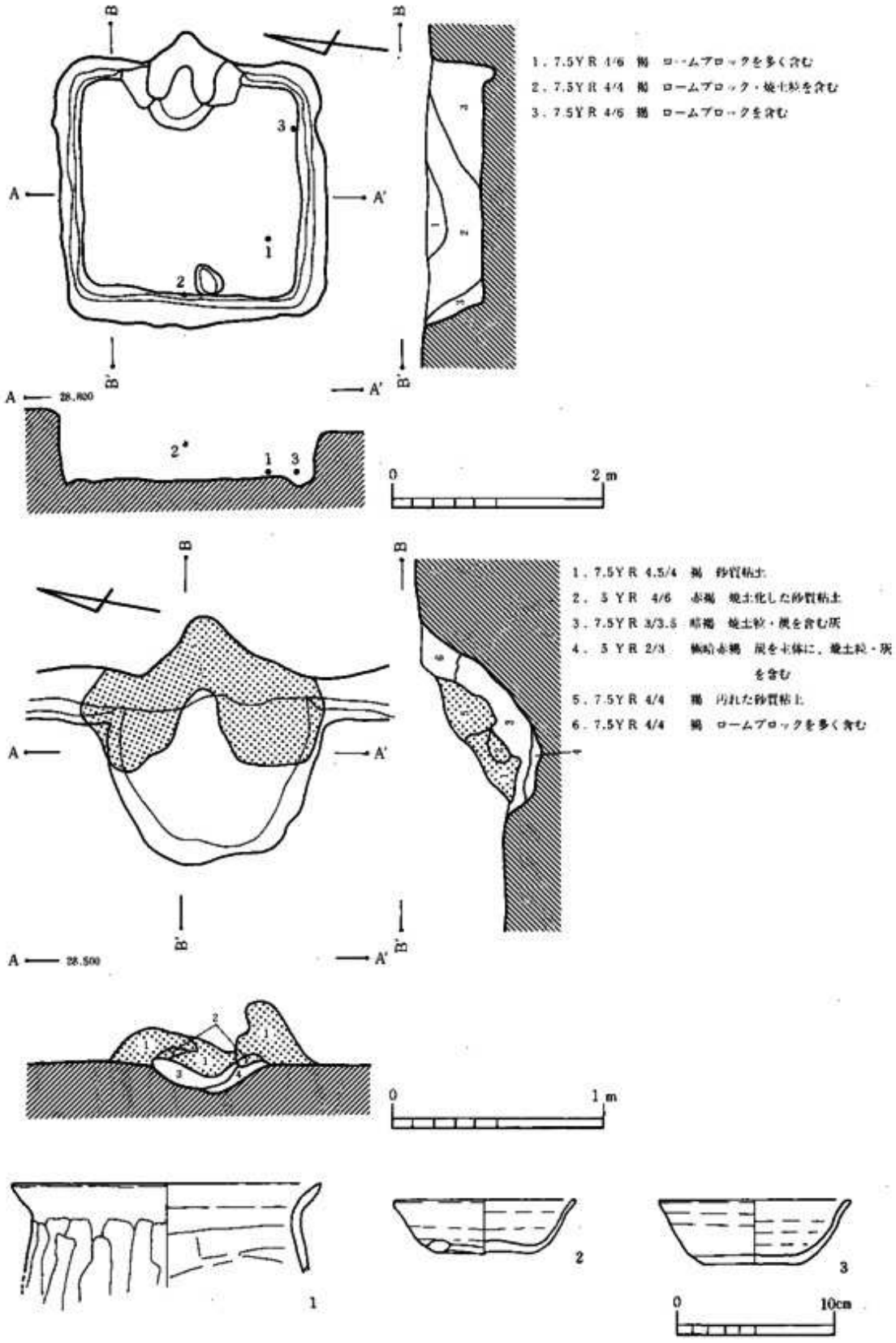
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 11<br>PL- 32 | 土師器<br>坏 | 口径(13.8)<br>器高 4.3<br>底径( 9.4) | 底部から直線的に短かく立ち上がる。静止糸切り後体部下端と底部周縁を手持ち箆削り。 | 緻密 | 良好 | 生地5YR<br>7/4<br>にぶい橙 | 内外面赤彩<br>3/4欠損 |
| 12<br>PL- 32 | 土師器<br>坏 | 口径(13.8)<br>器高 4.3<br>底径( 9.4) | 直線的に大きく開く体部をもつ。 | 石英粒・赤褐色粒少量含有 | 良好 | 生地5YR<br>7/4<br>にぶい橙 | 内外面赤彩<br>体部1/4遺存 |
| 13 | 土師器<br>坏 | 口径(14.0)<br>現存高 3.3 | 内反気味に大きく開く体部をもつ。 | 白色微砂粒<br>赤褐色粒少量含有 | 良好 | 生地5YR<br>6/4<br>にぶい橙 | カマド出土<br>内外面赤彩<br>体部1/3遺存 |
| 14 | 土師器<br>坏 | 口径(15.6)<br>現存高 4.7 | ロクロ未使用、外面は体部上半部に横位箆磨き、下半部に斜位の粗い箆磨きをもつ。内面は体部に直放射と斜放射よりなる斜格子状暗文、底部には螺旋状暗文。 | 白色微砂粒含有 | 良好<br>やや軟質 | 7.5YR<br>7/6<br>橙 | 畿内産土師器<br>飛鳥II<br>4/5欠損 |

**第5号住居跡**

本住居跡は、6C－aおよび6C－cの両グリッドにまたがる。規模は2.5×2.5mの小型の正方形を呈し、主軸方位はN－74°30′－Eである。壁高は50cmを測る。周溝は幅20cm、深さ10cm前後でカマド下を除いて全周する。主柱穴は認められず、径30cm、深さ20cmの第5ピット1本が検出された。床面はハードローム中に作られ堅固である。カマドは、東壁のほぼ中央に位置し、主軸長1.20m、幅1.10mである。袖は幅20cmの砂質粘土を用い、壁を大きく掘り込んで構築する。火床の焼けは弱い。

遺物は、土師器甕1点と杯2点が検出された。甕No.1と杯No.3は床面直上の出土である。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL- 33 | 土師器<br>坏 | 口径 19.8<br>現存高 8.0 | 頸部で一度垂直に立ち上がり大きく外反した口縁につづく。 | 石英粒・白色針状物質含有 | 良好 | 10YR<br>7/4<br>にぶい橙 | 床面直上<br>上半部の2/3遺存 |
| 2<br>PL- 33 | 土師器<br>坏 | 口径 11.4<br>器高 3.3<br>底径 6.2 | 内反気味に大きく開いて立ち上がった体部は、口縁部でわずかに外傾する。体部下端と底部全面を手持箆削り。 | 微砂粒少量含有 | 良好 | 7.5YR<br>6/6<br>橙 | 体部の1/3欠損 |




**第16図　第５号住居跡とカマドと遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3<br>PL-33 | 土師器<br>坏 | 口径 12.2<br>器高 4.0<br>底径 6.2 | 内反気味に大きく開いて立ち上がった体部は口縁部でわずかに外反する。回転糸切り後体部下端と底部周縁を回転箆削り。 | 微細な金雲母赤褐色粒含有<br>緻密 | 良好 | 7.5YR<br>6/4<br>にぶい橙 | 床面直上<br>体部の1/3欠損 |

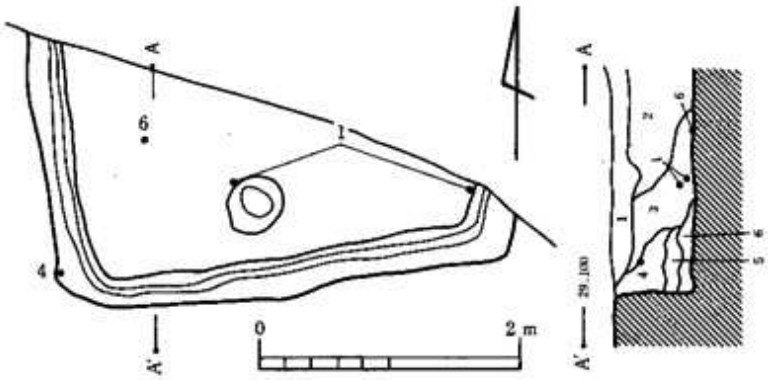
## 第6号住居跡

本住居跡は、6C－bおよびに7C－aグリッドにまたがるものの、カマドを含めた住居跡の北側部分は調査区域外となり未調査である。

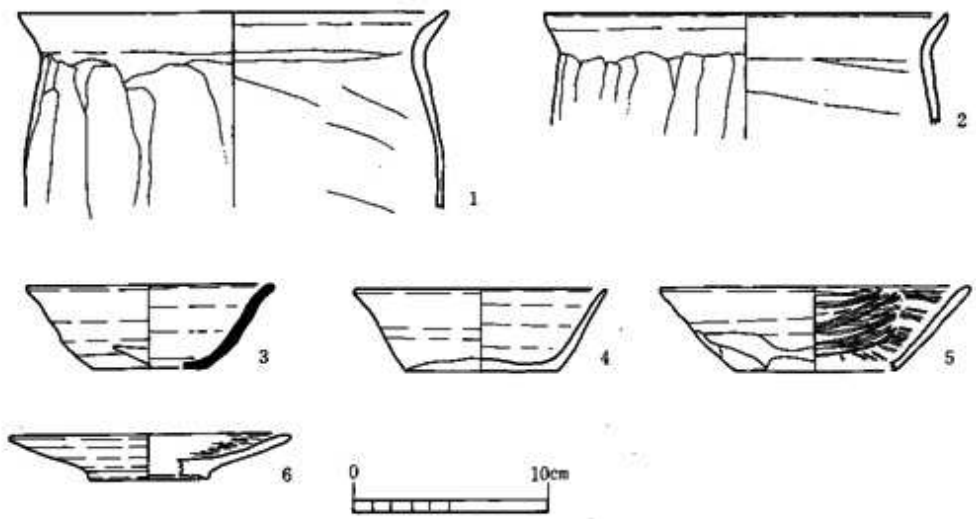
規模は、現在の主軸長2.2×3.5 mの方形を呈すると考えられる。主軸方位はN－9°30′－Wである。壁高は60cmを測る。周溝は、幅10m、深さ10cm前後である。主柱穴は認められず、径40cm、深さ30cmの第5ピット1本が検出された。床面はハードロームで作られ堅固である。

遺物は、土師器甕2点、杯2点、高台付皿1点と須恵器杯1点である。土師器杯No.5と高台付皿No.6は内面に箆磨きを施す。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL-33 | 土師器<br>甕 | 口径(22.0)<br>現存高10.0 | 頸部で大きく外反した口縁は口唇付近でわずかに直立気味になる。 | 白色微砂粒石英粒・白色針状物質含有 | 良好 | 7.5YR<br>6/6<br>橙 | 上半部の1/2遺存 |
| 2<br>PL-33 | 土師器<br>甕 | 口径(21.0)<br>現存高 6.0 | 頸部で大きく外反した口縁は口唇付近でわずかに直立気味になる。 | 白色針状物質含有 | 良好 | 5YR<br>5/6<br>明赤褐 | 上半部の1/2遺存 |
| 3<br>PL-33 | 土師器<br>坏 | 口径(12.8)<br>器高 4.2<br>底径 8.0 | 内反気味に大きく開いて立ち上がった体部は、口縁部で小さく外反する。体部下端と底部を回転箆削り。 | 雲母・白色微砂粒含有 | 良好 | 2.5YR<br>5/2<br>暗灰黄 | 1/2欠損 |
| 4<br>PL-33 | 土師器<br>坏 | 口径 13.0<br>器高 4.2<br>底径 8.0 | 直線的に大きく開く体部をもつ。体部下端と底部全面を手持ち箆削り。 | 白色微砂粒石英粒 | 良好<br>硬質 | 5YR<br>6/4<br>にぶい橙 | ほぼ完形 |
| 5<br>PL-33 | 土師器<br>坏 | 口径(16.0)<br>器高 4.3<br>底径( 8.4) | 直線的に大きく開く体部をもつ。内面を箆磨き。体部下端と底部を手持ち箆削り。 | 石英粒・長石粒・金雲母 | 良好 | 7.5YR<br>6/6<br>橙 | 3/4欠損 |
| 6<br>PL-33 | 土師器<br>皿 | 口径(14.4)<br>器高 2.3<br>底径( 6.0) | ゆるやかに立ち上がり、外方へと伸びる体部をもつ。内面は箆磨き。回転糸切り後底部周縁に | 微細な金雲母<br>緻密 | 良好 | 7.5YR<br>7/6<br>橙 | 3/4欠損 |




1．7.5YR 3/4 暗褐
2．7.5YR 4/3 褐
3．7.5YR 4/3 褐 ロームブロックを多く含む
4．7.5YR 3/4 暗褐
5．7.5YR 3/2 黒褐 炭を少し含む
6．7.5YR 3/4 暗褐

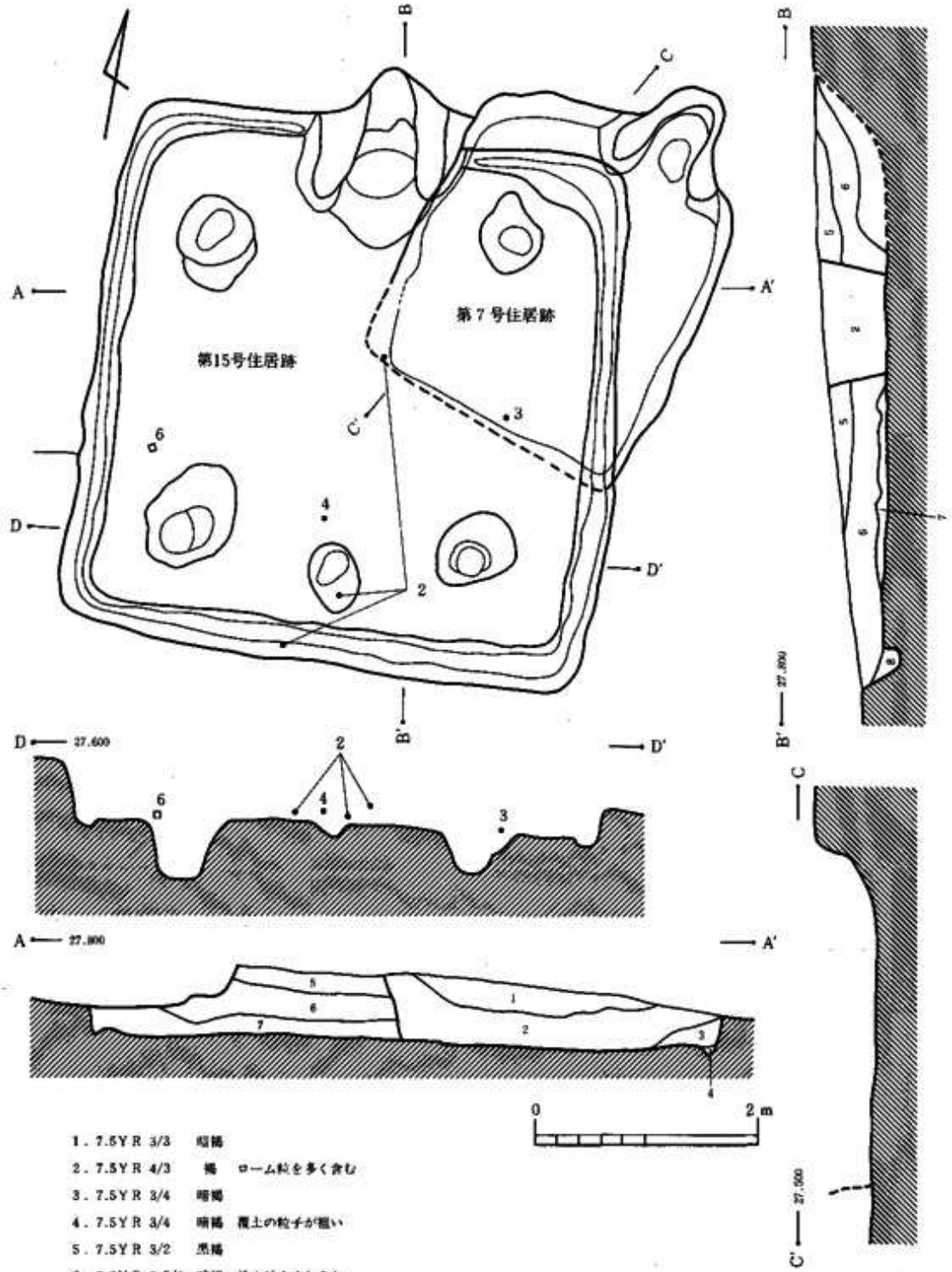



**第17図　第６号住居跡と遺物実測図**

### 第７号住居跡

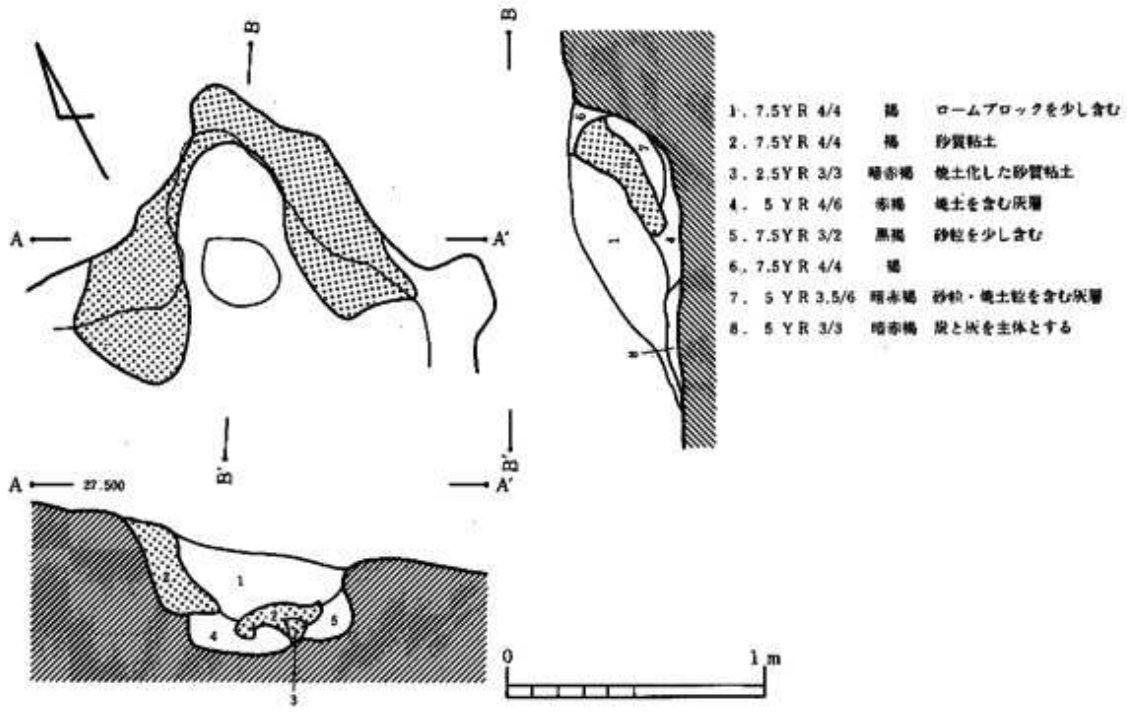
本住居跡は、６Ｅ－ｄおよび７Ｅ－ｃグリッドにまたがる。15号住居跡の北東コーナーを壊して築かれており本住居跡の方が新しい。規模は3.1×2.7ｍの長方形を呈する。主軸方位はＮ－24°30′－Ｅである。壁高は北壁で約60cmを測る。周溝および柱穴は認められない。床面は第15号住居跡の床面レベルとほぼ一致するが、比較的軟弱である。カマドは北壁の東端に設けられ、主軸長1.36ｍ、幅1.20ｍを測る。袖は幅40cmの砂質粘土より構築されている。火床の焼けは弱い。壁を大きく掘りくぼめてカマド掘り方としている。

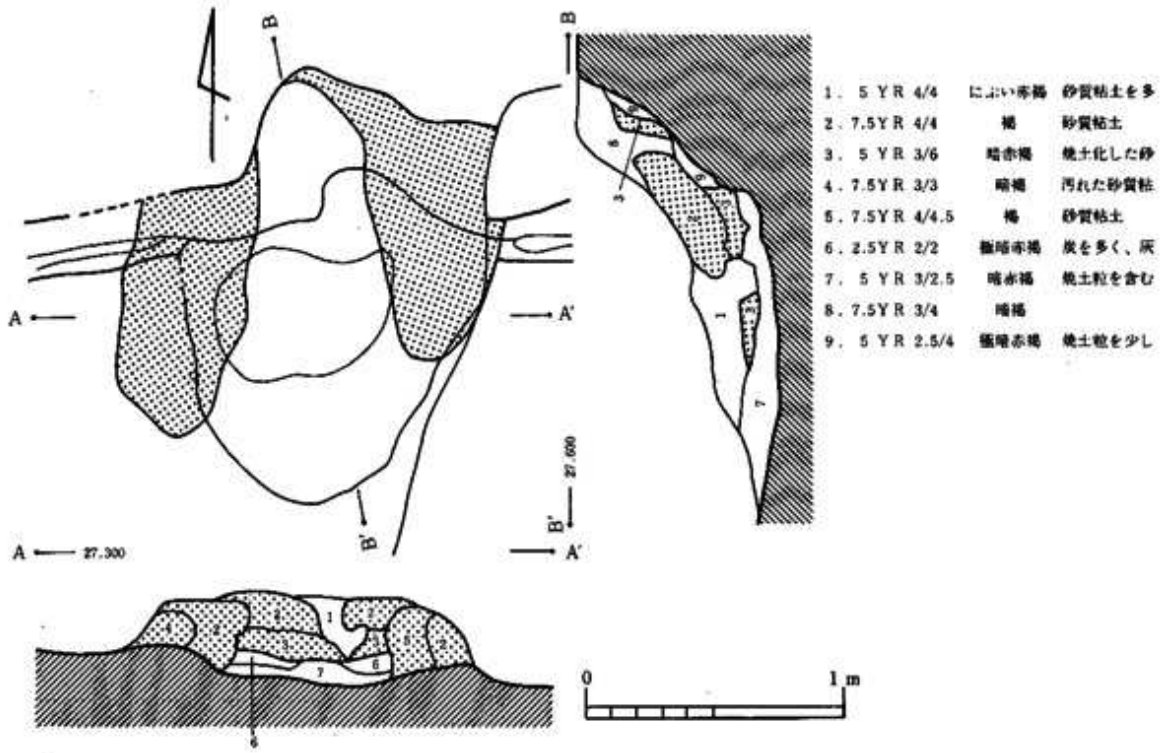
遺物には、カマド内から硬質の緑釉陶器椀の細片１点が出土し、他に遺構内からも土器数点の出土を見たがいずれも小破片のため図示するには至らなかった。




1．7.5YR 3/3　暗褐
2．7.5YR 4/3　褐　ローム粒を多く含む
3．7.5YR 3/4　暗褐
4．7.5YR 3/4　暗褐　焼土の粒子が粗い
5．7.5YR 3/2　黒褐
6．7.5YR 3.5/4　暗褐　焼土粒を少し含む
7．7.5YR 3.5/3　暗褐　ロームブロック、焼土粒を少し含む
8．7.5YR 3/3　暗褐

**第18図　第７・15号住居跡実測図**



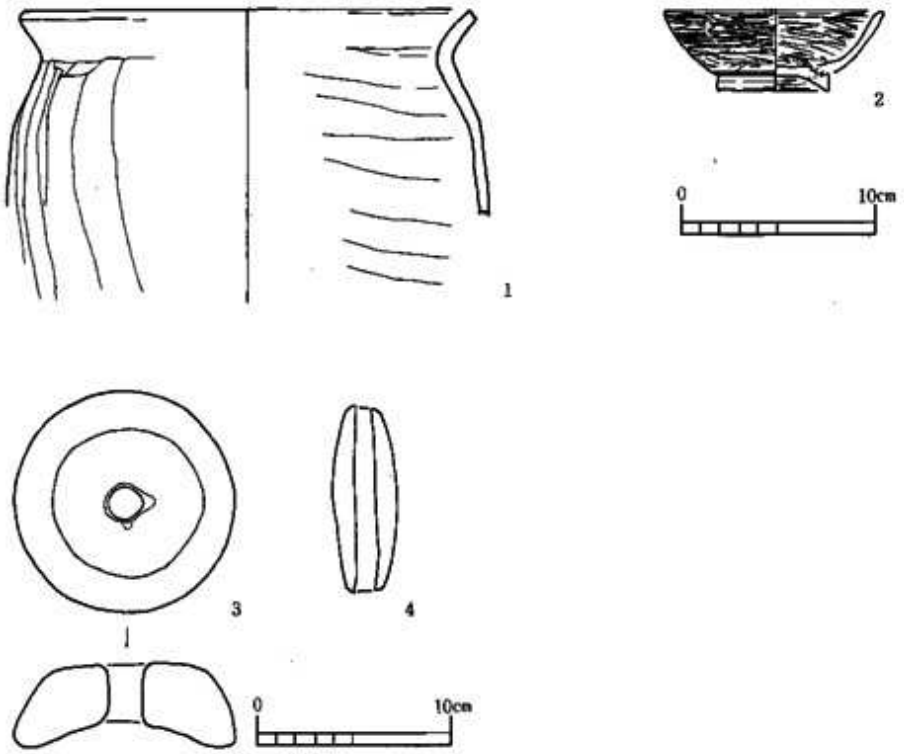




**第19図　第7・15号住居跡カマド実測図**

**第８号住居跡**

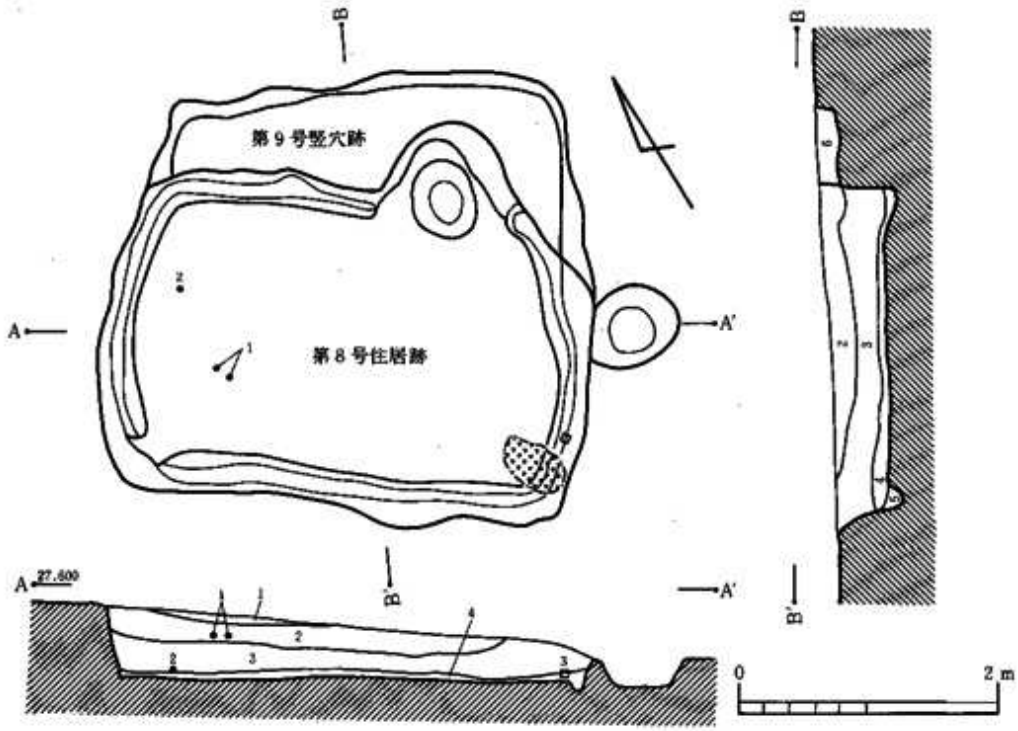
本住居跡は、８Ｄ－ｃおよび８Ｄ－ｄグリッドにまたがる。北で第９号住居跡を、西で第10・11・17・18住居跡を切っており本住居跡が最も新しい。規模は2.5×3.7ｍの長方形を呈する。主軸方位はＮ－39°50′－Ｅである。壁高は60㎝を測る。周溝は、幅10㎝前後、深さ10㎝でカマド下および南西コーナーを除いて確認された。柱穴は検出されなかった。床面はハードローム中に作られ堅固である。カマドは北壁の東端で検出されたが崩壊が著しく掘り方をつかむにとどまった。

遺物は土師器甕１点、内黒処理された高台付杯１点、土製紡錘車１点と土錘１点である。

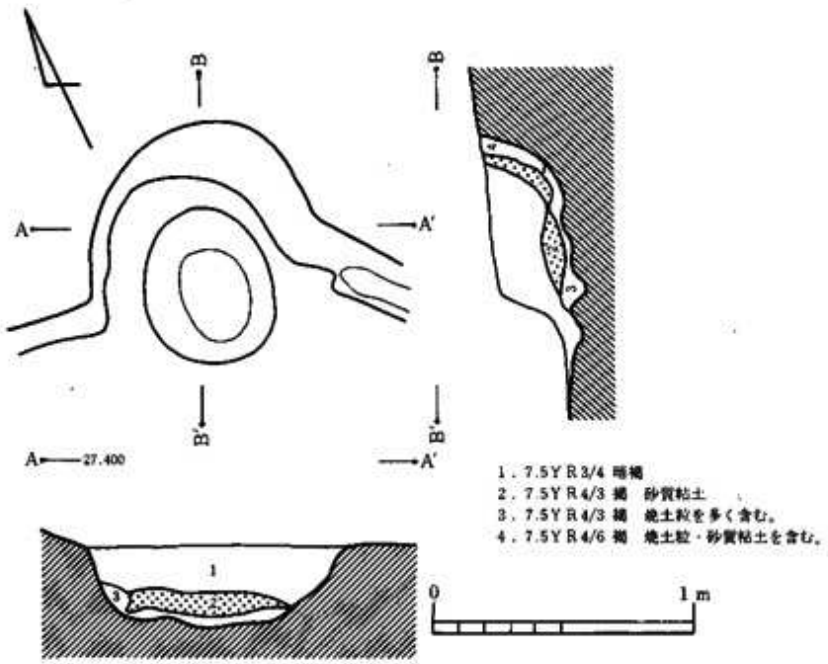



**第20図　第８号住居跡遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL 33 | 土師器<br>甕 | 口径(23.0)<br>現存高15.0 | 器壁が厚く、すぼまりながら立ち上がった胴部は、頸部で大きく外傾し、口縁端部に稜をもつ。 | 金雲母極少量含有 | 良好 | 10ＹＲ<br>7/4<br>にぶい黄橙 | 上半部の1/4遺存 |
| 2<br>PL- 33 | 土師器<br>高台付<br>坏 | 口径(11.4)<br>器高 4.2<br>高台径 5.8 | 内反気味に立ち上がる体部をもち、底部に断面三角の高台を付す。体部内外面は横位の磨き。 | | 良好 | 7.5ＹＲ<br>6/4<br>にぶい橙 | 体部の1/2欠損 |




1．7.5YR 3/2 黒褐
2．7.5YR 3/3 暗褐　ローム粒・炭・焼土粒を多く含む。
3．7.5YR 3/4 暗褐　ローム粒・大粒の焼土粒を多く含む。
4．7.5YR 2/2 黒褐　炭・焼土粒を多く含む。
5．7.5YR 4/3 暗褐　大粒のローム粒を多く含む。
6．7.5YR 3/2 黒褐　焼土粒・ローム粒を多く含む。




1．7.5YR 3/4 暗褐
2．7.5YR 4/3 褐　砂質粘土
3．7.5YR 4/3 褐　焼土粒を多く含む。
4．7.5YR 4/6 褐　焼土粒・砂質粘土を含む。

**第21図　第８・９号住居跡と第８号住居跡カマド実測図**

### 第９号竪穴跡

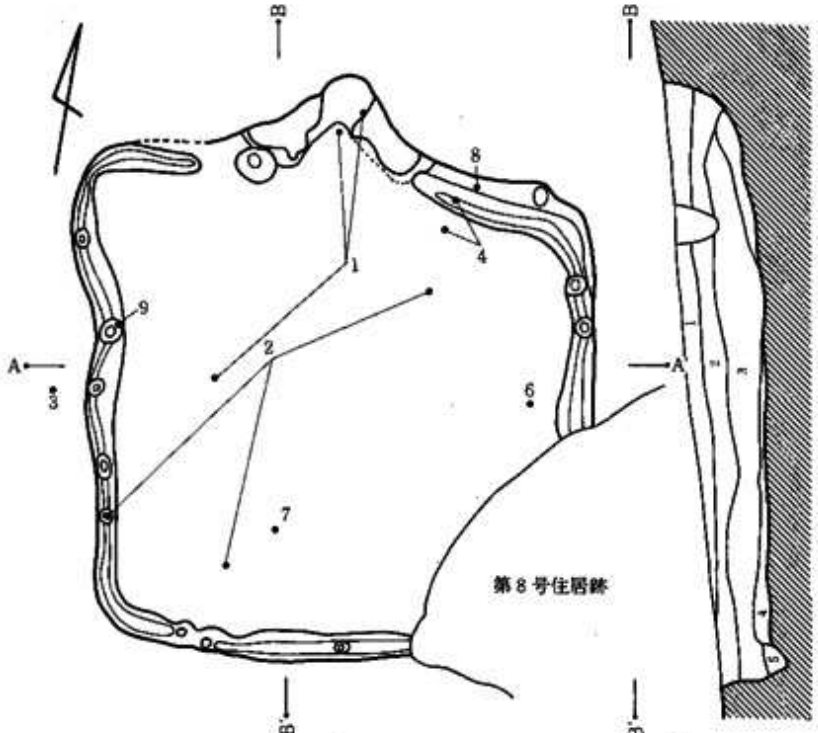
本竪穴跡は、第８号住居跡と位置を同じくしており、その南側の大半を切られた形になっている。東西の軸長もほぼ一致することから考えれば８号住居跡の張り出し状施設ととらえることもできるが、土層断面図によれば第８号住居跡の立ち上がりらしきものが見られ、一応別遺構として報告する。南北の現存長1.0m、東西長3.4m、深さ15cm前後を測る。周溝・柱穴等の施設は検出されなかった。

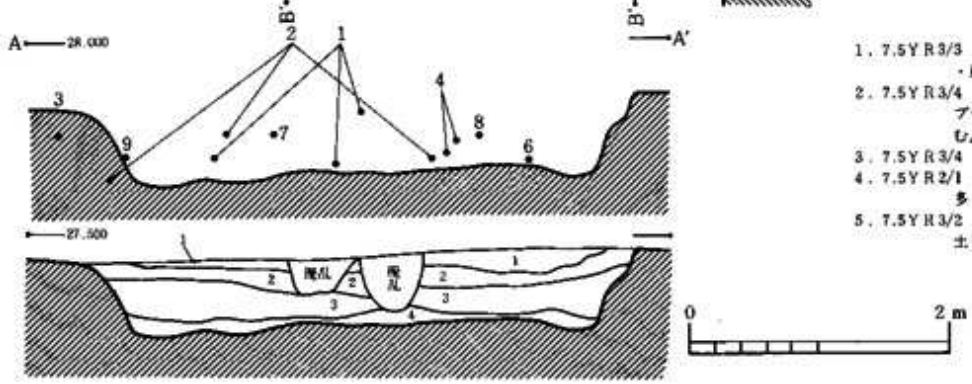
### 第10号住居跡

本住居跡は、８Ｄ－ａおよび８Ｄ－ｃグリッドに位置し、第17号住居跡の覆土中に構築される。南東コーナーを第８号住居跡に切られ、北側では第18号住居跡を切る。規模は4.0×3.9mの方形を呈する。主軸方位はＮ－7°50′－Ｗである。壁高は65cmを測る。周溝は、幅20cm、深さ10cmでカマド付近を除いて全周する。主柱穴はなく周溝にそって９本の壁柱穴が認められた。床面はハードローム中に作られ堅固である。カマドは北壁中央部に位置し、第17号住居跡の覆土を掘りくぼめて構築している。主軸長０.８ｍ・幅1.20ｍを測る。袖は幅40cmの砂質粘土により構築されており、火床面は良く焼けている。

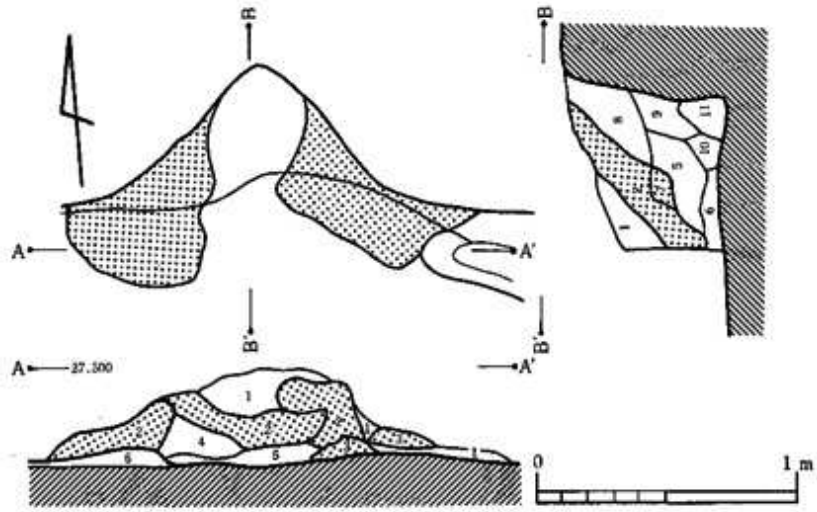
遺物としては、須恵器甕１点および杯４点、土師器甕１点と杯３点を図示したが、本住居跡は重複が著しいため、一軒の一括遺物と見るにはやや問題を持つ。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL- 34 | 須恵器<br>広口壺 | 口径(23.0)<br>現存高31.0 | 弧状の胴部は、急激にすぼまって頸部に至り、一転して直立し、緩やかに外反する口縁をもつ。口縁は折り返して肥厚させる。 | 白色微砂粒 | 良好 | 5ＹＲ<br>3/4<br>暗赤褐 | 胴上部の1/2遺存 |
| 2<br>PL- 34 | 土師器<br>甕 | 口径(21.4)<br>現存高16.5 | 緩やかな弧状の胴部は、頸部で大きく外傾し、短い口縁をもつ。 | 石英粒・金雲母 | 良好 | 7.5ＹＲ<br>7/4<br>にぶい橙 | 体部の1/2遺存 |
| 3<br>PL- 34 | 須恵器<br>坏 | 口径(13.0)<br>器高　4.0<br>底径　7.8 | 大径の底部から、わずかに開いて直線的に立ち上がる体部をもつ。体部下端と底部を回転箆削り。 | 石英粒 | 良好 | 2.5ＹＲ<br>6/3<br>にぶい黄 | 体部の1/2欠損 |
| 4<br>PL- 34 | 須恵器<br>坏 | 口径 13.4<br>器高　3.3<br>底径　7.0 | 大きく開いた体部は、体部中央で一旦角度を緩めて立ち上がり、さらに外反して口縁に至る。回転箆切り後体部下端と底部周縁を回転箆削り。 | 白色微砂粒<br>石英粒 | 良好 | 5Ｙ<br>3/1<br>オリーブ黒 | 完形 |
| 5<br>PL- 34 | 須恵器<br>坏 | 口径 13.2<br>器高　3.9<br>底径　7.8 | 直線的に開く体部をもつ。回転箆切り後体部下端と底部周縁を回転箆削り。 | 白色微砂粒<br>石英粒 | 良好 | 5Ｙ<br>3/1<br>オリーブ黒 | 体部の1/4欠損 |



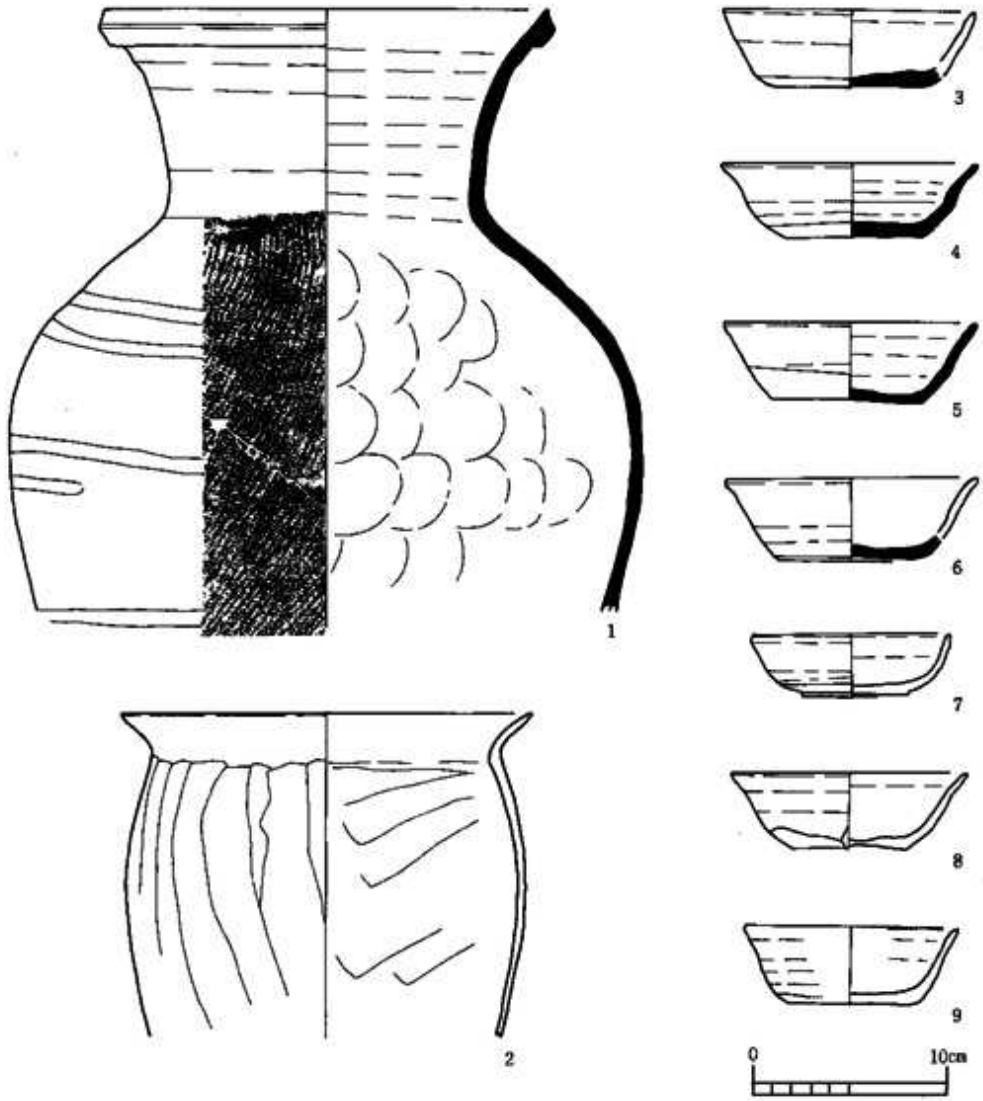




1．7.5YR3/3　暗褐　焼土粒・炭を多く含む。
2．7.5YR3/4　暗褐　ロームブロックを多く含む。
3．7.5YR3/4　暗褐
4．7.5YR2/1　黒　焼土粒を多く含む。
5．7.5YR3/2　黒褐　砂質粘土を多く含む。




1．7.5YR3/4　暗褐　砂質粘土ブロックを含む。
2．7.5YR3/4　暗褐　砂質粘土
3．7.5YR5/6　明褐　砂質粘土
4．7.5YR3/3　暗褐　焼土粒・砂粒・炭を多く含む
5．5YR 2/4　極暗赤褐　炭・焼土粒を多く含む炭層
6．5YR 4/4　にぶい赤褐　焼土粒・炭を多く含む
7．2.5YR3/6　暗赤褐　焼土化した砂質粘土
8．7.5YR2/4　極暗赤褐　焼土粒炭を多く含む
9．7.5YR4/6　暗褐　焼土粒・砂質粘土を多く含む
10．7.5YR4/4　褐　砂質粘土を主体に、焼土粒を多く含む
11．5YR 4/4　にぶい赤褐　焼土粒・炭・砂質粘土を多く含む

**第22図　第10号住居跡とカマド実測図**




**第23図　第10号住居跡遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6<br>PL 34 | 須恵器<br>坏 | 口径 13.0<br>器高 4.2<br>底径 7.3 | わずかに開いて立ち上がった体部は、口縁部で小さく外反する。回転箆切り後体部下端と底部周縁を手持箆削り。 | 白色微砂粒 | 良好 | 10YR<br>4/4<br>褐 | 体部の1/4欠損<br>底部内面に丹が付着 |
| 7<br>PL- 34 | 土師器<br>坏 | 口径 10.3<br>器高 3.2<br>底径 5.6 | 底部と体部の境に段をもち、内反して立ち上がる体部をもつ。回転糸切り未調整 | 石英粒・雲母・赤褐色粒 | 良好 | 5YR<br>5/4<br>にぶい赤褐 | 体部の1/3欠損 |
| 8<br>PL- 34 | 土師器<br>坏 | 口径 12.2<br>器高 3.9<br>底径 5.8 | 内反気味に大きく開く体部は口縁部で小さく外反する。回転糸切り後体部下端と底部周縁を手持箆削り。 | 石英粒・雲母微量・金雲母微量 | 良好 | 7.5YR<br>6/6<br>橙 | 体部の1/5欠損 |

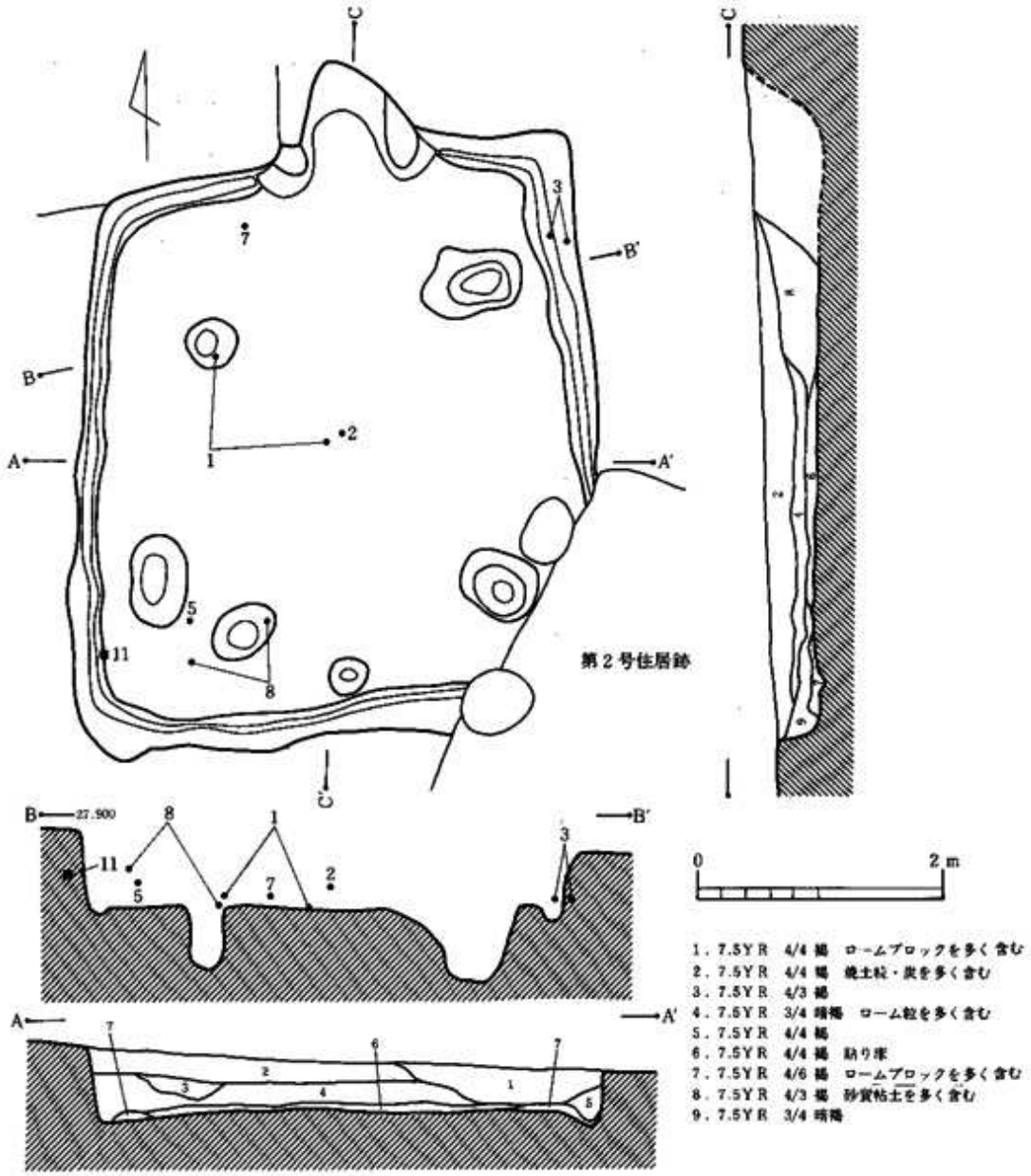
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 9<br>PL- 34 | 土師器<br>坏 | 口径(11.0)<br>器高 4.0<br>底径 6.6 | 小径の底部からわずかに開いて直線的に立ち上がる体部をもつ。体部下端と底部を手持ち箆削り。 | 石英粒・金雲母・赤褐色粒 | 良好 | 5YR<br>5/4<br>にぶい赤褐 | |

**第11号住居跡**

本住居跡は、7D－cおよび7E－aグリッドに中心を持つ。南東コーナーを第11号住居跡に北西コーナーを第12号住居跡にそれぞれ切られる。規模は4.7×4.1mの長方形を呈する。主軸方位はN－8°－Eである。壁高は50cmを測る。周溝は、幅20cm、深さ10cmでカマド下を除いて全周すると考えられる。柱穴は、やや配置が不揃いながらも径40～60cm、深さ50cm前後の主柱穴4本と径30cm、深さ10cmの第5ピット1本が認められた。また西壁の南側には不明ピットがある。床面は、ハードローム中に作られ堅固である。カマドは北壁中央部に位置し、主軸長1.0、幅1.3mを測る。袖は幅40cmの砂質粘土により構築されており、左袖の一部は第12号住居跡によって削られている。

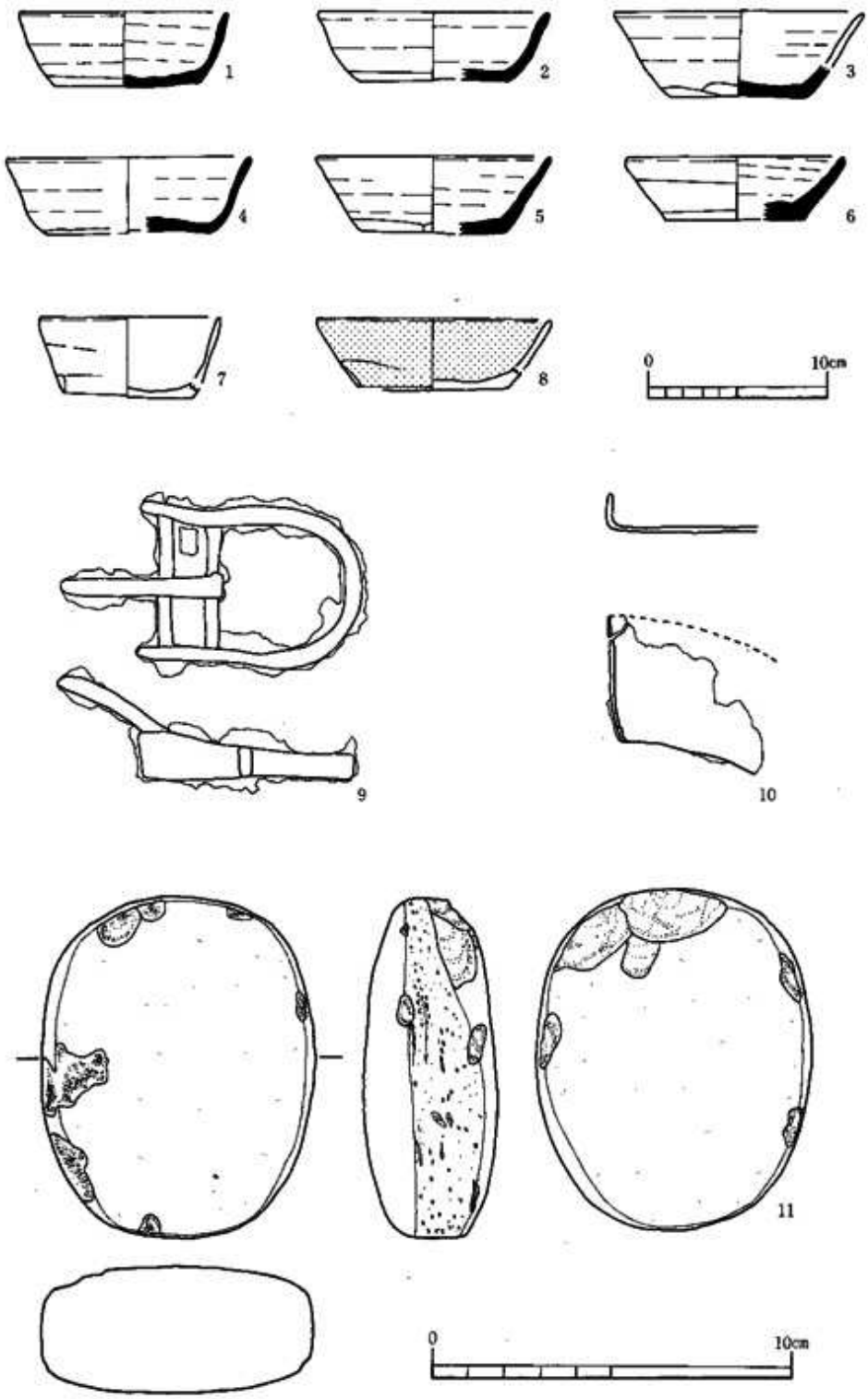
遺物には、須恵器坏6点、土師器坏2点、鉄製鉄具1点、鉄製鏃1点と縄文時代の磨石がある。土師器坏No.8は内外面に赤彩処理を施す。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL- 34 | 須恵器<br>坏 | 口径 11.9<br>器高 4.1<br>底径 8.2 | 内反気味に、ほぼ真上に立ち上がった体部は、口縁部でわずかに外反する。回転箆切り後体部下端と底部全面を回転箆削り。 | 白色微砂粒<br>石英粒 | 良好 | 5Y<br>5/1<br>灰 | 体部の1/5欠損 |
| 2<br>PL- 34 | 須恵器<br>坏 | 口径(13.0)<br>器高 3.8<br>底径( 8.2) | 内反気味に立ち上がった体部は、口縁部でわずかに外反する。体部下端と底部を回転箆削り。 | 白色微砂粒 | 良好 | 2.5Y<br>6/2<br>灰黄 | 1/2遺存 |
| 3<br>PL- 34 | 須恵器<br>坏 | 口径(14.2)<br>器高 4.7<br>底径 7.5 | 大きく開く体部をもつ。体部下端と底部全面を手持ち箆削り。 | 石英粒・砂粒 | 良好 | 7.5Y<br>7/2<br>灰白 | 体部の1/2欠損 |
| 4<br>PL- 34 | 須恵器<br>坏 | 口径(14.0)<br>器高 4.2<br>底径( 9.0 | 大径の底部からほぼ真上に立ち上がる体部をもつ。体部下端と底部全面を手持ち箆削り。 | 白色微砂粒<br>石英粒 | 良好 | 10YR<br>6/3<br>にぶい黄橙 | 2/3欠損 |
| 5<br>PL- 34 | 須恵器<br>坏 | 口径(13.2)<br>器高 4.2<br>底径( 8.0 | 直線的に大きく開く体部をもつ。体部下端と底部を手持ち箆削り。 | 軽石<br>緻密 | 良好 | 5Y<br>6/1<br>灰 | 1/2遺存 |
| 6<br>PL- 34 | 須恵器<br>坏 | 口径(12.4)<br>器高( 3.5)<br>底径( 7.8 | 全体に厚手の作りである。直線的に開いた体部は、口縁部で直立する。体部下端と底部を回転箆削り。 | 黒色粒<br>緻密 | 良好<br>硬質 | 5Y<br>6/1<br>灰 | 1/2遺存 |

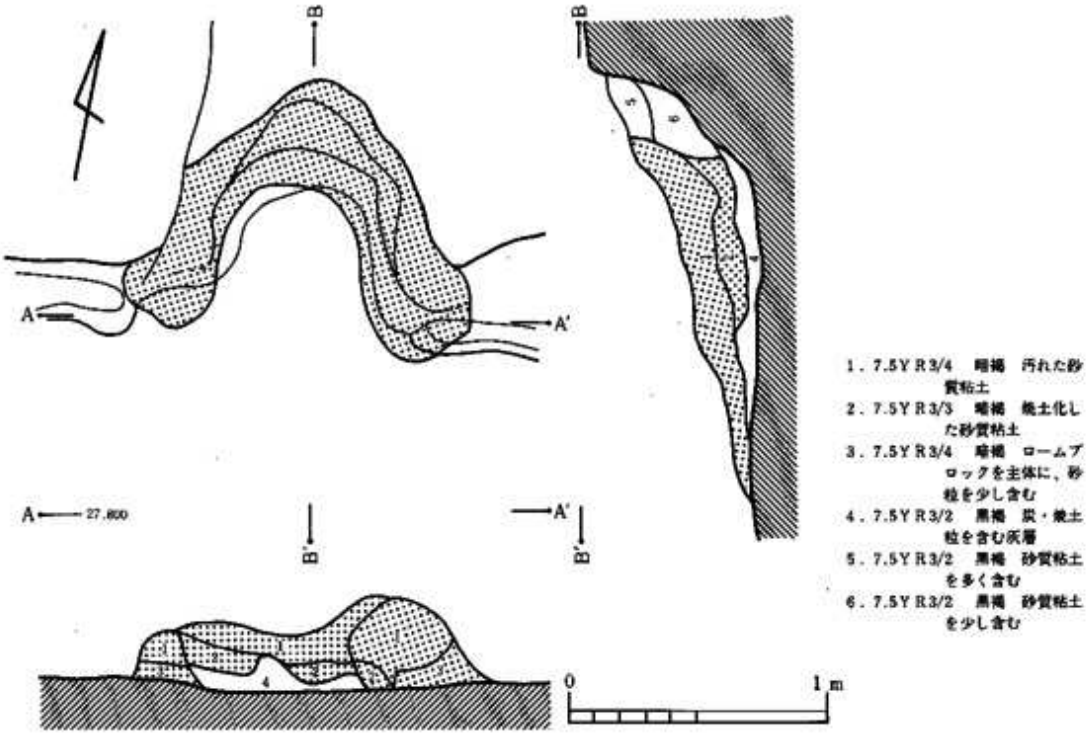



**第24図　第11号住居跡実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 7<br>PL- 34 | 土師器<br>坏 | 口径(10.2)<br>器高　4.5<br>底径　7.6 | 小径の底部から直線的に真上に立ち上がる体部をもつ。回転糸切り後体部下端と底部全面を手持ち箆削り。 | 白色微砂粒<br>赤褐色粒・<br>金雲母微量 | 良好 | 2.5YR<br>5/6<br>明褐 | 1/2遺存 |




第25図　第11号住居跡遺物実測図



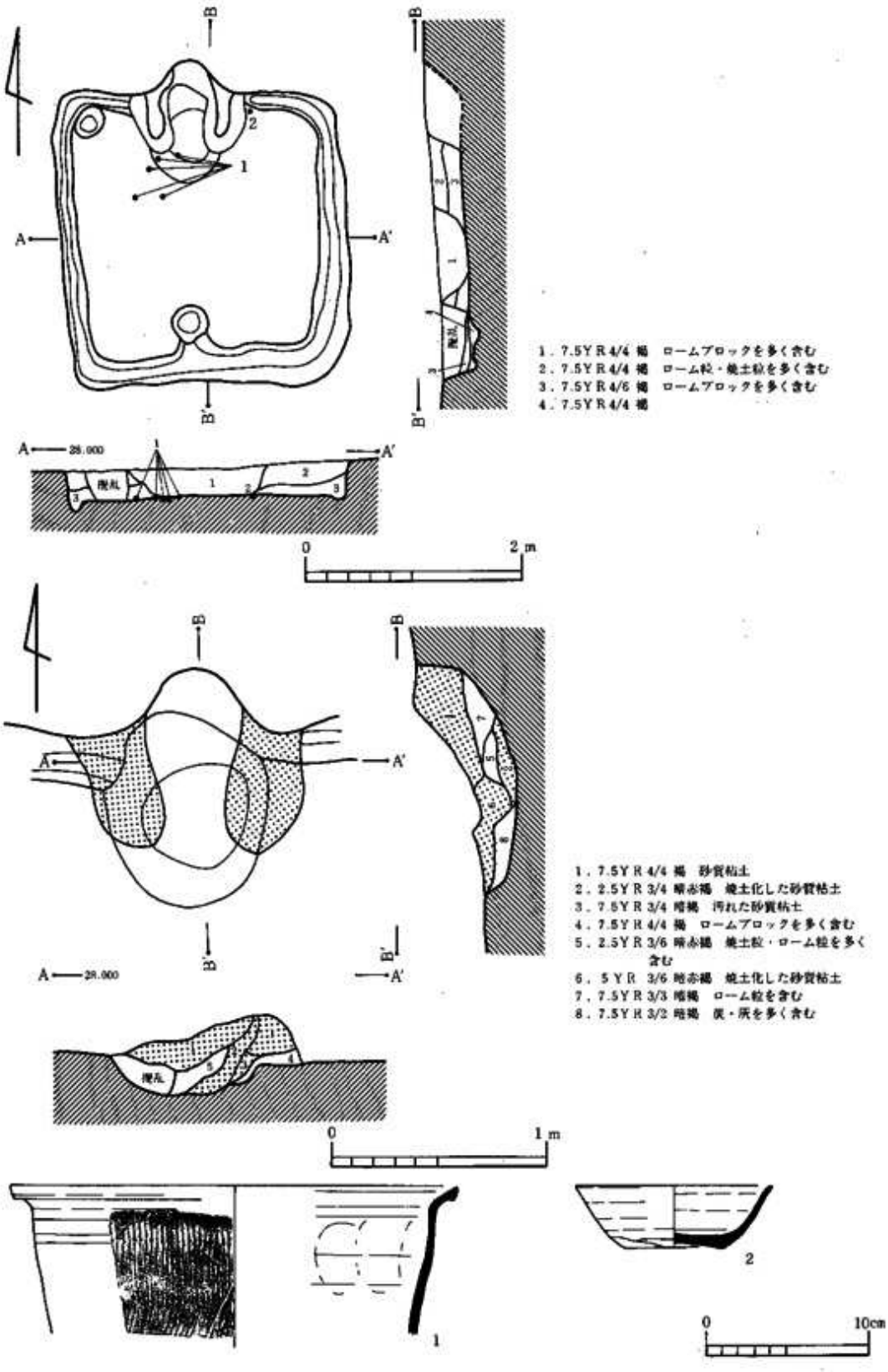

**第26図　第11号住居跡カマド実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 8<br>PL- 34 | 土師器<br>坏 | 口径(13.2)<br>器高　4.0<br>底径　8.8 | 直線的に開く体部をもつ。静止糸切り後体部下端と底部全面を手持ち箆削り。 | 白色微砂粒<br>緻密 | 良好 | 2.5YR<br>4/8<br>赤褐 | 内外面赤彩・刷毛塗り痕<br>体部の1/3欠損 |

**第12号住居跡**

本住居跡は、７Ｄ－ａおよび７Ｄ－ｃグリッドにまたがる。北東コーナーでの第13号住居跡との切り合いは、重複部分が少なく新旧は決められない。また遺物の上で杯における形態差からも明確な時間差は認められない。規模は2.7×2.7ｍの正方形を呈する。主軸方位はＮ－5°－Ｅである。壁高は25cmを測る。周溝は幅15cm前後、深さ10cmでカマド下を除いて全周する。柱穴は、カマドに対面する南壁直下に径20cm、深さ25cmの第５ピット１本が検出された。床面はソフトローム中に作られた軟弱である。カマドは北壁中央に位置し、主軸長1.0ｍ、幅1.0ｍを測る。袖は幅35cmの砂質粘土により構築されている。

遺物には、須恵器甕１点および杯１点がある。須恵器杯No.２は箆切りにより切り離され、その後の調整には手持ち箆削りが施される。




**第27図　第12号住居跡とカマドと遺物実測図**

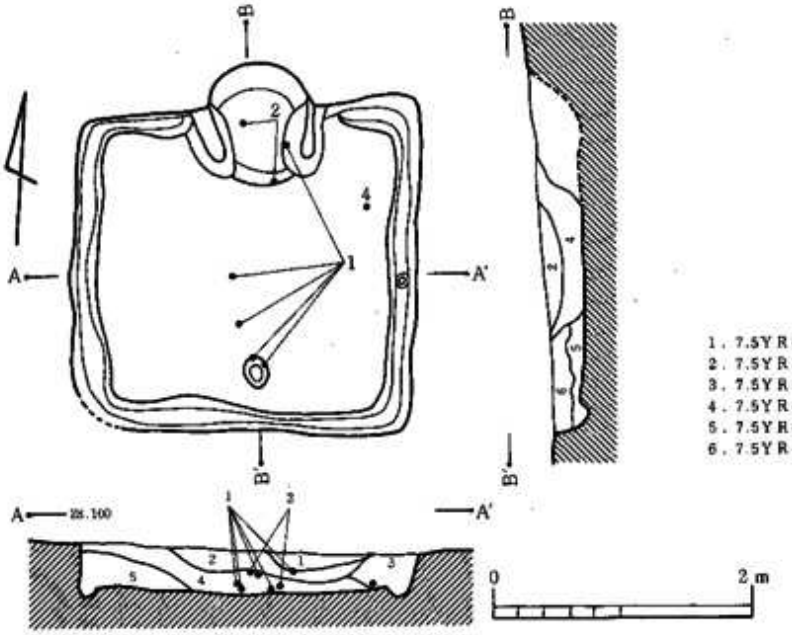
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL- 35 | 須恵器<br>甕 | 口径(27.6)<br>現存高 9.0 | 直線的に立ち上がった体部は頸部で急激に外傾し、口唇部をわずかにつまみ上げる。口縁は折り返して肥厚させる。 | 白色微砂粒 | 良好 | 2.5Y<br>7/2<br>灰黄 | 上半部の1/4遺存 |
| 2<br>PL- 35 | 須恵器<br>坏 | 口径(12.2)<br>器高 3.8<br>底径( 6.2) | 内反気味に大きく開く体部は口縁でわずかに外反する。回転篦切り後体部下端と底部周縁を手持ち篦削り。 | 白色微砂粒<br>石英粒 | 良好 | 10YR<br>6/1<br>灰 | 体部の2/3欠損 |

**第13号住居跡**

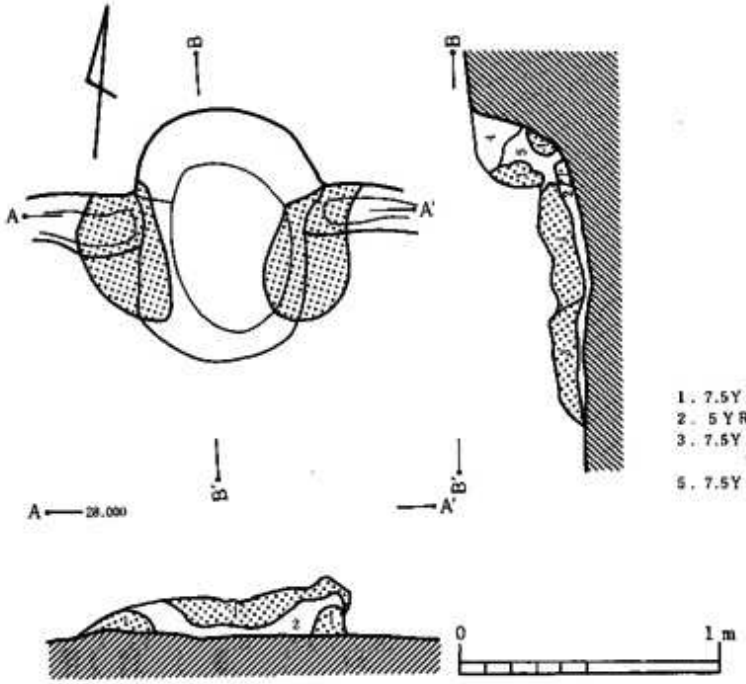
本住居跡は、６Ｄ－ｄおよび７Ｅ－ｃグリッドにまたがる。南東コーナーが第11号住居跡を切ることは確実であるが、南西コーナーにおける第12号住居跡との新旧は不明である。規模は、2.6×2.6ｍの正方形を呈するが、東壁に比べ西壁がやや短く、北壁に比べて南壁の長さがわずかに短い。主軸方位はＮ－5°15′－Ｗである。壁高は35cmを測る。周溝は、幅15cm前後、深さ10cmでカマド下を除いて全周する。柱穴は、カマドに対面する南壁直下の第５ピット１本が検出され、径20cm弱、深さ20cmを測る。床面はソフトローム中に作られ軟弱である。カマドは北壁中央に位置し、主軸長1.0、幅1.0ｍを測る。袖は幅30cmの砂質粘土により構築されている。火床面は良く焼けている。

遺物には、須恵器甕２点および杯１点、土師器杯１点がある。須恵器甕はロクロ成型の後体部外面に篦削りを用いて整形しており一見土師器を思わせる作りである。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL- 35 | 須恵器<br>甕 | 口径(13.2)<br>器高 15.0<br>底径 7.0 | 弧状の胴部は、頸部で大きく外傾し、口唇部をわずかにつまみ上げる。粘土紐の積み上げ後ロクロ調整を行う。底部には板目を遺し、胴部下端と底部を手持ち篦削り。 | 白色微砂粒<br>石英粒赤褐色粒 | 良好 | 2.5Y<br>5/1<br>黄灰 | 胴上部の一部欠損<br>床直 |
| 2<br>PL- 35 | 須恵器<br>甕 | 口径(13.3)<br>現存高15.6 | 弧状の胴部は、頸部で大きく外傾し、口縁中ほどでさらに外傾する。口唇部をわずかにつまみ上げる。粘土紐の積み上げ後ロクロ調整を行う。胴部を縦篦削り。 | 白色微砂粒<br>石英粒・金雲母・赤褐色粒 | 良好 | 5YR<br>5/8<br>明赤褐 | 胴上部の1/2遺存<br>床直 |
| 3<br>PL 35 | 須恵器<br>坏 | 口径(12.6)<br>器高 3.9<br>底径 6.0 | 直線的に大きく開く体部をもつ。回転篦切り後体部下端と底部周縁を手持ち篦削り。 | 白色微砂粒<br>石英粒・長石粒 | 良好 | 2.5YR<br>6/2<br>灰黄 | 体部の1/2欠損 |



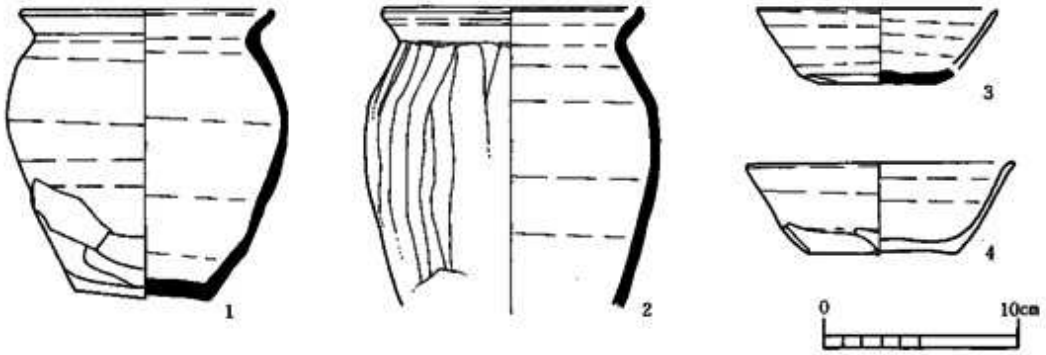

1．7.5YR4/3 褐　焼土粒を多く含む
2．7.5YR3/4 暗褐　焼土粒を少し含む
3．7.5YR4/4 褐　ロームブロックを多く含む
4．7.5YR4/4 褐　ローム粒を多く含む
5．7.5YR4/4 褐　ロームブロックを多く含む
6．7.5YR4/6 褐　ロームブロックを主体とする。




1．7.5YR4/3　褐　砂質粘土
2．5YR 3/3　暗赤褐　砂粒と褐色土を多く含む
3．7.5YR4/3　褐　砂質粘土を主体にロームブロックを多く含む
5．7.5YR3/2　黒褐　焼土粒・炭・砂粒を多く含む

**第28図　第13号住居跡とカマド実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4<br>PL- 35 | 土師器<br>坏 | 口径 14.0<br>器高 4.6<br>底径 7.8 | 直線的に大きく開く体部をもち、口縁部でわずかに外反する。体部下端と底部全面を手持ち箆削り。 | 白色微砂粒<br>砂粒・石英粒・長石粒<br>赤褐色粒 | 良好 | 5YR<br>5/4<br>にぶい赤褐 | ほぼ完形<br>体部外面に炭化物付着 |



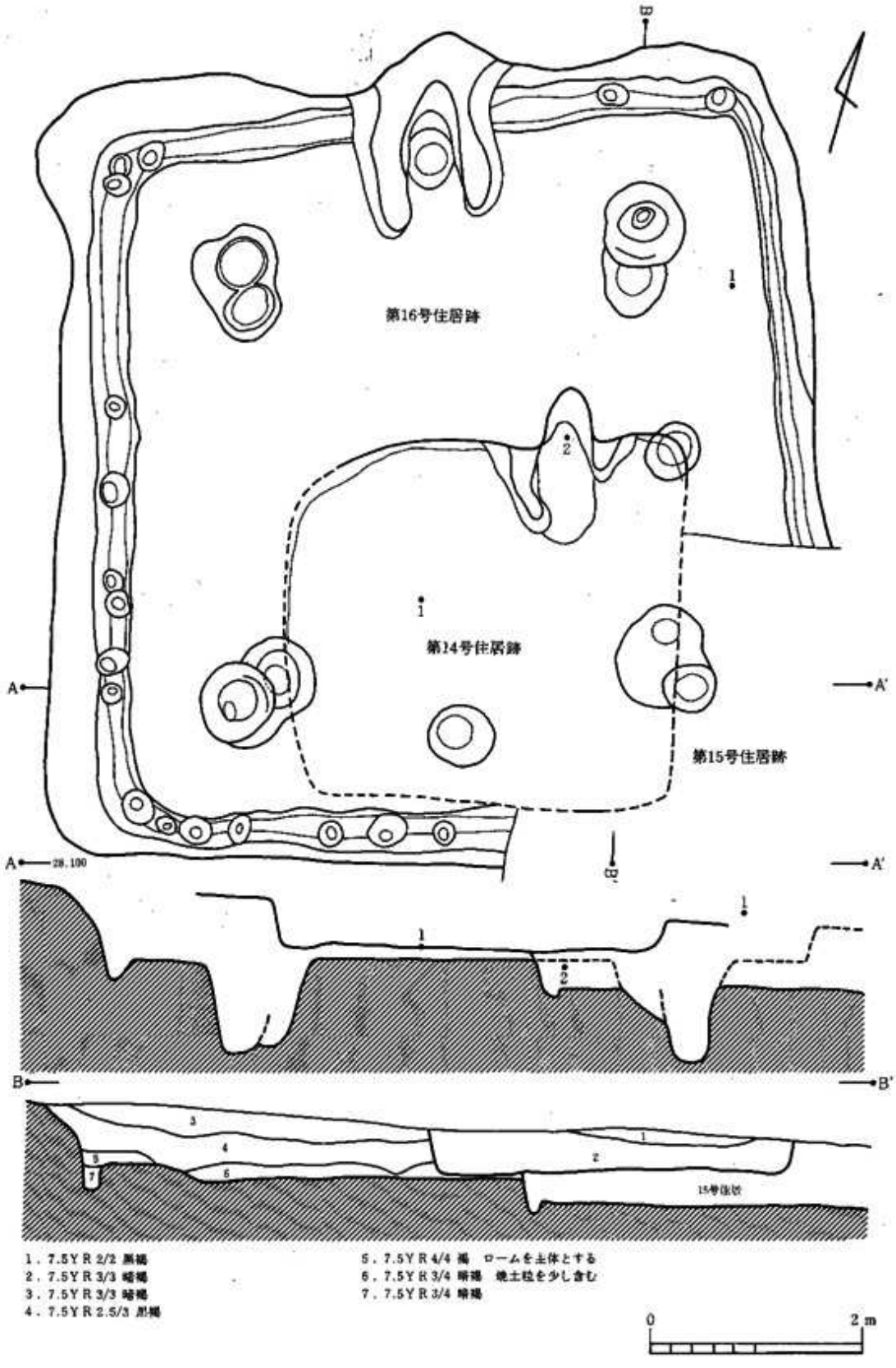

**第29図　第13号住居跡遺物実測図**

**第14号住居跡**

本住居跡は、６Ｅ－ｃおよび６Ｅ－ｄグリッドにまたがり、第14号住居跡と第16号住居跡の覆土中に構築されている。新旧の順序は、16号→15号→14号（本住居跡）の順になる。調査当初は本住居跡の存在を見逃していたため、東・西・南壁の３方の壁を面的に把握することができず、確実につかめたのはカマドを有する北壁だけで、他の壁は断面図からの復元であり、周溝などについて不明な点を多々残している。規模は3.5×3.6ｍの方形を呈する。主軸方位はＮ－14°30′－Ｗである。壁高は45cmを測る。周溝は、カマド周辺には認められなかった。柱穴は、主柱穴は持たないものの、第５ピットの有無は不明である。床面は16号住居跡および　第15号住居跡の覆土中に築かれ軟弱である。カマドは北壁中央よりやや東寄りに位置し、主軸長1.2ｍ、幅1.3ｍ を測る。袖は30cmの砂質粘土により構築される。火床は良く焼けている。第16号住居跡の覆土を大きく掘りくぼめてカマドを構築する。

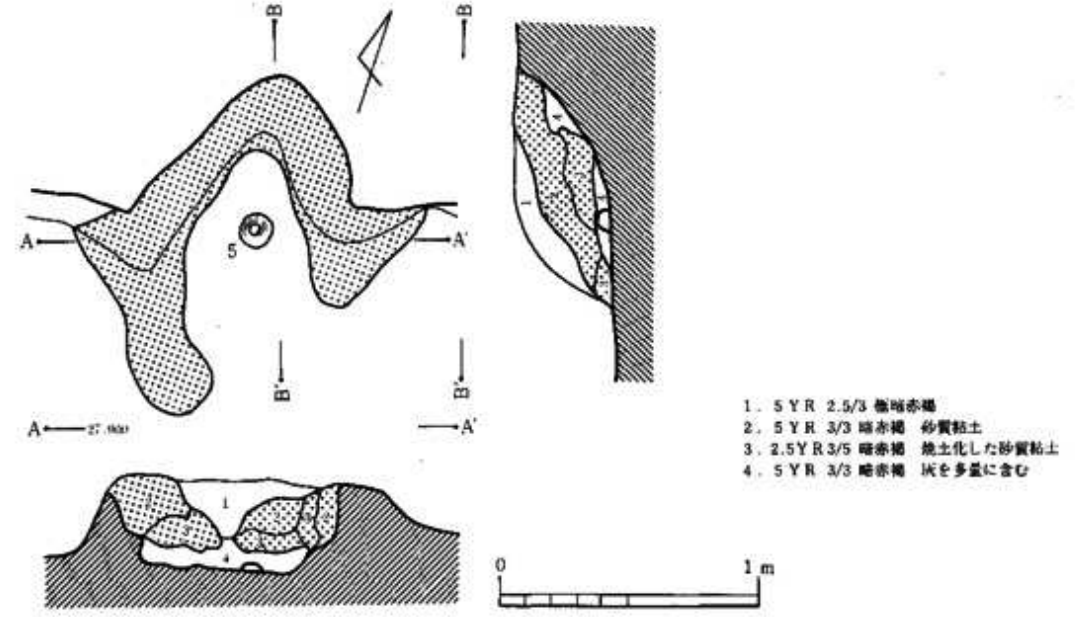
遺物には、須恵器杯１点と土師器杯４点がある。杯No.３と５は内面に篦磨きを持ち、No.５は内黒である。

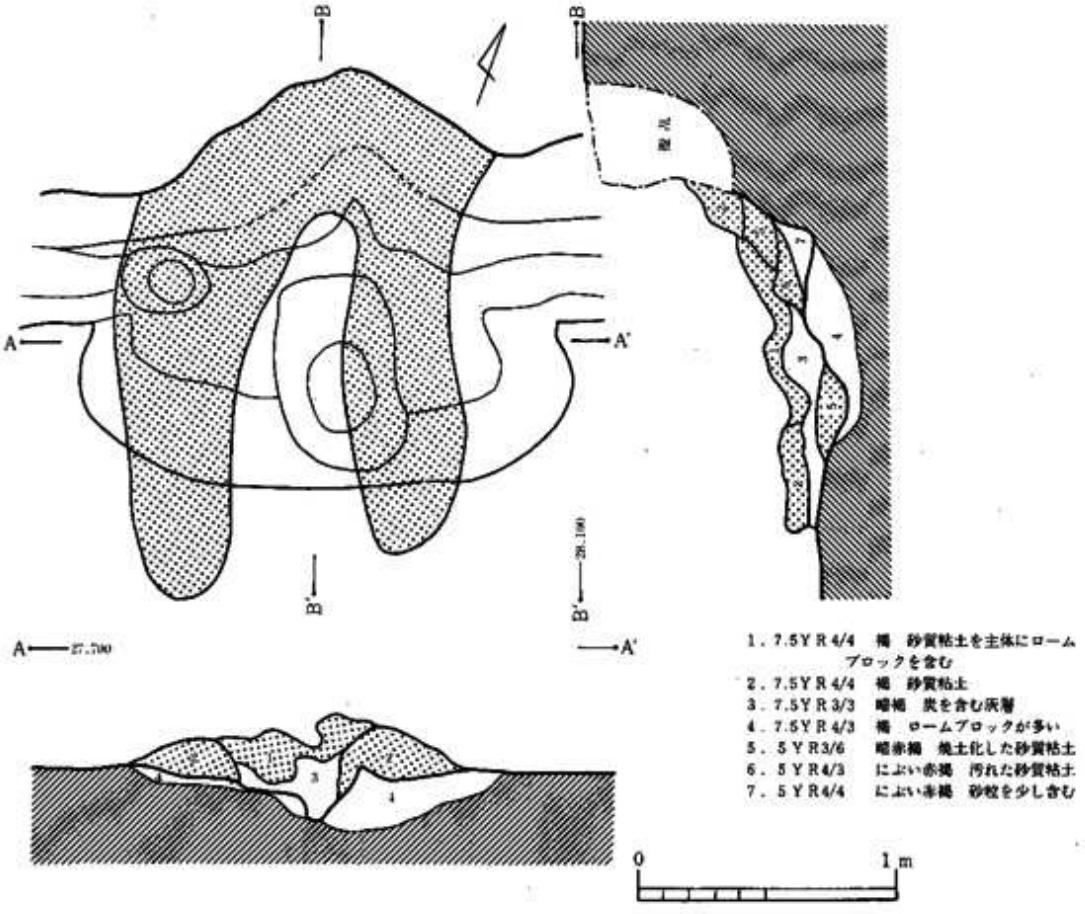
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL-36 | 須恵器<br>坏 | 口径 13.0<br>器高 4.7<br>底径 5.0 | 小径の底からやや丸味をもち、大きく開いて立ち上がり、口縁で小さく外反する。体部下端と底部全面を回転篦削り。 | 白色砂粒・石英粒少量含有 | 良好 | 7.5YR<br>7/6<br>橙 | 体部の1/4欠損 |
| 2<br>PL-36 | 土師器<br>坏 | 口径(12.0)<br>器高 3.7<br>底径 5.0 | 小径の底部から内反気味に大きく開いて立ち上がる。回転糸切り後体部下端と底部全面を手持ち篦削り。 | 石英粒・長石粒・赤褐色粒少量含有 | 良好 | 5YR<br>5/8<br>明赤褐 | 体部の2/3欠損 |
| 3<br>PL-36 | 土師器<br>坏 | 口径(15.0)<br>器高 6.1<br>底径 (7.0) | 底部と体部の境にわずかに段をもち、体部は内反気味に大きく開いて立ち上がる。 | | 良好 | 10YR<br>7/3<br>にぶい黄橙 | 内黒土器<br>体部の4/5欠損 |



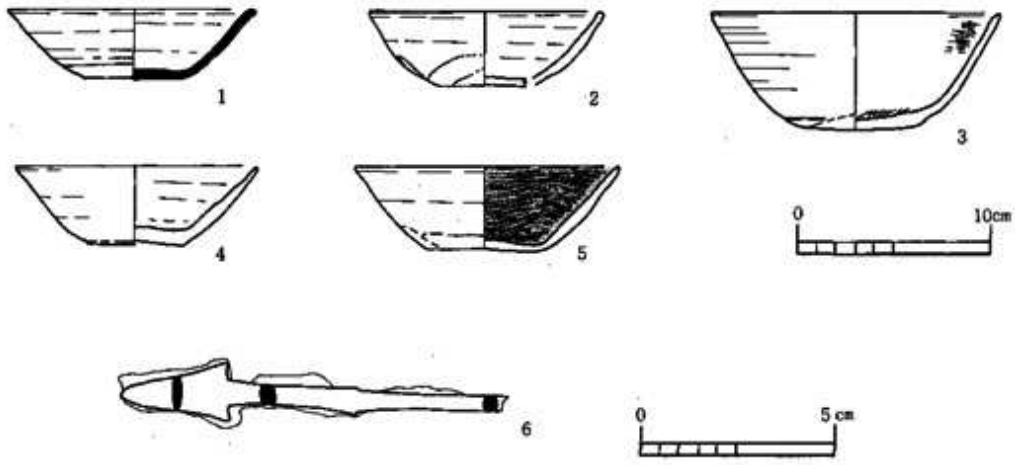

1．7.5YR 2/2 黒褐
2．7.5YR 3/3 暗褐
3．7.5YR 3/3 暗褐
4．7.5YR 2.5/3 黒褐
5．7.5YR 4/4 褐　ロームを主体とする
6．7.5YR 3/4 暗褐　焼土粒を少し含む
7．7.5YR 3/4 暗褐

**第30図　第14・16号住居跡実測図**




**第31図　第14・16号住居跡カマド実測図**



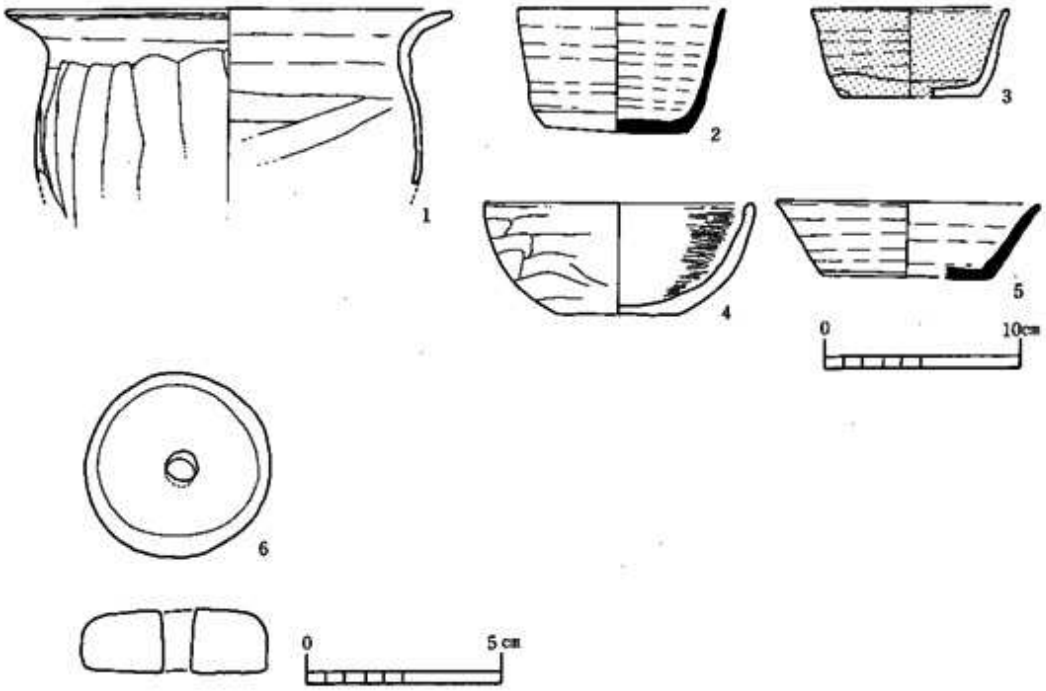

**第32図　第14号住居跡遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4<br>PL- 36 | 土師器<br>坏 | 口径(12.5)<br>器高　4.0<br>底径 (5.0) | 小径の底部から大きく直線的に開く体部をもつ。回転糸切り後未調整。 | 石英粒 | 良好 | 5 Y R<br>6/6<br>橙 | 体部の3/4欠損 |
| 5<br>PL- 36 | 土師器<br>坏 | 口径 16.6<br>器高　4.2<br>底径　6.0 | 小径の底部から大きく直線的に開く体部をもつ。内面は篦磨き。回転糸切り後体部下端と底部周縁を手持ち篦削り。 | | 不良<br>脆弱 | 2.5Y R<br>4/6<br>にぶい赤褐 | 内黒土器<br>完形 |

**第15号住居跡**

本住居跡は、６Ｅ－ｄグリッドに中心を持つ。東と西側で第14号と第７号住居跡によって切られ、また本住居跡も北西コーナーで第16号住居跡を切る。規模は4.8×4.8ｍの正方形を呈する。主軸方位はＮ－2°30′－Ｗである。壁高は遺存状況の良い西壁では50cmを測る。周溝は、幅20cm、深さ10cmで明瞭な掘り方を持ちカマド下を除いて全周する。柱穴は、径50～70cm、深さ40～50cmの主柱穴４本と、径40cm、深さ10cmの第５ピット１本が検出された。床面はハードローム中に作られよく踏み固められ堅固である。カマドは北壁中央に位置した主軸長 1.3 ｍ、幅 1.3ｍ を測る。袖は幅40cmの砂質粘土により構築される。床面は良く焼けている。煙道部分の壁をわずかに掘りくぼめてカマドを構築する。

遺物には、須恵器杯１点と土師器甕１点、杯２点、ロクロ未使用杯１点、石製紡錘車１点である。土師器杯No.３は内外面に赤彩を施し、ロクロ未使用杯No.４は内面に篦磨きを施す。No.６は石製紡錘車である。



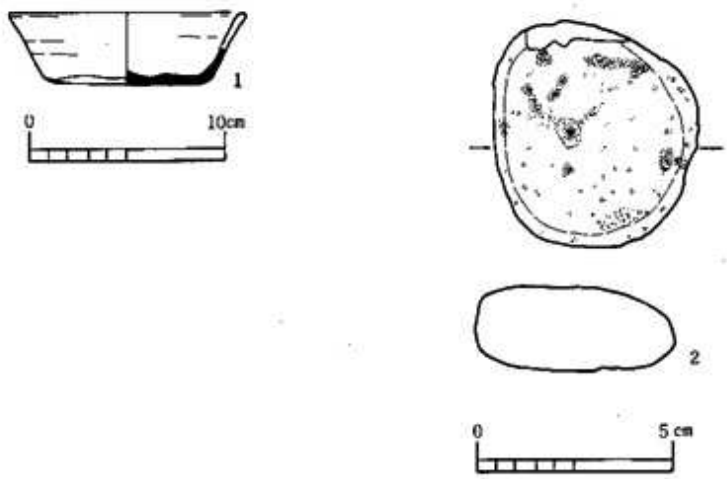

**第33図　第15号住居跡遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL- 36 | 土師器<br>甕 | 口径(23.0)<br>現存高11.6 | 弧状の胴部は、頸部で大きく外反し、口縁部中ほどでさらに外反の度を強め、口唇部を外方へつまみ出す。 | 白色砂粒・石英粒・長石粒 | 良好 | 2.5Y R<br>6/6<br>橙 | 胴上部の1/2遺存 |
| 2<br>PL- 36 | 須恵器<br>坏 | 口径 10.6<br>器高 6.4<br>底径 7.4 | 底部から直線的に真上に立ち上がる体部をもつ。底部内面に指頭による抽で。回転箆切り後体部下端と底部周縁を回転箆削り。 | 白色砂粒 | 良好<br>硬質 | N<br>6/0<br>灰 | 体部の1/3欠損 |
| 3<br>PL- 36 | 土師器<br>坏 | 口径(10.2)<br>器高 4.6<br>底径 7.0 | 底部から直線的に真上に立ち上がる体部をもち、口縁部がわずかに外反する。静止糸切り後体部下端と底部全面を手持ち箆削り。 | 緻密 | 良好 | 2.5Y R<br>5.6<br>明褐 | 内外面赤彩<br>1/2欠損 |
| 4<br>PL- 36 | 土師器<br>坏 | 口径(14.0)<br>器高 5.8<br>底径( 6.0) | ロクロ未使用。内反して立ち上がる体部をもつ。内面は荒磨き。 | 石英粒・金雲母<br>緻密 | 良好 | 7.5Y R<br>6/6<br>灰 | 3/4欠損 |
| 5<br>PL- 36 | 須恵器<br>坏 | 口径(13.6)<br>器高 3.9<br>底径( 8.6) | 大径の底部から直線的に大きく開く体部をもつ。回転箆切り未調整。 | 白色粗石 | 良好 | N<br>6/0<br>灰 | 2/3欠損 |

**第16号住居跡**

本住居跡は、６Ｅ－ａ・ｂ・ｃ・ｄの４グリッドにまたがる大形の住居跡である。住居跡の南東コーナーを第15号住居跡によって切り取られ、またさらに南側の覆土中には第14号住居跡が掘り込まれている。規模は7.5×7.0ｍと主軸方向にやや長い長方形を呈する。主軸方位はＮ－5°30′－Ｗである。壁高は60cmを測る。周溝は、幅15～20cm、深さ15cmでカマド下を除いて全周するが、柱の立て替えに伴う周溝の掘り直しは認められない。主柱穴の４本はいずれも２度の立て替え痕跡をもち、旧柱穴は径60～70cm、深さ80cm前後を測り、また新柱穴は径50～60cm、深さ70～80cmを測る。第５ピットは径50cm、深さ40cmである。また周溝中からは径20cm前後、深さ10cmの壁柱穴らしき小ピット18本が検出された。床面はハードローム中に掘り込まれ堅固である。カマドは北壁中央に位置し、主軸長1.8ｍ、幅1.3ｍを測る。袖は幅40cmの砂質粘土により構築されているが崩壊が著しい。火床の焼けは弱い。壁に対する掘り込みは極めて少なく、両袖の長さが1.6ｍと長く、煙道を含めたカマドの大半が竪穴に構築されている。

遺物は、須恵器杯１点と不明石製品を図示したが、いずれも本住居跡に伴うものではない。なお、カマド調査中に図示しえないほどの丸底のロクロ未使用土師器杯細片が認められている。




**第34図　第16号住居跡遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL 36 | 須恵器<br>坏 | 口径(12.2)<br>器高 3.7<br>底径( 7.5) | 底部から直線的に立ち上がった体部は、口縁で小さく外反し、肥厚する。体部下端と底部全面を手持箆削り。 | 白色砂粒・石英粒含有 | 良好 | ５Ｙ<br>3/1<br>オリーブ黒 | 体部の4/5欠損 |

**第17号住居跡**

本住居跡は、８Ｄ－ａおよび８Ｄ－ｃグリッドにまたがる。覆土の中央部には第10号住居跡がほぼ同じ主軸方向の一回り小型のプランで掘り込まれ、さらにその後東壁を第８・９号住居跡によって切られている。また本住居跡も北側で第18号住居跡を掘り込むという複雑な重複関係を持つ。規模は4.6×5.7ｍの長方形を呈する。主軸方位はＮ－3°30′－Ｗである。壁高は90cmと深い。周溝は、幅10cm、深さ５cmでカマド下を除いて全周すると考えられる。主柱穴は、東側の２柱穴についてのみ新旧２度の立て替え痕跡がみられた。旧柱穴は径50cm、深さ50cmを測り、新柱穴は径40～50cm、深さ40～50cmである。第５ピットは径40cm、深さ30cmを測る。床面はハードローム中に作られ堅固である。カマドは第10号住居跡による撹乱が著しく、北壁中央に砂質粘土の分布およびにカマドの掘り方としてその痕跡を検出するに止どまった。火床は良く焼けており、壁に対するカマドの掘り込みは小さい。

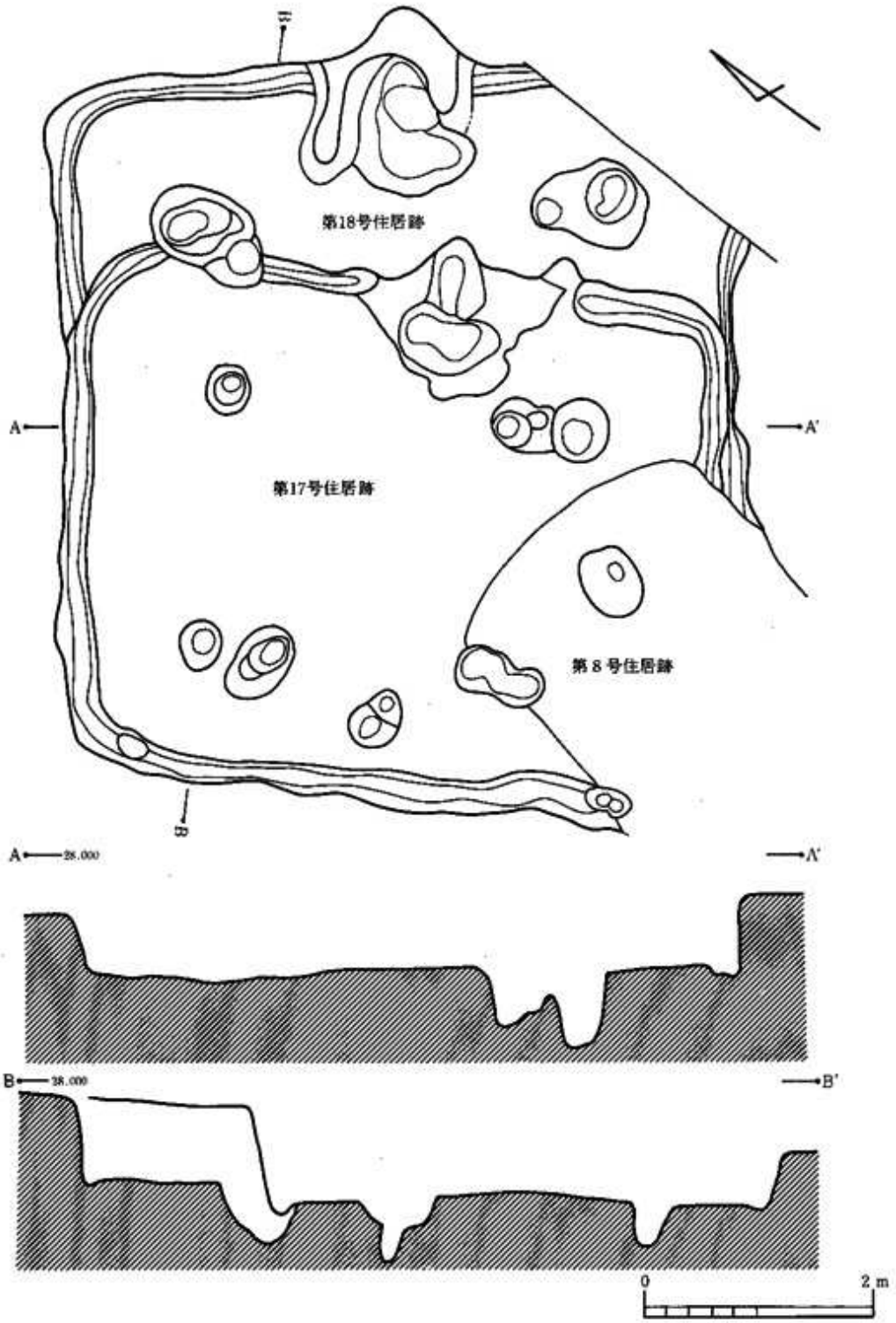
図示しえる遺物は無い。

**第18号住居跡**

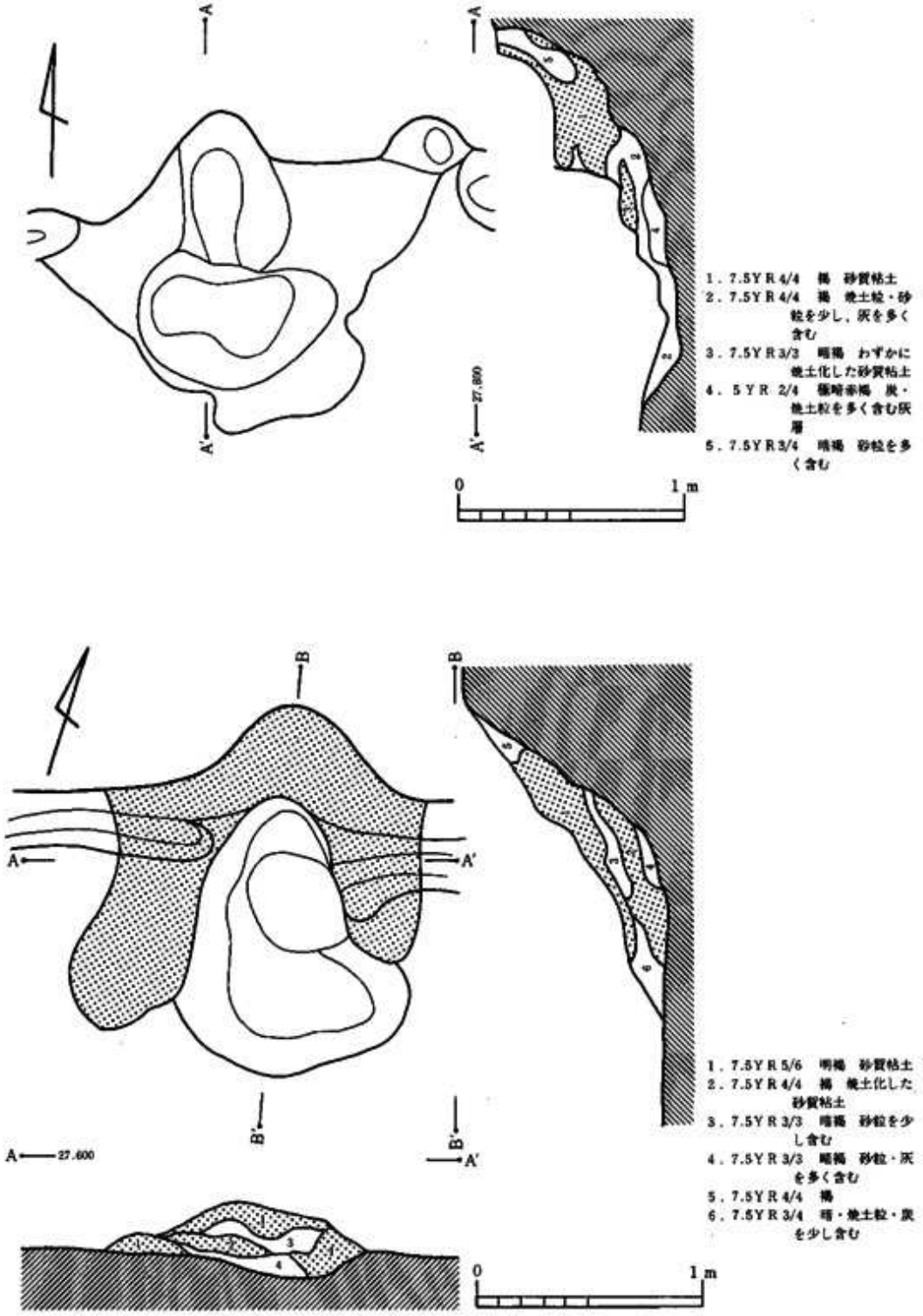
本住居跡は、第17号住居跡と同じく８Ｅ－ａと８Ｅ－ｃグリッドにまたがって位置し、中央部以南を第17号住居跡によって掘り取られている。また北西コーナーは調査区域外にあたり未調査である。規模は2.0（現存長）×6.0ｍの方形を呈すると考えられる。主軸方位はＮ－10°－Ｗである。壁高は75cmを測る。周溝は、幅10cm前後、深さ５cm弱でカマド下を除いて全周すると考えられる。柱穴は径80cm前後、深さ60cmの主柱穴４本検出したが、やや配置が不揃いである。また第５ピットの有無は不明である。床面はハードローム中に作られ堅固である。カマドは北壁中央に位置し、主軸長1.6ｍ、幅1.5ｍを測る。袖は幅40cm前後の砂質粘土により構築されている。火床面は良く焼けている。壁をわずかに掘りくぼめて煙道を構築している。

図示しえる遺物はない。

（倉田　義広）




**第35図　第17・18号住居跡実測図**

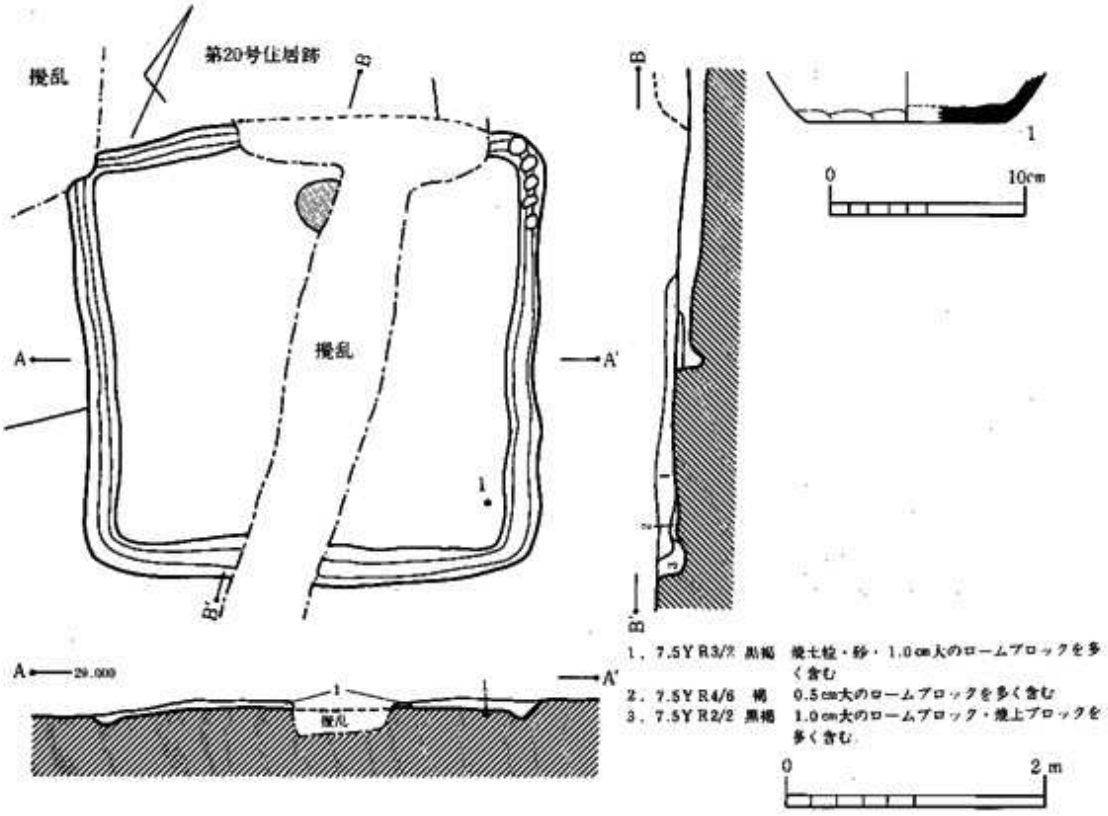



**第36図　第17・18号住居跡カマド実測図**

**第19号住居跡**（第37図）

４Ｃ－ｃグリッドより検出され、第20号住居跡と重複する。規模は3.6×3.6ｍの正方形を呈し、主軸はＮ－30°－Ｗである。壁高は20cmで、幅15cm、深さ５cmの周溝が全周する。周溝内には北隅に径10～15cm、深さ10cmの壁柱穴が５本みられる。床面はハードローム面を利用した堅固なもので、北側は第20号住居跡の覆土内に貼床を形成する。柱穴は検出されず、中央部の溝状の撹乱によりカマドはほとんど破壊されており、火床部分にあたると思われる焼土が北側に一部検出されたに過ぎない。

遺構内からは須恵器の杯の底部が１点出土したに過ぎない。

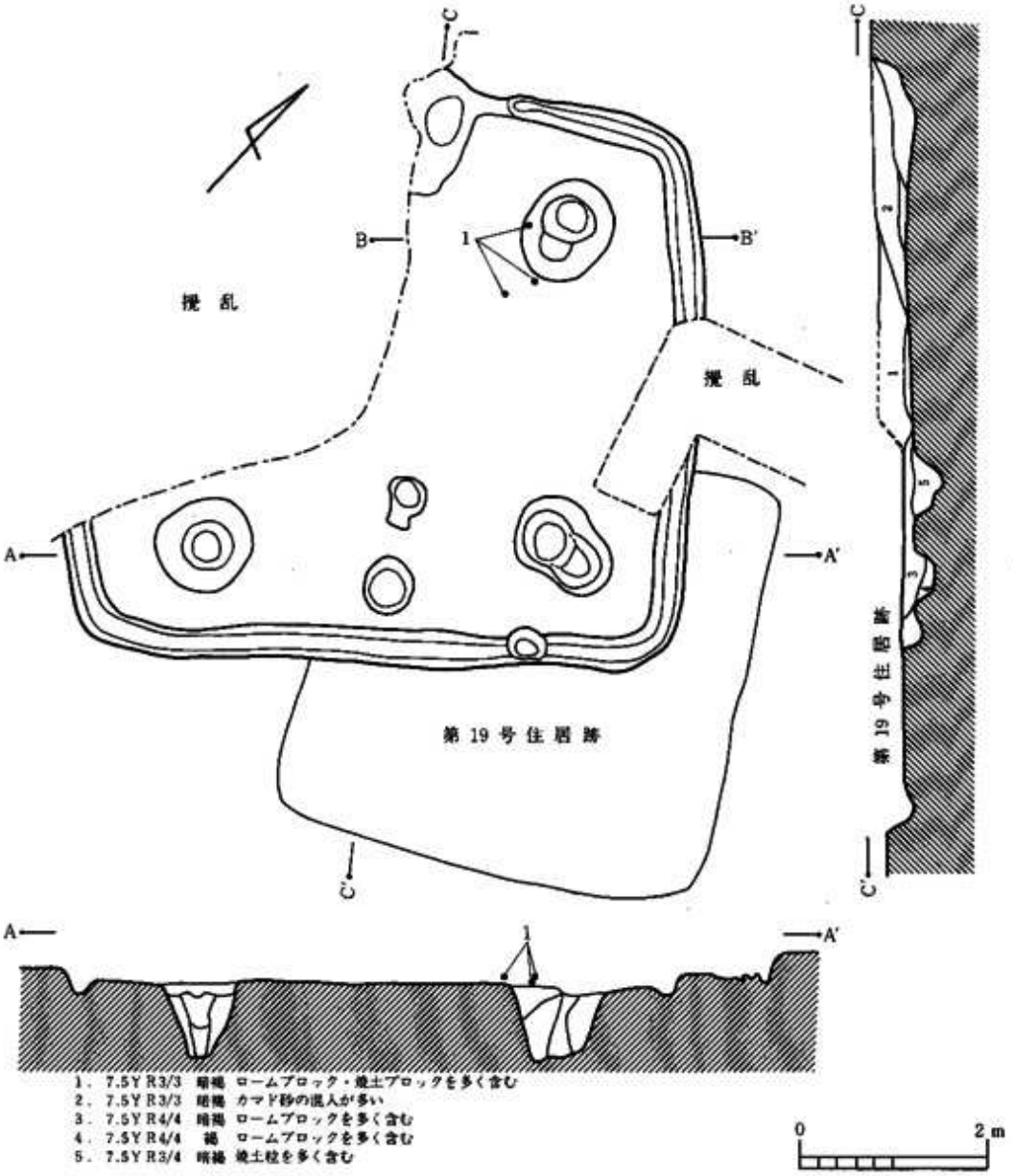



**第37図　第19号住居跡と遺物実測図**

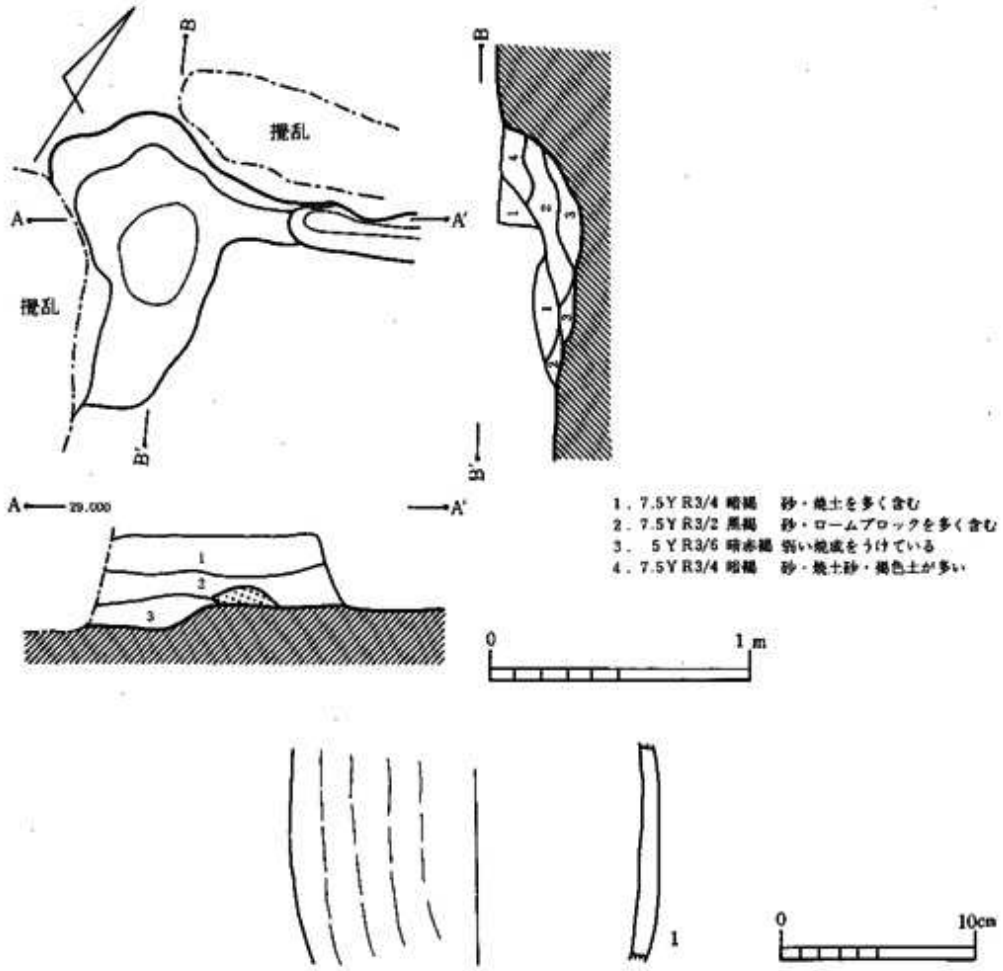
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 須恵器<br>坏 | 底径 10.0 | 底部、平底。体部下端、手持ち鹿削り。 | 砂粒若干混入 | 良好 | 5B<br>5/1<br>青灰 | 須恵器<br>底部1/3 |

**第20号住居跡**（第38図・第39図）

第19号住居跡の西側に位置し、5.0×4.9mの方形を呈するも西側1／3は撹乱により破壊されている。主軸はN－33°－Wである。壁高は28cmで、幅20cm、深さ10cmの周溝がカマド下を除いて全周する。柱穴は径70～80cm、深さ60cmのものが3本の他に撹乱により1本壊されている。第5ピットは径40cm、深さ30cmである。なお南側の2本は別のものである。床面はハードローム面を利用して堅固である。カマドは北辺中央部に構築されているが、左袖は撹乱により破壊されており、全体の形状は捉えられない。右袖は厚さ10cmの砂質粘土により僅かに形状を留め




**第38図　第20号住居跡実測図**




**第39図　第20号住居跡カマドと遺物実測図**

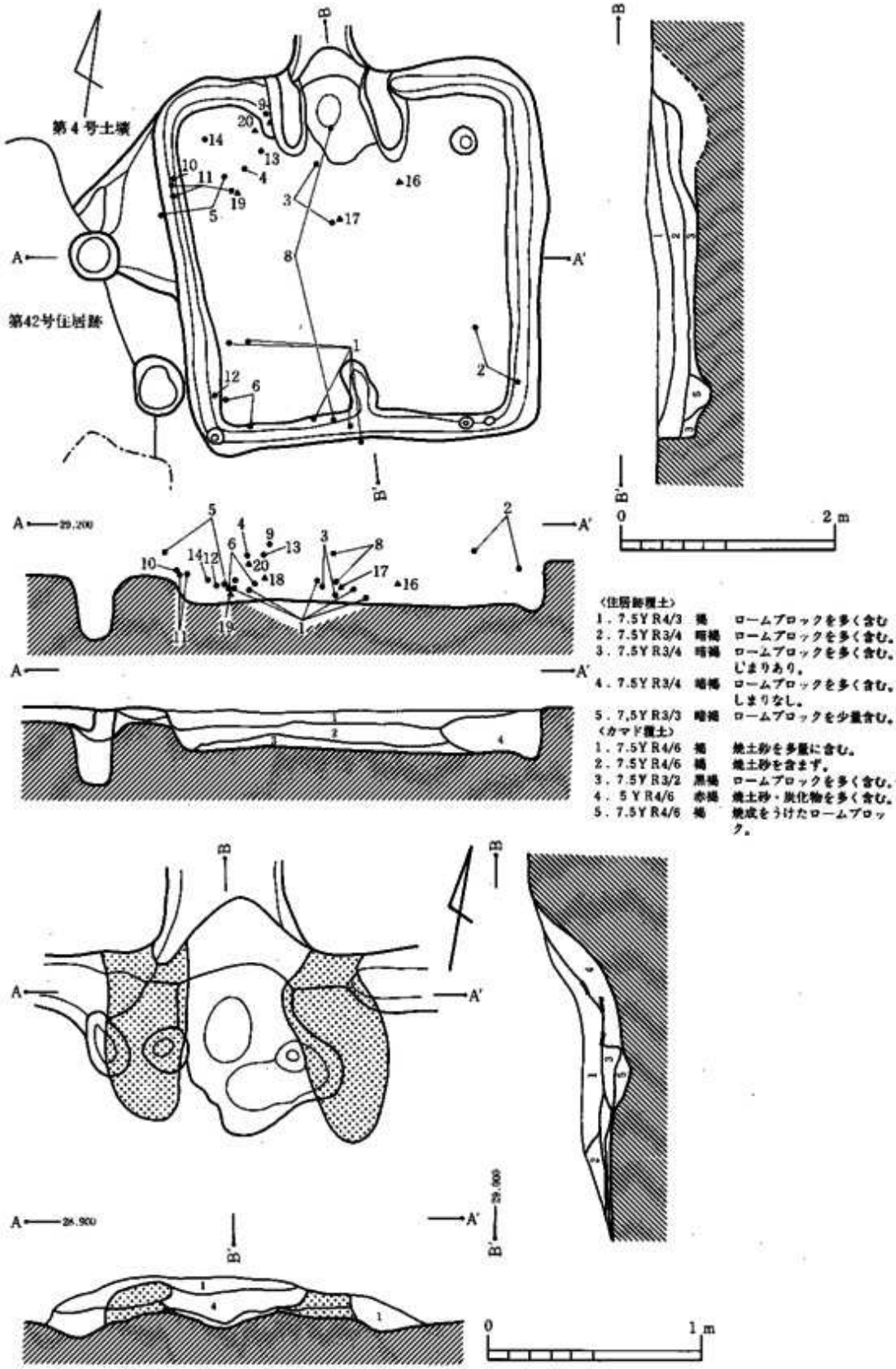
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>甕 | 胴部径18.4 | 胴部中央がゆるやかに膨む縦の箆削り。 | 砂粒多量混入。粗 | やや不良 | 2.5YR<br>4/8<br>赤褐 | 土師器<br>胴部1/3 |

るのみであり、火床は床面より10cm低くなっている。

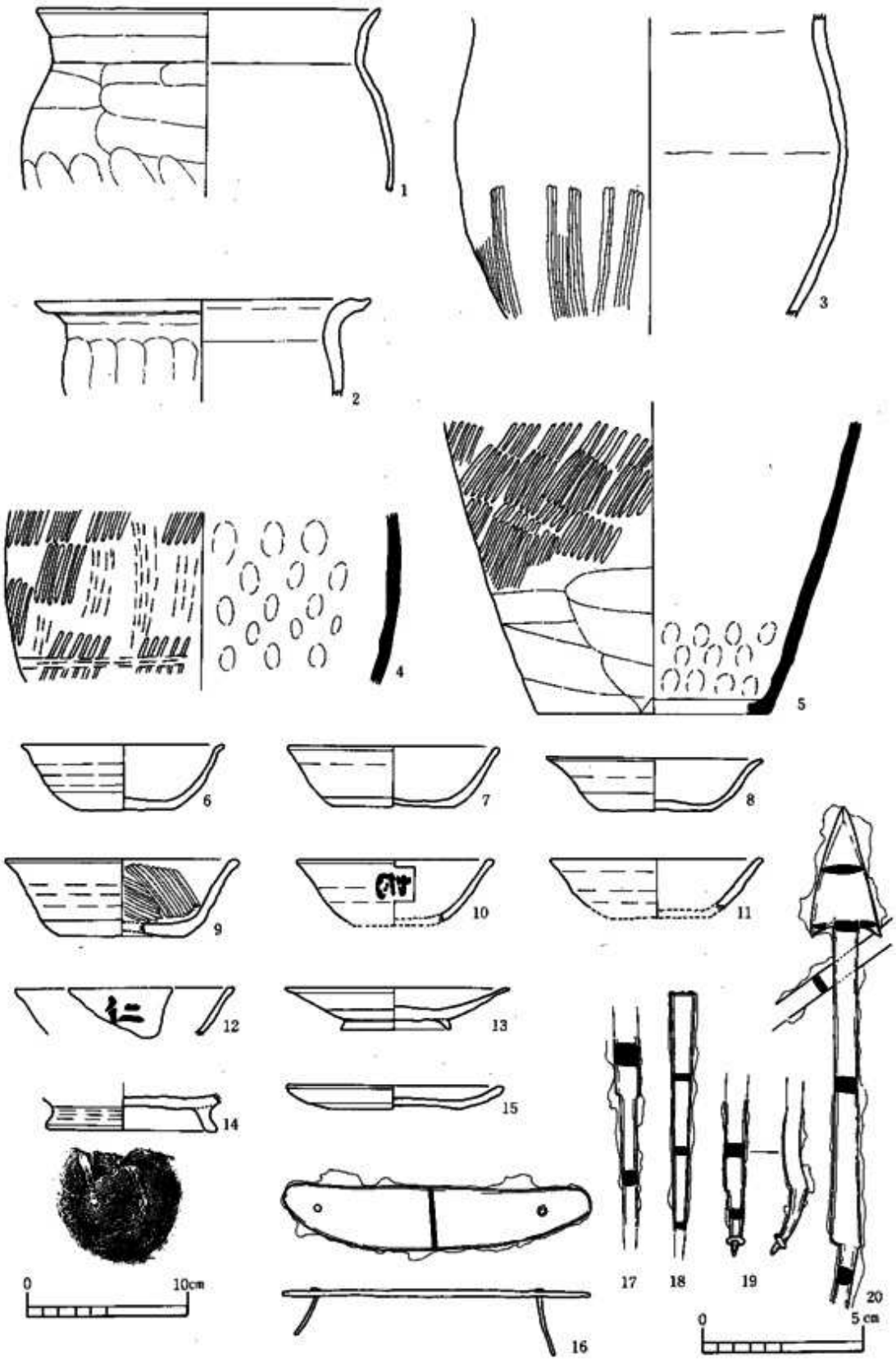
遺構内からは土師器の甕の胴部が出土しているのみである。

**第21号住居跡**（第40図・第41図）

5C－bグリッドで検出され、3.5m×3.6mの方形を呈する。主軸はN－14°－Wをとり、幅5～10cm、深さ5cmの周溝がカマド下を除いて全周する。柱穴は北隅に径25cm、深さ10cmのものが1本認められるのみである。床面はハードローム面を利用して堅固である。カマドは北辺中央部に設けられ上面は近世の溝により削られている。主軸長1.10m、幅1.30mで、両袖は幅




**第40図　第21号住居跡とカマド実測図**




**第41図　第21号住居跡遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>甕 | 口径(21.0) | 最大径を胴部上半に持ち、口縁部は「コ」の字状をなす。胴部上半は横、下半は縦のヘラ削り。器壁は4㎜と薄い。 | 白色砂粒・石英粒を多く含み砂質 | 良好 | 10YR<br>4/8<br>赤 | 武蔵型甕<br>体部上半1/2 |
| 2 | 土師器<br>甕 | 口径(20.6) | 最大径を口縁に持ち、胴部は緩く膨らむ。胴部上半は縦のヘラ削り。 | 白色砂粒・金雲母を多く含む | 良好 | 7.5YR<br>6/6<br>橙 | 体部上半1/6残存 |
| 3 | 土師器<br>甕 | | 胴部中央に最大径を持ち緩く膨らむ。胴部下半に細かいヘラ削り。 | 白色砂粒・石英粒・金雲母を含む | 良好 | 7.5YR<br>3/3<br>暗褐 | 胴体部1/3残存 |
| 4 | 須恵器<br>甕 | | 胴部中央部が緩く膨らむ。外面縦立のタタキ、内面には指頭圧痕が顕著。 | 白色砂粒・石英粒を多く含む | 良好 | 5YR<br>3/6<br>暗赤褐 | 胴体部2/3残存<br>土師質須恵 |
| 5<br>PL-37 | 須恵器<br>甕 | 底径(14.4) | 大きな底部から直線的に立ち上る。外面縦のタタキ、内面指頭圧痕が顕著。 | 白色砂粒・石英粒を多く含む | 良好 | 7.5YR<br>5/8<br>橙 | 胴体部2/3残存<br>土師質須恵 |
| 6<br>PL-37 | 土師器<br>坏 | 口径(12.6)<br>器高 4.1<br>底径 5.8 | 平坦な底部から内彎気味に立ち上がり口縁部は小さく外反する。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後、外周部回転ヘラ調整。 | 石英粒・長石粒を多く含み若干砂質 | 良好 | 7.5YR<br>5/8<br>黄褐色 | 胴体部1/5欠損 |
| 7 | 土師器<br>坏 | 口径(13.0)<br>器高 3.8<br>底径( 7.4) | 平坦な底部から直線的に外反する。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後、外周部回転ヘラ調整。 | 石英粒・長石粒を多く含み若干砂質 | 良好 | 7.5YR<br>5/4<br>にぶい橙 | 胴体部1/4欠損 |
| 8<br>PL-37 | 土師器<br>坏 | 口径(13.4)<br>器高 3.3<br>底径 7.0 | やや上底の底部により内彎気味に立ち上り、口縁部は大きく外反する。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後、外周部回転ヘラ調整。 | 石英粒・長石粒を多く含む | 良好 | 10YR<br>3/3<br>暗褐色 | 胴体部1/2残存 |
| 9 | 土師器<br>坏 | 口径(14.4)<br>器高 4.8<br>底径 ( 8.0 | やや上底の底部より直線的に立ち上り、口縁部は小さく外反する。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後、外周部回転ヘラ調整。内面ヘラ磨き。 | 金雲母を多く含み砂質 | 良好 | 7.5YR<br>5/8<br>明褐色 | 胴体部1/4残存 |
| 10 | 土師器<br>坏 | 口径(12.0) | 内彎気味に立ち上り、口縁部は小さく外半する。体部下半の調整は不明。 | 金雲母を多く含み砂質 | 良好 | 7.5YR<br>7/4<br>にぶい橙 | 胴体部1/3残存<br>体部「宅」墨書 |
| 11 | 土師器<br>坏 | 口径(13.0) | 直線的に外半する。体部下半の調整は不明。 | 石英粒・長石粒を多く含み砂質 | やや不良 | 7.5YR<br>3/6<br>暗赤色 | 胴体上半1/3残存 |
| 12 | 土師器<br>坏 | 口径(13.4) | 直線的に外半する。体部下半の調整は不明。 | 微粒の金雲母を多く含む | 良好 | 7.5YR<br>7/6<br>橙 | 口縁部のみ<br>「仁」墨書 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 13<br>PL- 37 | 土師器<br>高台付<br>皿 | 口径(13.8)<br>器高( 2.6)<br>底径( 6.8) | 「ハ」字状高台を貼り付け、直線的に大きく開く、底部は回転ヘラ削り。 | 石英粒を多く含みやや粗い | 良好 | 2.5Y R<br>4/8<br>赤褐色 | 底部2/3残存 |
| 14 | 土師器<br>高台付<br>皿 | 底径( 4.6) | 「ハ」字状高台を貼り付け、外面横なで、底部内面は磨きで光沢をおびる。回転糸切り。 | 微粒の金雲母を含むも緻密 | 良好 | 7.5Y R<br>6/6<br>橙 | 底部のみ |
| 15 | 土師器<br>皿 | 口径(13.4)<br>器高( 1.4)<br>底径( 8.0) | やや上底の底部より内彎気味に立ち上る。底部は回転ヘラ切り後、全面回転ヘラ調整。 | 石英粒・長石粒を多く含み粗い | 良好 | 2.5Y R<br>4/8<br>赤褐色 | 底部1/3残存 |

30cmの砂質粘土で構築されており、火床面の掘り込みはほとんどみられない。隣接した第4号土壙を切り込んでいる。

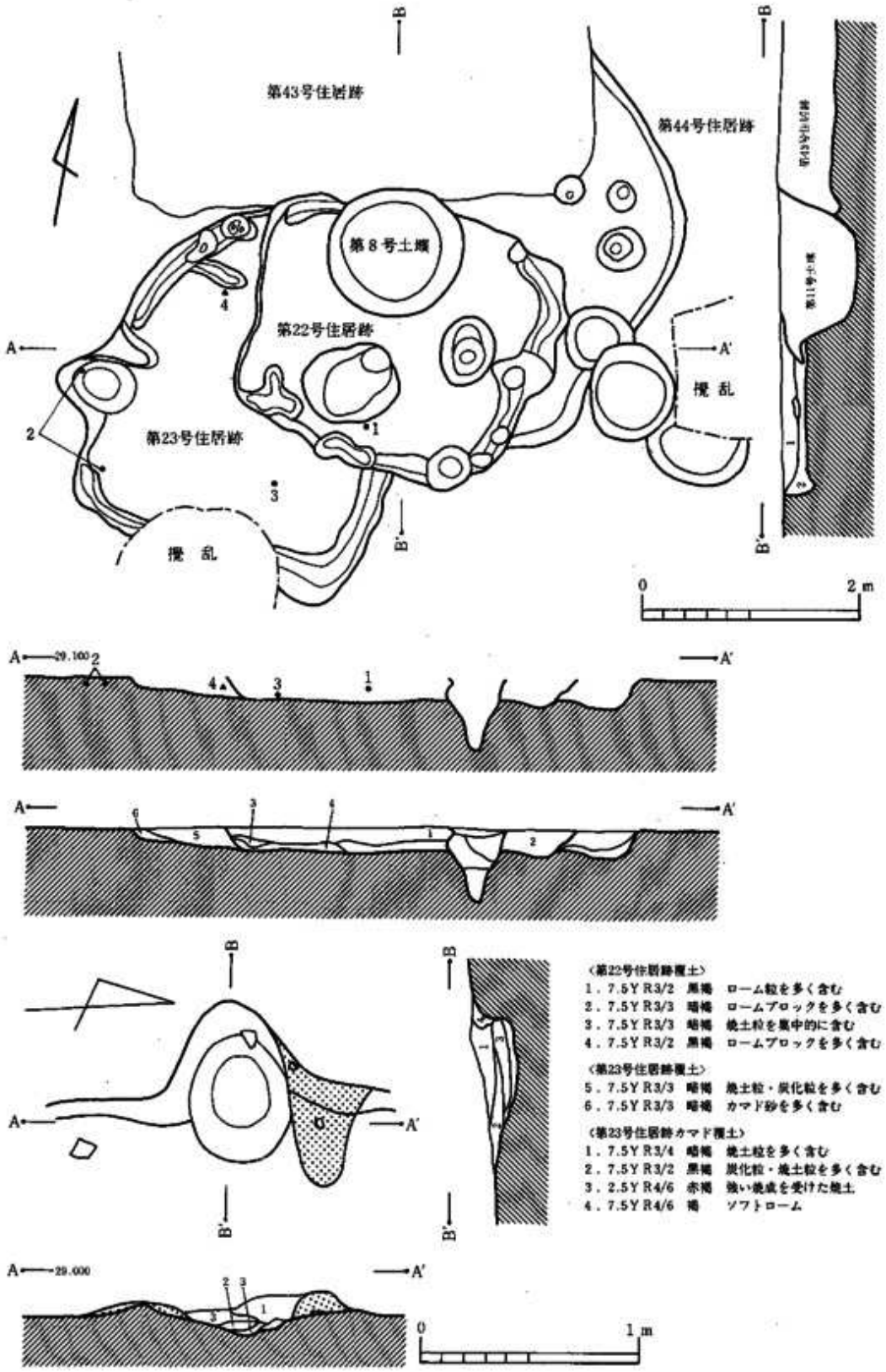
遺構内からは甕5点・杯7点・高台付皿2点・皿1点が出土しているが、いずれも覆土第1・2層からの出土であり、No.10・12には各々「宅」・「仁」の墨書がみられる。他に手鎌1点・鉄鎌4点が出土している。No.16の手鎌は長さ9.7cm、幅20cm、厚さ0.2cmで釘が留具になっている。No.18は細根箭式鉄鏃で刃部の幅8mm、20は有茎腸抉三角形式の鉄鏃で、全長14cm・刃部の長さ4cm・幅2.2cmで箆被の部分に鉄鏃が1本付着している。

**第22号住居跡**（第42図・第43図）

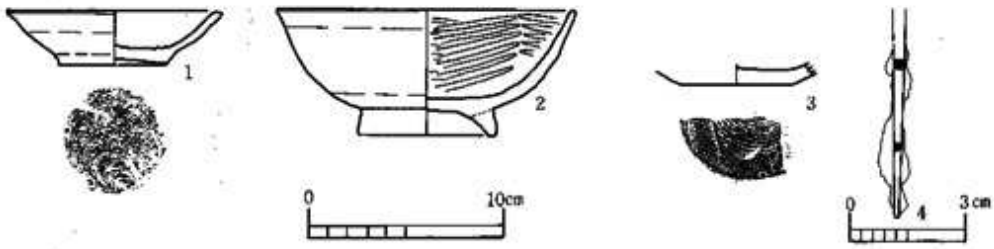
4D－bグリッドより検出され、第23号・43号・44号住居跡および第8号土壙・第8号掘立柱建物跡と切り合い、新旧関係は第8号土壙（新）→第22号住居跡→第23号住居跡（旧）、第22号住居跡（新）→第43号住居跡→第44号住居跡（旧）となる。規模は2.42m×2.42mの方形を呈し、主軸はN－0°－Eをとる。壁高は15cmで、北側と西側に幅25cm、深さ10cmの周溝が部分的にみられ、柱穴は無い。床面はソフトローム上面であまり堅固ではない。カマドは北辺にあったものが第11号土壙により破壊されたもので、第11号土壙の覆土内にはカマドの構築に使われたと思われる砂質粘土が多量に混入している。

遺構内からの出土遺物は少なく、杯1点が出土したのみである。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>坏 | 口径(11.2)<br>器高( 2.7)<br>底径 5.4 | やや上底より内彎気味に立ち上り口縁部に至る。体部下端無調整。底部は回転糸切りのまま。 | 石英粒・長石粒を多く含み粗い | 良好 | 7.5Y R<br>7/2<br>明褐灰白 | 底部・体部1/5残存<br>22住出土 |
| 2<br>PL- 37 | 土師器<br>高台付<br>椀 | 口径(15.3)<br>器高( 6.4)<br>底径( 7.0) | 「ハ」字状の貼付け高台から内彎気味に緩く立ち上り、口縁は小さく開く。内面は丁寧な横のヘラ磨き。 | 石英粒・長石粒を多く含み粗い | 良好 | 2.5Y R<br>4/8<br>赤褐色 | 体部1/6残存<br>23住出土 |
| 3 | 土師器<br>坏 | 底径( 5.8) | 回転糸切り後、外面部回転ヘラ調整。 | 石英粒を多く含み砂質 | 良好 | 10Y R<br>5/6<br>黄褐色 | 体部1/4残存<br>23住出土 |




**第42図　第22・23号住居跡と第23号住居跡カマド実測図**




**第43図　第23・23号住居跡遺物実測図**

**第23号住居址**（第42図・第43図）

東側を第22号住居跡に切られ、南側の一部に撹乱が入る。規模は2.7m×2.6mの方形を呈し、主軸はN－88°－Wをとる。壁高は15cmで、幅25cm、深さ5cmの周溝が全周していたと思われる。ソフトローム上面を床面としており、柱穴はみられない。カマドは西辺中央部に設けられているが、大きく崩壊しており右袖が残存するのみである。袖は幅30cmの砂質粘土で構築され、火床面は約10cm掘り込まれ良く焼けている。

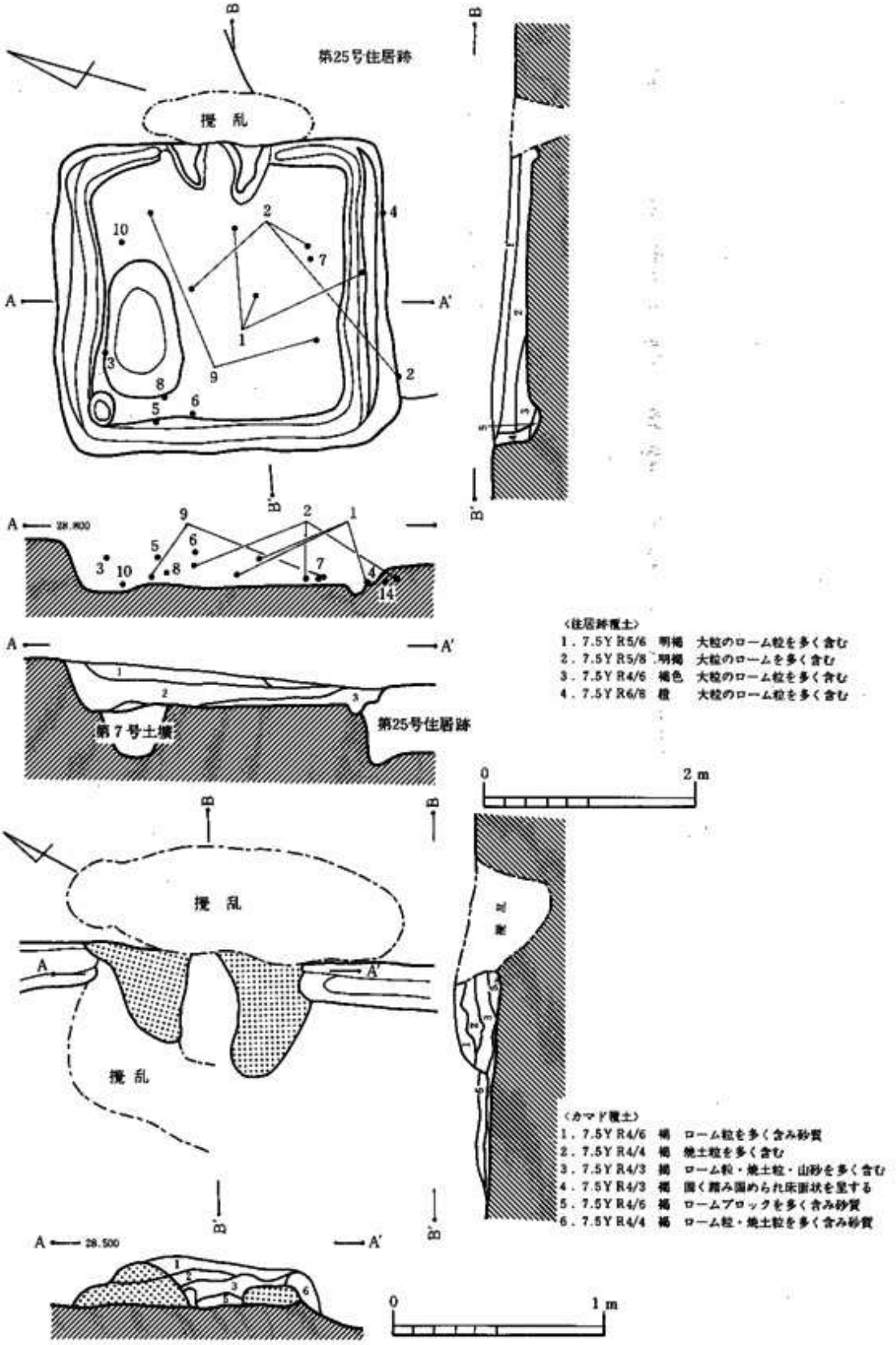
遺構内からは高台付椀1点と杯底部・鉄鏃1点が出土しているに過ぎない（第43図2・3・4）。

**第24号住居跡**（第44図・第45図）

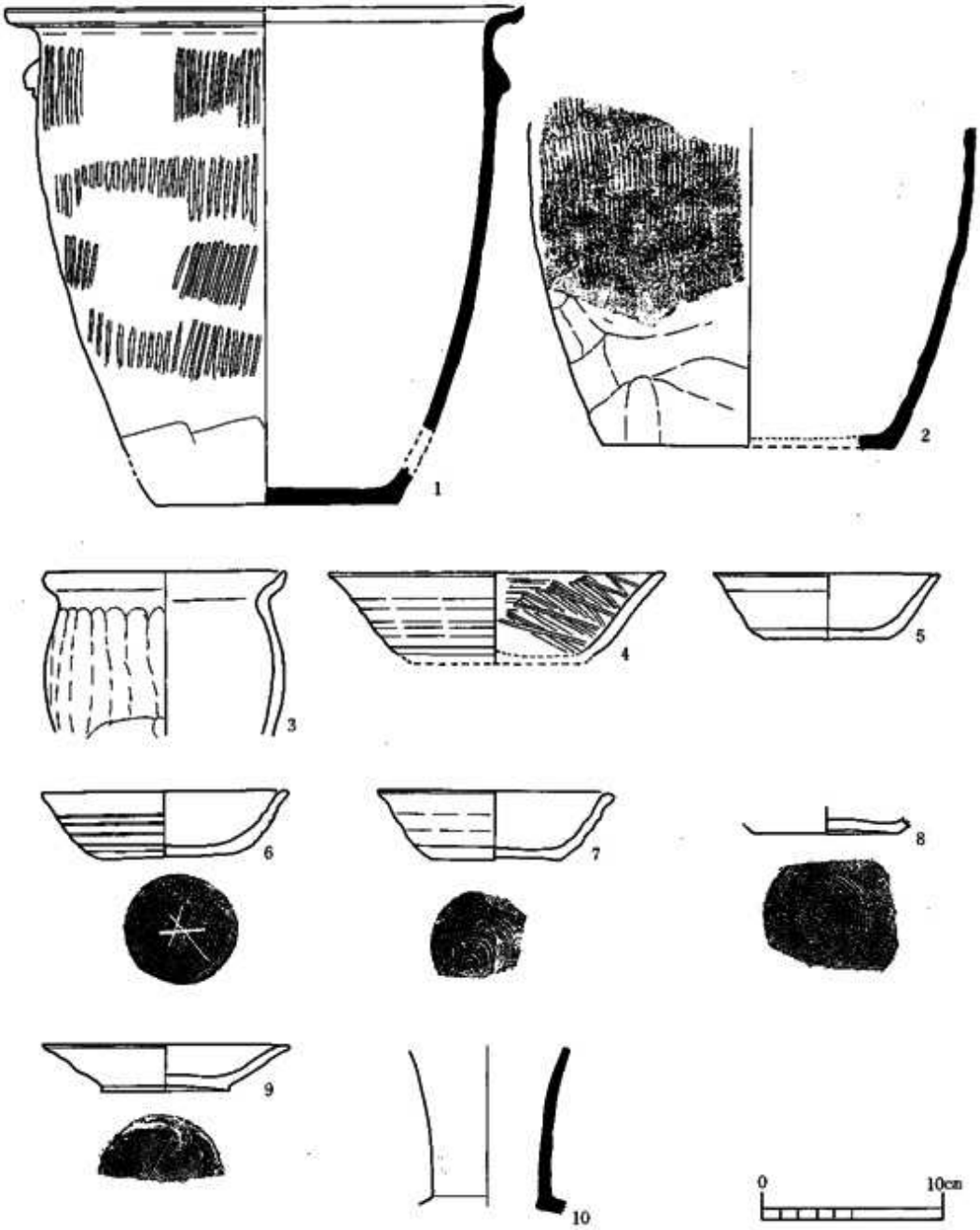
5D－bグリッドより検出され、南側で第25号住居跡を切っている。規模は3.1m×2.9mの方形を呈し、主軸はN－69°－Eをとる。壁高は西側で40cm、東側で10cmで、幅15cm、深さ10cmの周溝がカマド下を除いて全周する。ソフトローム上面を床面としており、カマドの前面と南側の1部に硬い床面が検出された他は軟弱で、西側は第7号土壙を切っている。カマドは東辺中央部に設けられているが、煙道部は撹乱により壊されている。袖は左袖が幅60cm、右袖が幅30cmで、左袖には二段に亘って構築された痕跡が窺え、火床面の掘り込みはほとんどみられない。カマド内には焼土の堆積がほとんど認められない。

遺構内からは甕3点・杯5点・皿1点・長頸瓶1点が出土している。このうち床面周辺より出土している土器は、No.4・No.7の杯とNo.9の皿およびNo.10の灰釉の長頸瓶である。なおNo.6の杯の底には「メ」のへら記号がみられる。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL-37 | 須恵器<br>甕 | 口径 27.8<br>器高(27.5)<br>底径 13.0 | 口縁部に最大径を持ち、胴部は緩く膨らむ。外面縦のタタキ。胴部下端は横のへラ削り。 | 石英粒・長石粒を多く含む | 良好 | 7.5YR<br>4/4<br>褐 | 復元完形<br>須恵質土師 |
| 2 | 須恵器<br>甕 | 底径 16.0 | 胴部は緩く膨らむ。外面縦のタタキ。胴部下半は横のへラ削り。内面に指頭圧痕。 | 石英・長石粒を多く含む | 良好 | 10YR<br>6/1<br>灰 | 胴部下半1/4残存。 |




**第44図　第24号住居跡とカマド実測図**



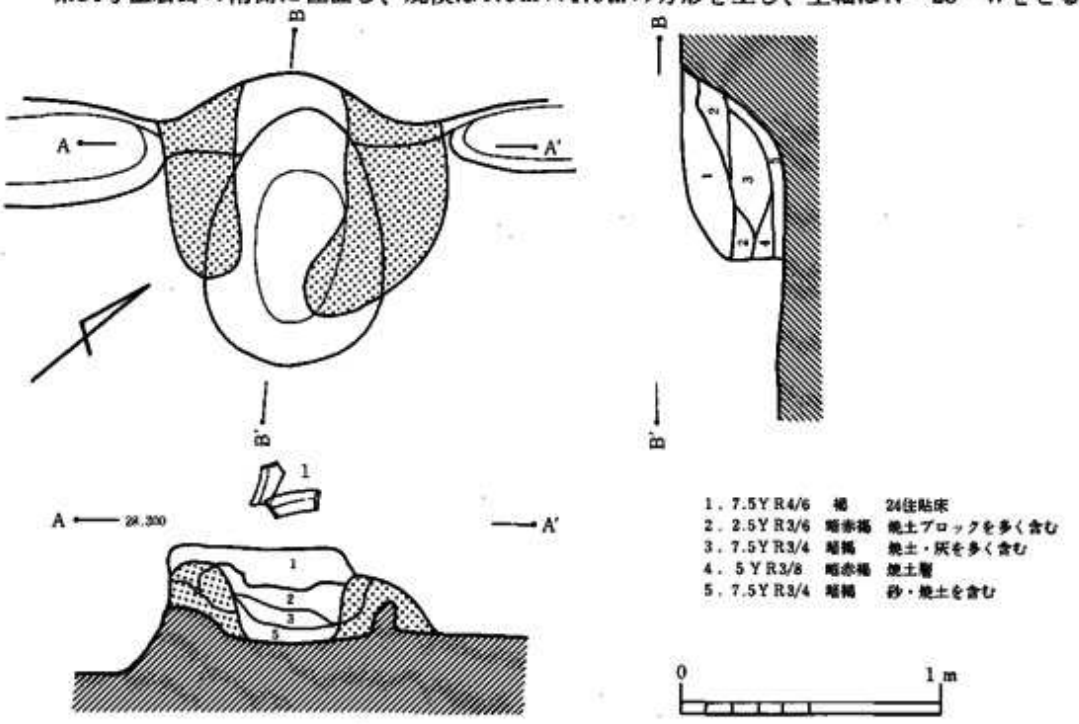

第45図　第24号住居跡遺物実測図

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3<br>PL-37 | 土師器<br>甕 | 口径(13.2) | 最大径を口縁と胴部中央に持ち、胴部は緩く膨らむ。胴部上半は縦のヘラ削り、下半は横のヘラ削り。 | 石英粒・長石粒を多く含み砂質 | 良好 | 7.5YR<br>4/3<br>褐 | 胴部上半1/2残存。 |
| 4 | 土師器<br>坏 | 口径(18.4) | 直線的に立ち上り、口縁部は小さく開く。体部下端は回転ヘラ削り。内面はヘラ磨き。 | 金雲母を多く含み緻密 | 良好 | 10YR<br>5/6<br>黄褐 | 体部上半1/3残存。 |

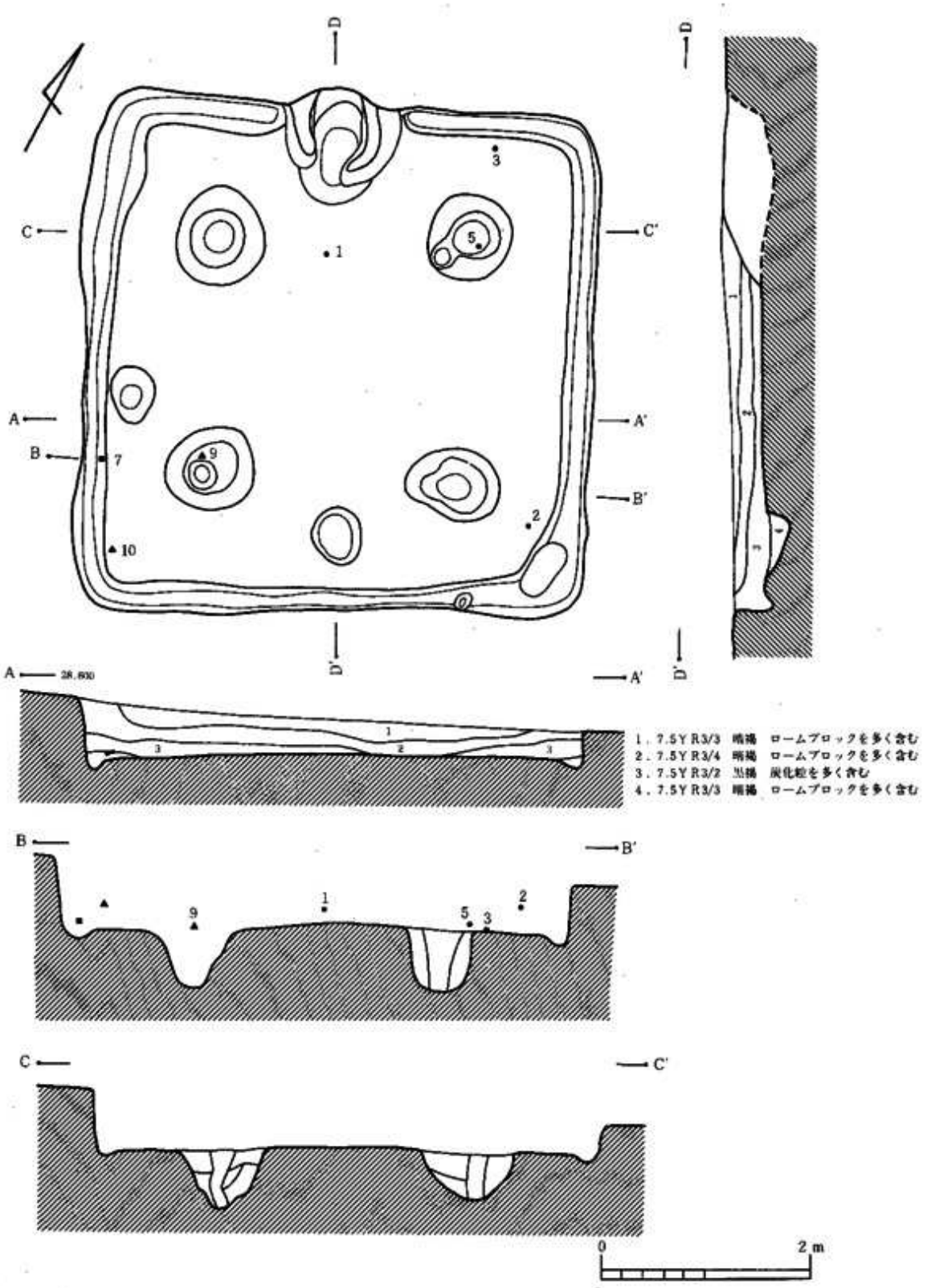
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5<br>PL-37 | 土師器<br>坏 | 口径(12.4)<br>器高 3.5<br>底径( 7.0) | 直線的に立ち上り、口縁部は小さく開く。体部下半は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後、全面ヘラ調整。 | 金雲母を多く含み緻密 | 良好 | 10YR<br>5/6<br>黄褐 | 体部1/4残存。 |
| 6<br>PL-37 | 土師器<br>坏 | 口径(13.5)<br>器高 3.6<br>底径( 6.4) | 内彎気味に緩く立ち上り、口縁部は小さく開く。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転ヘラ切り後、全面回転ヘラ調整。 | 石英粒・長石粒を多く含み粗く脆い | やや不良 | 7.5YR<br>5/6<br>黄褐 | 体部2/3残存<br>底部「メ」ヘラ記号 |
| 7<br>PL-37 | 土師器<br>坏 | 口径(12.8)<br>器高 3.8<br>底径( 7.0) | やや上底の底部から内彎気味に緩く立ち上り、口縁部は小さく開く。体部下端は回転ヘラ削り。 | 石英粒・長石粒を多く含むも緻密 | 良好 | 7.5YR<br>5/6<br>黄褐 | 体部1/2残存 |
| 8 | 土師器<br>坏 | 底径( 7.8) | やや上底の底部、回転糸切り後、外周部手持ちヘラ調整。 | 石英粒・長石粒を多く含み粗い | 良好 | 7.5YR<br>1.7/1<br>黒 | 底部のみ<br>外周部赤褐色 |
| 9 | 土師器<br>皿 | 口径(13.5)<br>器高 2.5<br>底径( 7.0) | やや上底の底部より大きく開く。底部回転糸切り後、無調整。 | 金雲母を多く含み緻密 | 良好 | 7.5YR<br>3/3<br>暗褐 | 体部1/4残存 |
| 10 | 灰釉<br>長頸瓶 | | 緩く外半する頸部 | 緻密 | 良好 | 5Y<br>7/1<br>灰白 | |

**第25号住居跡**（第46図～第48図）

第24号住居跡の南側に位置し、規模は4.9m×4.9mの方形を呈し、主軸はN－28°－Wをとる。



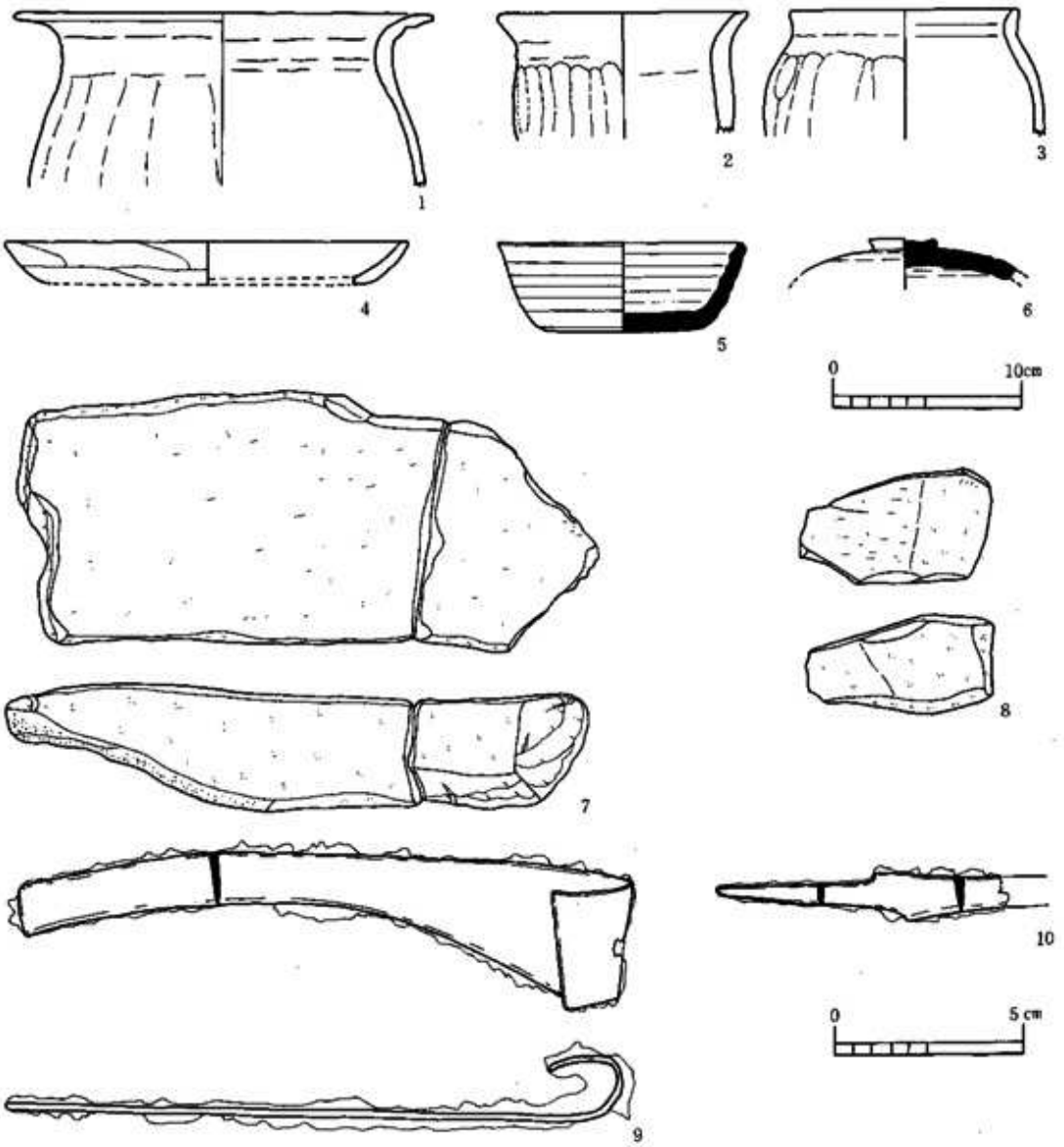

**第46図　第25号住居跡カマド実測図**




**第47図　第25号住居跡実測図**

壁高は70cmで、幅15cm、深さ10cmの周溝がカマド下を除いて全周する。柱穴は径70cm、深さ40cmのものが4本で、第5ピットは径45cm、深さ20cmである。床面はハードローム面で堅固であり、西側に50cm×40cm－10cmの浅い窪みがみられる。カマドは北辺中央部に設けられ、主軸長1.10m、幅1.15mを測る。袖は左右ともロームの造り出しを芯としており、その周辺に幅40cmの砂質粘土を貼り付けている。袖の内壁は強い焼成をうけているが、焼土の堆積はあまりみられない。

遺構内からは甕3点・盤1点・杯1点・蓋1点の他に鎌1点・刀子1点・砥石2点が出土し、床面周辺からはNo.3・No.5とNo.9の鎌が出土している。鎌は長さ16.3cm・幅1.0cm・厚さ0.2cmで完形である。No.7の砥石は第30号住居跡出土のものと接合関係がある。

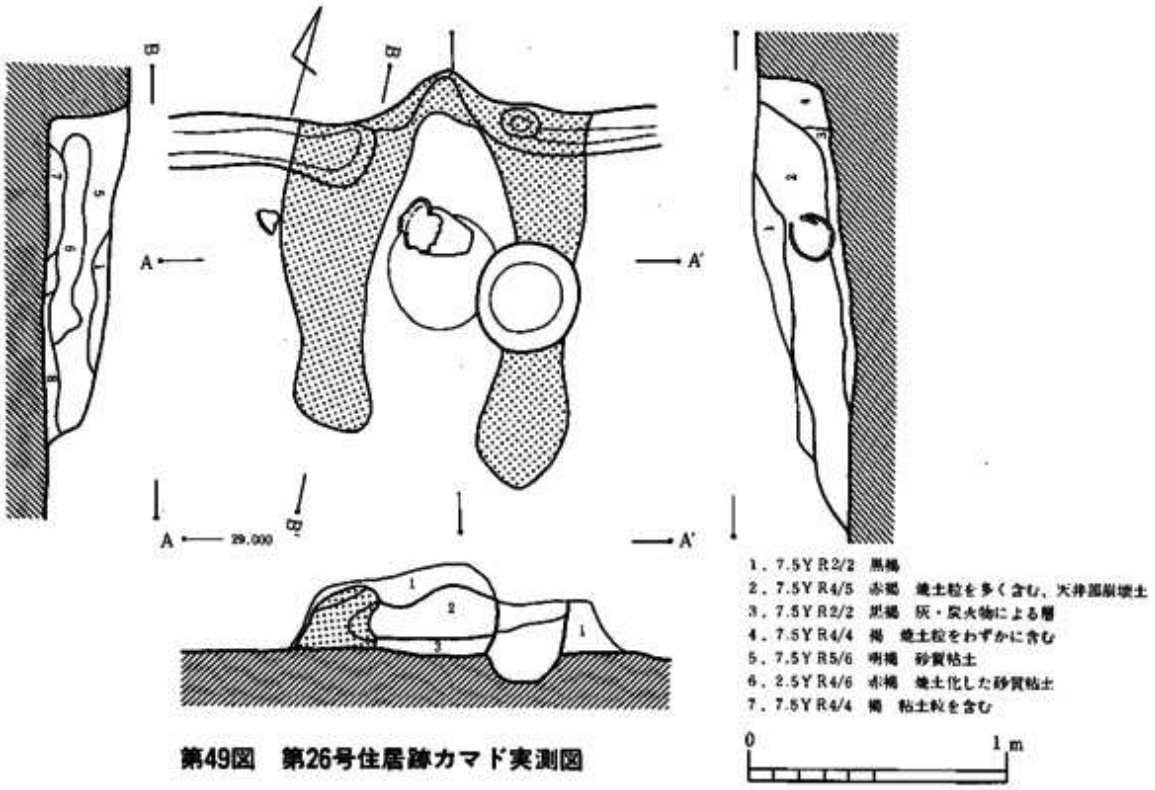



**第48図　第25号住居跡遺物実測図**

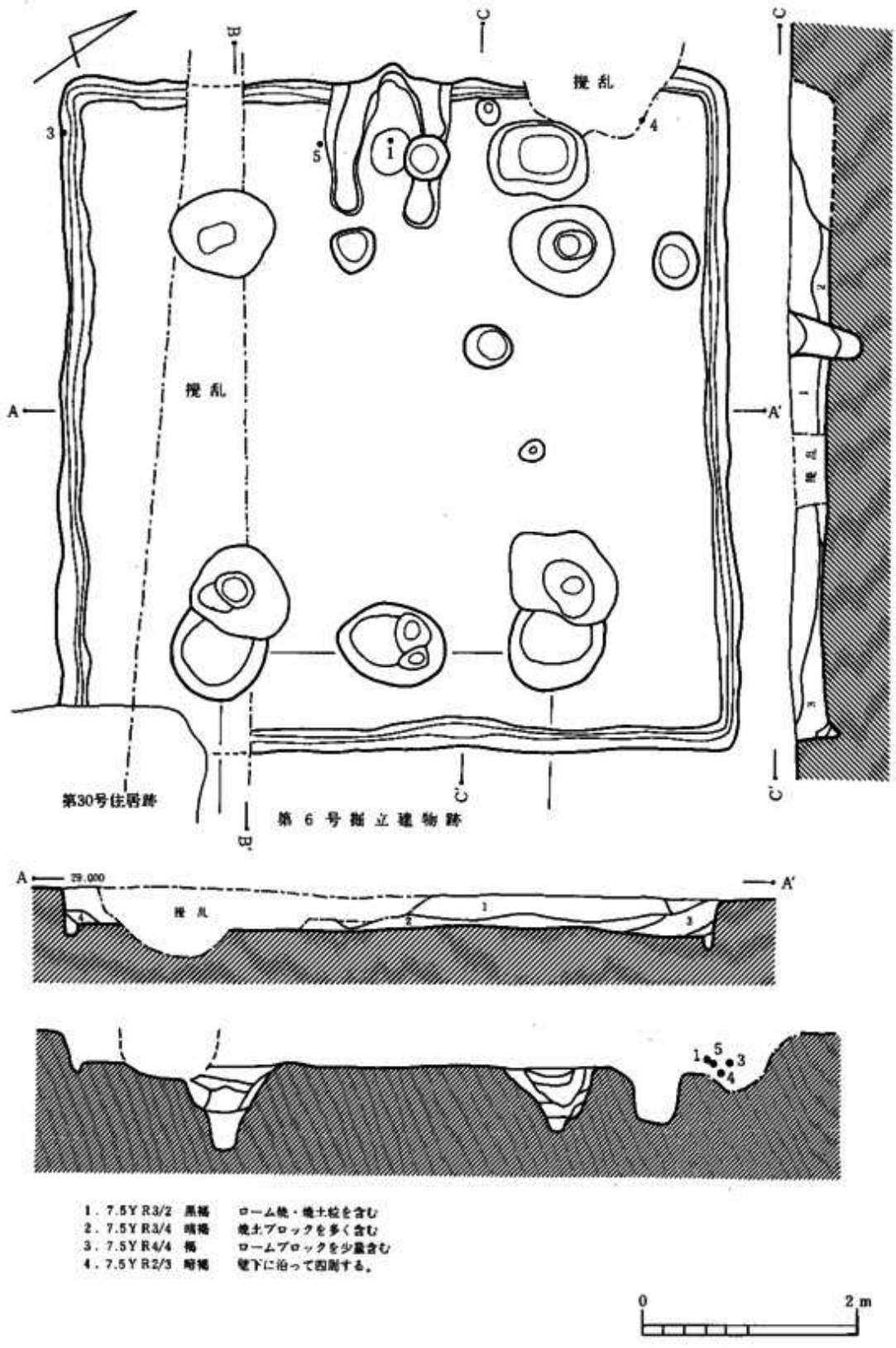
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL- 38 | 土師器<br>甕 | 口径(22.3) | 最大径を口縁に持ち胴部は緩く膨らむ。口縁は水平に開く胴部上半は縦のヘラ削り。 | 金雲母を多く含む | 良好 | 5YR<br>3/6<br>暗赤褐 | 胴部上半3/4残存 |
| 2 | 土師器<br>甕 | 口径(13.4) | 最大径を口縁に持ち胴部は緩く膨らむ。胴部上半は縦のヘラ削り。 | 石英粒・長石粒を多含み粗い | 良好 | 2.5YR<br>4/8<br>赤褐 | 胴部上半2/3残存 |
| 3 | 土師器<br>甕 | 口径(12.4) | 最大径を胴部に持ち、口縁部は直立気味。胴部上半は縦のヘラ削り。 | 石英粒・長石粒を多含み粗い | 良好 | 2.5YR<br>4/8<br>赤褐色 | 胴部上半2/5残存 |
| 4 | 土師器<br>盤 | 口径(21.4)<br>器高 2.2<br>底径(17.4) | 大径の底部より内湾気味に立ち上る。外面は斜位のヘラ削り後磨き。内面ヘラ磨き。 | 細かい鉱物粒を含むも緻密 | 良好 | 7.5YR<br>6/6<br>橙 | 体部1/6残存 |
| 5<br>PL- 38 | 須恵器<br>坏 | 口径 13.0<br>器高 4.6<br>底径 9.0 | 丸底気味の底部から直線的に立ち上る。 | 石英粒・雲母粒を多含み砂質 | 良好 | 2.5YR<br>8/1<br>灰白 | 口縁部1部欠損 |
| 6 | 須恵器<br>蓋 | | 丸味をおびた天井部より緩く体部に移る。 | 石英粒・金雲母を多含む | 良好 | 10YR<br>7/1<br>灰白 | 体部1/3残存 |

**第26号住居跡**（第49図～第51図）

4D－cグリッドより検出され、北側は第10号掘立柱建物跡に、南側は第6号掘立柱建物跡




**第49図　第26号住居跡カマド実測図**

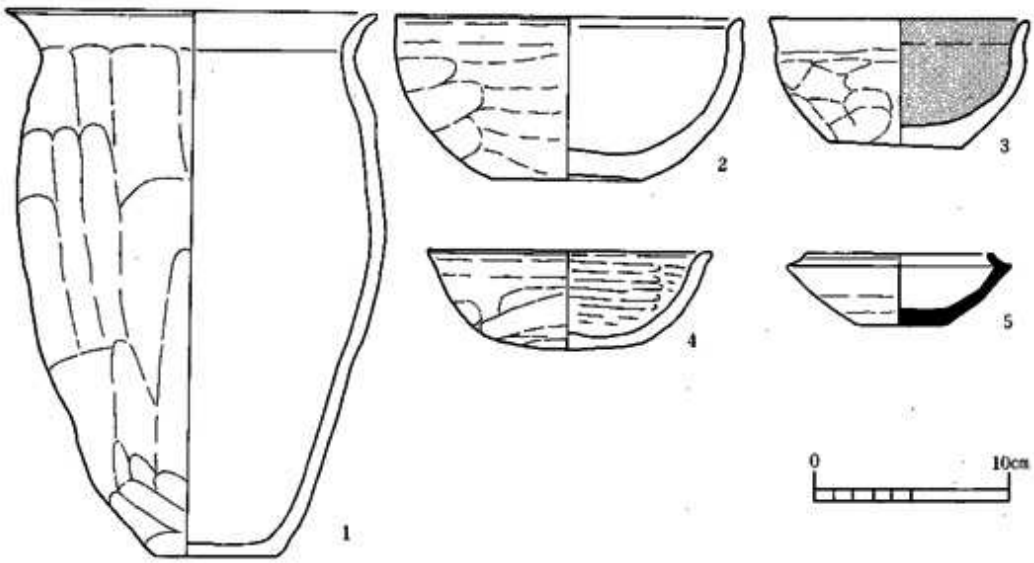



1．7.5Y R3/2　黒褐　　ローム粒・焼土粒を含む
2．7.5Y R3/4　暗褐　　焼土ブロックを多く含む
3．7.5Y R4/4　褐　　ロームブロックを少量含む
4．7.5Y R2/3　暗褐　　壁下に沿って囲剤する。

0　2 m

**第50図　第26号住居跡実測図**

および第30号住居跡に切られている。規模は6.3m×5.2mの長方形を呈し、主軸はN－16°－Wをとる。壁高は40cmで、幅15cm、深さ10cmの周溝がカマド下を除いて全周する。柱穴は径90cm、深さ50～80cmのものが4本で、第5ピットは第6号掘立柱建物跡の柱穴により壊されている。カマドの右側に90cm×70cm－70cmの貯蔵穴を有する。床面はハードローム面で堅固である。カマドは北辺中央に位置し、主軸長1.50m、幅1.25mを測る。袖は幅40cmの砂質粘土により構築されており、右袖の中央部は第10号掘立柱建物跡の柱穴によって壊されている。火床は良く焼




**第51図　第26号住居跡遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL-38 | 土師器<br>甕 | 口径 19.0<br>器高 28.3<br>底径 6.4 | 最大径を胴部中央に持ち、口縁部は「く」字状に小さく開く。外面縦のヘラ削り。胴部下半は斜位のヘラ削り。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み粗い。 | 良好 | 2.5YR<br>4/8<br>褐色 | 完形<br>カマド内出土 |
| 2<br>PL-38 | 土師器<br>鉢 | 口径 17.6<br>器高 8.5<br>底径 7.6 | 上底の底部より内彎気味に立ち上り口縁は小さく開く。胴部外面は横のヘラ削り。 | 石英粒・長石粒を含み粗く脆い | 良好 | 2.5YR<br>4/8<br>赤褐 | 完形 |
| 3<br>PL-38 | 土師器<br>鉢 | 口径 13.2<br>器高 6.6<br>底径 6.6 | 平底の底部より内彎気味に立ち上り口縁は小さく開く。胴部外面は横のヘラ削り後磨き内面は黒色処理。 | 石英粒・長石粒を多く含み若干砂質 | 良好 | 2.5YR<br>4/8<br>赤褐色 | 完形 |
| 4<br>PL-38 | 土師器<br>鉢 | 口径(14.4)<br>器高 5.0<br>底径( 5.0) | 丸底の底部から緩く立ち上り口縁は小さく開く。内面は丁寧な磨き。 | 石英粒・長石粒を含み粗く脆い | やや不良 | 2.5YR<br>4/8<br>赤褐色 | 体部2/3残存 |
| 5<br>PL-38 | 須恵器<br>坏 | 口径( 9.6)<br>器高 3.7<br>底径 4.2 | 小径の底部より内彎気味に立ち上り口縁部は「く」字状に内傾する。底面にはヘラ板がみられ、底部は粘土板を貼付。 | 緻密 | 極良好 | 5GB<br>5/1<br>青灰 | 体部3/4残存 |

けているが、掘り込みはみられない。カマド中央からはNo.1の甕が横に傾いて出土した他、左袖脇からNo.5の須恵器の杯が出土している。

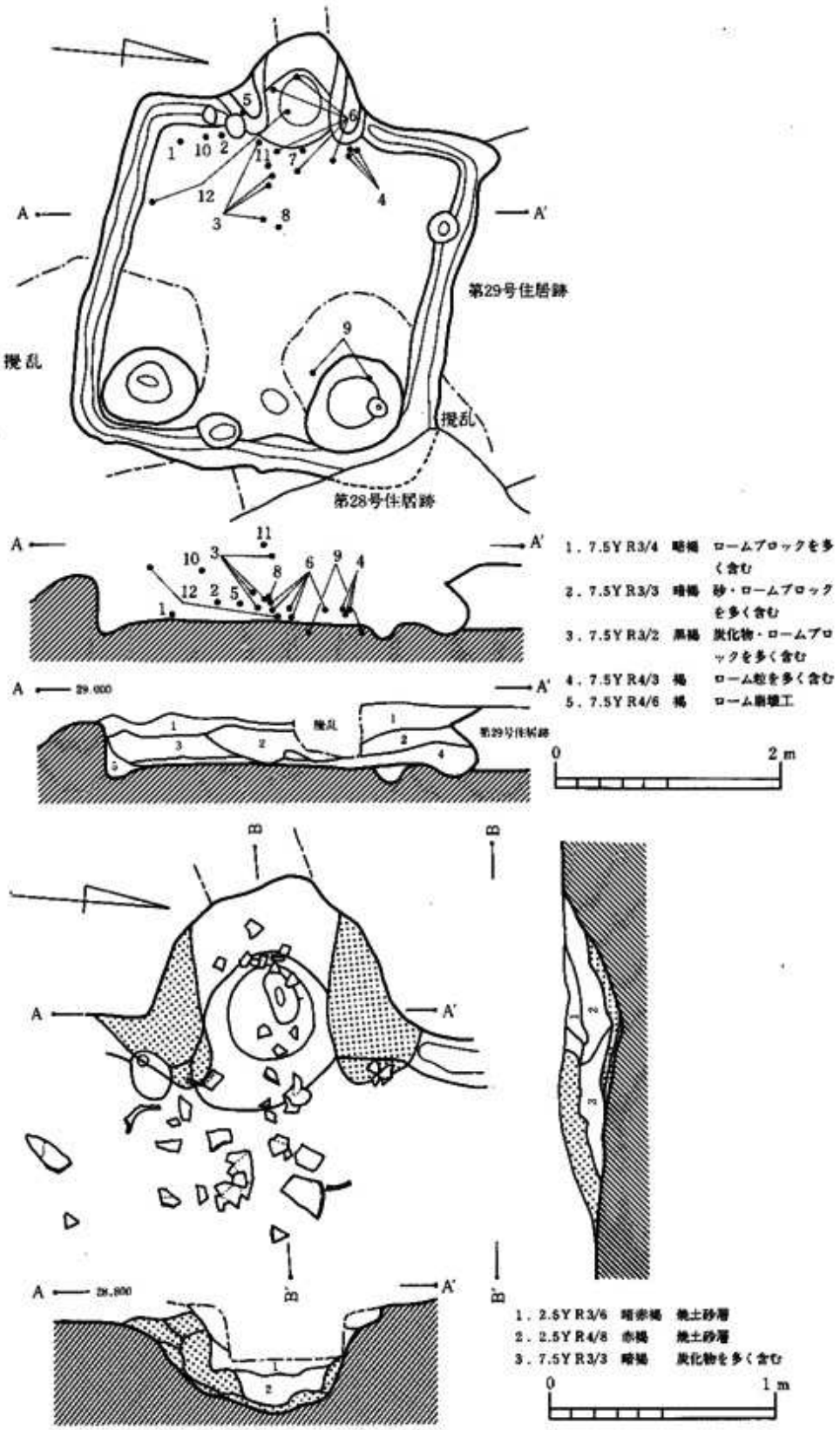
遺構内からは甕1点・鉢2点・杯2点出土しているが、No.1・No.2を除くといずれも床面上から出土している。

**第27号住居跡**（第52図・第53図）

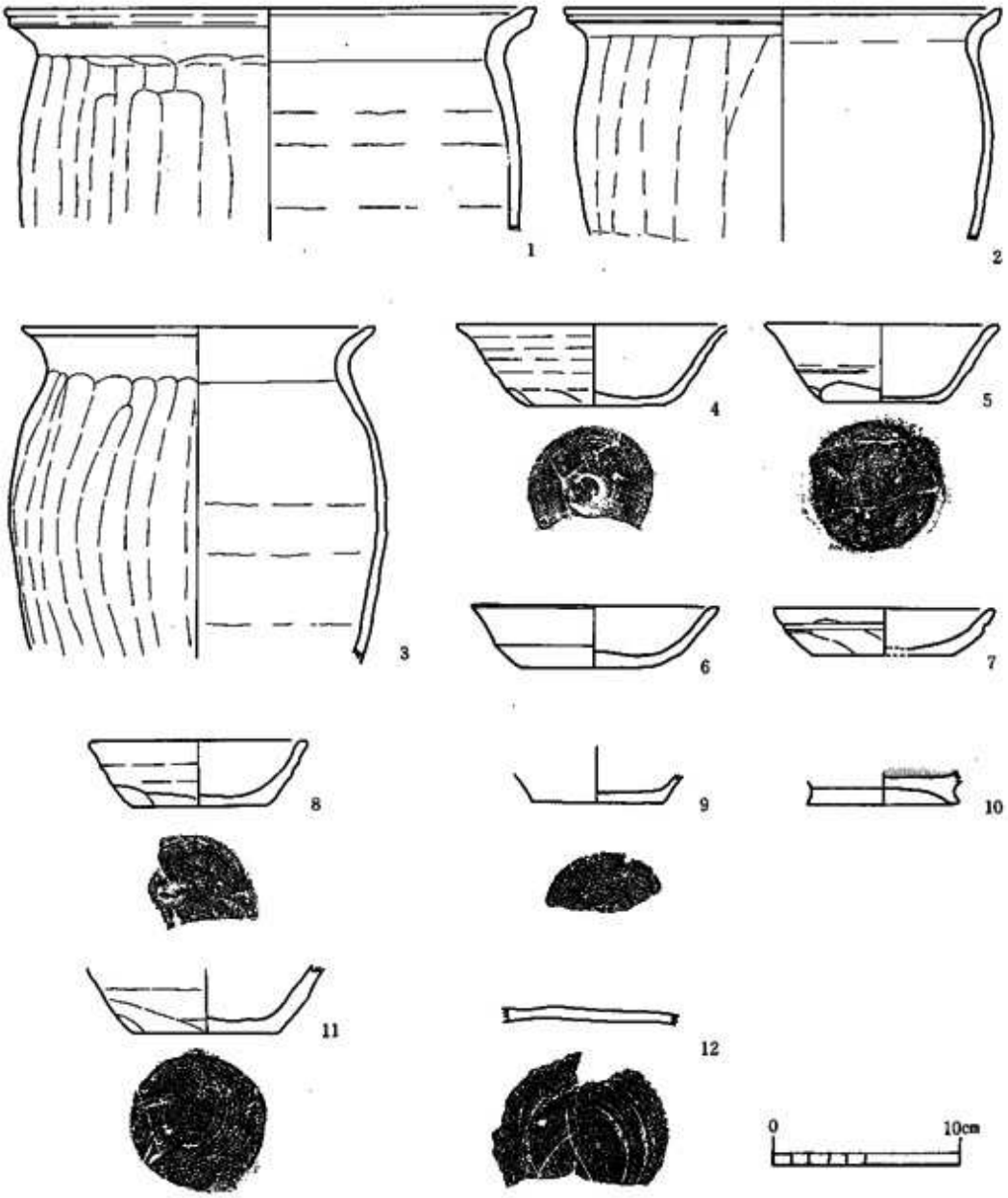
第26号住居跡の東側に位置し、東側で第28号住居跡を、北側で第29号住居跡を切り込み、南側で第10号掘立柱建物跡に切られている。規模は3.7m×3.1mの方形を呈し、主軸はN－85°－Wをとる。壁高は60cmで、幅15cm、深さ15cmの周溝がカマド下を除いて全周する。柱穴は北側と東側に径30～40cm、深さ20～50cmのものが2本みられる。床面はハードローム面で堅固であるが、東側は撹乱により破壊されている。カマドは西辺中央部に設けられており、主軸長1.10m、幅1.15mを測る。袖は基部が残っているのみで、第1・第2層を煙道部の残存と捉えられる。火床面の焼成はあまりみられず、掘り込みはない。カマド周辺からはNo.1・No.2の甕とNo.5の杯が左袖脇から、No.6とNo.7の坏がカマド内から、No.4の坏が右袖前面から出土している。

遺構内からは甕3点・坏5点が出土している。前記したようにNo.1・No.2とNo.4～No.7はカマド周辺より出土しており、住居跡に近い時期が与えられる。なおNo.12の甕底部には「メ」のヘラ記号がみられる。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器甕 | 口径(28.6) | 最大径を口縁部に持ち、胴部は緩く膨らむ。胴部上半は外面ヘラ削り。 | 石英粒を多く含み粗い | 良好 | 7.5YR 6/8 橙 | 上部1/3残存 |
| 2 | 土師器甕 | 口径(23.0) | 最大径を口縁部に持ち、胴部は緩く膨らむ。胴部上半は外面ヘラ削り。 | 石英粒・長石粒・雲母を多く含む | 良好 | 7.5YR 6/8 橙 | 体部上半1/3残存 |
| 3 PL-39 | 土師器甕 | 口径(18.6) | 最大径を胴部中央に持ち、口縁は「ハ」字状に開く。胴部上半は外面ヘラ削り。 | 石英粒・長石粒を多く含み砂質 | 良好 | 7.5YR 4/6 褐色 | 体部上半1/3残存 |
| 4 PL-39 | 土師器坏 | 口径(14.6) 器高 3.3 底径( 7.4) | 底部から内彎気味に立ち上り口縁部は外半する。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後全面手持ちヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み若干砂質 | やや不良 | 7.5YR 3/3 暗褐色 | 体部1/2残存 |
| 5 PL-39 | 土師器坏 | 口径(12.4) 器高 4.2 底径( 6.0) | 底部から内彎気味に立ち上り口縁部は直線的に開く。体部下端は手持ちヘラ削り。底部は回転糸切り後全面手持ちヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み粗い | 極良好 | 2.5YR 4/8 赤褐 | 体部1/2残存 |




**第52図　第27号住居跡とカマド実測図**



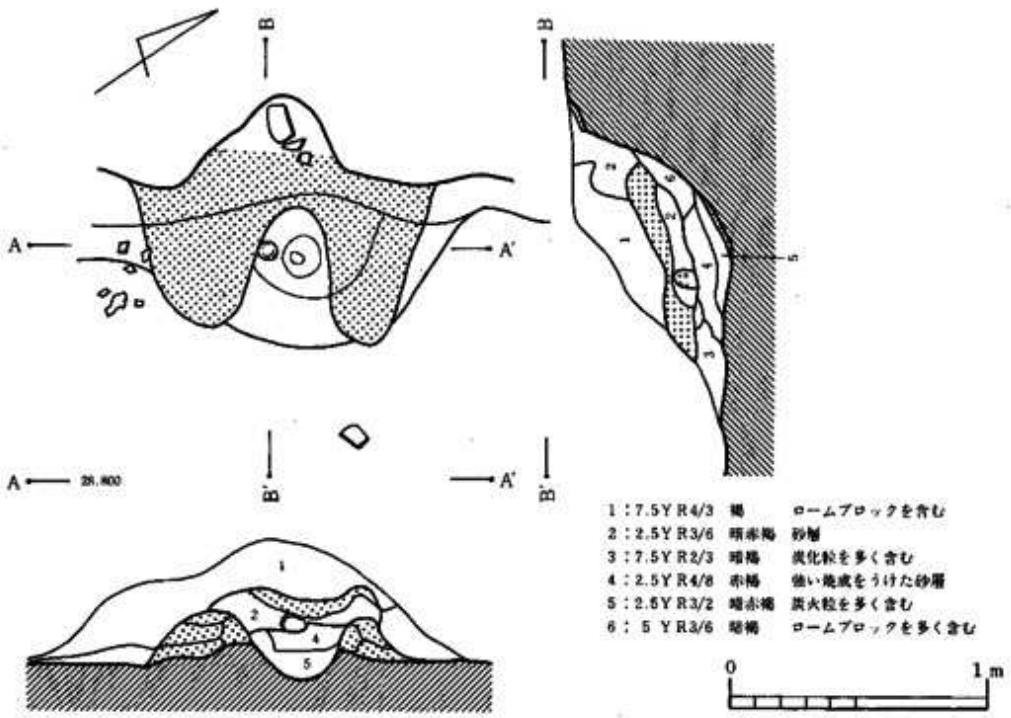

**第53図　第27号住居跡遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6<br>PL- 39 | 土師器<br>坏 | 口径(13.6)<br>器高　3.3<br>底径( 7.6) | 底部より内彎気味に立ち上り口縁部は直線的に開く。体部下端回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後外周部回転ヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み砂質で脆い | やや不良 | 10Y R<br>5/8<br>黄褐 | 体部1/2残存 |
| 7 | 土師器<br>坏 | 口径(11.6)<br>器高　2.5<br>底径( 7.8) | 底部より内彎気味に立ち上り口縁に至る。体部下端斜位のヘラ削り。底部は回転糸切り後全面手持ちヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み砂質 | 良好 | 10Y R<br>5/8<br>黄褐 | 体部1/2残存 |

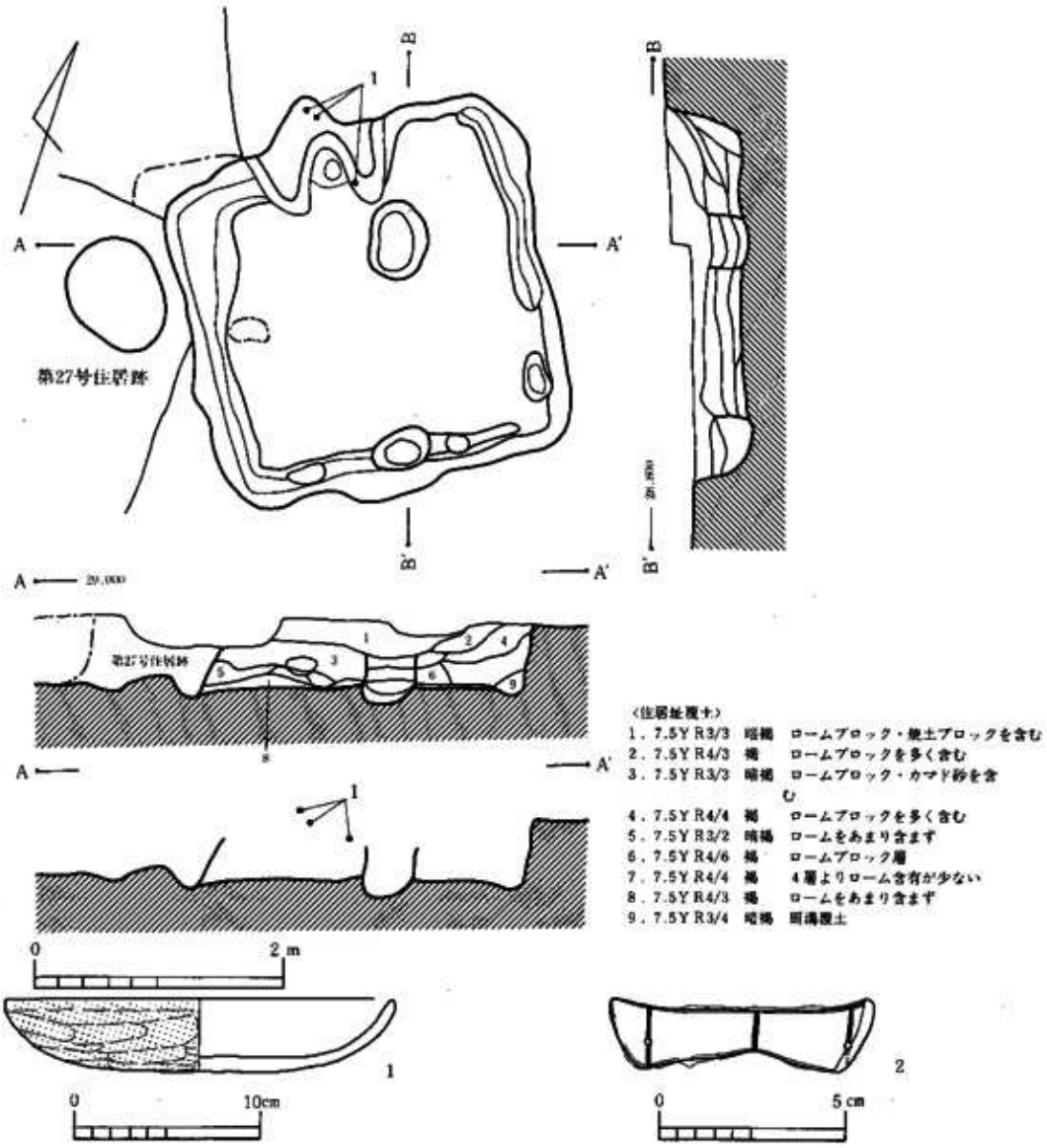
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 8 | 土師器<br>坏 | 口径(11.6)<br>器高 3.6<br>底径( 7.0) | 底部より内彎気味に立ち上り口縁部に至る。体部下端は手持ちヘラ削り。底部は回転糸切り後外周部回転ヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み砂質 | 良好 | 10YR<br>5/8<br>黄褐 | 体部1/2残存 |
| 9 | 土師器<br>坏 | 底径( 7.0) | 底部より外反気味に立ち上る底部は回転糸切り後無調整 | 石英粒・長石粒を多く含み砂質 | 良好 | 10YR<br>5/8<br>黄褐 | 底部1/2残存 |
| 10 | 土師器<br>高台付<br>坏 | 底径( 8.0) | 緩い「ハ」字状の高台を貼り付け、底部はヘラ切り。内面は黒色処理 | 石英粒・長石粒を多く含み砂質 | 良好 | 7.5YR<br>3/3<br>暗褐 | 底部1/2残存 |
| 11 | 土師器<br>甕(?) | 底径( 7.2) | 底部より直線的に立ち上る。底部回転糸切り後無調整 | 石英粒・長石粒を多く含み砂質 | 良好 | 5YR<br>3/3<br>暗赤褐 | 底部のみ残存 |

**第28号住居跡**（第54図・第55図）

第27号住居跡の東側に位置し、第７号掘立柱建物跡に切られている。規模は3.3m×2.9mの方形を呈し、主軸はN－34°－Wをとる。壁高は70cmで、幅20cm、深さ10cmの周溝がカマド下を除いて全周するが、北隅および東側で一部途切れる。床面はハードローム面で堅固で、柱穴は見られない。カマドは北辺中央部に設けられており、主軸長0.95m、幅1.05mを測る。袖は幅45cm、右袖は幅30cmでいずれも厚さ20cmの砂質粘土で構築されている。カマド左寄りに支脚が



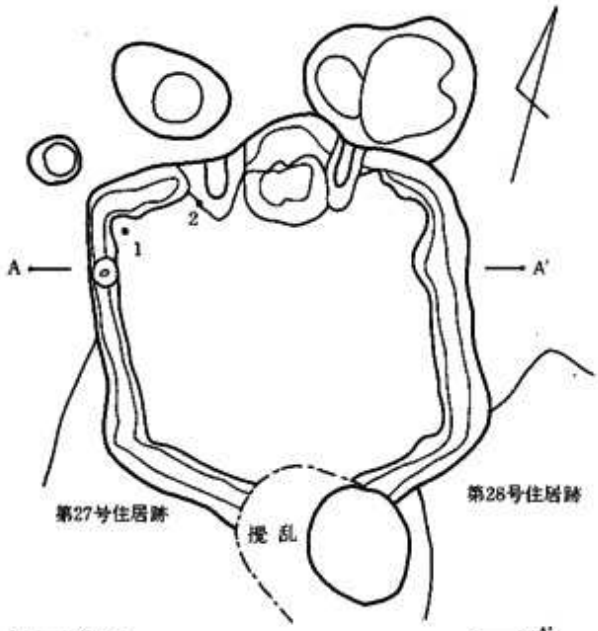

**第54図　第28号住居跡カマド実測図**

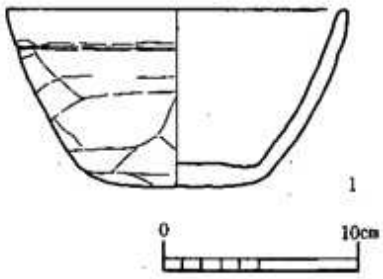


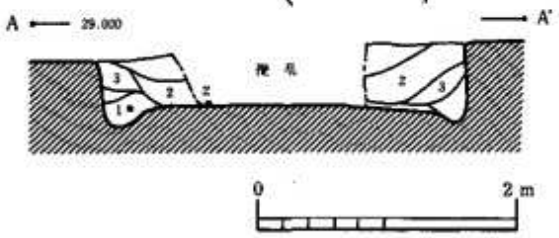

**第55図　第28号住居跡と遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL-38 | 土師器<br>盤 | 口径(20.6)<br>器高 3.9<br>底径( 8.0) | 丸底の底部より内彎気味に立ち上り、口縁部に至る。外面は横方向のヘラ削り後ヘラ磨き。内面は磨き。外面には赤彩の痕跡がみられる。 | 細かい金雲母を含むも緻密。 | 良好 | 5YR<br>4/3<br>にぶい赤褐 | 体部1/2残存 |

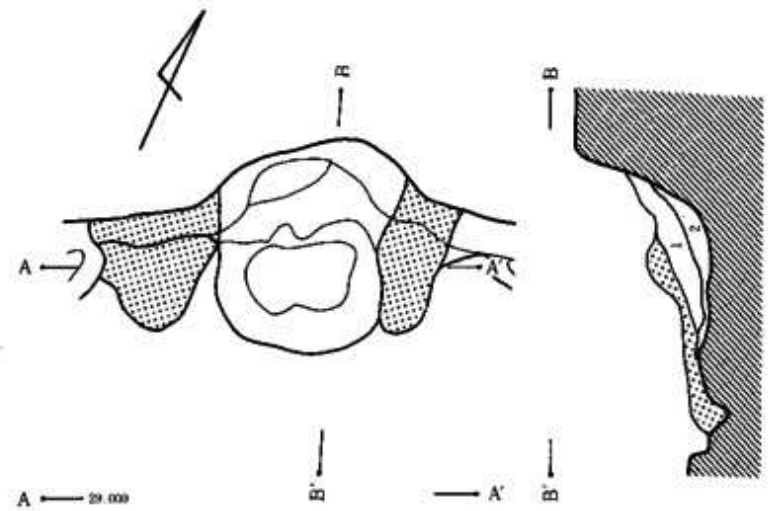
No.1の土器の底部を被せた状態で検出された。カマド内の焼土の堆積は厚く、第5層は灰層である。火床面は良く焼けており、床面から約10cmの掘り込みがみられる。カマド内からはNo.1の盤が天井部崩壊土上面から出土しており、遺構内からは他にNo.2の手鎌が出土している。手鎌は全長7.6cm、幅1.6cmを測る。




〈住居跡覆土〉
1．7.5YR3/3 褐　ロームブロックを多く含む
2．7.5YR3/2 黒褐　ロームブロックを多く含む
3．7.5YR4/4 褐　ローム粒を多く含む
4．7.5YR4/6 褐　ローム質土
5．7.5YR4/3 暗褐　焼土



〈カマド覆土〉
1．5YR3/6 暗赤褐　地土・炭化物を多く含む
2．7.5YR2/2 黒褐　炭化物層

**第56図　第29号住居跡とカマドと遺物実測図**

**第29号住居跡**（第56図）

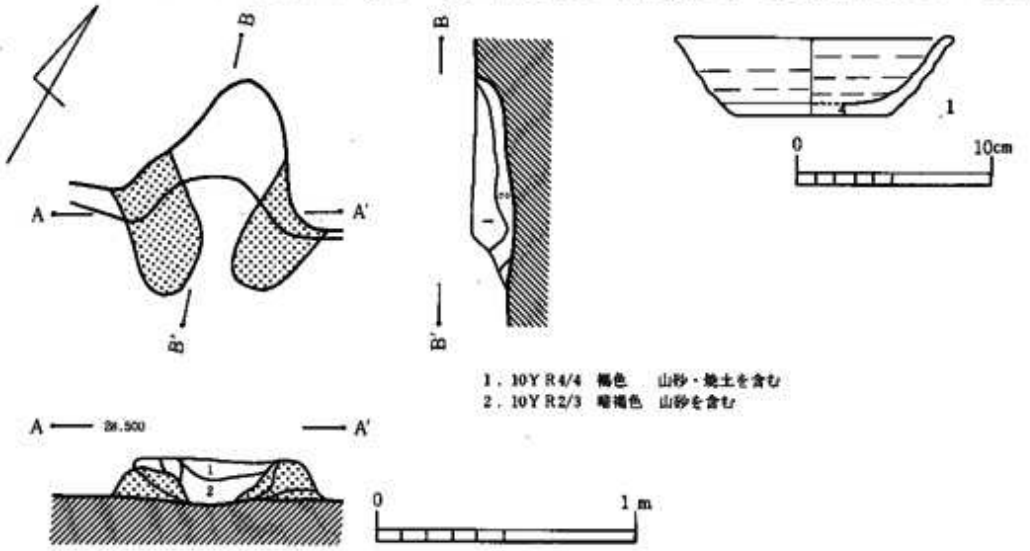
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>鉢 | 口径 17.6<br>器高 9.0<br>底径 9.0 | 丸底の底部から直線的に立ち上り口縁部に至る。体部外面は横のヘラ削り。口縁下にヘラ先端を残す。 | 石英粒・長石粒を多く含み粗く砂質 | 不良 | 5YR<br>3/4<br>暗赤褐 | 完形 |

第27号住居跡の北側に位置し、規模は3.0m×2.9mで南側が張り出し、主軸はN－10°－Wをとる。壁高は60cmで、幅20cm、深さ10cmの周溝がカマド下を除いて全周する。床面はハードローム面で堅固であり、柱穴はみられない。カマドは北辺中央部に設けられており、主軸長0.83m、幅1.35mを測る。袖は幅30cmの砂質粘土で構築されており、第1層が煙道部の残欠で、第2層は灰層である。火床面の掘り込みは約5cmで、あまり強い焼成はうけていない。

遺構内からの出土遺物は北西コーナー床直からNo.1の鉢が出土した他、カマド左袖より砥石が1点出土している。

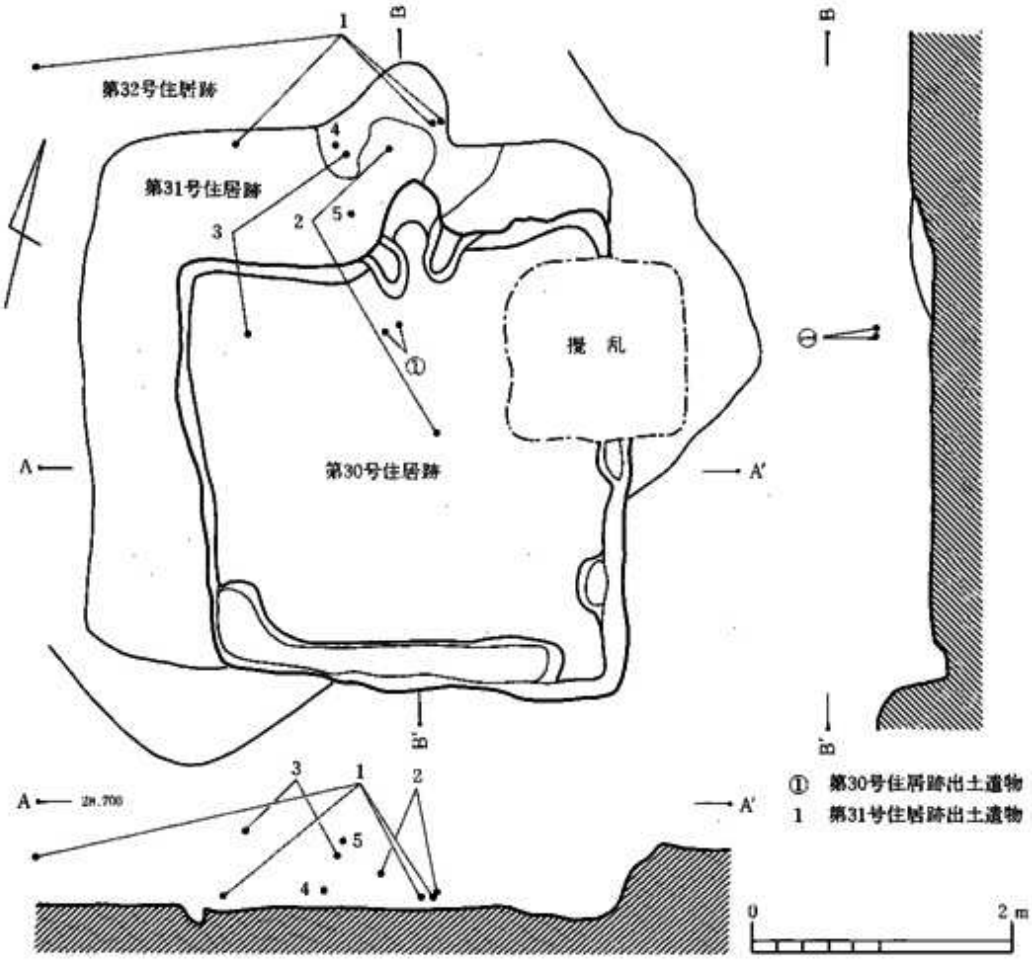
**第30号住居跡**（第57図・第58図）

5E－cグリッドより検出され、第31号住居跡を切って構築している。規模は3.8m×3.3m




**第57図　第30号住居跡カマドと遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>坏 | 口径(13.8)<br>器高 4.0<br>底径( 7.8) | 底部より内彎気味に立ち上り、口縁部に至る。体部下端は回転ヘラ削り。底部は全面回転ヘラ調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み粗い。 | 良好 | 5P<br>2/1<br>紫黒 | 体部1/3残存 |



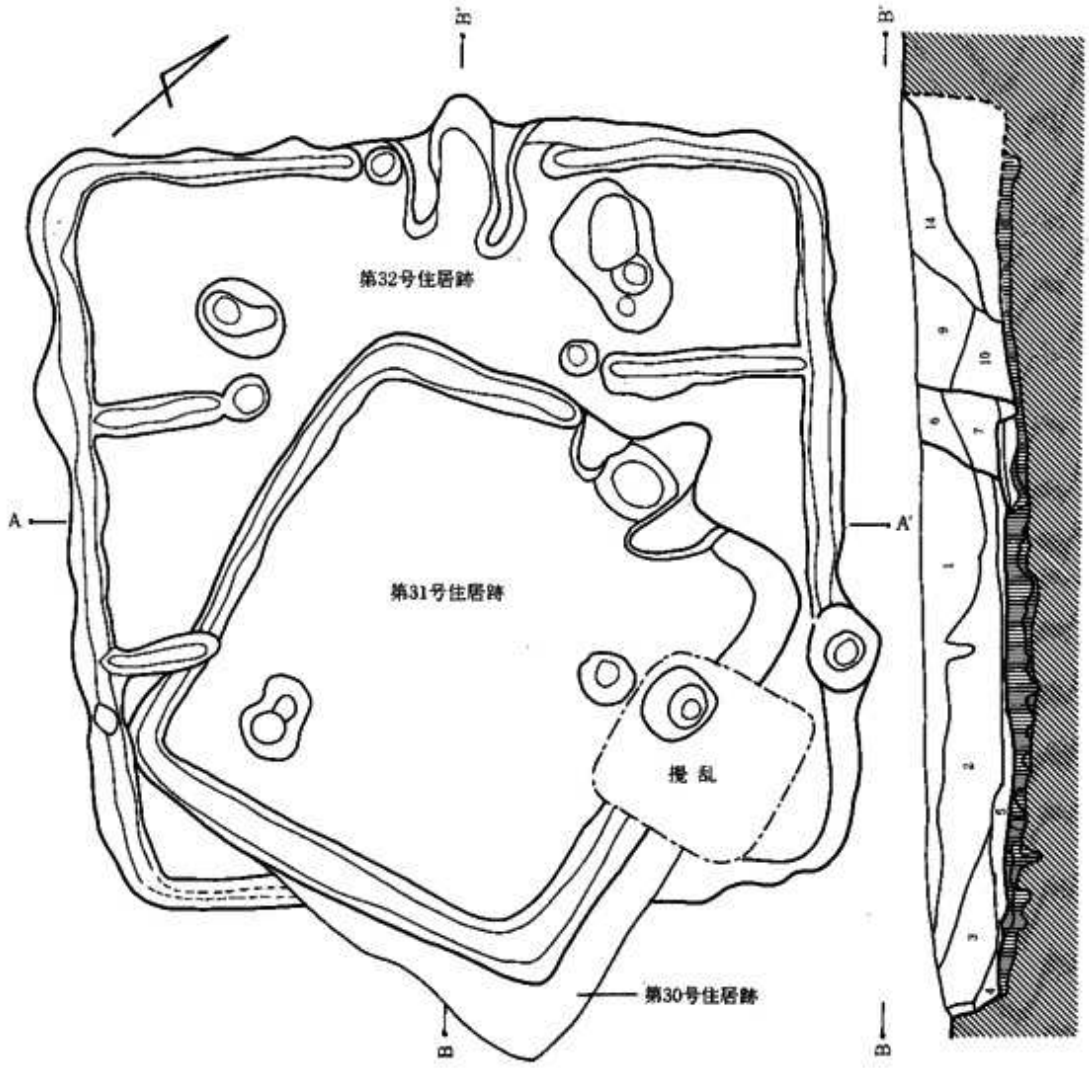

**第58図　第30号住居跡実測図**

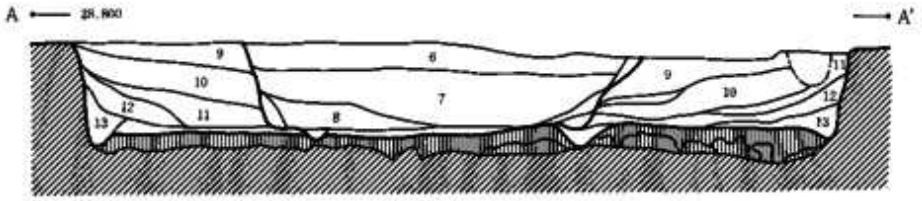
の方形を呈し、主軸はN－5°－Wをとる。壁高は60cmで、周溝は南側に部分的にみられ、幅20cm、深さ7cmである。床面は第31号住居跡とほぼ同じレベルで、ハードロームの掘り方に貼り床を形成する。柱穴はなく、北辺中央部に主軸長90cm、幅80cmのカマドを設ける。袖は幅30cmの砂質粘土により構築されており、火床面の掘り込みはみられない。

遺構内からは坏が1点出土しているのみである。

**第31号住居跡**（第59図・第60図）

第30号住居跡の外側にあり、第33号住居跡を切って構築している。規模は4.6m×4.0mの方形を呈し、主軸はN－7°－Wをとる。壁高は60cmで、幅35cm、深さ5cmの周溝が全周する。床面はハードロームの掘り方に貼り床を形成し、柱穴はみられない。カマドは北辺中央部に位置し、主軸長0.9m、幅1.4mを測る。袖は幅40cmの砂質粘土で構築されている。火床面はほとんど焼けておらず、掘り込みはみられない。左袖上からNo.4の甕が出土している。



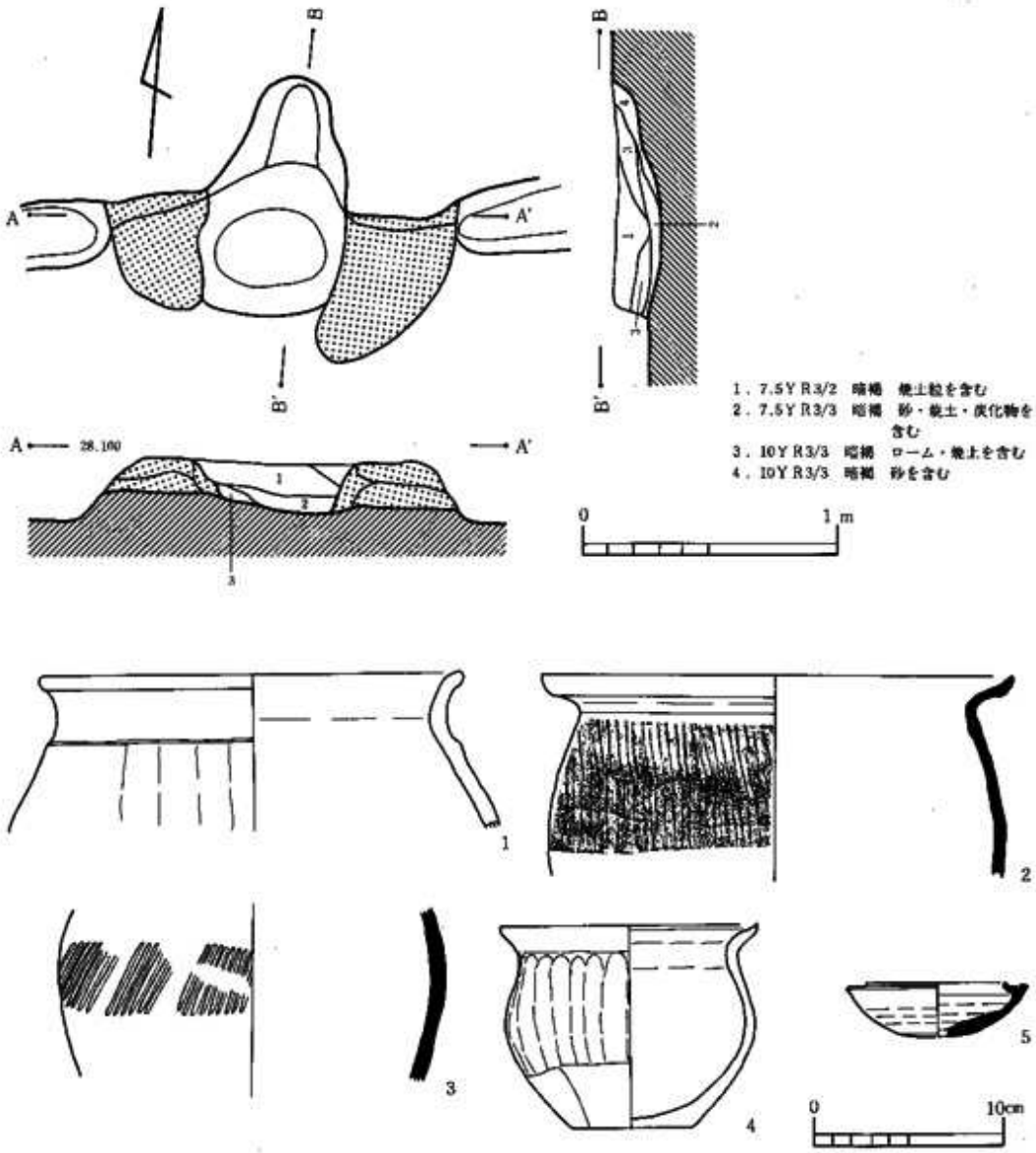




1：7.5Y R4/3　褐　ローム粒を多く含む
2．7.5Y R4/4　褐　1cm大のロームブロックを多く含む
3：10 Y R 4/4　褐　ローム質
4：10 Y R 4/4　褐　黒色土を少量含む
5：10 Y R 4/4　褐　粘味
6．7.5Y R4/3　褐　ローム粒を少量含む
7：7.5Y R3/2　黒褐　ロームブロックを少量含む
8：10 Y R 4/4　褐　ロームブロックを多く含む
9：7.5Y R4/4　褐　ロームブロックを多く含む
10：7.5Y R4/3　褐　黒褐色土を多く含む
11：7.5Y R4/3　褐　ローム粒・焼土粒を少量含む
12：7.5Y R4/4　褐　ロームブロックを多く含む
13：7.5Y R3/3　暗褐　ロームブロックを多く含む
14：7.5Y R4/3　褐　ローム粒を少量含む

0　2 m

**第59図　第30・31・32号住居跡実測図**

遺構内からは甕4点・坏1点出土したが、No.4を除いてはいずれも床面から浮いて出土している。




**第60図　第31号住居跡カマドと遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>甕 | 口径(22.6) | 最大径を胴部上半に持ち、口縁部は緩く「く」字状に屈曲する。胴部上半は縦のヘラ削り。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み<br>砂質 | 良好 | 7.5YR<br>5/8<br>明褐 | 胴部上半1/3残存 |

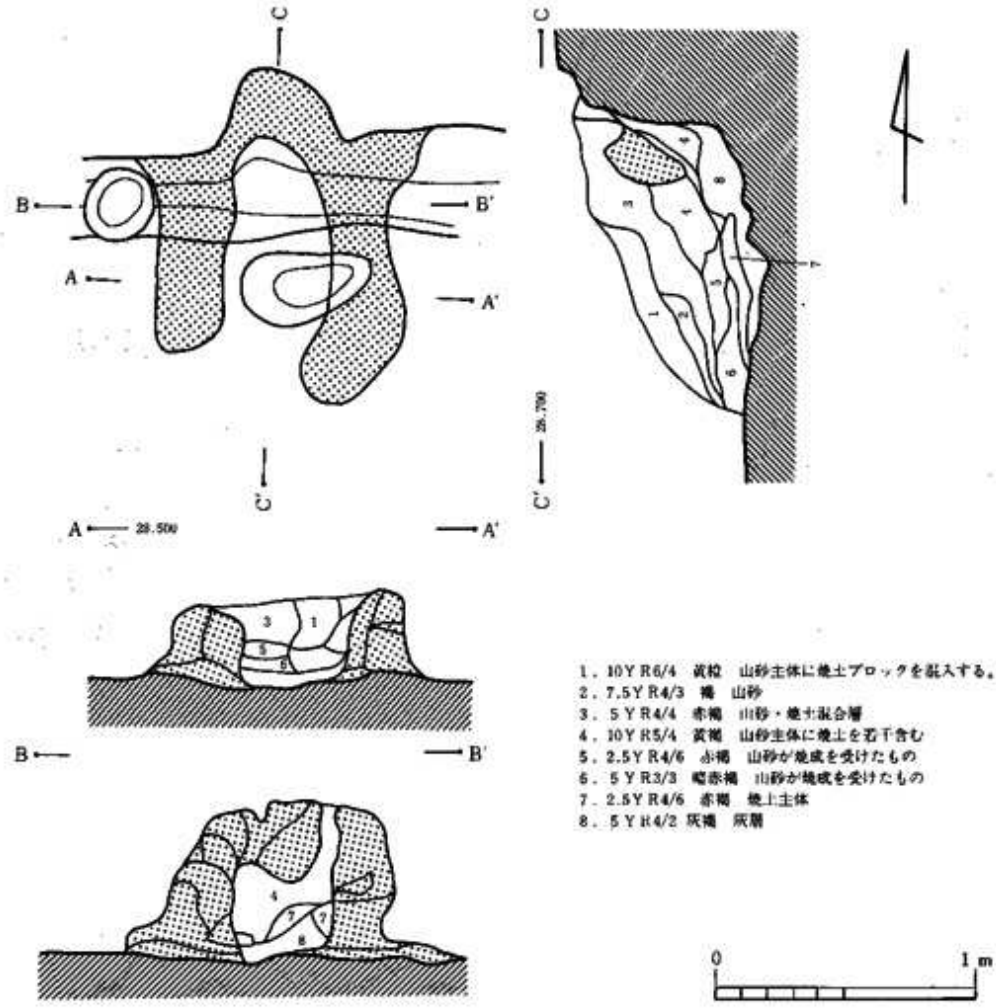
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 須恵器<br>甕 | 口径(25.0) | 最大径を口縁に持ち、胴部は緩く張る。外面縦のタタキ。 | 細かい鉱物粒を少量含む | 良好 | 10YR<br>2/2<br>黒褐 | 胴部上半1/3残存 |
| 3 | 須恵器<br>甕 | | 胴部は緩く張る。外面縦のタタキ。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み砂質 | 良好 | 2.5Y<br>3/3<br>暗オリーブ褐 | 胴部中央1/2残存 |
| 4<br>PL-39 | 土師器<br>甕 | 口径(13.2)<br>器高 10.7<br>底径 6.4 | 最大径を口縁部に持ち、胴部は大きく張る。胴部上半は縦のヘラ削り。下半は横のヘラ削り | 細かい石英粒・長石粒を含み粗い | 良好 | 5YR<br>2/2<br>黒褐色 | 2/3残存 |
| 5 | 須恵器 | 口径( 7.0) | 小径の底部より内彎気味に立ち上り口縁部は「く」字状に内傾する。 | 細かい長石粒を多く含むも緻密 | 良好 | N4/<br>灰 | 体部1/4残存 |

**第32号住居跡**（第59図・第61図～第63図）

第31号住居跡の北側にあり、南側は第31号住居跡により切られている。規模は7.6m×6.0mの方形を呈し、主軸はN－45°－Wをとる。壁高は80cmで、幅20cm、深さ10cmの周溝がカマド下を除いて全周する。柱穴は径50～60cm、深さ70～90cmのものが4本あり、一部に柱痕が認められる。間仕切りは4本あったものが第32号住居跡により1本壊されたと思われ、補助的な柱穴3本と連絡する。床面は重復する2軒とほぼ同レベルで、ハードロームの掘り方に貼り床を形成し、あまり堅固でない。カマドは北辺中央部に位置し、主軸長1.10m、幅1.0mを測る。袖は幅25cmの砂質粘土で構築されており、内壁および火床は強い焼成をうけている。

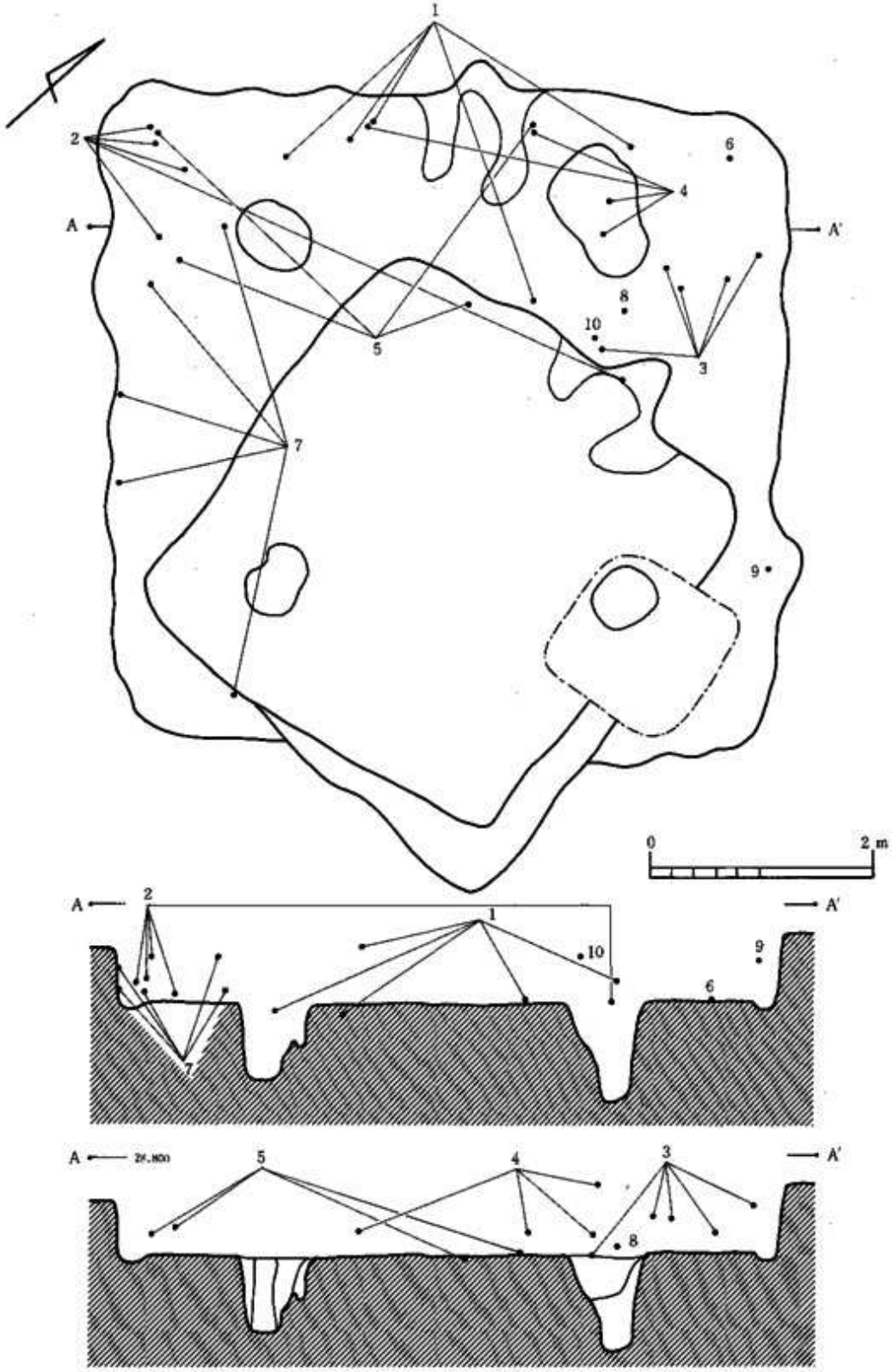
遺構内からは甑2点・甕2点・坏5点・高坏脚部2点が出土しているが、床面から出土しているのはNo.6の坏のみである。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>甕 | 口径(33.0) | 直線的な胴部より口縁は小さく外半する。胴部上半縦のヘラ削り。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含む | 良好 | 5YR<br>5/8<br>暗赤褐 | 胴部上半1/4残存 |
| 2 | 土師器<br>甑 | 底径(10.2) | 胴部は緩やかに膨らむ、外面縦のヘラ削り。内面縦のヘラ削り後ヘラ磨き。 | 石英粒・長石粒を多く含み砂質 | 良好 | 5YR<br>3/3<br>暗赤褐 | 胴部上半1/2残存 |
| 3 | 土師器<br>甑 | 底径(12.4) | 胴部は緩やかに膨らむ、外面縦のヘラ削り。内面縦のヘラ削り後ヘラ磨き。 | 石英粒・長石粒を若干含むも砂質 | 良好 | 10YR<br>6/8<br>明黄褐 | 胴部下半1/4残存 |
| 4<br>PL-39 | 土師器<br>甕 | 底径 8.0 | 小径の底部より大きく開く。底部は木葉痕。 | 長石粒を多く含み粗く砂質 | 良好 | 5YR<br>5/8<br>明赤褐 | 胴部上半2/3残存 |

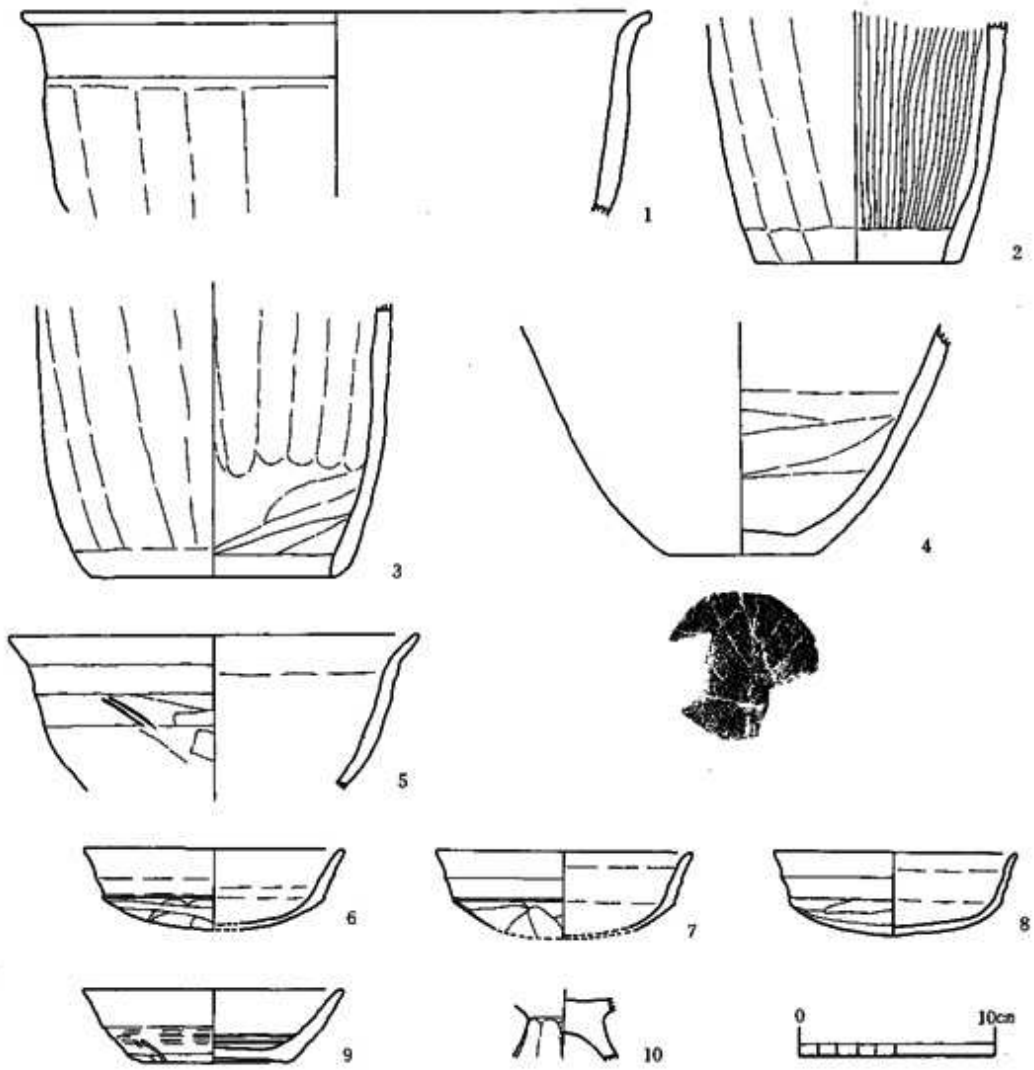



**第61図　第32号住居跡カマド実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | 土師器<br>鉢 | 口径(21.0) | 緩く膨らむ体部より口縁部は小さく開く。 | 大粒の長石粒を多く含み粗く砂質 | 良好 | 5 Y R<br>6/8<br>橙 | 体部上半1/3残存 |
| 6<br>PL- 39 | 土師器<br>坏 | 口径(13.2)<br>器高　4.2 | 体部中央に稜を持ち、口縁部は小さく開く。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み粗い | 良好 | 7.5Y R<br>5/4<br>にぶい褐 | 体部上半1/2残存 |
| 7 | 土師器<br>坏 | 口径(13.0)<br>器高　4.5 | 体部中央に稜を持ち、口縁部は小さく開く。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み粗い | 良好 | 5 Y R<br>4/8<br>赤褐 | 体部上半1/2残存 |
| 8 | 土師器<br>坏 | 口径(12.4)<br>器高　4.2 | 体部中央に稜を持ち、口縁部は小さく開く。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み粗い | 良好 | 5 Y R<br>4/6<br>赤褐 | 体部2/3残存 |




**第62図　第32号住居跡遺物分布図**




**第63図　第32号住居跡遺物実測図**

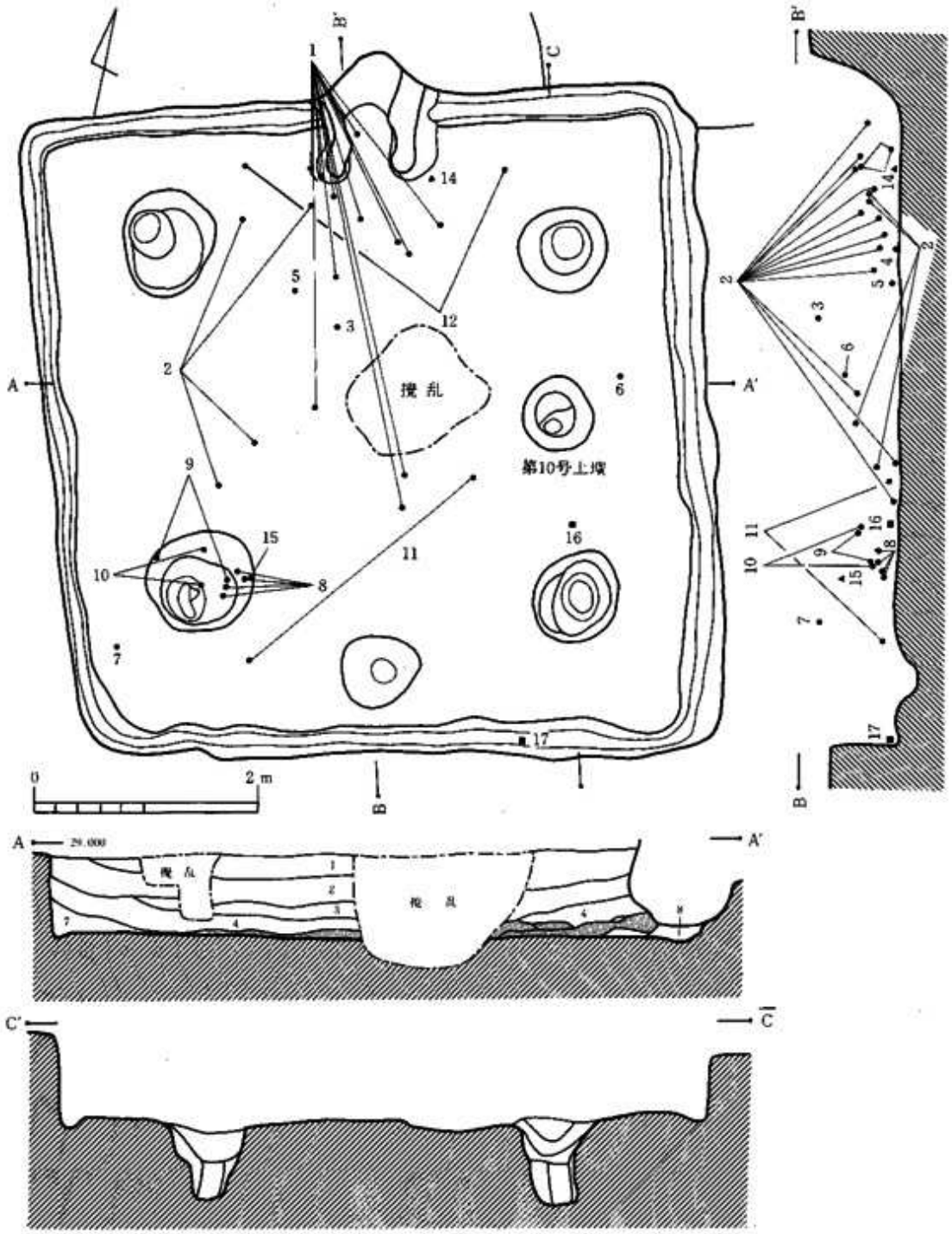
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 9 | 土師器<br>坏 | 口径(13.2)<br>器高( 3.8)<br>底部( 8.2) | 平底の底部より直線的に大きく開く。体部下端は回転ヘラ切り後全面回転ヘラ調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み粗い | 良好 | 7.5YR<br>5/8<br>明褐 | 体部1/2残存 |

**第33号住居跡**（第64図～第66図）

4 E－a グリッドより検出され、規模は6.2m×6.1mの方形を呈し、主軸はN－11°－Wをとる。壁高は66cmで、幅20cm、深さ10cmの周溝がカマド下を除いて全周する。柱穴は径70～90cm、深さ70～90cmのものが4本で一部に柱痕がみられ、径70cm、深さ15cmの第5ピットを有する。東側で第6号掘立柱建物跡に切られている他、覆土内に第10号土壙がみられる。床面はハードローム面を直床として堅固である。カマドは北辺中央部に位置し、主軸長1.15m、幅0.95mを測る。袖は幅20cmの砂質粘土で構築されており、左袖の脇から支脚が直立して検出された。火床面の掘り込みはみられないが、強い焼成をうけている。

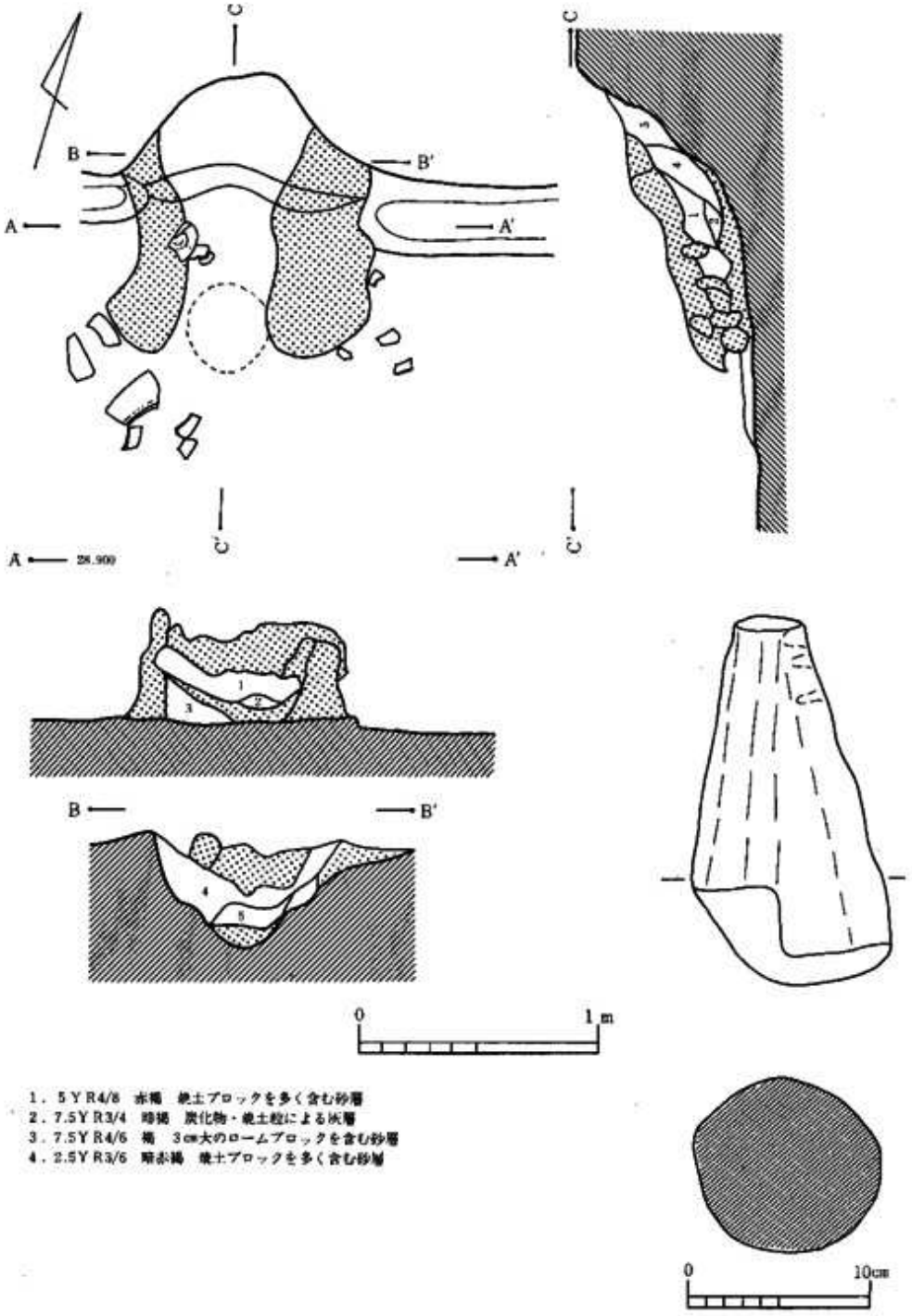
北側と東側の床面上には厚さ10cmの焼土の堆積がみられる。No.1・No.4・No.5の土器は、カマド周辺および焼土上面から出土し、他に鉄鏃1点・刀子1点・砥石2点が出土している。No.14は有茎片刃箭式の鉄鏃で、全長16.0cm、身長10.0cm・刀幅0.6cmを測る。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>甕 | 口径 24.6<br>器高 29.6<br>底径( 6.0)<br>胴部径29.6 | 最大径を胴部中央に有し、口縁は大きく水平に開く。底部は小さい。胴部上半は縦のヘラ削り。下半は横のヘラ削り。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み粗い | 良好 | 2.5YR<br>5/6<br>明赤褐 | 復元完形 |
| 2 | 土師器<br>坏 | 口径(19.0) | 半球状の体部から口縁に至る。外面は斜・横のヘラ削り。内面は磨き。 | 細かい鉱物粒を含むも緻密 | 良好 | 2.5YR<br>5/6<br>明赤褐 | 体部上半1/2残存 |
| 3<br>PL-39 | 土師器<br>坏 | 口径 13.4<br>器高 4.6 | 半球状の体部から口縁部が大きく開く。体部下半ヘラ削り内面は軽い磨き。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み粗い | 良好 | 7.5YR<br>4/6<br>褐 | 口縁部一部<br>欠損 |
| 4 | 土師器<br>坏 | 口径(14.4)<br>底径( 3.2) | 半球状の体部から口縁部に至る。外面は軽いなで。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み粗い | 極良好 | 7.5YR<br>4/6<br>褐 | 体部上半1/6残存 |
| 5<br>PL-39 | 土師器<br>坏 | 口径(12.6)<br>器高 3.6 | 半球状の体部から口縁部に至る。口縁部は垂直に立ち上る。内面はヘラ磨き。 | 細かい鉱物粒を含むも | 良好 | 7.5YR<br>5/8<br>明褐 | 体部上半2/5残存 |
| 6 | 土師器<br>坏 | 口径(12.0)<br>器高 3.8<br>底径 5.5 | 小径の底部より大きく開いて口縁部に至る。体部下端は手持ちヘラ削り。底部全面回転ヘラ調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み粗い | 良好 | 7.5YR<br>5/8<br>明褐 | 完形 |
| 7<br>PL-40 | 土師器<br>坏 | 口径 12.2<br>器高 4.0<br>底径 6.8 | 小径の底部より直線的に立ち上り口縁部に至る。体部下半は手持ちヘラ削り。底部は回転糸切り後外周部手持ちヘラ調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み粗い | 不良 | 2.5YR<br>5/8<br>明赤褐 | 体部2/3残存 |



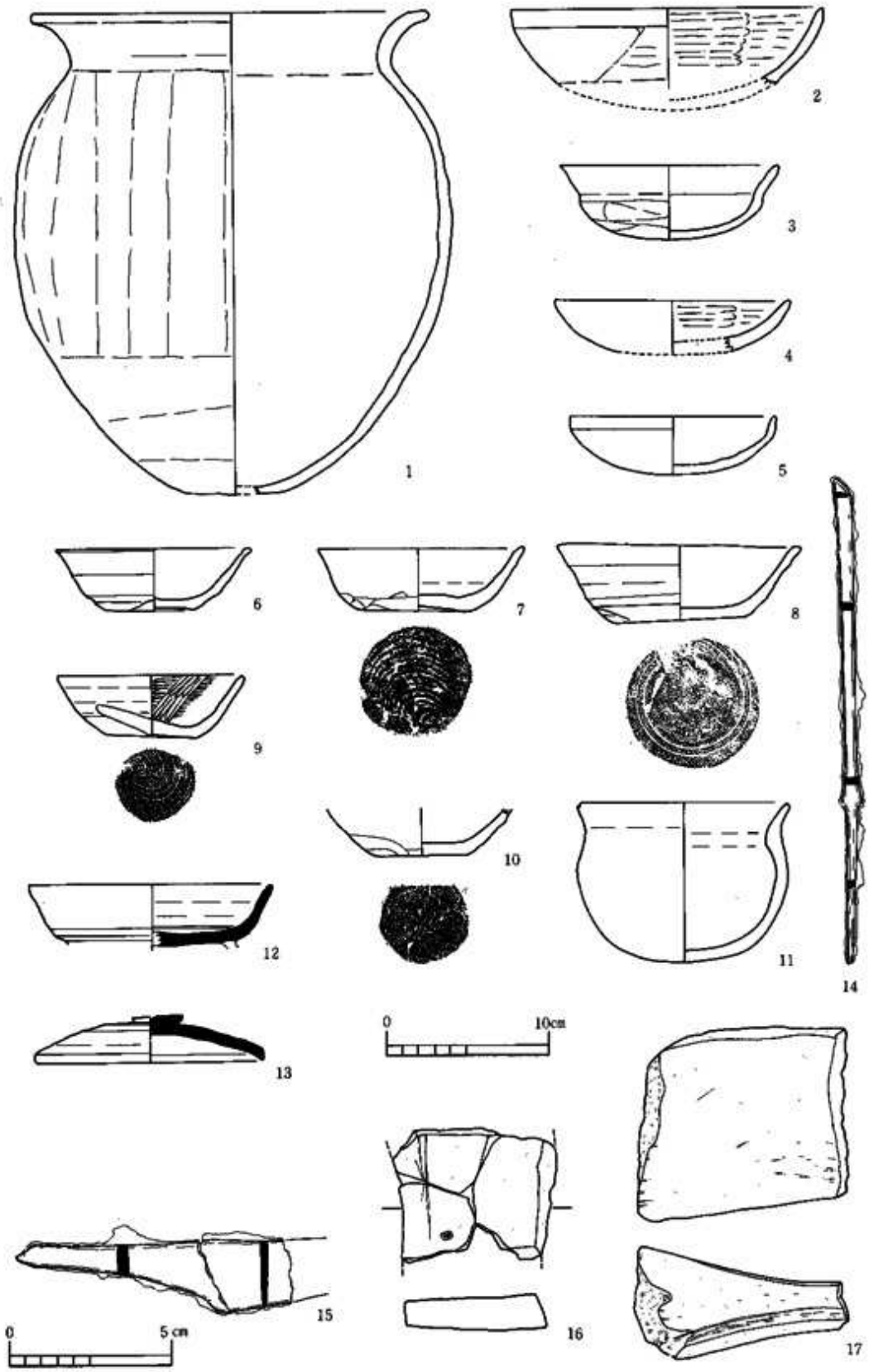

1．7.5Y R3/2　黒褐　ローム粒・焼土粒を多く含む
2．7.5Y R3/2　黒褐　1層中に黒色土が混入
3．7.5Y R3/4　暗褐　ローム粒を多く含む
4．7.5Y R4/3　褐　1cm大のロームブロックを多く含む
5．7.5Y R3/2　黒褐　焼土粒を多く含む
6．7.5Y R3/4　暗褐　焼土粒を含む
7．7.5Y R3/1　黒褐　ローム粒を少量含む
8．7.5Y R4/4　褐　ローム粒を多く含む

**第64図　第33号住居跡実測図**




1．5YR4/8　赤褐　焼土ブロックを多く含む砂層
2．7.5YR3/4　暗褐　炭化物・焼土粒による灰層
3．7.5YR4/6　褐　3cm大のロームブロックを含む砂層
4．2.5YR3/6　暗赤褐　焼土ブロックを多く含む砂層

**第65図　第33号住居跡カマド実測図**




**第66図　第33号住居跡遺物実測図**

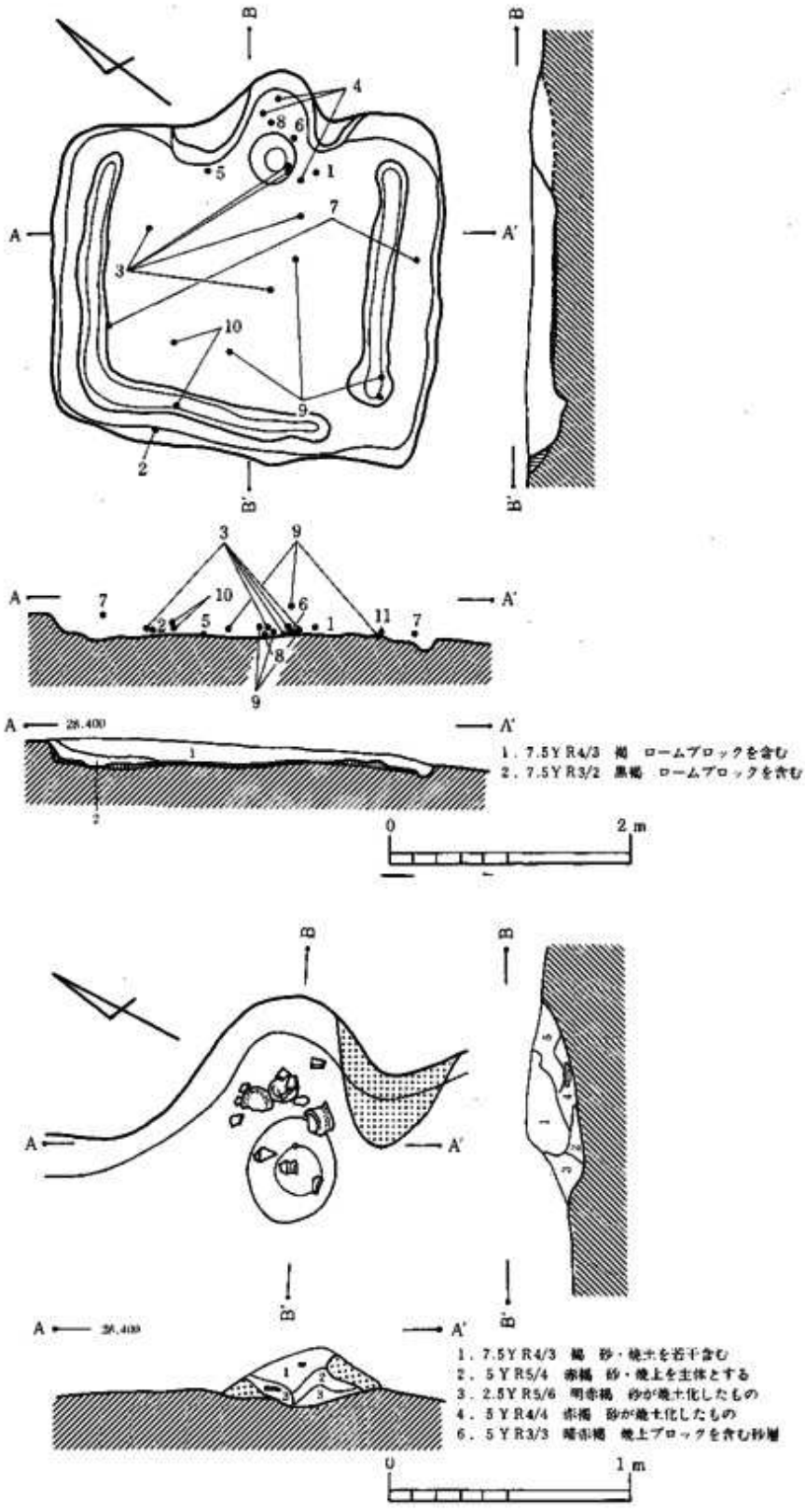
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 8<br>PL-40 | 土師器<br>坏 | 口径 15.0<br>器高 4.7<br>底径 8.1 | 大径の底部より直線的に立ち上り口縁部に至る。体部下半は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後外周部回転ヘラ調整 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み粗い | 不良 | 2.5YR<br>5/6<br>明赤褐 | 口縁部一部欠損歪み有 |
| 9 | 土師器<br>坏 | 口径 11.4<br>器高 3.8<br>底径( 5.4) | 小径の底部より直線的に立ち上り、口縁部に至る。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後外周部回転ヘラ調整。 | 石英 | 良好 | 7.5YR<br>5/8<br>明赤褐 | |
| 10 | 土師器<br>坏 | 底径 5.2 | 体部下端手持ちヘラ削り。底部は回転糸切り後全面手持ちヘラ調整。 | 長石粒を多く含みやや粗い | 良好 | 7.5YR<br>7/3<br>にぶい橙 | 底部のみ |
| 11<br>PL-39 | 土師器<br>小形甕 | 口径 23.2<br>器高 10.8 | 丸底の底部から内彎気味に立ち上り、頸部は小さくすぼまる。外面全面はナデ調整。 | 緻密 | 良好 | 7.5YR<br>7/8<br>黄橙 | 底部一部欠損 |
| 12<br>PL-40 | 須恵器<br>高台付<br>坏 | 口径(14.8) | 大径の底部より直線的に立ち上り口縁部に至る。 | 緻密 | 良好 | 5B<br>6/1<br>灰青 | 体部1/3残存 |
| 13<br>PL-40 | 須恵器<br>蓋 | 口径 14.0<br>器高 2.9 | 天井部より緩やかに口縁部に至る。口唇は内傾する。 | 緻密 | 良好 | 5B<br>6/1<br>灰青 | 3/4残存 |

**第34号住居跡**（第67図・第68図）

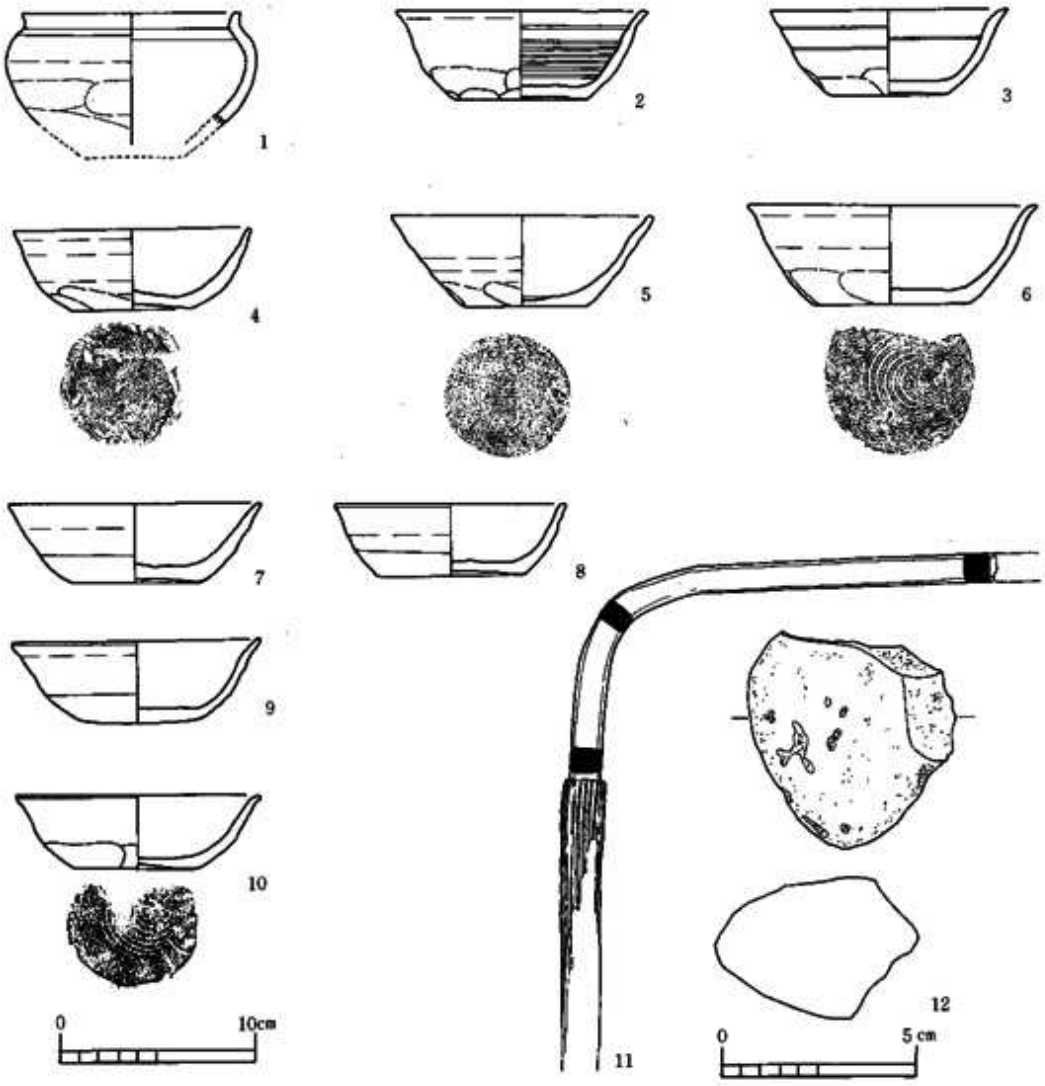
5F－aグリッドより検出され、規模は3.1m×3.2mの方形を呈し、主軸はN－69°－Eをとる。壁高は28cmで、幅20cm、深さ10cmの周溝が廻るが、カマドが位置する東辺にはなく、壁のかなり内側を巡っている。床面はローム面まで達しておらず、軟弱で貼り床を形成し、床面にはカマドの砂の流れ込みが全面に亘ってみられた。カマドは東辺中央部に位置し、主軸長0.8m、幅0.6mを測る。袖は前記したように崩壊が激しく、痕跡が僅かに認められたに過ぎない。カマド内からはNo.4・No.6・No.8の坏と緑釉陶器の破片が1点出土しており、No.4は伏せた状態で支脚に代用した可能性も考えられる。火床面はあまり焼成を受けず、掘り込みは5cmである。

遺構内からは短頸瓶1点・坏10点・鉄器1点出土している。No.7とNo.9を除いては本住居跡に伴うものと考えられ、No.11の鏃は木質部を残す。No.12は軽石である。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>短頸瓶 | 口径(11.0) | 胴部上半より緩くすぼまり、口縁は短かく直立する。胴部下半は横方向のヘラ削り。口縁部内外面に煤付着。 | 細かい石英粒・長石粒金雲母を多く含み粗い | 良好 | 7.5YR<br>3/3<br>暗褐 | 体部上半1/8残存 |




**第67図　第34号住居跡とカマド実測図**




**第68図　第34号住居跡遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 土師器<br>坏 | 口径(12.8)<br>器高 4.5<br>底径 6.6 | 体部は内湾気味に立ち上り、口縁は外反する。体部下端は手持ちヘラ削り、底部は回転糸切り後、全面回転ヘラ調整内面にヘラ先痕が顕著。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み粗い。 | 良好 | 7.5YR<br>4/8<br>赤褐 | 体部1/2・底部残存 |
| 3<br>PL. 40 | 土師器<br>坏 | 口径(12.0)<br>器高 4.4<br>底径 6.2 | 底部より直線的に立ち上り、口縁部は小さく外反する。体部上半内外面にヘラ先痕。体部下端は手持ちヘラ調整。底部は全面手持ちヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み粗く砂質 | 良好 | 5YR<br>6/6<br>橙 | 体部2/3残存 |
| 4<br>PL. 40 | 土師器<br>坏 | 口径 12.0<br>器高 4.3<br>底径 6.4 | 底部より内湾気味に立ち上り、口縁部に至る。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後外周部手持ちヘラ調整。 | 大粒の石英粒・長石粒金雲母を含み粗く砂質 | 良好 | 2.5YR<br>5/6<br>明赤褐 | 完形 |

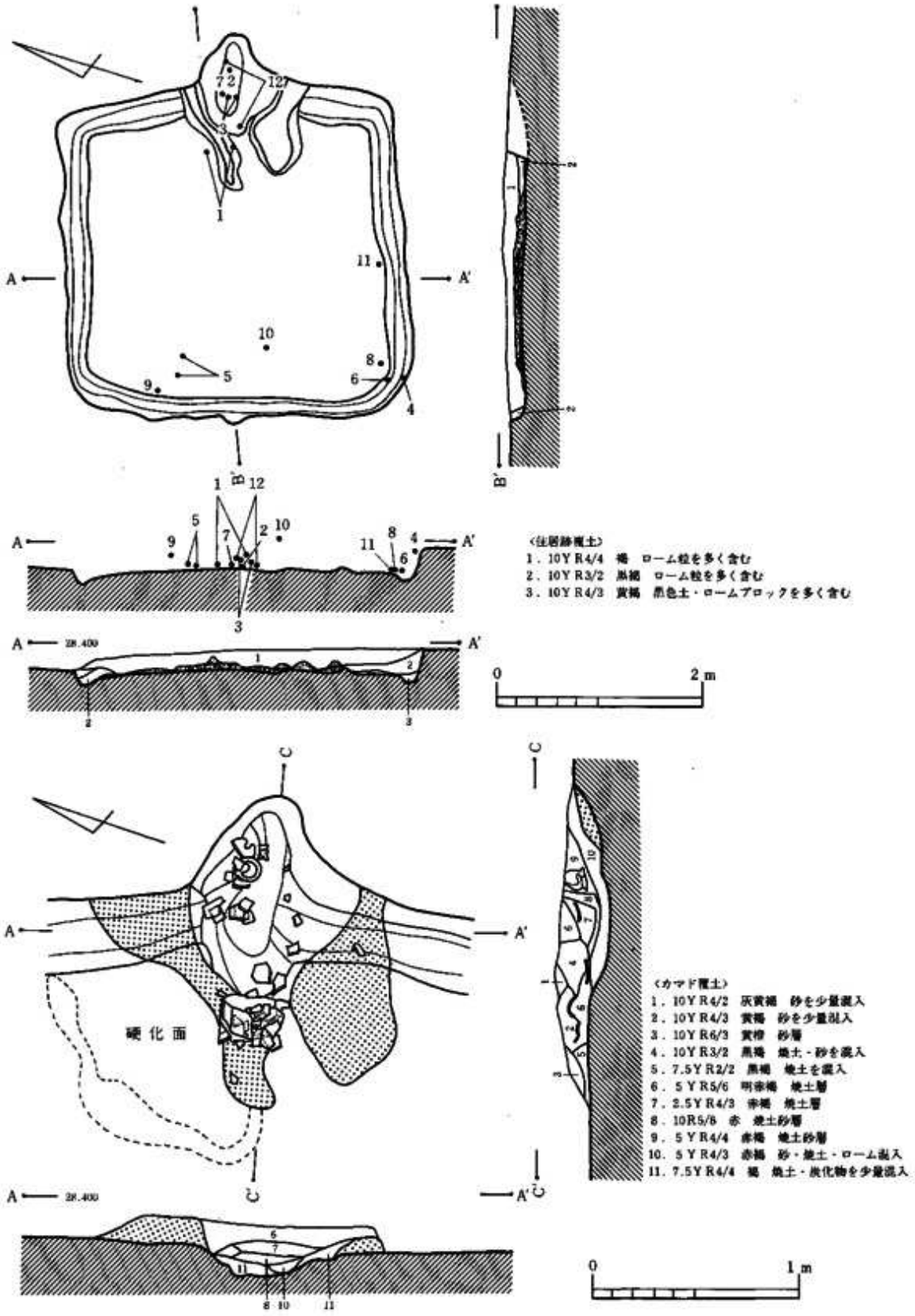
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5<br>PL- 40 | 土師器<br>坏 | 口径 13.4<br>器高 4.7<br>底径 6.0 | 底部から直線的に立ち上る。体部下端は手持ちヘラ削り。底部は静止糸切り後無調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み粗い | 極良好 | 7.5YR<br>5/8<br>明赤褐 | 完形 |
| 6 | 土師器<br>坏 | 口径(14.6)<br>器高 5.1<br>底径( 7.8) | 底部から内彎気味に立ち上り、口縁部は小さく外反する。体部下端は手持ちヘラ削り。底部は回転糸切り後外周部手持ちヘラ調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み粗い | 良好 | 7.5YR<br>5/8<br>明赤褐 | 体部1/2残存 |
| 7<br>PL 40 | 土師器<br>坏 | 口径(12.8)<br>器高 4.1<br>底径( 6.4) | 底部より直線的に立ち上り、口縁部に至る。体部下端は回転ヘラ調整 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み | 良好 | 7.5YR<br>5/8<br>明赤褐 | 体部1/2残存 |
| 8<br>PL- 40 | 土師器<br>坏 | 口径 11.8<br>器高 3.6<br>底径 7.6 | 底部より直線的に立ち上り、口縁部に至る。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後外周部回転ヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含む | 良好 | 7.5YR<br>5/8<br>明赤褐 | 完形 |
| 9 | 土師器<br>坏 | 口径(12.6)<br>器高 4.3<br>底径 6.0 | 丸底気味の底部から内彎気味に立ち上り、口縁部は小さく外反する。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後外周部回転ヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含む | 良好 | 7.5YR<br>5/8<br>明赤褐 | 体部1/6・底部残存 |
| 10<br>PL- 40 | 土師器<br>坏 | 口径(12.4)<br>器高 3.8<br>底径( 6.4) | 底部より内彎気味に立ち上り、口縁部は外反する。体部下端は手持ちヘラ削り。底部は回転糸切り後外周部手持ちヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含む粒子細 | 極良好 | 5YR<br>6/8<br>橙 | 体部2/3残存 |

**第35号住居跡**（第69図・第70図）

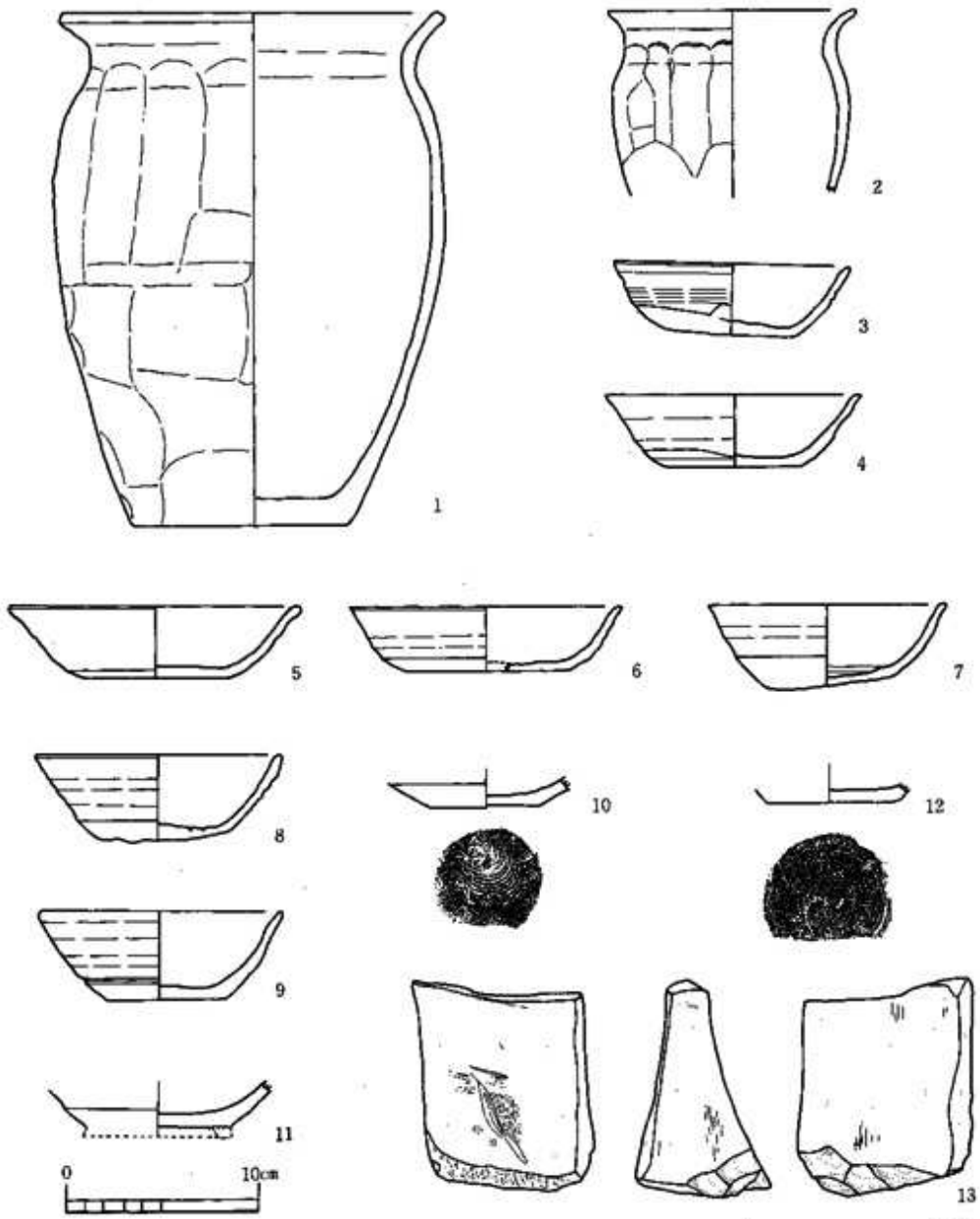
第34号住居跡の西側に位置し、規模は3.7m×3.2mの方形を呈し、主軸はN－70°－Eをとる。壁高は26cmで、幅20cm、深さ10cmの周溝がカマド下を除いて全周する。床面はローム面まで達しておらず、軟弱である。カマドは東辺中央部に位置し、主軸長1.4m、幅1.1mを測る。袖は幅50cmの砂質粘土で構築されており、左袖前面に硬化面がみられる。カマド内からは火床前面からNo.1の甕が横倒しの状態で、No.2が倒立の状態で出土した。第7層～第9層の焼土層との関係からNo.7を支脚の代用とし、No.2の底部を抜いて煙道に再使用したと思われる。No.2が小型の点からみれば壁の掘り込みも当初から浅いものと推定される。

カマド前面には炭化物の分布がみられ、遺物はそれをはずれるように西側とカマド周辺に集

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL 40 | 土師器<br>甕 | 口径 20.0<br>器高 27.2<br>底径 11.4 | 最大径を口縁部と胴部に持ち胴部は緩く張らむ。胴部上半は縦のヘラ削り、下半は横のヘラ削り。 | 石英・長石粒を含み粗い。 | 良好 | 7.5YR<br>3/4<br>暗褐色 | 復元完形 |




**第69図　第35号住居跡とカマド実測図**




**第70図　第35号住居跡遺物実測図**

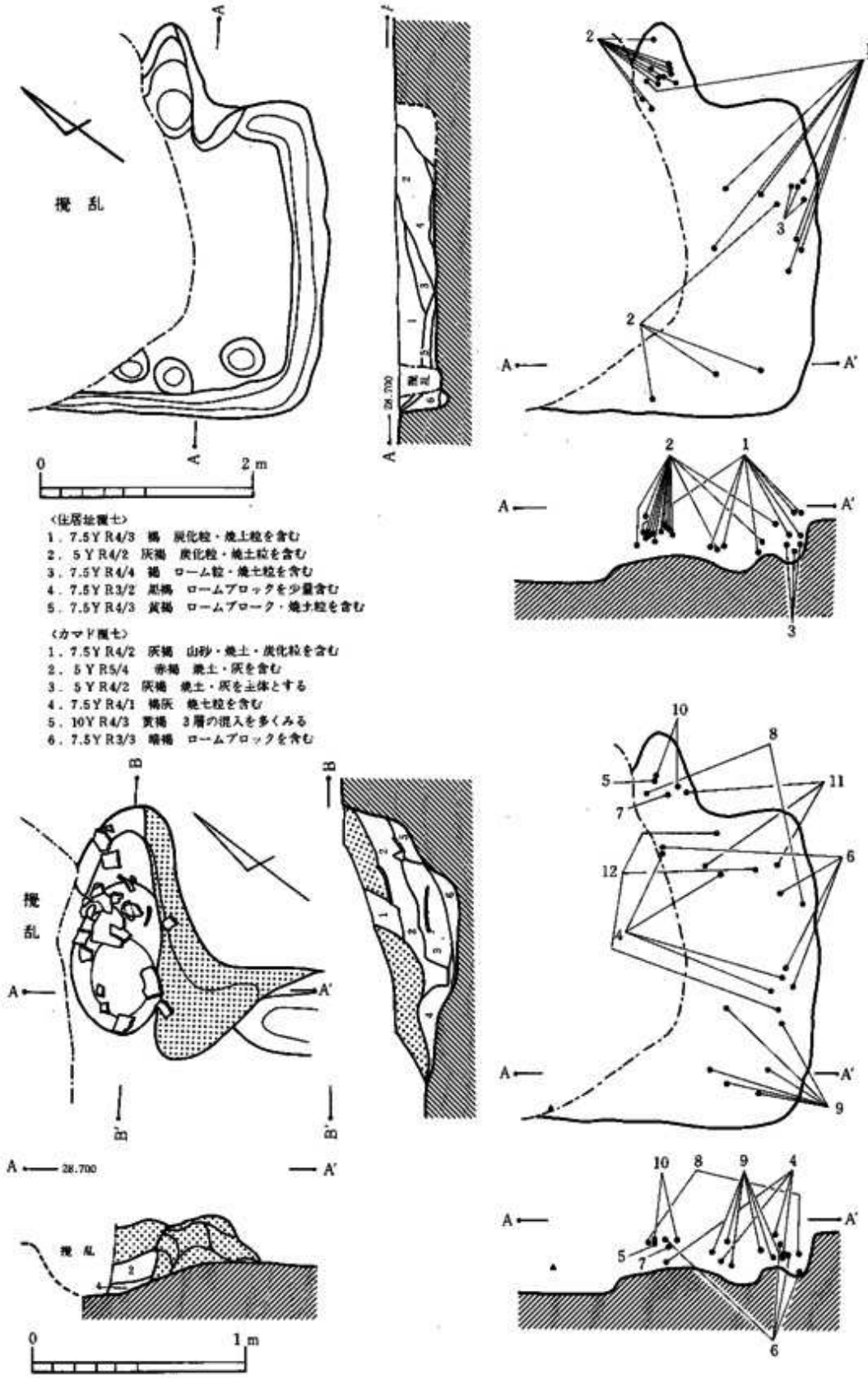
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2<br>PL- 40 | 土師器<br>甕 | 口径(13.0) | 最大径を口縁部に持ち、胴部は緩く膨らむ。胴部上半は縦のヘラ削り。下半は斜位のヘラ削り。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み砂質 | やや不良 | 2.5Y R<br>4/6<br>赤褐 | 胴部上半1/2残存 |
| 3<br>PL- 41 | 土師器<br>坏 | 口径 12.2<br>器高 3.8<br>底径 6.8 | 底部より直線的に立ち上り、口縁は小さく外反する。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転ヘラ切り後全面回転ヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含む | やや不良 | 7.5Y R<br>3/4<br>暗褐 | 体部2/3残存 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4<br>PL- 41 | 土師器<br>坏 | 口径(13.2)<br>器高 3.8<br>底径( 7.0) | 底部より直線的に立ち上り口縁部に至る。体部下端は回転ヘラ調整。底部は回転ヘラ切り後外周部回転ヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含む | 極良好 | 2.5Y R<br>4/8<br>赤褐 | 体部1/2残存 |
| 5<br>PL- 41 | 土師器 | 口径(15.2)<br>器高 3.8<br>底径 7.4 | 底部より大きく開いて立ち上り口縁部に至る。体部下端は回転ヘラ調整。底部は回転ヘラ切り後、外周部回転ヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み砂質 | 良好 | 10Y R<br>5/8<br>黄褐 | 体部1/3・底部残存 |
| 6 | 土師器<br>坏 | 口径(14.0)<br>器高 3.4<br>底径( 6.4) | 大径の底部から内彎気味に立ち上り、口縁部は小さく開く。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後、外周部回転ヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含む | 極良好 | 10Y R<br>5/8<br>黄褐 | 体部1/4残存 |
| 7<br>PL- 41 | 土師器<br>坏 | 口径 12.2<br>器高 4.5<br>底径 6.3 | 底部より直線的に至る。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転ヘラ切り後全面回転ヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み粗い | 極良好 | 2.5Y R<br>4/8<br>赤褐色 | 体部2/3残存<br>歪みが著しい |
| 8<br>PL- 41 | 土師器<br>坏 | 口径 12.6<br>器高 4.5<br>底径 6.6 | 底部より内彎気味に立ち上り口縁部に至る。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後外周部回転ヘラ調整 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み粗い。 | 極良好 | 2.5Y R<br>4/8<br>赤褐 | 体部2/3残存 |
| 9<br>PL- 41 | 土師器<br>坏 | 口径 12.6<br>器高 4.8<br>底径 5.4 | 底部より内彎気味に立ち上り口縁部は小さく外反する。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後外周部手持ちヘラ調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み、粗く砂質、脆い | やや不良 | 5 Y R<br>3/3<br>暗赤褐 | 完形 |
| 10 | 土師器<br>坏 | 底部( 6.8) | 体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後外周部回転ヘラ調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含む | 極良好 | 2.5Y R<br>4/8<br>黄褐 | 底部のみ |
| 11 | 土師器<br>長頸瓶 | | 底部より内彎気味に立ち上る。 | 細かい雲母を多く含む | 良好 | 10Y R<br>5/8<br>黄褐 | 底部のみ |

中する。甕2点・坏9点・高台付坏1点・砥石1点が出土しており、このうちNo.4・No.9・No.10を除いては本住居跡に伴うものと考えられる。

**第36号住居跡**（第71図・第72図）

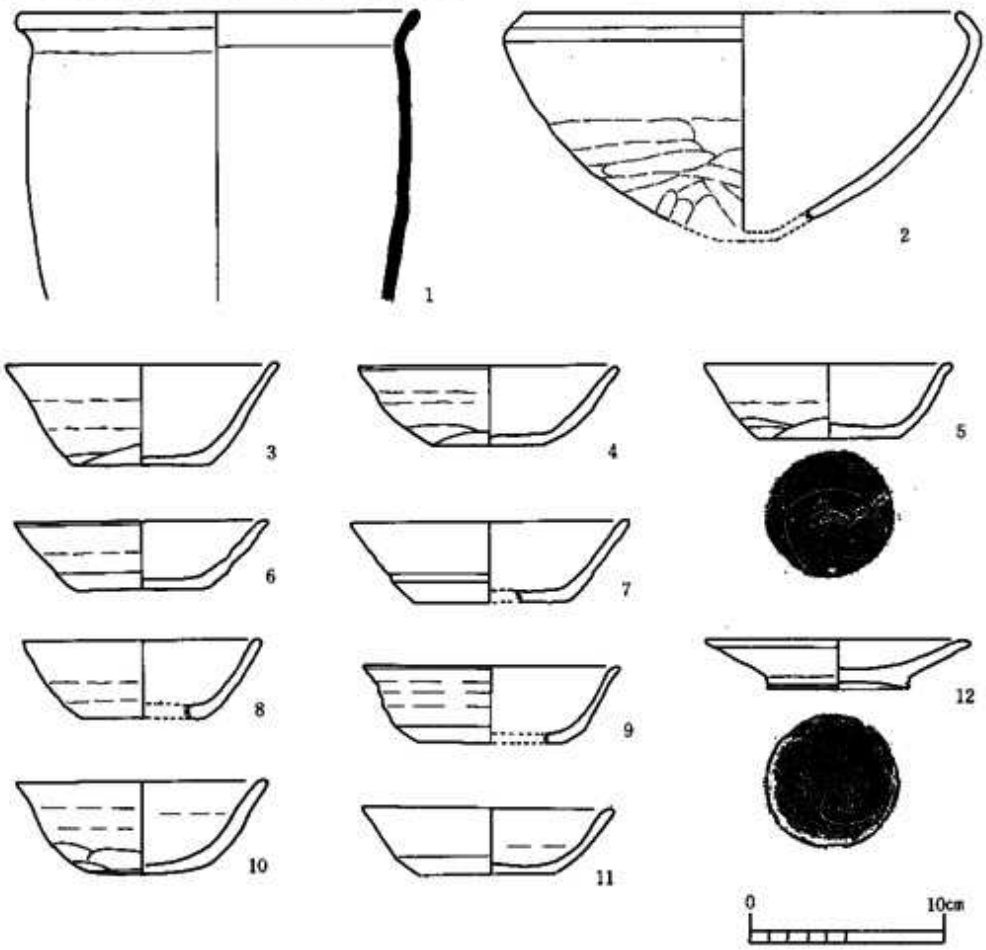
4F－aグリッドより検出され、北側半分を撹乱により破壊されている。規模は2.9m×2.9mの方形を呈し、主軸はN－62°－Eをとる。壁高は46cmで、幅20cm、深さ10cmの周溝がカマド下を除いて全周する。床面はハードローム面を利用した堅固なもので、西側に径30cm、深さ10cmのピットが3本みられるのである。カマドは東辺中央部に設置されているが、左袖は撹乱に




**第71図　第36号住居跡とカマド実測図**

より削り取られている。主軸長1.0ｍで、右袖は幅50cmの砂質粘土で構築されている。火床は強い焼成をうけており、約10cmの掘り込みがみられる。カマド内からはNo.2・No.5・No.7・No.10の土器の他に大型の甕の破片が折り重なるよう出土した。

遺構内からは甕1点・鉢1点・坏7点・高台付皿1点が出土しているが、カマド出土遺物以外はいずれも床面から浮いて出土している。



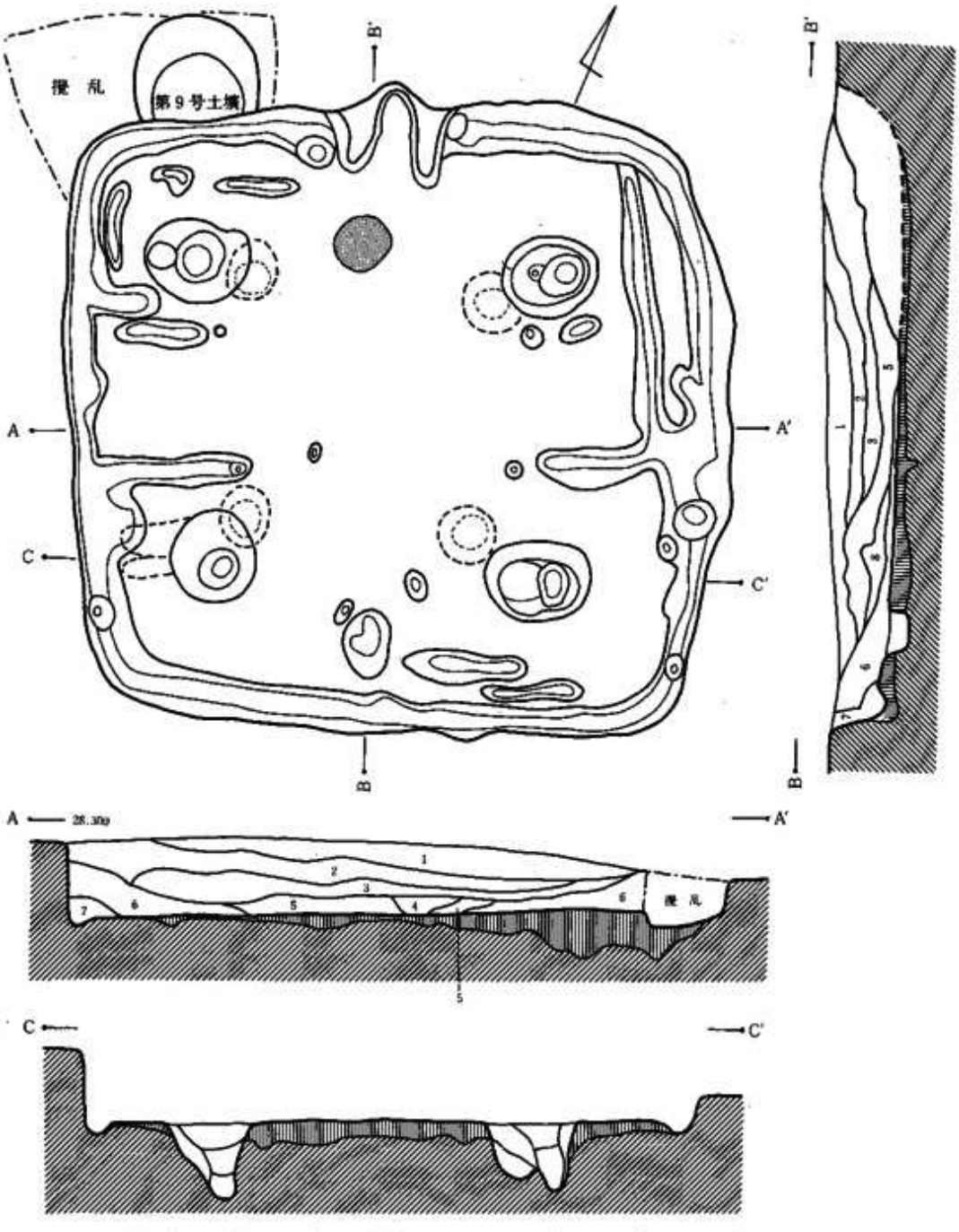

**第72図　第36号住居跡遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 須恵器<br>甕 | 口径(21.0) | 最大径を口縁部に持ち、胴部は直線的である。 | 大粒の石英粒を多く含み粗い | 良好 | 5B<br>5/1<br>青灰 | 胴部上半1/4残存 |
| 2<br>PL-41 | 土師器<br>鉢 | 口径(23.0) | 小径の底部から急激に立ち上り、口縁は「く」字状に内傾する。胴部下半は横および斜方向のヘラ削り。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含むも緻密 | 良好 | 10YR<br>5/8<br>黄褐 | 胴部1/3残存 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3<br>PL-41 | 土師器<br>坏 | 口径(13.8)<br>器高 5.1<br>底径( 7.0) | 底部から内彎気味に立ち上り、口縁部は小さく外反する。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転ヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み砂質で粗い | 不良 | 5YR<br>3/3<br>暗赤褐 | 体部1/2残存 |
| 4<br>PL-41 | 土師器<br>坏 | 口径(13.2)<br>器高 4.1<br>底部 5.6 | 底部から直線的に立ち上り、口縁部に至る。体部下端は手持ちヘラ削り。底部は回転ヘラ切り後手持ちヘラ調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み粗い | 良好 | 2.5YR<br>4/8<br>赤褐 | 体部2/3残存 |
| 5<br>PL-41 | 土師器<br>坏 | 口径(12.6)<br>器高 3.9<br>底径 7.0 | 底部から内彎気味に立ち上り、口巻は小さく開く。体部下端は手持ちヘラ削り。底部は回転糸切り後外周部回転ヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み砂質 | やや不良 | 10YR<br>5/8<br>黄褐 | 体部1/3・口縁残存 |
| 6<br>PL-41 | 土師器<br>坏 | 口径(12.8)<br>器高 3.6<br>底径 7.0 | 底部から直線的に立ち上り、口縁部に至る。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転ヘラ切り後全面回転ヘラ調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含む | やや不良 | 7.5YR<br>4/6<br>褐 | 体部1/2残存 |
| 7<br>PL-41 | 土師器<br>坏 | 口径(14.2)<br>器高 4.1<br>底径( 7.8) | 底部から直線的に立ち上り、口縁部に至る。体部下端は回転ヘラ削り。 | 大粒の鉱物粒を多く含み粗く砂質 | 良好 | 2.5YR<br>4/8<br>赤褐 | 体部1/3残存 |
| 8<br>PL-41 | 土師器<br>坏 | 口径(12.0)<br>器高 4.0<br>底径( 6.0) | 底部から直線的に立ち上り、口縁部に至る。体部は軽いなで。 | 大粒の鉱物粒を多く含み粗く砂質 | やや不良 | 5YR<br>6/8<br>橙 | 体部1/2残存 |
| 9<br>PL-41 | 土師器<br>坏 | 口径(13.0)<br>器高 4.0<br>底径 7.2 | 底部より直線的に立ち上り、口縁部は小さく外反する。体部下端は回転ヘラ削り。 | 細かい鉱物粒を多く含み若干砂質 | 良好 | 10YR<br>5/8<br>黄褐 | 体部1/2残存 |
| 10<br>PL-41 | 土師器<br>坏 | 口径 13.0<br>器高 4.7<br>底径 6.4 | 丸底気味の底部から内彎気味に立ち上り、口縁は小さく外反する。体部下端は手持ちヘラ削り。底部は手持ちヘラ切り後全面手持ちヘラ調整。 | 細かい鉱物粒を多く含み粗い。 | 良好 | 7.5YR<br>4/4<br>褐色 | 完形 |
| 11<br>PL-41 | 土師器<br>坏 | 口径 11.4<br>器高 3.4<br>底径 7.0 | 底部から直線的に立ち上り口縁部に至る。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転ヘラ切り後全面回転ヘラ調整。 | 細かい鉱物粒を多く含み、粗く砂質 | 良好 | 5YR<br>6/8<br>橙 | 完形<br>底面に「ノ」のヘラ記号 |
| 12 | 土師器<br>高台付<br>皿 | 口径(13.4)<br>器高 2.5<br>底径 7.1 | 上底の底部から直線的に大きく開いて口縁部に至る。内面磨き。底部は回転糸切り。 | 細かい鉱物粒を多く含み砂質 | 良好 | 10YR<br>5/8<br>黄褐 | 口縁1／3・体部残存 |

**第37号住居跡・第38号住居跡**（第73図～第76図）

5E－dグリッドより検出され、大型の第37号住居跡の貼り床下より柱穴4本と周溝の一部およびカマド火床部の残存と思われる焼土が検出されたために、これを第38号住居跡とした。なお、第38号住居跡から第37号住居跡へ拡張した可能性も考えられる。




1．7.5Y R3/4　暗褐　5㎝大のローム ブロックを多く含む
2．7.5Y R3/3　暗褐　1㎝大のローム ブロックを多く含む
3．7.5Y R3/3　暗褐　ローム含有量が少ない
4．7.5Y R3/3　明褐　焼土粒を多く含む
5．7.5Y R3/3　暗褐　3㎝大のローム ブロックを多く含む
6．7.5Y R3/3　暗褐　3層よりローム含有量が少ない
7．7.5Y R4/6　褐　ローム崩壊土・炭化粒を多く含む
8．7.5Y R3/2　黒褐　5㎜大のローム ブロックを多く含む
9．7.5Y R4/4　暗褐　1㎝大のローム ブロックを多く含む

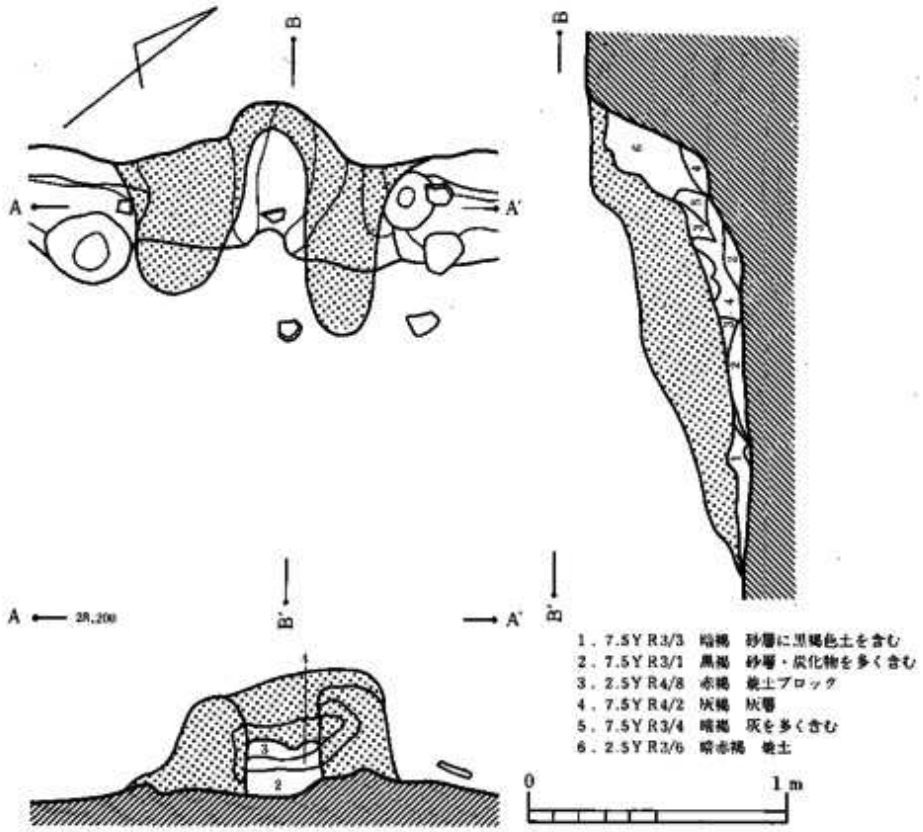
0　2m

**第73図　第37・38号住居跡実測図**

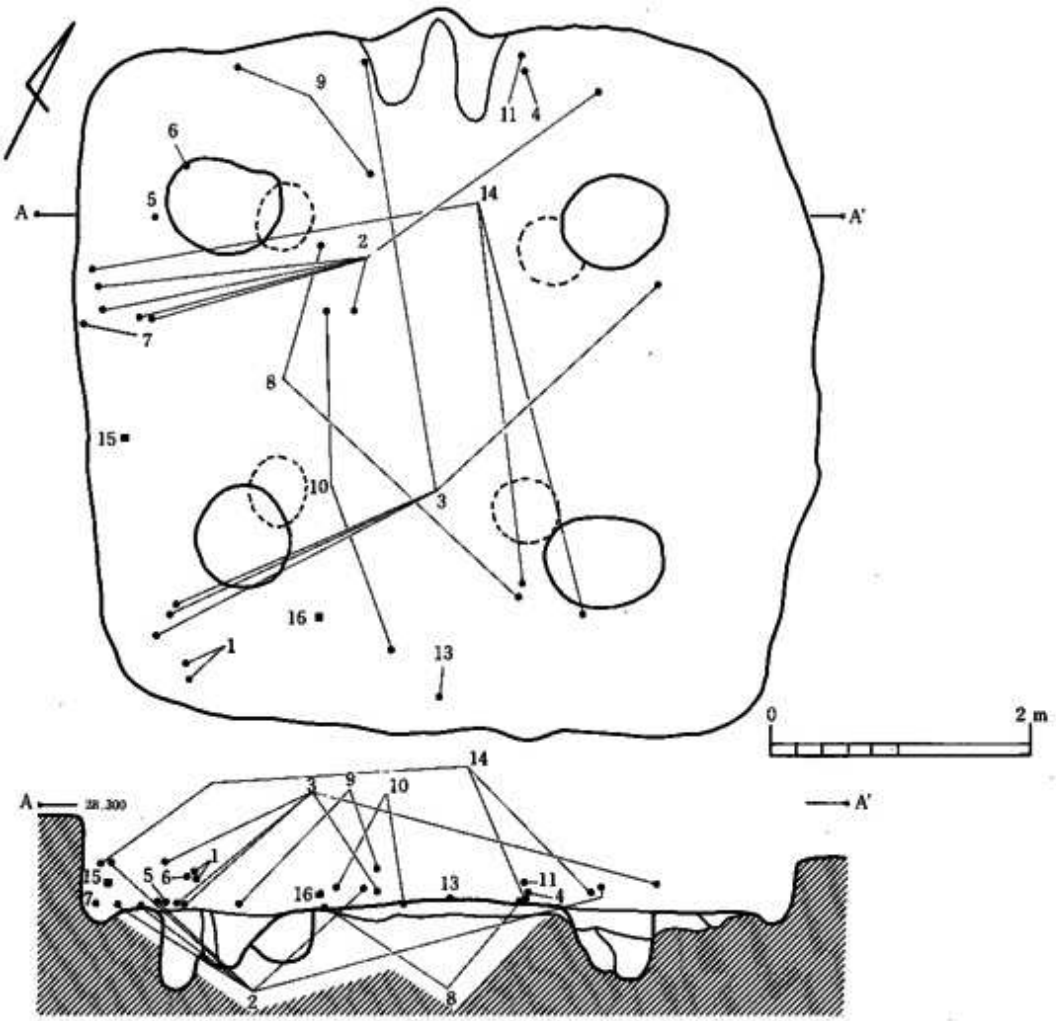
第37号住居跡は、規模5.7m×5.7mの方形を呈し、主軸をN－15°－Wにとる。壁高は60cmで、幅20cm、深さ5cmの周溝がカマド下を除いて全周する。床面はハードローム面に貼り床をしており、柱穴は径50cm、深さ50cmのものが4本の他に、径30cm、深さ20cmの第5ピットがみられる。間仕切りは3本みられ、これに伴うと思われる小ピットも検出されており、北東部はこの残欠と思われる。カマドは北辺中央部に設置されており、主軸長1.10mを測る。袖は幅40cmの砂質粘土で構築されており、両脇には深さ20cmのピットがみられる。カマド周辺からはNo.4とNo.11の土器が出土しているに過ぎない。

遺構内からは甕5点・坏5点・蓋3点・短頸瓶1点が出土しているが、このうち床面周辺から出土しているのは、No.5・No.7・No.13の土器である。No.15は軽石、No.16は砥石である。

第38号住居跡は4本の柱穴と内側の周溝の残欠により構成され、規模は5.0m×4.4mの方形を呈するものと思われる。西辺は第37号住居跡と共有するが、東辺は明確に内側を幅20cmの周溝が巡る。径50cm、深さ60cmの柱穴が4本みられる他、南東部には間仕切りがみられる。カマドは北側に火床部の残欠と思われる焼土を残すのみである。遺構に伴うと思われる遺物の出土はみられない。

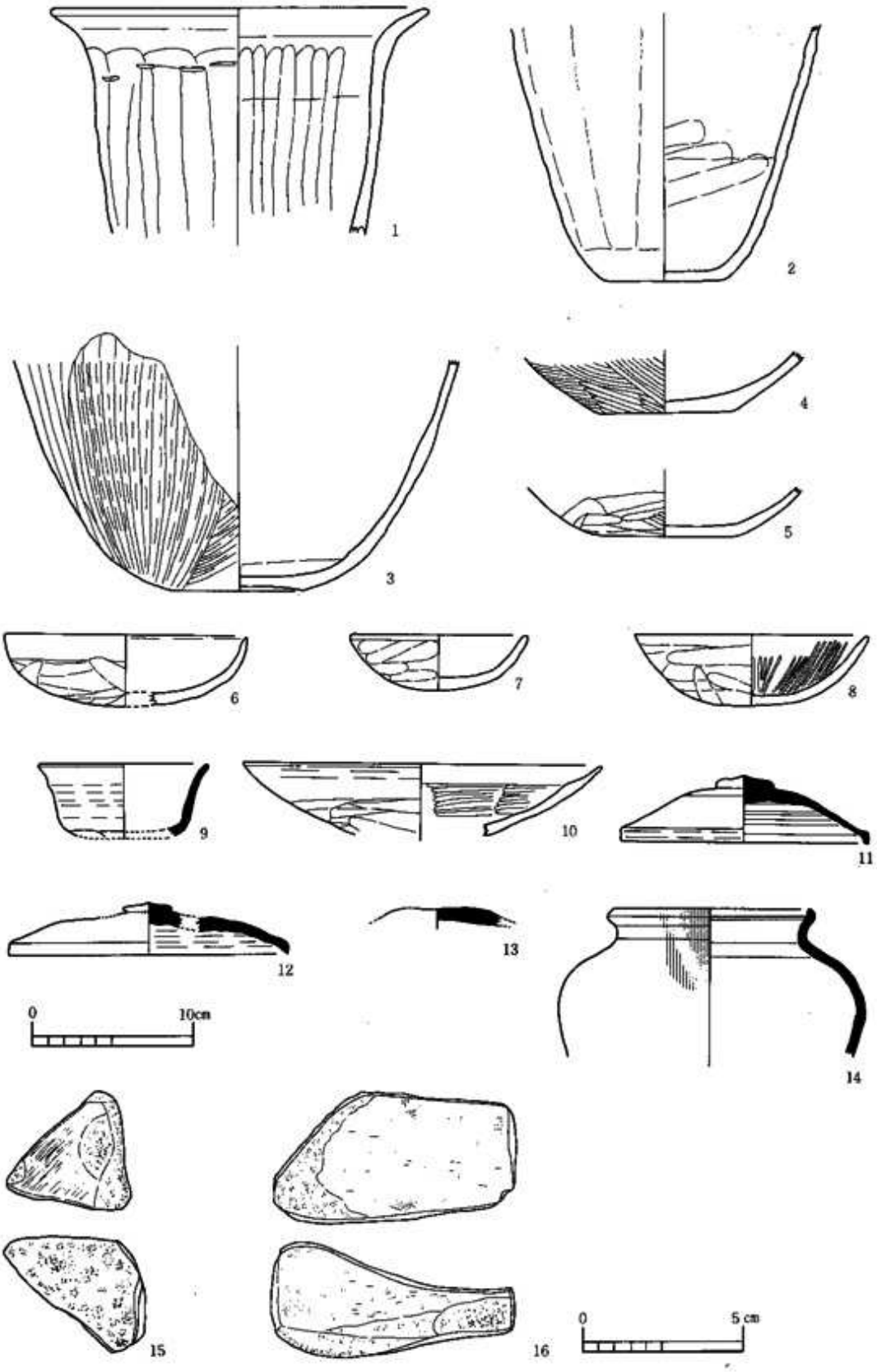



**第74図　第37号住居跡カマド実測図**




**第75図　第37・38号住居跡遺物分布図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>甕 | 口径(22.5) | 最大径を口縁部に持ち、胴部は直線的。外面は縦のヘラ削り。内面は縦のヘラ磨き。 | 微粒の鉱物粒を多く含み若干砂質 | 良好 | 5YR<br>6/8<br>橙 | 胴部上半1/3残存 |
| 2 | 土師器<br>甕 | 底径 7.4 | 外面は縦のヘラ削り。内面は斜位のヘラ削り。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み粗い | やや不良 | 2.5YR<br>3/6<br>明赤褐 | 胴部下半残存 |
| 3 | 土師器<br>甕 | 底径 8.0 | 胴部は細かいヘラ削り。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み砂質 | 良好 | 2.5YR<br>5/8<br>明赤褐 | 底部本葉痕<br>体部下半1/4残存 |
| 4<br>PL-42 | 土師器<br>甕 | 底径 8.2 | 胴部は細かいヘラ削り。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み砂質 | 良好 | 5YR<br>3/3<br>暗赤褐 | |




**第76図　第37号住居跡遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | 土師器<br>甕 | 底径 8.0 | 胴部は細かいヘラ削り。 | 微粒の長石粒・金雲母を多く含む | 良好 | 5YR<br>6/8<br>橙 | 底部のみ |
| 6<br>PL-41 | 土師器<br>坏 | 口径(14.8)<br>器高 4.3 | 丸底の底部より内彎気味に立ち上り、口唇部は尖がる。外面は横のヘラ磨き。内面は磨き後、横なで。 | 大粒の長石粒・石英粒を多く含む | 良好 | YR<br>6/8<br>明黄褐 | 体部1/3残存 |
| 7<br>PL-41 | 土師器<br>坏 | 口径 11.0<br>器高 3.5 | 丸底の底部より彎曲して立ち上り、口縁部に至る。外面は横のヘラ磨き。内面は磨き。 | 微粒の金雲母を若干含むも緻密 | 良好 | 7.5YR<br>7/4<br>橙 | 口縁部1/2欠損 |
| 8<br>PL-41 | 土師器<br>坏 | 口径(10.4)<br>器高 4.5 | 半球状の体部から口縁部に至る。外面は横および斜のヘラ磨き。内面に暗文。 | 大粒の長石粒・石英粒を含み粗い | 良好 | 7.5YR<br>6/8<br>橙 | 完形 |
| 9<br>PL-42 | 須恵器<br>坏 | 口径(10.4)<br>器高 4.7<br>底径( 7.8) | 底部より直線的に立ち上り、口縁部は小さく外反する。 | 大粒の長石粒を多く含み粗い | 良好 | 10YR<br>6/1<br>褐灰 | 体部1/2残存 |
| 10 | 土師器<br>皿 | 口径(22.0) | 直線的に大きく開く。外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラ磨き。 | 微粒の鉱物粒を多く含み砂質 | 良好 | 7.5Y<br>4/2<br>灰オリーブ | 体部1/2残存 |
| 11<br>PL-42 | 須恵器<br>蓋 | 口径(10.4)<br>器高 4.1 | 丸味をもつ天井部より直線的に口縁に至り、口縁部は屈曲して直立する。 | 鉱物粒をほとんど含まず緻密 | 良好 | N<br>6/1<br>灰 | 体部2/3残存 |
| 12 | 須恵器<br>蓋 | 口径(17.2)<br>器高 3.2 | 低い天井部より直線的に口縁に至る。口縁部は屈曲して直立し、口唇が尖がる。 | 緻密 | 良好 | 10YR<br>6/1<br>褐灰 | 体部1/6残存 |
| 13 | 須恵器<br>蓋 | | 扁平な天井部。 | 雲母を若干含むのみ | 良好 | 5YR<br>6/8<br>橙 | 体部残存 |
| 14 | 須恵器<br>短頸壺 | 口径(12.0) | 胴部上位が張り出し、頸部は緩やかに屈曲し、口唇部は「く」字状に内傾する。 | 黒雲母を若干含むも緻密 | 良好 | 10YR<br>6/8<br>明黄褐 | 胴部上半1/5残存<br>外面一部に自然釉 |

**第39号住居跡・第40号住居跡**（第77図～第81図）

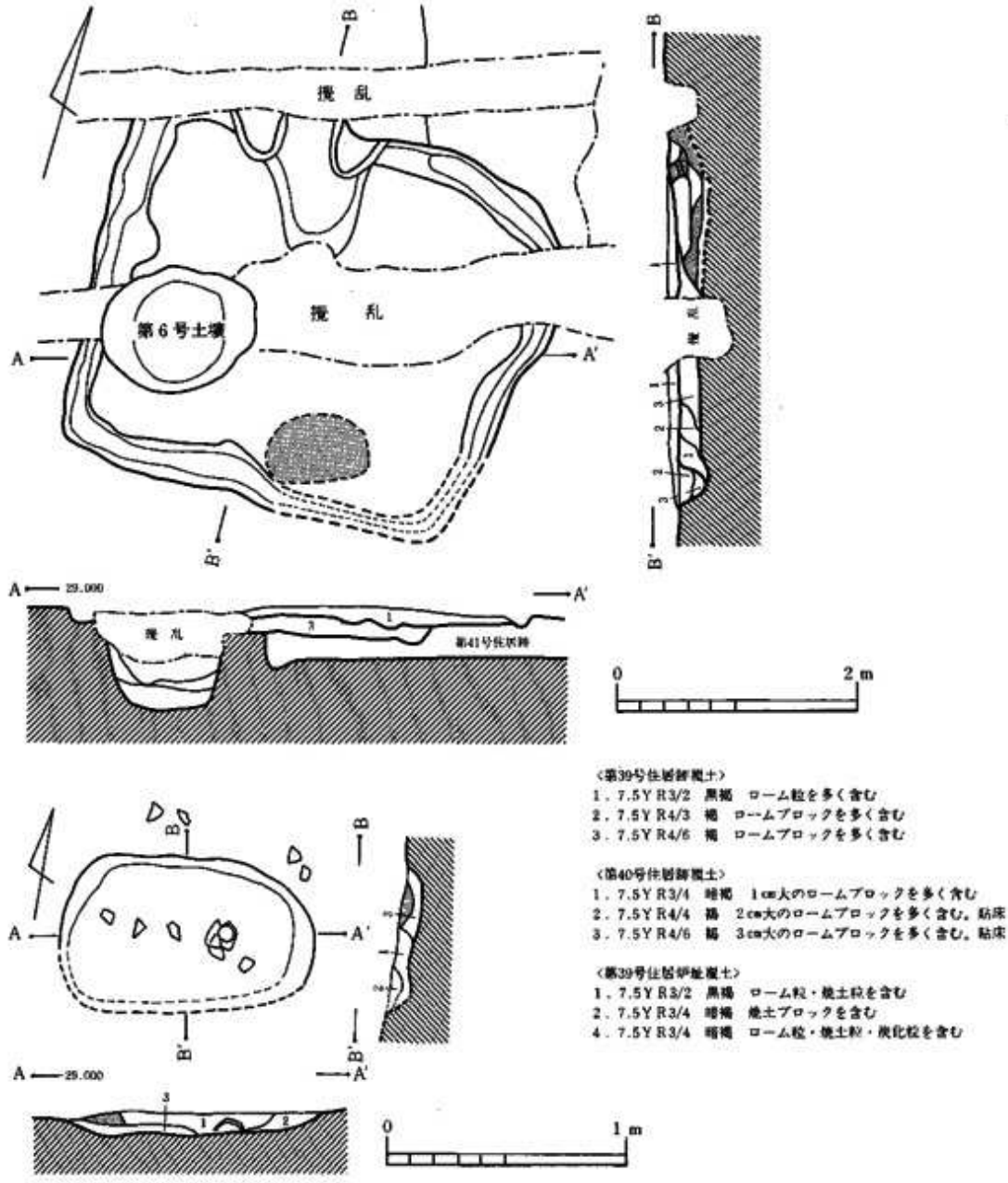
4C－dグリッドより検出され、第39号住居跡は第40号住居跡の覆土内に貼り床を形成して構築しており、北側と中央部に撹乱を受けている。

第39号住居跡は規模3.6m×3.2mの方形を呈し、主軸はN－14°－Eをとる。掘り込みはほとんどみられず、幅30cm、深さ5cmの周溝がカマド下を除いて全周する。柱穴はなく、南側に1.05m×0.65mの焼土を伴うが、焼土の堆積が薄く底面はほとんど焼成を受けていない。

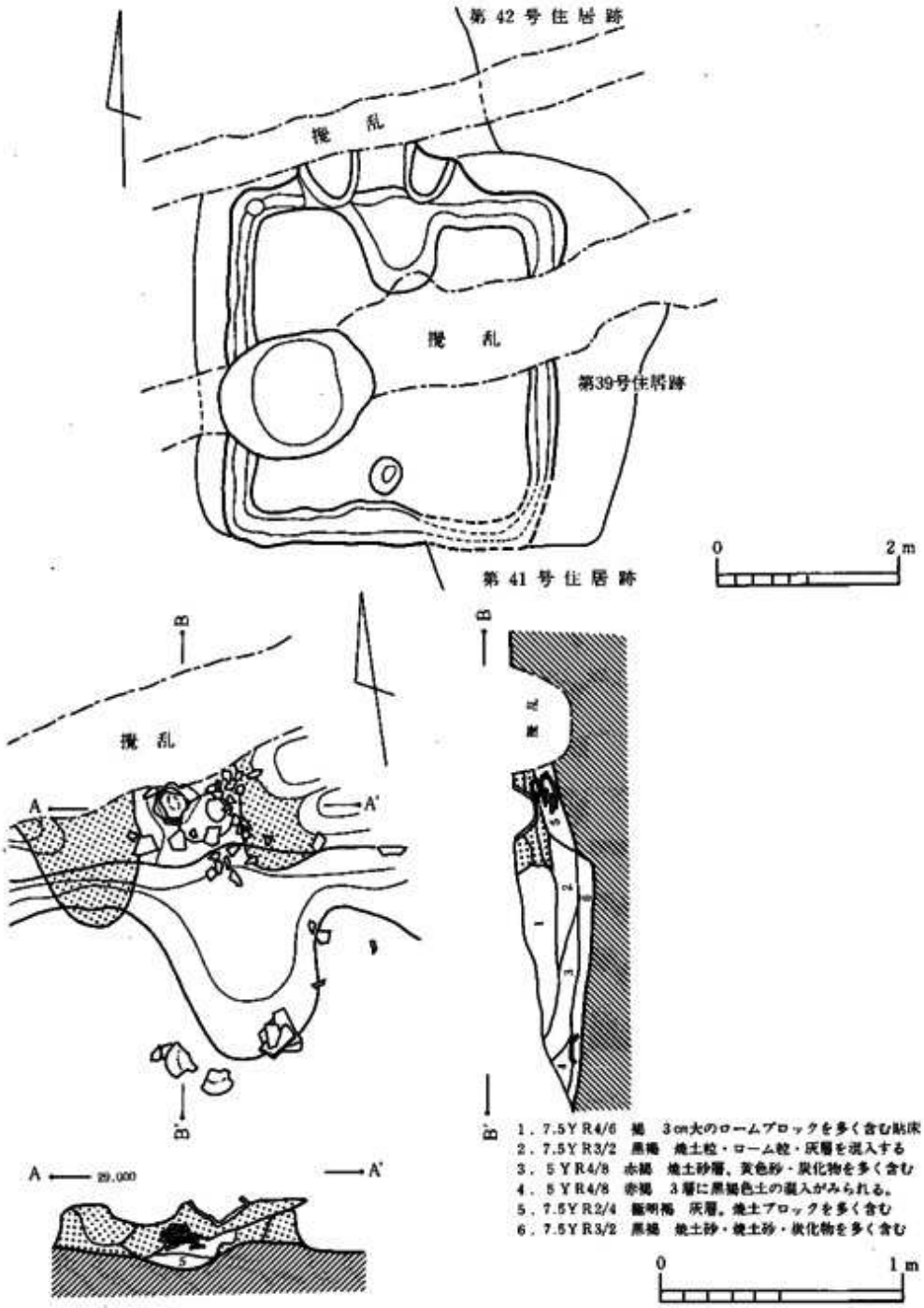
遺物は鉢1点・坏4点の計5点が出土しており、No.3とNo.5は南側の焼土から出土している。

No.2の坏の体部には「仁」の墨書が行われている。

第40号住居跡は、規模が2.9m×2.2mの方形を呈し、主軸をN－10°－Eにとる。壁高は10cmで、幅20cm、深さ15cmの周溝が第39号住居跡の内側を全周する。東側で第41号住居跡・第42号住居跡と重復するが、本住居跡の方が新しい。床面は第41号住居跡内に貼り床を一部形成し、西側はハードローム面を利用している。柱穴は南側に径15cm、深さ20cmのものが1本みられる



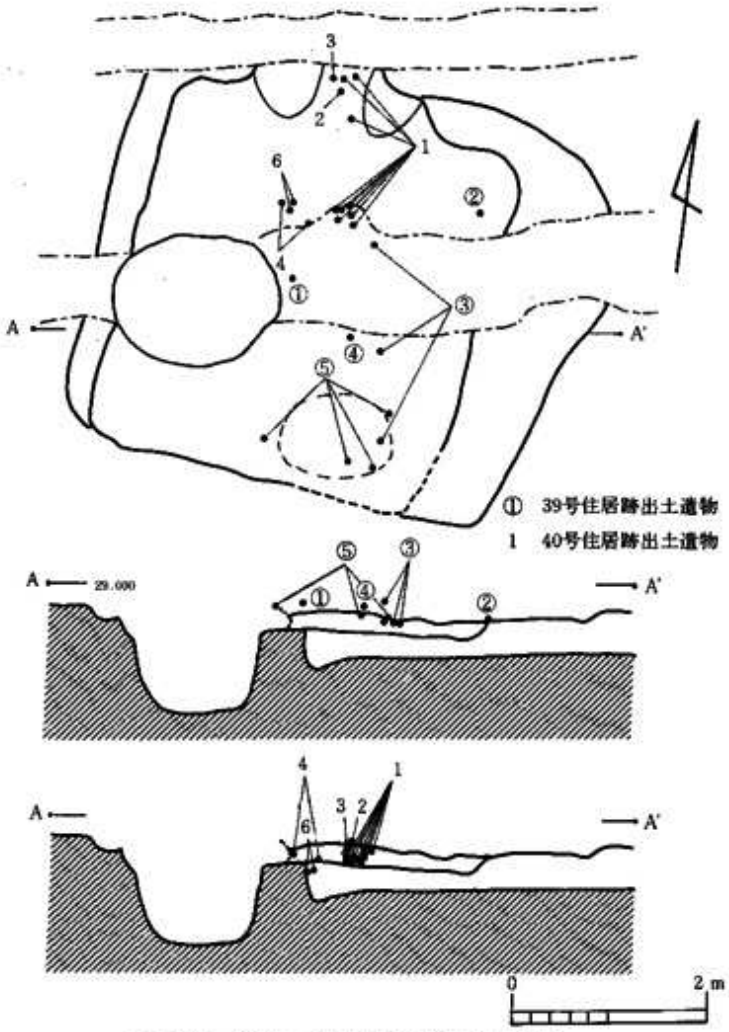

**第77図　第39号住居跡と炉実測図**



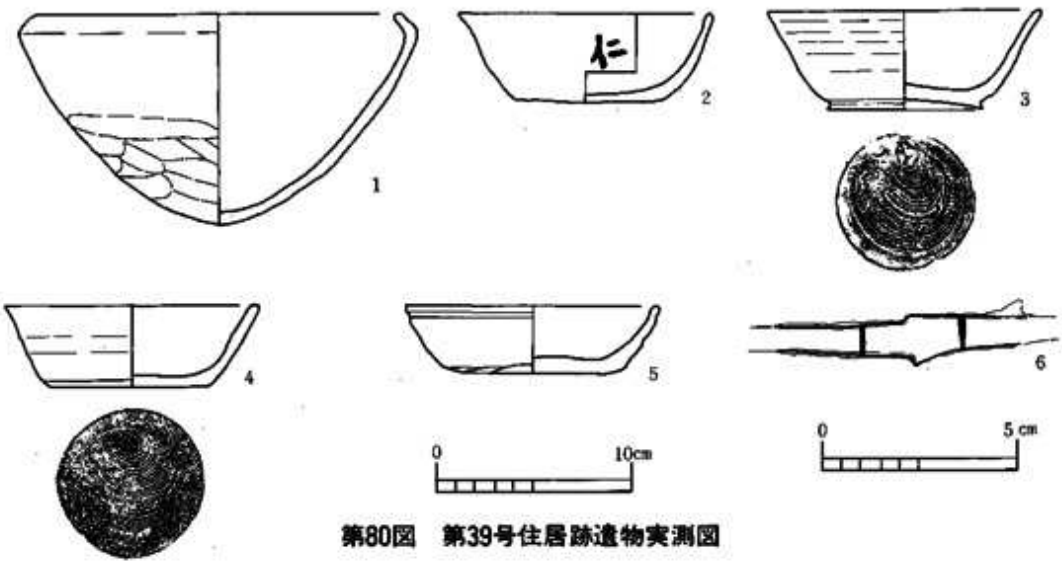

**第78図　第40号住居跡とカマド実測図**

のみである。カマドは北辺に設置されており、奥壁は撹乱により破壊されている。規模は不明であるが、天井部崩壊土の砂質粘土を切って第39号住居跡の貼り床が形成されており、その貼り床下からは灰層と焼土砂層が検出されている。支脚は、No.3の坏を伏せて更にNo.1の土器片で補強して代用しており、その上にNo.2の甕の底部が乗っていた。

遺物は甕2点・坏3点の計5点が出土しているが、カマド以外からはNo.4とNo.5の坏がカマド前面から出土している。

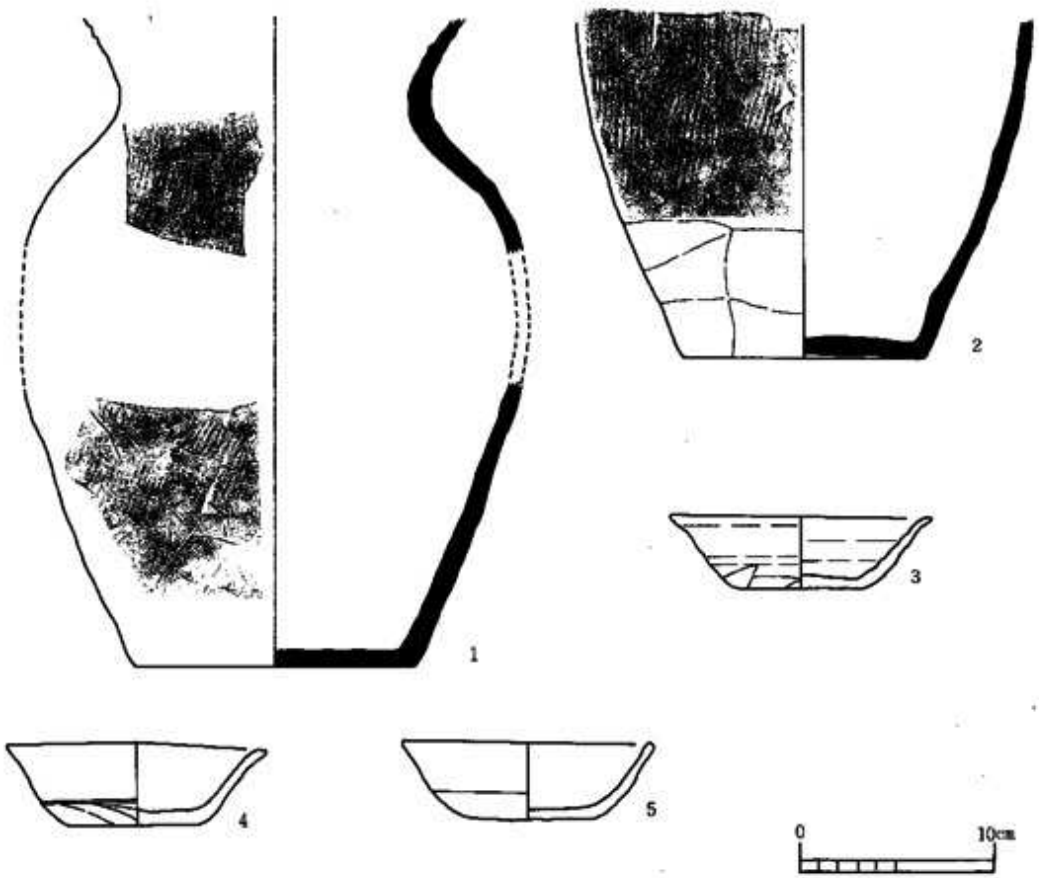



第79図　第39・40号住居跡遺物分布図




第80図　第39号住居跡遺物実測図

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL- 42 | 土師器<br>鉢 | 口径 18.0<br>器高 10.6 | 尖底の底部より大きく開き、口縁部は「く」字状に内傾する。胴部下半は横のヘラ削り。 | 細かい石英粒・長石粒を含み粗い | 良好 | 7.5YR<br>3/3<br>暗褐 | 胴部2/3残存 |
| 2<br>PL- 42 | 土師器<br>坏 | 口径 12.8<br>器高 4.5<br>底径 7.2 | 底部より内弯気味に立ち上り口縁部に至る。底部は全面手持ちヘラ整形。 | 細かい石英粒・長石粒を含み砂質 | 良好 | 10YR<br>5/8<br>黄褐 | 完形<br>体部「仁」墨書 |
| 3<br>PL- 42 | 土師器<br>坏 | 口径 13.8<br>器高 5.0<br>底径 7.8 | 上底状の底部から直線的に立ち上り口縁部に至る。底部回転糸切り。 | 細かい鉱物粒を多く含むも緻密 | 良好 | 10YR<br>5/8<br>黄褐 | |
| 4<br>PL- 42 | 土師器<br>坏 | 口径(12.8)<br>器高 4.2<br>底径 8.0 | 底部より直線的に立ち上り、口縁部に至る。底部は回転糸切り後外周部回転ヘラ調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み粗い | 良好 | 7.5YR<br>3/3<br>暗褐 | 体部2/3残存 |
| 5<br>PL- 42 | 土師器<br>坏 | 口径(12.8)<br>器高 3.5<br>底径 7.0 | 底部より内弯気味に立ち上り口縁部に至る。体部下端は手持ちヘラ削り。底部は全面手持ちヘラ調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み粗い | 良好 | 10YR<br>2/2<br>黒褐 | 体部1/2残存<br>底部「メ」刻書 |

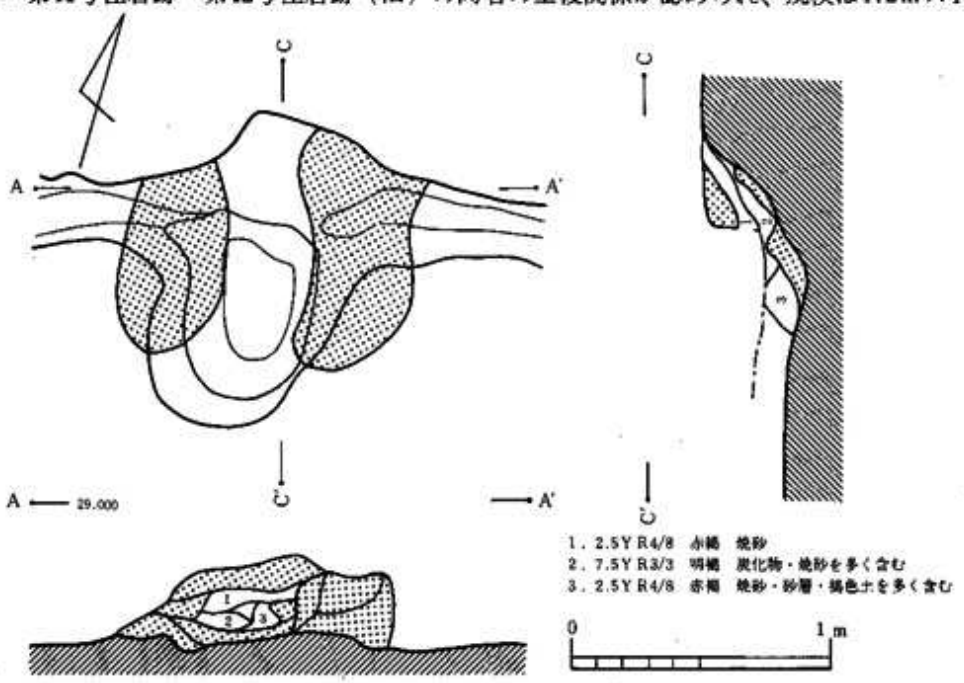



第81図　第40号住居跡遺物実測図

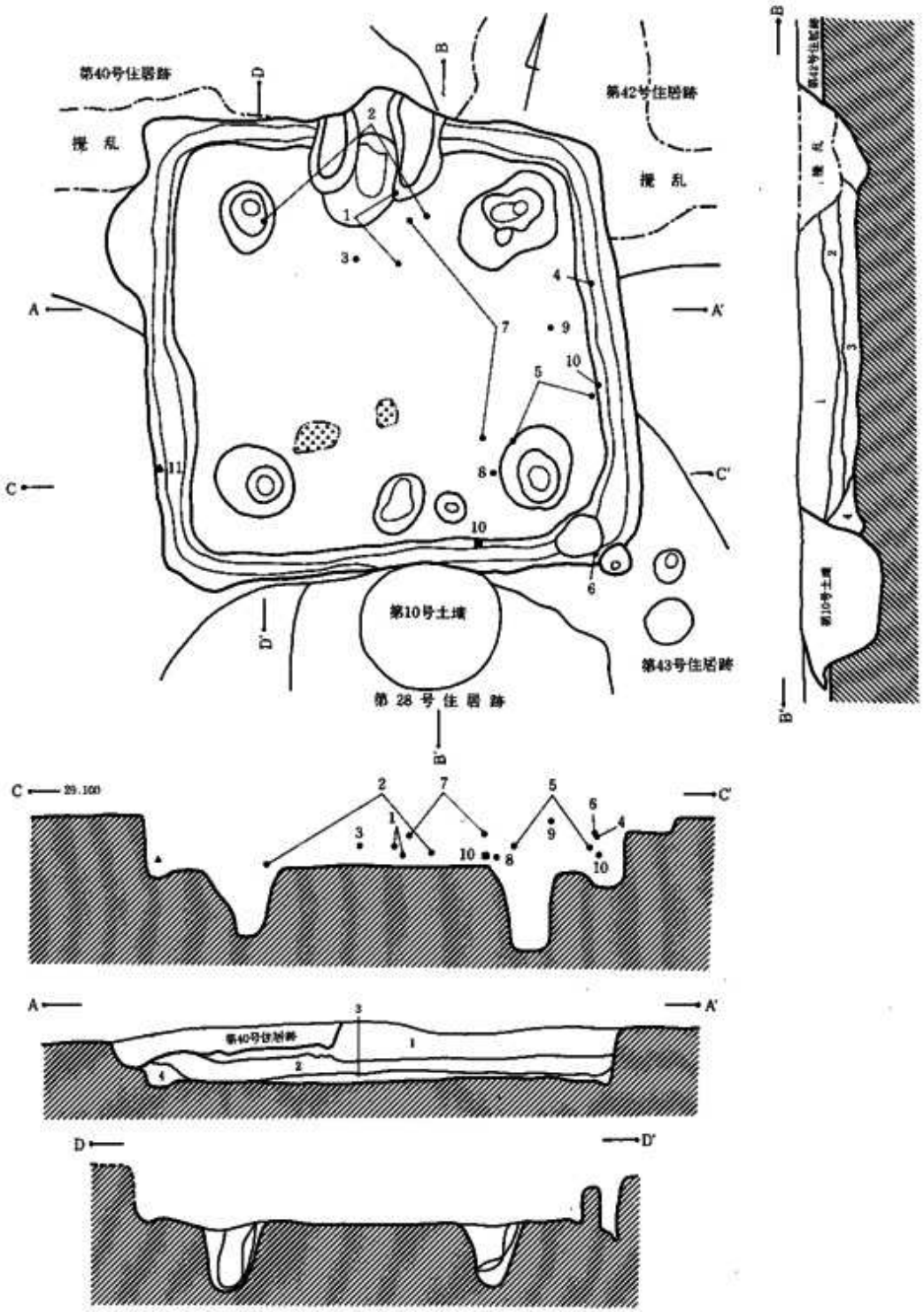
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 須恵器<br>甕 | 底径 14.4 | 最大径を上半に持ち、頸部は「く」字状に屈曲する。外面にタタキ。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み粗い | 良好 | 2.5Y R<br>5/8<br>赤褐 | 胴部1/3残存 |
| 2 | 須恵器<br>甕 | 底径 12.4 | 外面タタキ。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み粗い | 良好 | 2.5Y R<br>5/8<br>赤褐 | 胴部下半残存 |
| 3<br>PL- 42 | 須恵器<br>坏 | 口径 13.2<br>器高 3.8<br>底径 6.4 | 底部から直線的に立ち上り、口唇は小さく開く。体部下端は手持ちヘラ削り。底部は回転ヘラ切り後全面手持ちヘラ調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み粗い | 良好 | 10Y R<br>5/8<br>黄褐 | 完形<br>歪みが著しい |
| 4<br>PL- 42 | 須恵器<br>坏 | 口径 13.0<br>器高 4.2<br>底径 6.5 | 底部から直線的に立ち上り、口唇は小さく開く。底部回転ヘラ切り後全面手持ちヘラ調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み粗い | 良好 | 5 B<br>5/1<br>灰青 | 体部2/3残存 |
| 5<br>PL- 42 | 土師器<br>坏 | 口径 12.8<br>器高 4.0<br>底径 6.8 | 丸底気味の底部から緩く立ち上り口縁部に至る。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転ヘラ切り後全面回転ヘラ調整。 | 微粒の金雲母を多く含みやや砂質 | やや不良 | 7.5Y R<br>3/3<br>暗褐 | 完形 |

**第41号住居跡**（第83図・第84図）

第23号住居跡(新)→第41号住居跡→第43号住居跡（旧）と、第39号住居跡（新）→第40号住居跡→第41号住居跡→第42号住居跡（旧）の両者の重複関係が認められ、規模は4.2m×4.0m



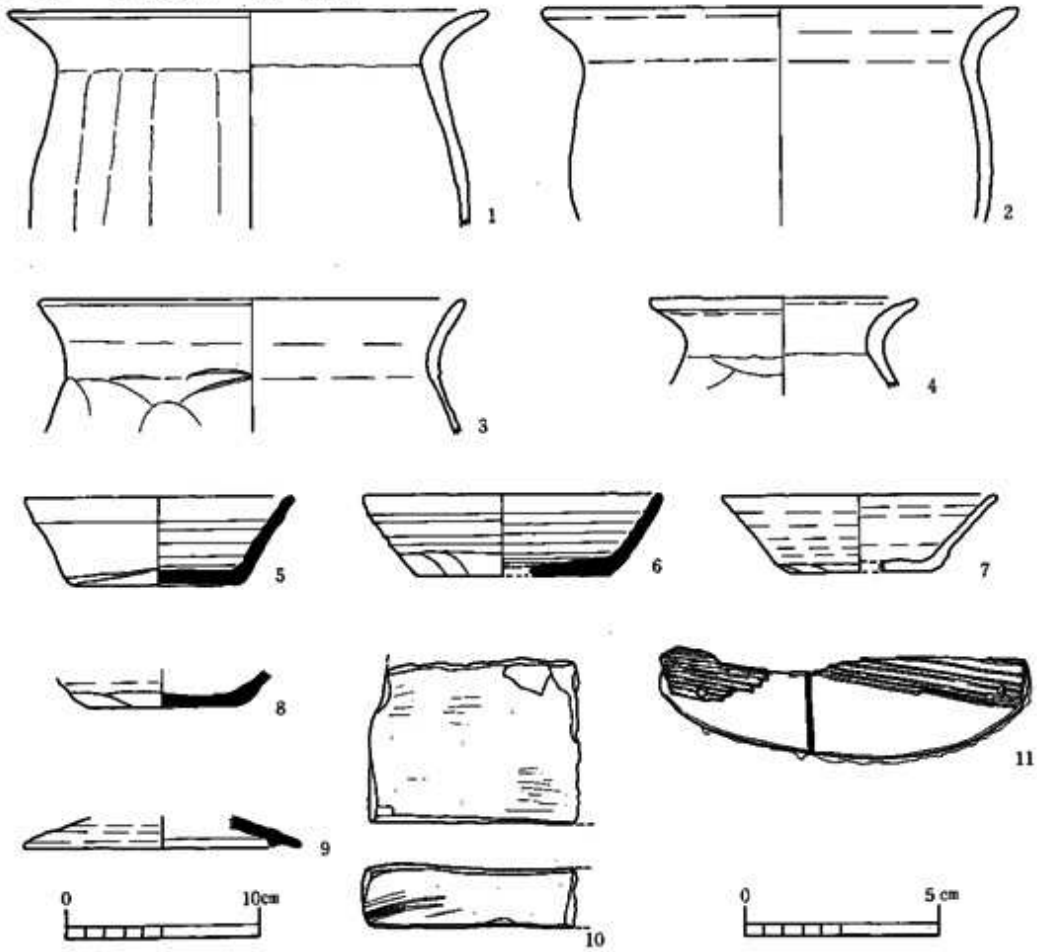

**第82図　第41号住居跡カマド実測図**




**第83図　第41号住居跡実測図**

の方形を呈し、主軸はN－17°－Wをとる。壁高は48cmを測り、幅20cm、深さ10cmの周溝がカマド下を除いて全周する。床面はハードローム面を利用した堅固なもので、径50～70cm、深さ50～70cmの柱穴が4本みられる他、径50cm、深さ20cmの第5ピットがみられる。カマドは北辺中央部に設置されているが、上面は攪乱により削り取られている。主軸長1.2m、幅1.05mで、袖は幅40cmの砂質粘土で構築され、火床面は焼成をうけている。

遺構内からは甕4点・坏4点・蓋1点の他に砥石1点・手鎌1点が出土しており、覆土内にはキサゴを主体とした貝の小ブロックが検出された。No.11の手鎌は全長9.5cm、幅1.8cm、厚さ0.2cmで木質部を一部に残す。




**第84図　第41号住居跡遺物実測図**

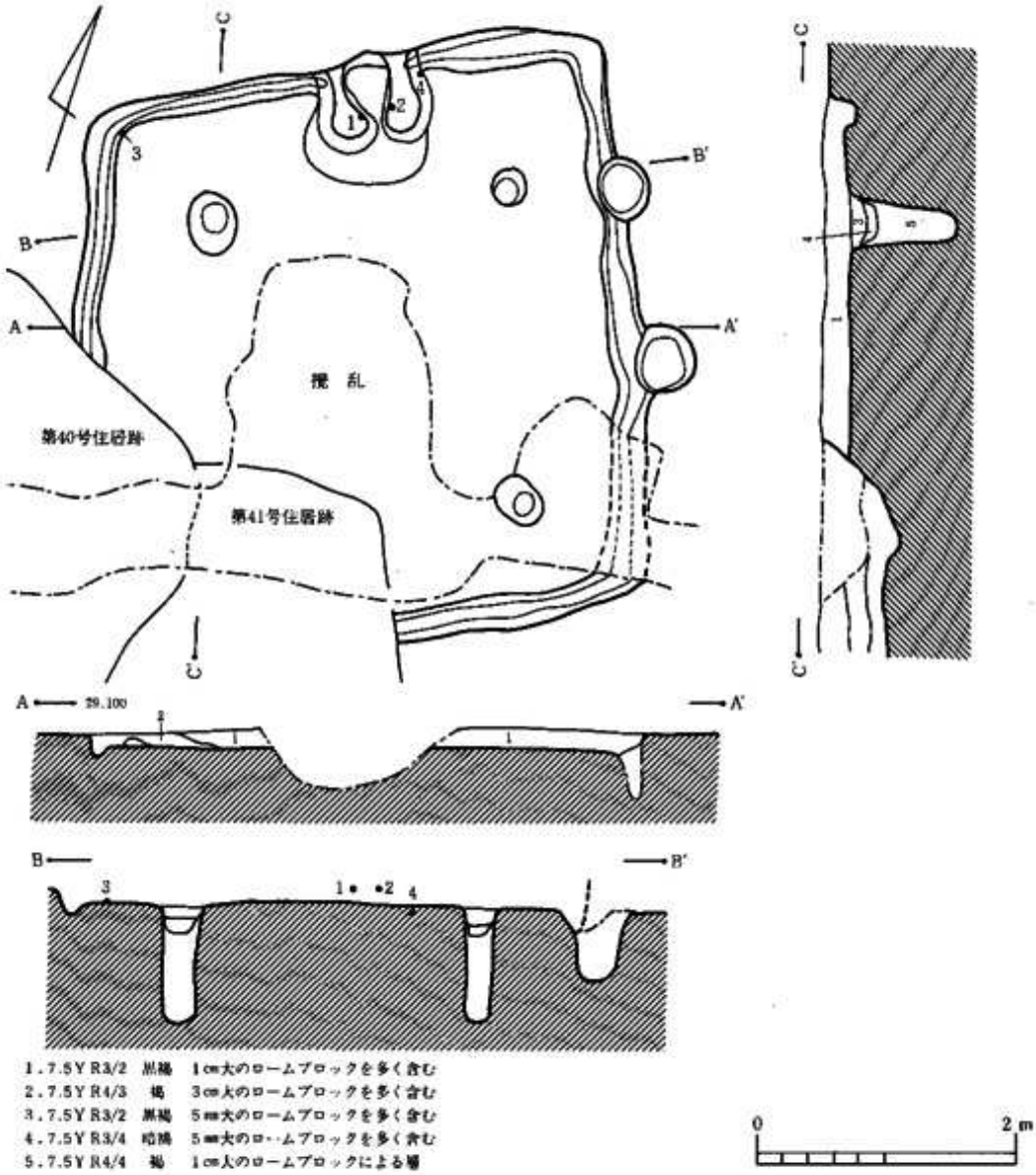
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>甕 | 口径(25.0) | 最大径を口縁部にとり、頸部は「く」字状に屈曲する。体部上半は縦ヘラ削り。 | 細かい石英粒・長石粒を含み粗い | 良好 | 7.5YR<br>5/6<br>明褐 | 胴部上半1/3残存 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 土師器<br>甕 | 口径(25.0) | 最大径を口縁部にとり、頸部は「く」字状に屈曲する。体部上半は縦ヘラ削り。 | 細かい石英粒・長石粒を含み粗い | 良好 | 10YR<br>5/8<br>黄褐 | 胴部上半1/3残存 |
| 3 | 土師器<br>甕 | 口径(21.8) | 「く」字状に屈曲する頸部から口縁部に至る。外面は斜位のヘラ削り。 | 細かい石英粒・長石粒を含み粗い | 良好 | 7.5YR<br>4/6<br>赤褐 | 胴部上半1/3残存 |
| 4 | 土師器<br>甕 | 口径(13.6) | 「く」字状に屈曲する頸部から口縁部に至る。外面は斜位のヘラ削り。 | 細かい石英粒・長石粒を含み粗い | 良好 | 2.5YR<br>5/8<br>明赤褐 | 胴部上半1/4残存 |
| 5 | 須恵器<br>坏 | 口径(13.6)<br>器高 4.5<br>底径 8.8 | 底部から直線的に口縁部に至る。体部下端手持ちヘラ削り底部回転ヘラ切り後全面手持ちヘラ調整。 | 金雲母を多く含む | 良好 | 2.5YR<br>7/2<br>灰黄 | 口縁1/2欠損 |
| 6 | 須恵器<br>坏 | 口径(14.0)<br>器高 4.1<br>底径 4.8 | 底部から直線的に口縁部に至る。体部下端は手持ちヘラ削り。底部は手持ちヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含む | 良好 | N<br>6/1<br>灰 | 体部1/6残存 |
| 7 | 土師器<br>坏 | 口径(14.0)<br>器高 3.9<br>底径 7.2 | 底部から直線的に口縁部に至る。体部下端は手持ちヘラ削り。底部全面手持ちヘラ調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み粗い | 良好 | 2.5Y<br>5/2<br>暗灰黄 | 体部1/2残存 |
| 8 | 須恵器<br>坏 | 底径 8.0 | 体部下端は手持ちヘラ削り。 | 白色微砂粒・金雲母を多く含む | 良好 | 5PB<br>4/1<br>暗青灰 | 底部のみ |
| 9 | 須恵器<br>蓋 | 口径 14.0 | 外面に自然釉。 | 緻密 | 良好 | 10YR<br>6/2<br>灰黄褐 | 体部1/6残存 |

**第42号住居跡**（第85図・第86図）

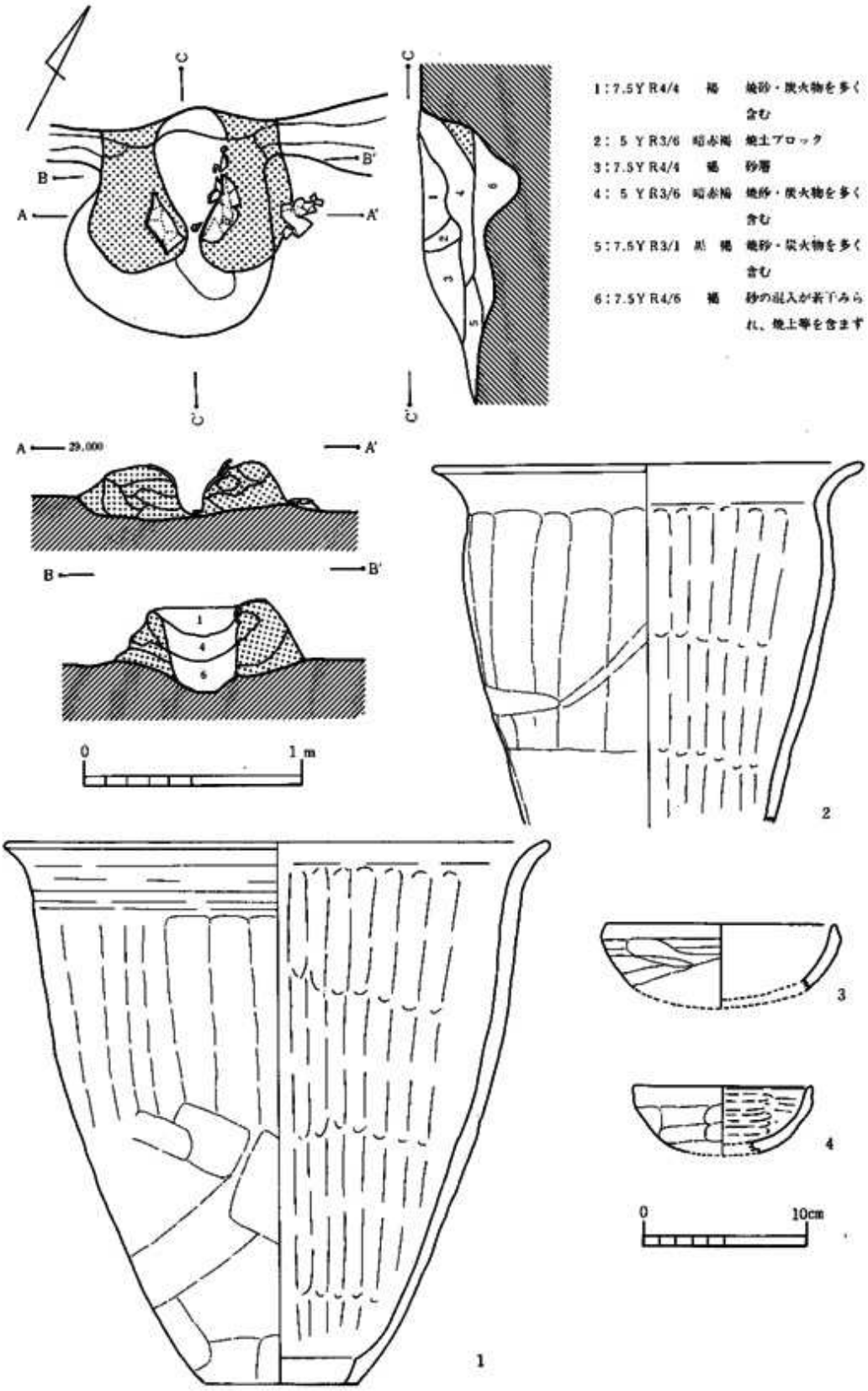
第41号住居跡の北側に位置し、規模は4.6m×4.0mの方形を呈し、主軸はN－10°－Wをとる。壁高は15cmを測り、幅15cm、深さ10cmの周溝がカマド下を除いて全周する。中央部は撹乱により、南側は第41号住居跡により削られており、床面はハードローム面を利用している。柱穴は径35cm、深さ90cmのものが3本みられ、他の1本は撹乱により壊されている。カマドは北辺中央部に設置され、主軸長0.8m、幅0.9mで、袖は幅30cmの砂質粘土により構築されており、火床面はあまり焼成をうけていない。左袖からNo.1の土器が、右袖からNo.2の土器が内側に張り付いて出土した他、No.4の坏が右袖脇から出土した。

遺構内からは他にNo.3の坏が北西コーナー付近より出土している。




**第85図　第42号住居跡実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>甕 | 口径(34.0)<br>器高 32.5<br>底径 9.2 | 胴部は緩く膨らみ口縁部は小さく外反する。胴部上半は縦・下半は斜位のヘラ削り。内面は縦のヘラ磨き。 | 細かい鉱物粒を多く含むも緻密 | 良好 | 10YR<br>5/8<br>黄褐 | 胴部1/2残存 |
| 2 | 土師器<br>甕 | 口径(26.0) | 胴部は緩く膨らみ口縁部は小さく外反する。胴部下半は縦・下半は横のヘラ削り。内面は縦のヘラ磨き | 細かい鉱物粒を多く含むも緻密 | 良好 | 7.5YR<br>4/3<br>褐 | 胴部1/3残存 |




**第86図　第42号住居跡カマドと遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | 土師器<br>坏 | 口径(14.0)<br>器高( 5.0) | 半球状の体部なし、口縁は尖がる。外面横のヘラ削りと磨き。内面磨き。 | 緻密 | 良好 | 10YR<br>5/8<br>黄褐 | 体部1/5残存 |
| 4 | 土師器<br>坏 | 口径(10.6)<br>器高( 4.3) | 半球状の体部なし、口縁部は段を持つ。外面横のヘラ削り。内面横なで後軽い磨き。 | 細かい鉱物粒を若干含むも緻密 | 良好 | 7.5YR<br>3/3<br>暗褐 | 体部1/3残存 |

**第43号住居跡**（第42図）

第23号住居跡と第42号住居跡により西側の大半を切られて規模等は不明であるが、方形を呈すると思われる。柱穴・カマド等の附属施設はみられない。　　（田中　英世）

**第44号住居跡**（第87図～第89図）

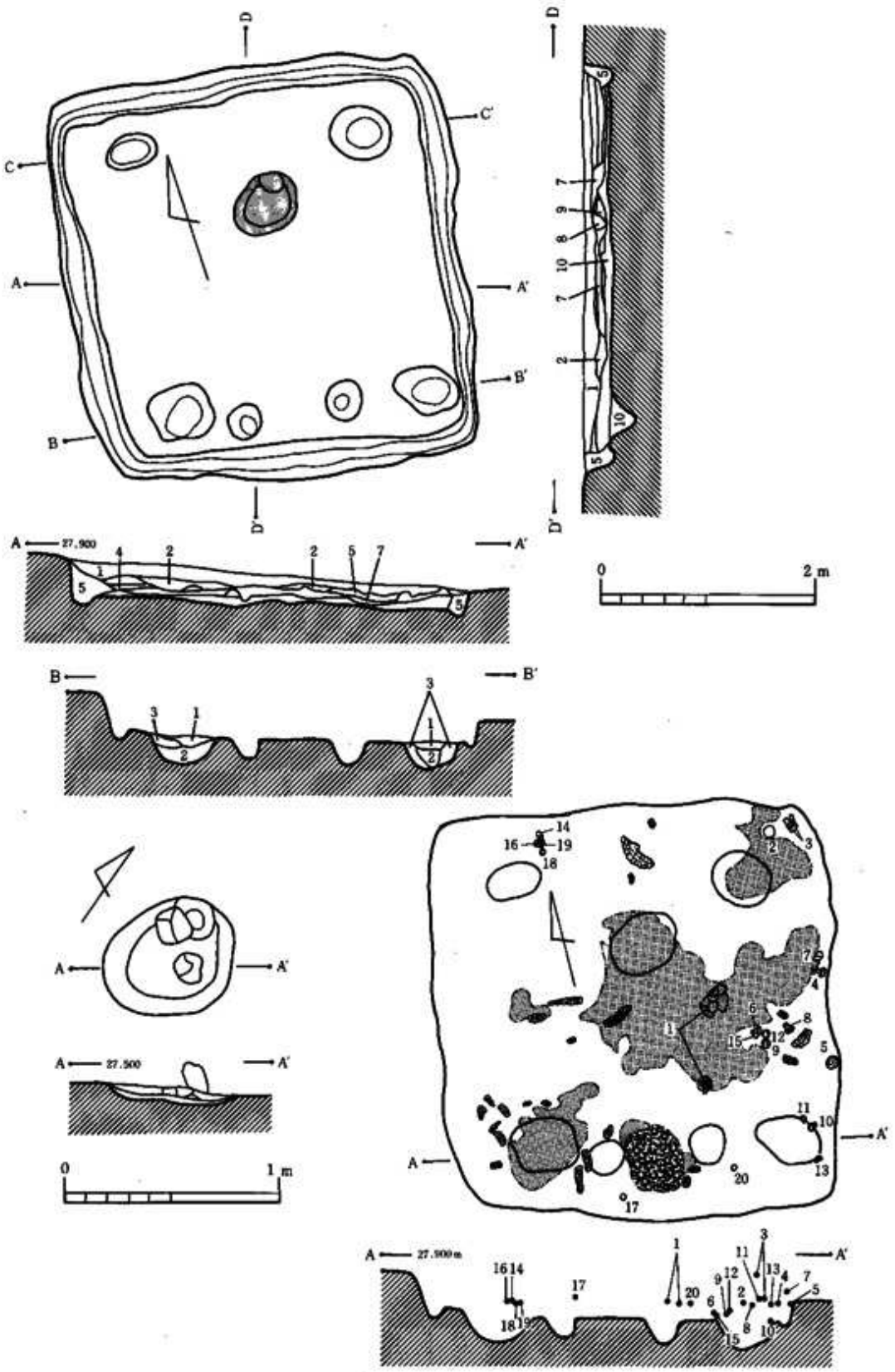
5G－bグリッドに位置する。規模は長軸3.8m、短軸3.7mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN－7°30′－Eである。壁高30cm。床は貼り床で、幅12cm、深さ6cmのU字形を呈する周溝が全周する。柱穴は4本で住居跡隅壁寄りのほぼ対角線上にあり、径30～40cm、深さ60cmを測る。間尺は東西が2.2m、南北が2.5mである。出入り口施設は南壁寄りの径30cm、深さ18cmの2基のピットが該当する。炉は主軸線上、北側の2基の柱穴の外側にあり、径60cm、深さ10cmを測る。底面は良く焼けており、土製支脚が5点出土した。内、2点は炉内から、3点は炉の付近から出土した。いずれも2次焼成を受けていた。

本住居跡は火災に遭ったもので、炭化材・焼土の分布が住居跡内のほぼ全域に亘り認められた。また、住居跡南側壁付近ではドングリ・アワ等を主体にした炭化穀類が多量に出土した。

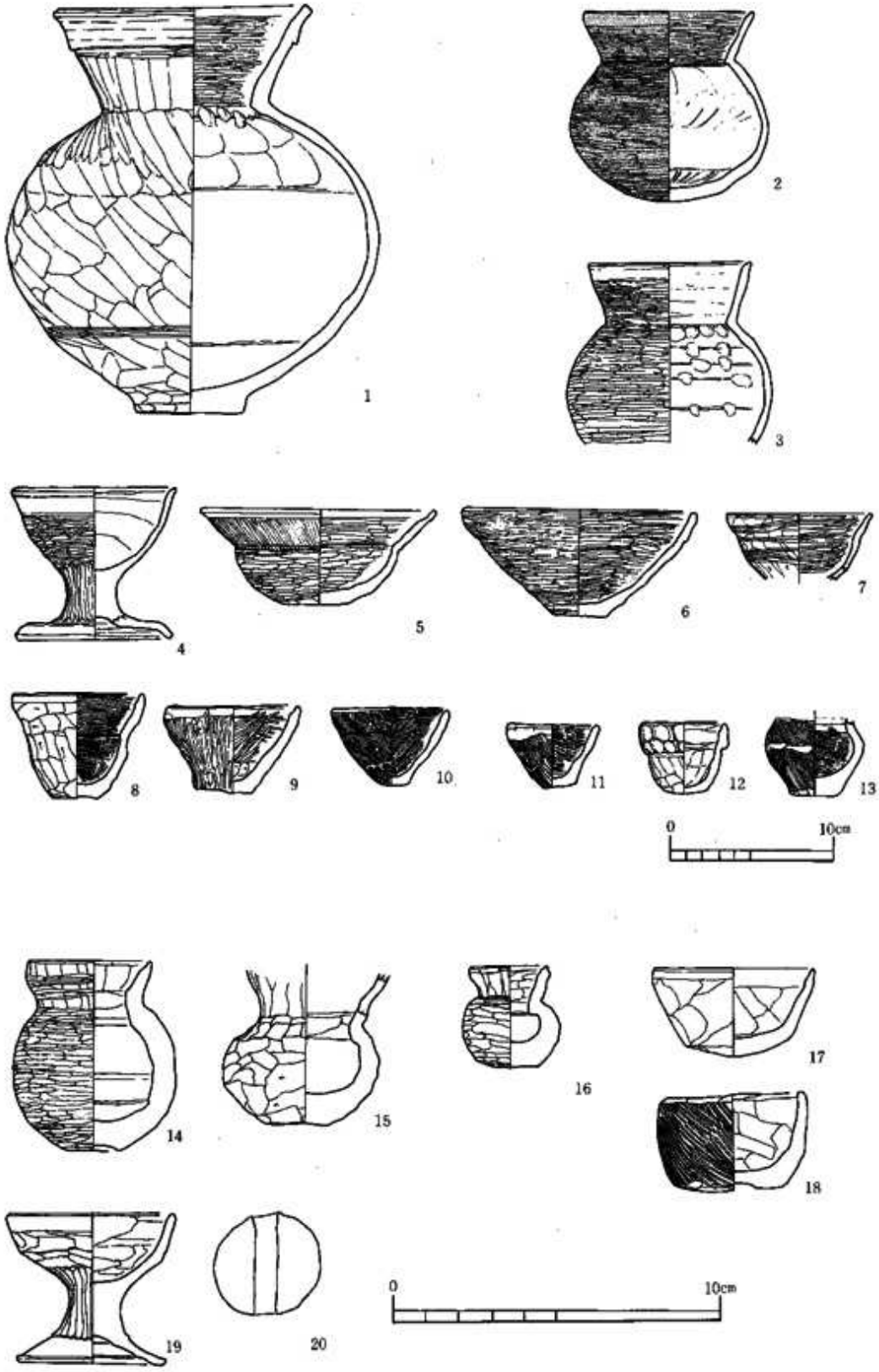
出土遺物は壺3点、高杯2点、鉢2点、椀8点、ミニュチュアの壺形土器4点、土玉1点があり、図示した1・2・4～6・8～20の土器が床面から検出された。

〈住居跡〉
1. 7.5YR 3/2　黒褐色　わずかに焼土含む。
2. 10YR 2/3　黒褐色　黒色土主体。
3. 10YR 3/3　暗褐色　ローム・焼土混合。
4. 10YR 2/2　黒褐色　焼土多い。
5. 10YR 4/4　黒褐色　ローム多い、焼土含む。
6. 2.5YR 5/6　明赤褐色　焼土純層。
7. 7.5YR 3/3　暗褐色　黒色土、炭主体。
8. 2.5YR 5/8　明赤褐色　焼土純層。
9. 7.5YR 2/1　黒　色　炭化材。
10. 10YR 5/4　黄褐色　ローム主体。

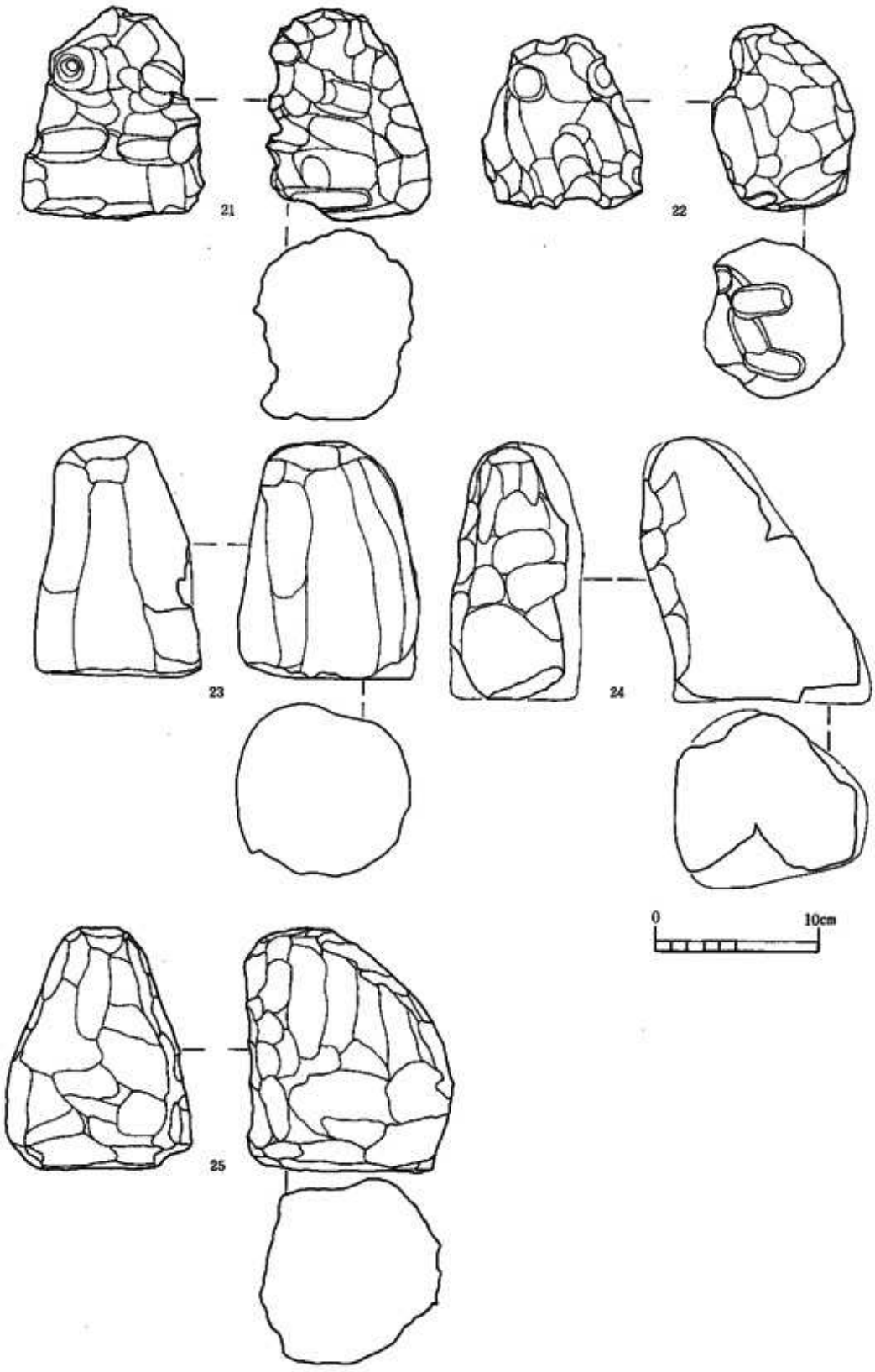
〈炉　跡〉
1. 2.5YR 5/6　明赤褐色　焼土主体。
2. 7.5YR 5/4　鈍い褐色　焼土・ローム。
3. 7.5YR 5/6　明褐色　地山。




**第87図　第44号住居跡と炉と遺物分布図**




**第88図　第44号住居跡遺物実測図(1)**




**第89図　第44号住居跡遺物実測図(2)**

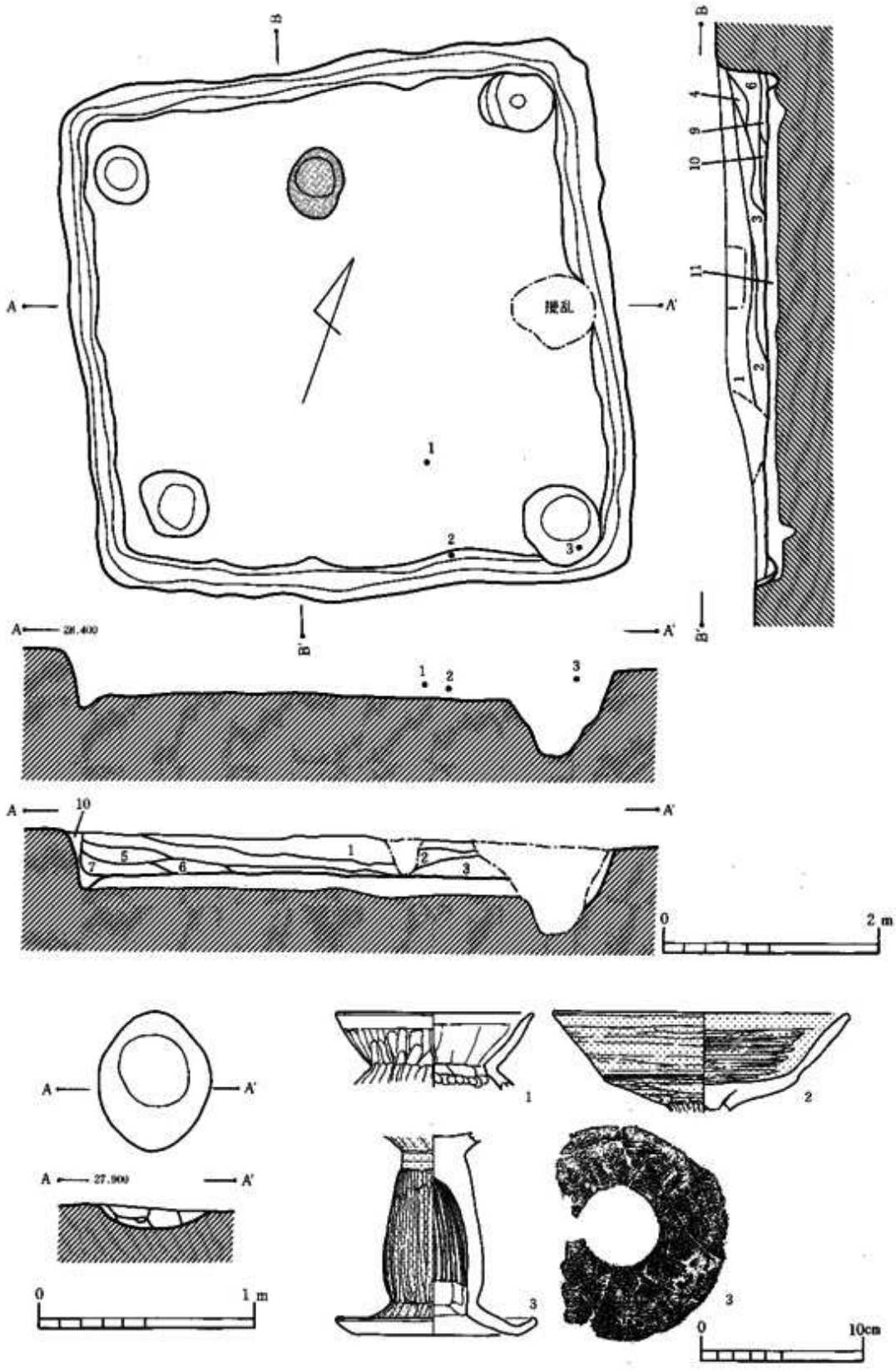
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL- 43 | 土師器<br>壺 | 口径 15.0<br>器高 24.4<br>胴部径22.8<br>底径 6.6<br>容量 4ℓ | 複合口縁壺<br>口縁部は外反し、複合部を貼りつける。胴部は球形を呈し、底部内面は丸底である。口縁部内磨き、端部ヨコナデ | 石英・小砂粒含む | 良好 | 10Y R<br>7/4<br>にぶい黄褐色 | 完形<br>住居中央部<br>胴中位内外面煤付着 |
| 2<br>PL- 43 | 土師器<br>小型丸底壺 | 口径 10.2<br>器高 11.6<br>胴部径12.0<br>容量 0.55 | 口縁部はやや長く直線的に外反する。胴部は球形を呈する。調整は内面箆ナデの他、全体的に横方向の磨きが加えられる。磨き単位は中が極く狭くていねいに仕上げられる。 | 細かい砂粒をわずかに含み、精選された胎土を使用する | 良好<br>軟質 | 7.5Y R<br>6/6<br>橙 | 完形<br>北東壁際<br>外面及び内面の口縁端部、赤彩 |
| 3<br>PL- 43 | 土師器<br>小型壺 | 口径 7.8<br>胴部径12.6 | 口縁部はわずかに内弯して立ち上がり、端部内面に稜をもつ。胴部は球形を呈する。内面に輪積み痕を指でおさえた痕が残る。外面横方向の磨き。 | 小砂粒含む | 良好 | 10Y R<br>5/3<br>にぶい黄褐 | 黒色化している。住居北東隅付近出土<br>胴下半欠損 |
| 4<br>PL- 43 | 土師器<br>高坏 | 口径 9.7<br>脚柱径 3<br>胴部径 9.2<br>器高 9.3<br>容量 0.08 | 坏部は椀状を呈し、脚柱部はほぼ垂直に伸び、裾部で大きく広がる。口縁部ヨコナデ指頭圧痕が認められる。 | 小砂粒含む | 良好 | 10Y R<br>6/4<br>にぶい黄褐 | 住居東側壁中央部7と並ぶ |
| 5<br>PL- 43 | 土師器<br>丸底鉢 | 口径 14.4<br>胴径 10.0<br>底径 3.7<br>容量 | 体部は横広がりの扁球形を呈し、口縁部は大きく外反する。口縁端部に面をもつ。内外面とも横方向に単位が不明瞭な磨きが加えられるが、口縁部だけは縦方向の磨き。 | 小砂粒を含む | 良好 | 10Y R<br>7/4<br>にぶい黄橙 | 住居東側壁際 |
| 6<br>PL- 43 | 土師器<br>鉢 | 口径 14.2<br>底径 3.4<br>器高 6.4<br>容量 0.45 | 口縁部貼り付けにより複合状を呈する。体部は直線的に傾斜する。底部□底。内外面とも横方向の磨き。 | 小砂粒含む | 良好 | 10Y R<br>6/4<br>にぶい黄橙 | 住居東側主柱穴の間、9、8、12、15と並ぶ<br>完形 |
| 7<br>PL- 43 | 土師器<br>鉢 | 口径 9.0 | 口縁部から体部の屈曲弱い。体部右廻り斜方向の削りを下から上に向かって施こし、口縁部は左廻り横方向の削りを加える。更に内面全体と外面一部に横方向の磨き。 | 小砂粒を含む | 良好 | 10Y R<br>2/1<br>黒 | 住居東側壁4と並ぶ<br>底部欠損 |
| 8<br>PL- 43 | 土師器<br>小型鉢 | 口径 8.0<br>胴径 5.9<br>底径 2.7<br>器高 6.2<br>容量 0.04 | 口縁部と体部の境に弱い屈曲をもつ。口縁は内弯気味にそる。底部はやや上げ底。外面は体部が左廻り右下から左上への砂粒移動伴なうナデ。口縁部は横方向の砂粒移動伴なうナデ。口縁端部ヨコナデ。内面は刷毛状工具による横方向のナデ。 | 小砂粒を含む | 良好 | 7.5Y R<br>6/3<br>にぶい褐 | 住居東側壁付近 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 9<br>PL 44 | 土師器<br>小型鉢 | 口径 8.1<br>底径 3.6<br>器高 5.2<br>容量 0.035 | 扁平な器形。口縁部から底部にかけて内弯気味にすぼまる。口縁部ヨコナデ後、体部外面は縦方向に磨いた後、更に底部付近に同方向の磨きを加える。体部内面は板状工具によるナデを加えた後斜方向に磨く。 | 赤褐色粒、長石等の小砂粒を含む | 良好 | 7.5YR<br>2/3<br>極暗褐 | 住居東側主柱穴の間 |
| 10<br>PL- 44 | 土師器<br>小型鉢 | 口径 7.4<br>底径 1.7<br>器高 4.7<br>容量 56 | 口縁部は貼り付けにより複合状を呈する。体部は直線的で、底部は小さい。整形は単位幅2cm、cm当り16～17条の刷毛整形工具を使い、外面はラセン状に、内面は不定方向に左回転させて整形する。 | 小砂粒含む | 良好 | 10YR<br>6/4<br>にぶい黄橙 | 住居南東部主柱穴脇11と並ぶ |
| 11<br>PL- 44 | 土師器<br>小型鉢 | 口径 5.6<br>底径 1.8<br>器高 3.8<br>容量 31.3 | 扁手な器形を呈する。内外面ともにcm当り4本の粗い刷毛状工具を使用する。体部外面は左回転斜方向、内面は横方向に施こす。口縁部は横方向のナデ。 | 長石等小砂粒含む | 良好 | 10YR<br>7/4<br>にぶい黄橙 | 住居東側主柱穴脇 |
| 12<br>PL- 44 | 土師器<br>小型鉢 | 口径 5.4<br>底径 2.2<br>器高 4.3<br>容量 31 | 口縁部に粘土帯を貼りつけることによって複合状を呈する。体部内外面ナデ、口縁部外面は2段に渡って指頭圧痕。 | 石英等小砂粒含む | 良好 | 10YR<br>3/4<br>暗褐 | 住居中央やや東寄り |
| 13<br>PL- 44 | 土師器<br>小型壺 | 胴径 6.0<br>底径 2.8<br>容量 35.0 | 胴中位よりやや上が張る。cm当り15条の刷毛状工具を使い、体部外面は左廻り斜方向、内面は左廻り横方向にナデツケした後、外面中位、内面頸部をナデる。 | 長石目立ち砂粒やや粗らい | 良好 | 10YR<br>3/1<br>黒褐 | 住居南東柱穴付近 |
| 14<br>PL- 44 | 土師器<br>小型壺 | 口径 3.6<br>胴径 4.9<br>底径 1.4<br>器高 5.8<br>容量 36.2 | 口縁部はやや内弯気味に立ち上がる。頸部で一端大きくくびれた後、球形の胴部に移る。外面は横方向の細かい磨き、内面はナデ。 | 小砂粒含む | 良好 | 7.5YR<br>3/1<br>黒褐 | 住居北西壁際 |
| 15<br>PL- 44 | 土師器<br>小型壺 | 胴径 4.8<br>底径 1.4<br>容量 8.0 | 口縁部は直線的に立ち上がる。胴部は中位に最大径があり、張り出す緩干な球形。外面は左廻り横方向の削り、内面はナデ。 | 小砂粒含 | 良好 | 7.5YR<br>6/3<br>にぶい褐 | 住居中央やや東寄り<br>口縁部欠 |
| 16<br>PL- 44 | 土師器<br>小型壺 | 口径 2.4<br>胴径 3<br>底径 1.3<br>器高 3.1<br>容量 2.5 | 口縁部はやや内弯気味に立ち上がる。頸部で一端しまった後、胴中位が張り出す球形な胴部を呈する。外面は体部横方向の磨きがかえられる他、内外面ともナデによる調整。 | 小砂粒含む | 良好 | 10YR<br>2/2<br>黒褐 | 住居北西壁付近14、18、19の土器と同一地点 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 17<br>PL- 44 | 土師器<br>椀 | 口径 4.8<br>底径 2.9<br>器高 3.7<br>容量 21.0 | 底部はやや丸味をもつ。体部内外面は左廻り斜方向に篦ナデが加えられ、口縁部はヨコナデが加えられる。ヨコナデによって口縁端部がつまみあげられている。 | 小砂粒含む | 良好 | 10YR<br>7/3<br>にぶい黄褐 | 完形 |
| 18<br>PL- 44 | 土師器<br>椀 | 口径 4.0<br>底径 3.0<br>器高 3.0<br>容量 22.5 | 底部は輪台状を呈する上げ底体部は円錐形。体部外面は㎝当り7条の条線溝浅い刷毛状工具によって右廻り斜方向にナデられる。 | 小砂粒目立つ | 良好 | 7.5YR<br>7/3<br>にぶい橙 | 住居北西部壁際 |
| 19<br>PL- 44 | 土師器<br>高坏 | 口径 5.0<br>脚径 4.6<br>器高 4.5<br>容量 15.1 | 坏部は椀状を呈する。脚柱部は円筒形で、裾部に至り大きく開く。外面は砂粒の移動伴なうナデの後、口縁部・裾部にヨコナデが加えられる。 | 小砂粒目立つ | 良好<br>硬質 | 10YR<br>6/4<br>にぶい黄橙 | 住居北西部壁際 |
| 20<br>PL- 44 | 土玉 | 径 3.2<br>穿孔径0.5 | 指によるナデによって整形されている。 | 小砂粒わずかに含む | 良好 | 7.5YR<br>6/4<br>にぶい黄橙 | 住居南側出入口施設脇 |
| 21<br>PL- 44 | 土製<br>支脚 | 幅 10<br>長 12.7<br>重 900g | 円錐状を呈する。体部はナデ調整。竹管により溝・穴を穿つ。 | 長石等小砂粒多く含む | 良好<br>2次焼成 | 2.5YR<br>3/4<br>暗赤褐 | |
| 22 | 土製<br>支脚 | 幅 6.5<br>長 11.3<br>重 510g | 21と同じく円錐状を呈する。竹管により溝・穴を穿つ。ナデによって調整。 | 長石等小砂粒を多く含む | 良好<br>2次焼成 | 2.5YR<br>3/4<br>暗赤褐 | |
| 23 | 土製<br>支脚 | 幅 11<br>長 14.4<br>重 1100g | 円柱状を呈する。体部はナデ調整。 | 砂粒多く含みザラザラしている | 良好<br>2次焼成により器面剥落 | 2.5YR<br>3/4<br>暗赤褐 | |
| 24 | 土製<br>支脚 | 幅 12.0<br>長 17.0<br>重 1000g | 三角柱状を呈する。体部はナデ調整。 | 長石等小砂粒を多く含む | 良好<br>2次焼成により器面剥落 | 5YR<br>3/6<br>暗赤褐 | |
| 25 | 土製<br>支脚 | 幅 11.3<br>長 14.5<br>重 1370g | 扁平な三角錐。ナデ調整。 | 長石等小砂粒を多く含む | 良好<br>2次焼成 | | |

**第45号住居跡**（第90図）

4G－aグリッドに位置する。規模は長軸5m、短軸4.9mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN－28°－Wである。壁高は40cm。床は貼り床で、幅6cm、深さ5cmを測り台形を呈する周溝が全周する。柱穴は4本で住居跡隅寄りにあり、径60cm、深さ60cmを計る。間尺は東西が3.2m、南北が3.5mである。炉は主軸線上の北壁寄りにあり、径50cm、深さ5cmを測り、底面は良く焼けていた。




**第90図　第45号住居跡と炉と遺物実測図**

本住居跡の埋没過程は出土遺物の有り方、堆積層からすると廃棄された後、埋め戻されたものと考えられる。

すなわち、住居跡内、特に北側に集中して炭化材の分布が認められる。しかし、炭化材と床面の間には間層が入り、中層にはロームブロックを主体にする層が検出された。

出土遺物は坩1点、高杯2点があるが、いずれも覆土下層からの出土であり、完形に復元できるものはなかった。

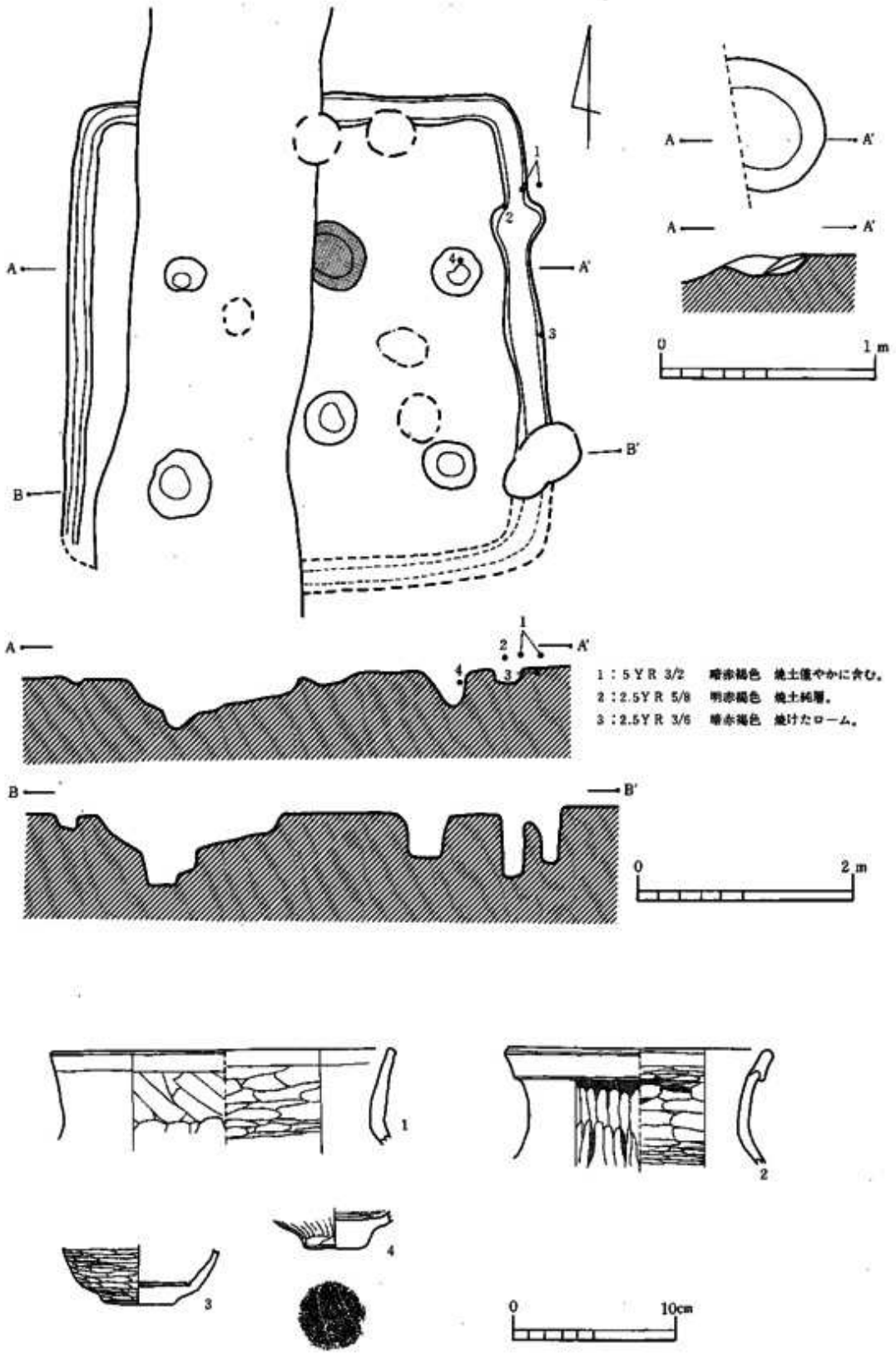
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL- 45 | 土師器<br>坩 | 口径 12.4 | 口縁端部ヨコナデ、口縁から頸部板状工具による磨き。口縁内面頸部削り。 | 長石等小砂粒やや多く含む | 良好 | 5YR<br>5/6<br>明赤褐 | 口縁1/2残存 |
| 2<br>PL- 45 | 土師器<br>高坏 | 口径 18.4 | 口縁端部ヨコナデ、坏内外面横方向の磨き。 | 白色小粒含む | 良好 | 2.5YR<br>5/6<br>明赤褐 | 坏部だけ残存 |
| 3<br>PL- 45 | 土師器<br>高坏 | 底径 10.2<br>脚高 11.1 | 脚部磨き、脚裾部ヨコナデ、内面シボリ痕。 | 長石等小砂粒含む | 良好 | 10YR<br>6/4<br>にぶい黄橙 | 脚部だけ残存<br>外面赤彩、脚裾部内面、墨記号 |

〈住居跡〉
1 10YR4/4 褐色 炭化物・焼土僅かに含む。
2 10YR3/3 暗褐色 焼土・ローム僅かに含む。
3 7.5YR3/3 暗褐色 ローム僅かに含む。
4 10YR4/4 褐色 ローム・焼土含む。
5 7.5YR4/3 褐色 ローム主体とする。
6 7.5YR3/4 暗褐色 炭化物・ローム主体とする。
7 7.5YR3/4 暗褐色 暗褐色土主体。
8 7.5YR4/3 褐色 ローム主体。
9 7.5YR5/6 明褐色 ローム主体。
10 10YR5/4 黄褐色 ローム・黒色土・炭化物主体。
11 10YR5/4 明黄褐色 ローム主体。

〈炉 跡〉
1 7.5YR4/6 褐色 焼土・炭化物混じり、褐色土。
2 5YR4/8 赤褐色 炭化物混じり焼土。
3 5YR4/6 赤褐色 焼土。

**第46号住居跡**（第91図）

6Ⅰ－aグリッドに位置し、第2号溝、第26号掘立柱建物跡に切られる。規模は長軸4.5m、短軸4.4mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN－28°－Eである。床はローム利用で、幅6～2cm、深さ10cmを測る台形を呈する周溝が全周する。柱穴は4本で主軸線上に検出され、径50cm、深さ40cmを測る。間尺は東西が2.6m、南北が1.8mである。炉は主軸線上の中央よりやや北側にあり、径50cm、深さ10cmを測る。底面は良く焼けていた。




**第91図　第46号住居跡と炉と遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>壺 | 口径 21.2 | 口縁端部ヨコナデ、口縁外面削り後ナデ、口縁ヨコナデ。 | 長石等小砂粒わずかに含む | 良好 | 10YR<br>7/4<br>にぶい黄橙 | 口縁1/3残存<br>周溝 |
| 2 | 土師器<br>壺 | 口径 16.4 | 口縁ヨコナデ、頸部刷毛6cm当り9本の刷毛後、砂粒の移動伴なう磨き。 | 長石等小砂粒もわずかに含む | 良好 | 7.5YR<br>6/6<br>橙 | 口縁1/4残存<br>周溝 |
| 3 | 土師器<br>小型壺 | 底径 4.4 | 体部外面横方向の磨き、内面ナデ。 | 長石等小砂粒わずかに含む | 良好 | 2.5YR<br>5/8<br>明赤褐 | 底部だけ残存<br>周溝 |
| 4 | 土師器<br>小型壺 | 底形 4 | 体部外面縦方向磨き、底部付近ナデ。底部木葉痕。 | 長石等小砂粒わずかに含む | 良好 | 5YR<br>4/8<br>赤褐 | 底部だけ残存<br>柱穴内 |

本住居跡は確認面が低く堆積土層を把握することが出来なかった。

出土遺物は壺1点、甕1点、坩1点である。いずれも住居址に伴う。

〈炉　跡〉
1　5YR3/2　暗赤褐色　焼土僅かに含む。
2　2.5YR5/8　明赤褐色　焼土純層。
3　2.5YR3/6　暗赤褐色　焼けたローム。

**第47号住居跡**（第92図）

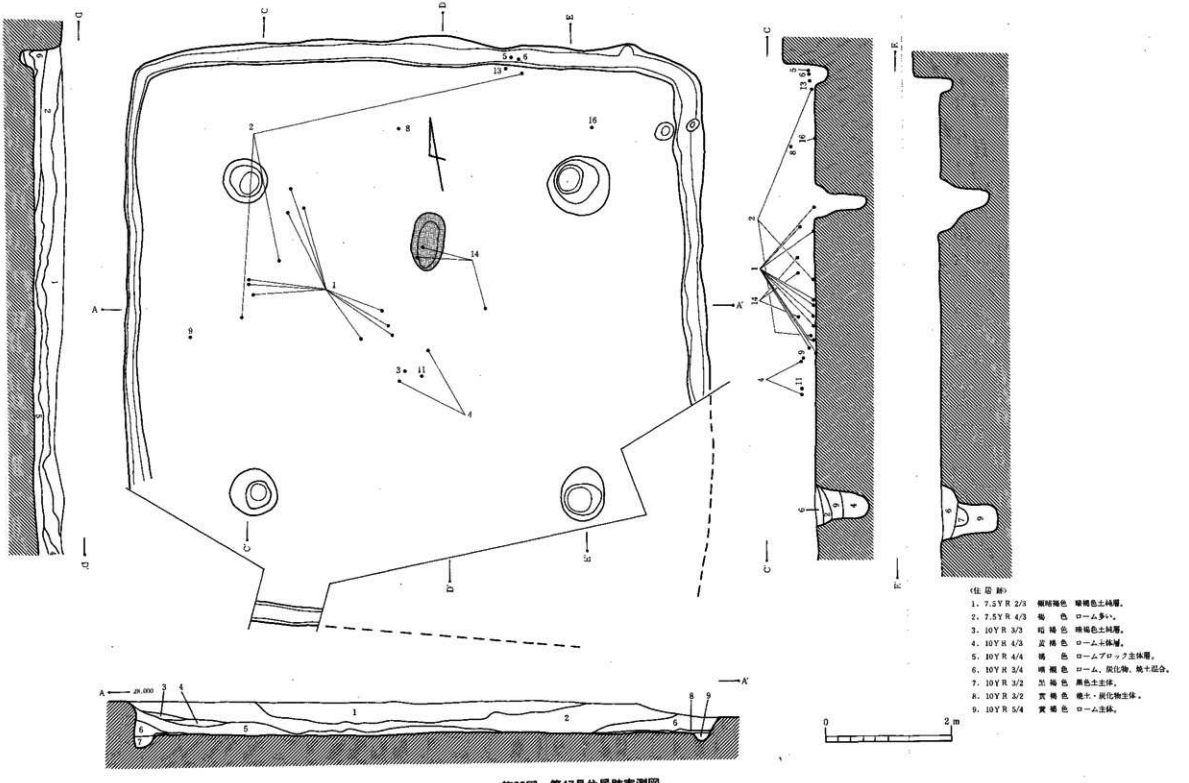
4H－bグリッドに位置する。規模は長軸9.3m、短軸9.2mの隅丸形を呈する。主軸方位はN－0°30′－Eである。壁高45cm。床は貼り床で、幅6cm、深さ10cmを測る台形を呈する周溝が全周する。柱穴は4本で主軸線上に検出され、径80cm、深さ90cmを測る。間尺は東西5.0m、南北5.0mである。炉は主軸線上中央よりやや北側にあり、長軸50×短軸90cm、深さ5cmを測る楕円形を呈し、底面は良く焼けていた。

本住居跡は堆積層からすると、住居跡壁際の三角堆積の後の5層の堆積土がローム主体層であることからして、人為的な埋め戻しがなされた可能性がある。

出土遺物は甕1点・鉢1点・有孔鉢1点・坩2点・高杯10点・土玉1点である。1・2・5・6・13・16は床面直上であるが、他は覆土上層から中層にかけて出土した。

（菊地　健一）

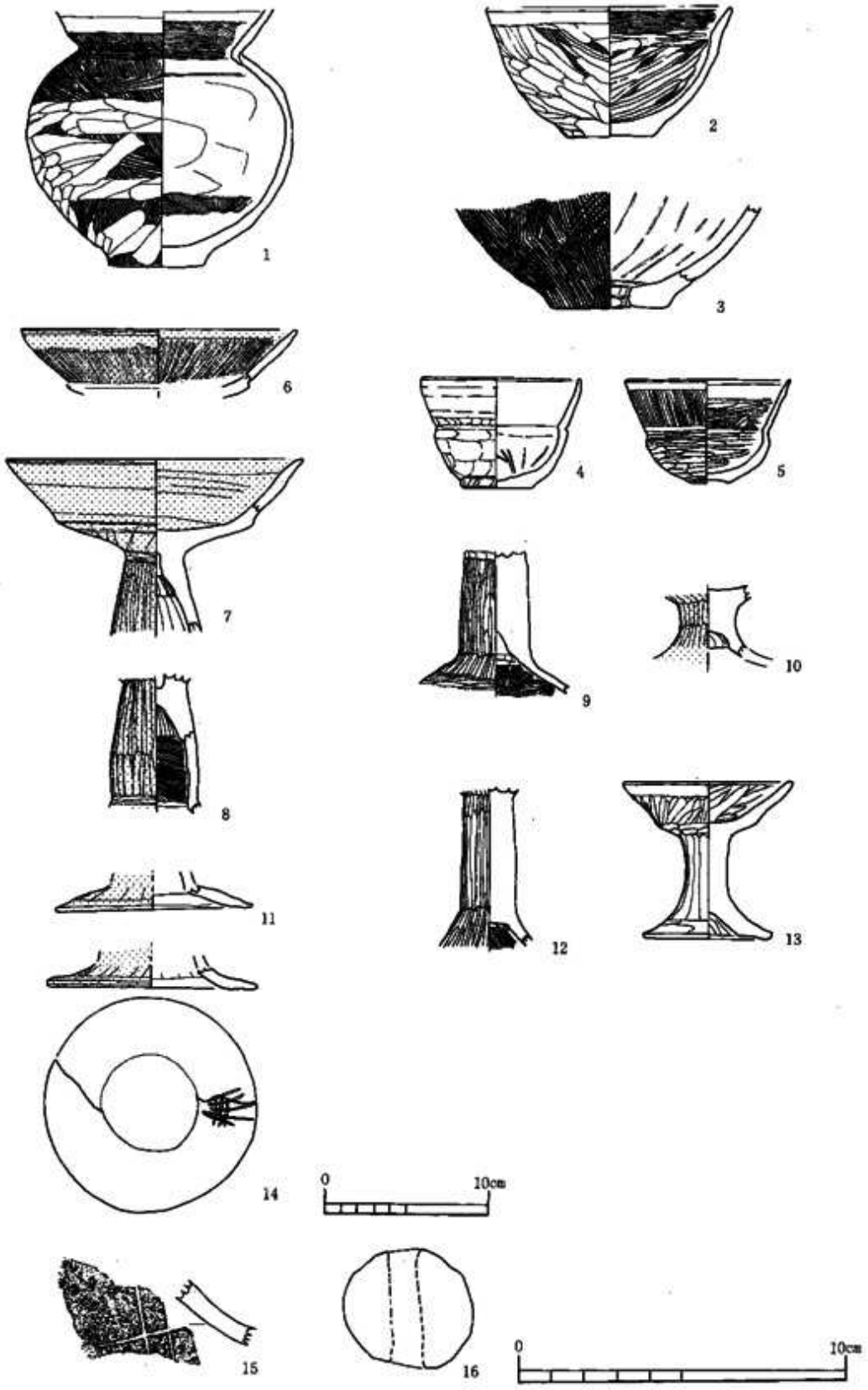
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL-45 | 土師器<br>甕 | 口径 14.4<br>胴径 16.3<br>底径 5.8<br>容量 1456 | 口縁はやや長く、内彎気味。口縁部cm当り9本の刷毛・胴部cm6本の刷毛を使用する。 | 赤色粒・長石等の小砂粒含む、キメ細かい | 良好 | 10YR<br>7/4<br>にぶい黄橙 | 外面胴中位煤付着 |




(住居跡)

1. 7.5YR 2/3　極暗褐色　暗褐色土純層。
2. 7.5YR 4/3　褐　色　ローム多い。
3. 10YR 3/3　暗 褐 色　暗褐色土純層。
4. 10YR 4/3　黄 褐 色　ローム土体層。
5. 10YR 4/4　褐　色　ロームブロック主体層。
6. 10YR 3/4　暗 褐 色　ローム・炭化物、焼土混合。
7. 10YR 3/2　黒 褐 色　黒色土主体。
8. 10YR 3/2　黒 褐 色　焼土・炭化物主体。
9. 10YR 5/4　黄 褐 色　ローム主体。

第92図　第47号住居跡実測図




**第93図　第47号住居跡遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL-45 | 土師器<br>甕 | 口径 13.4<br>胴径 16.3<br>底径 5.8<br>容量 14.56 | 口縁はやや長く、内彎気味。口縁部cm当り9本の刷毛・胴部cm6本の刷毛を使用する。 | 赤色粒、長石等の小砂粒含む、キメ細かい。 | 良好 | 10YR<br>7/4<br>にぶい黄橙 | 外面胴中位煤付着 |
| 2<br>PL-45 | 土師器<br>甕 | 口径 15.2<br>底径 5.1<br>器高 8.0<br>容量40.07 | 口縁部にわずかな屈曲をもつ。体部外面cm当り13条の刷毛後ナデ調整。体部内面は外面と同単位の刷毛が口縁部までおよぶ。 | 長石等小砂粒含む | 良好 | 10YR<br>7/4<br>にぶい黄橙 | |
| 3 | 土師器<br>有孔鉢 | 底径 7.0 | 底部胴面で屈曲をもって立ち上がる。cm当り5～6条の条線清深い刷毛使用。 | 長石・赤色小粒を含む | 良好 | 7.5YR<br>6/4<br>にぶい橙 | |
| 4 | 土師器<br>小型壺 | 口径 9.7<br>胴徒 8.2<br>底径 4.2<br>器高 6.6<br>容量 96.5 | 口縁部は比較的長く、彎曲して立ち上がる。体部上位に最大径。体部外面は箆状工具による粗いナデ。 | 小砂粒わずかに含む | 良好 | 10YR<br>7/4<br>にぶい黄橙 | 1/3欠損 |
| 5<br>PL-45 | 土師器<br>小型壺 | 口径 10.2<br>胴徒 7.6<br>底径 1.2<br>器高 6.2<br>容量 68.6 | 口縁部長く、わずかに彎曲し端部をつまみ出す。内・外面ともcm当9～12条の刷毛成形の後、磨いている。 | 小砂粒わずかに含む | 良好 | 10YR<br>7/4<br>にぶい黄橙 | 口縁一部欠損 |
| 6<br>PL-45 | 土師器<br>高坏 | 口径 16.8 | 口縁部やや肥厚し、直線的に開く。内外面とも磨がく。内外面赤彩。 | 白色小粒を多く含む | 良好 | 2.5YR<br>5/8<br>明赤褐 | |
| 7 | 土師器<br>高坏 | 口径 18.3<br>容量 536.4 | 口縁部はやや彎曲気味に立ち上がり、端部に面をもつ。坏部は削り後ナデ、口縁ヨコナデ。赤彩。 | 長石等小砂粒含む | 良好 | 5YR<br>5/6<br>明赤褐 | |
| 8 | 土師器<br>高坏 | 脚柱径 7.7 | わずかに彎曲する円柱状の脚部。脚部外面磨き、内面cm当り24条の細い各線の刷毛成形。 | 長石、石英等小砂粒 | 良好 | 10YR<br>5/4<br>にぶい黄褐 | |
| 9 | 土師器<br>高坏 | 脚柱径 6.3 | 脚柱部は円筒状を呈し、7、8と異なり内部中空でない。裾部はcm当り15条の刷毛成形。 | 長石等小砂粒含む | 良好<br>硬質 | 10YR<br>6/4<br>にぶい黄褐 | |
| 10 | 土師器<br>高坏 | 脚柱径 3.4<br>脚柱長 3 | 脚柱部が非常に短かく、裾部は外反する。外面、赤彩。 | 長石等小砂粒含む | 良好<br>硬質 | 10YR<br>6/4<br>にぶい黄橙 | |
| 11 | 土師器<br>高坏 | 脚柱径 3.2<br>脚柱長 7 | 脚柱が長く円柱状を呈し、内部は充塡される。裾部内面はcm当り9条の刷毛成形。 | 長石小砂粒含む | 良好 | 10YR<br>6/4<br>にぶい黄橙 | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 12 | 土師器<br>高坏 | 口径 10.4<br>脚柱径 3.4<br>脚長 8<br>器高 9.5<br>容量 90.5 | 比較的小型。坏部は直線的に広がる。脚柱部は円柱状。裾部外反し、肥厚する。坏部削り後ナデ調整。 | 小砂粒含む | 良好 | 10YR<br>7/3<br>にぶい黄橙 | |
| 13<br>PL-45 | 土師器<br>高坏 | 脚径 12.4 | 脚裾部は直線的に広がる。7、8と類似形態。 | 白色小砂粒含む | 良好<br>軟質 | 5YR<br>5/4<br>にぶい赤褐 | |
| 14<br>PL-45 | 土師器<br>高坏 | 脚径 13.0 | 脚裾部はわずかな反りをもつ。7、8、13と類似形態。外面赤彩。脚部内面に5条の縦線、3条の横線の組み合せによる線刻画がある。 | 白色、赤色小砂粒わずかに含む | 良好<br>軟質 | 7.5YR<br>5/6<br>明褐 | |
| 15 | 土師器<br>高坏 | | 外面赤彩、7、8、13、14と類似形態か、外面赤彩。脚部内面に1条の横線と2条の縦線の組み合わせによる線刻画がある。14と同一構成。 | 長石等小砂粒含む | 良好 | 10YR<br>6/4<br>にぶい黄橙 | |
| 16<br>PL-45 | 土玉 | 径 3.9<br>重 4g | ナデ調整。穿孔は両側からなされる。 | 長石等小砂粒多く含む | 良好 | 10YR<br>7/4<br>にぶい黄橙 | |

## 2．掘立柱建物跡

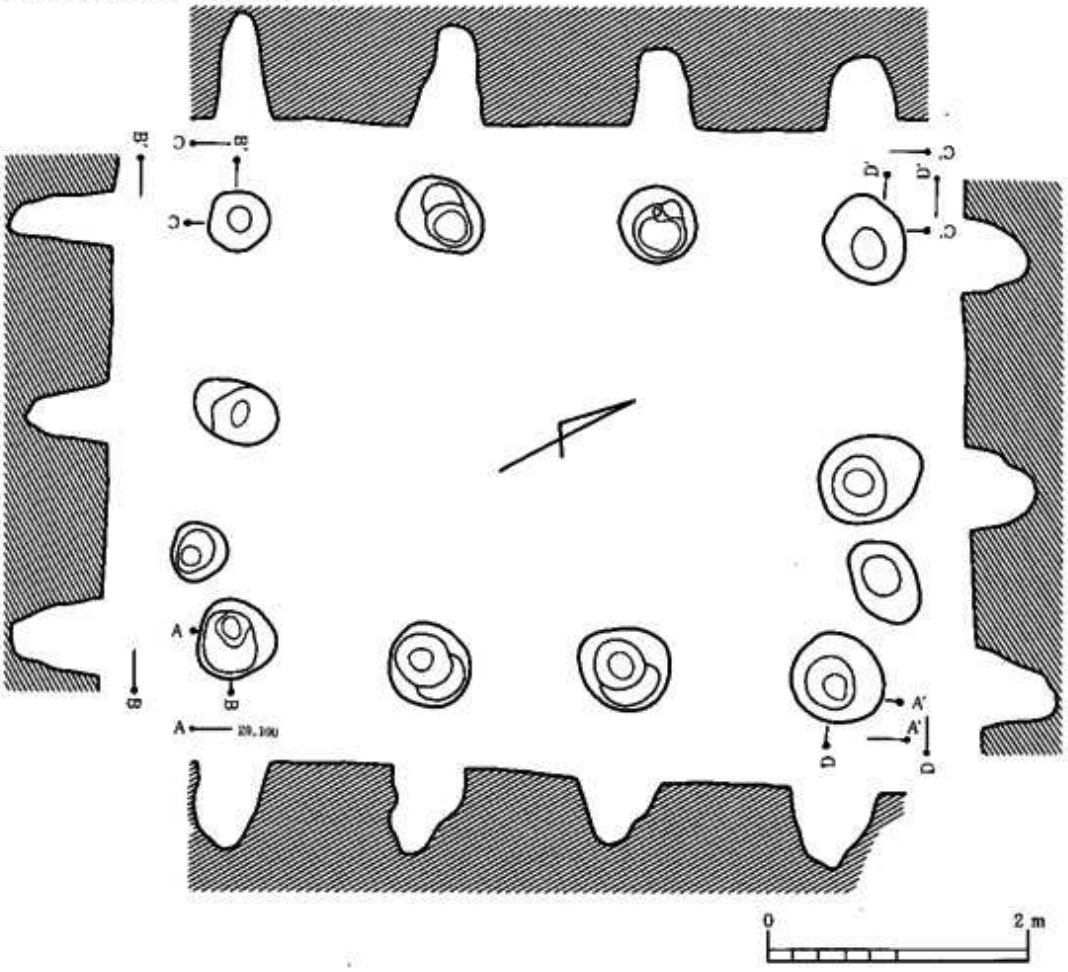
掘立柱建物跡は第１次調査で５棟が、第２次調査では７棟が検出された。特に調査区北側に集中する傾向が見受けられる。いずれも規模が小さく、柱穴の掘り方も貧弱なものが大半を占める。

### 第１号掘立柱建物跡（第94図）

本掘立柱建物跡は、６Ｃ－ａグリッドに中心を持ち、第１号住居跡に接して位置する。新旧の関係は重復部分が少ないため明確ではない。

東西棟桁行３間（4.8m）×梁行２間（3.3m）の側柱建物である。柱間は桁行1.6ｍ等間、梁行は1.6m間である。主軸方位はＮ－62°－Ｅを測る。

土層断面の観察では、柱痕が明瞭に認められた。また掘り方は、径60～80cmの不整な円形を呈し、深さは50～80cmを測る。



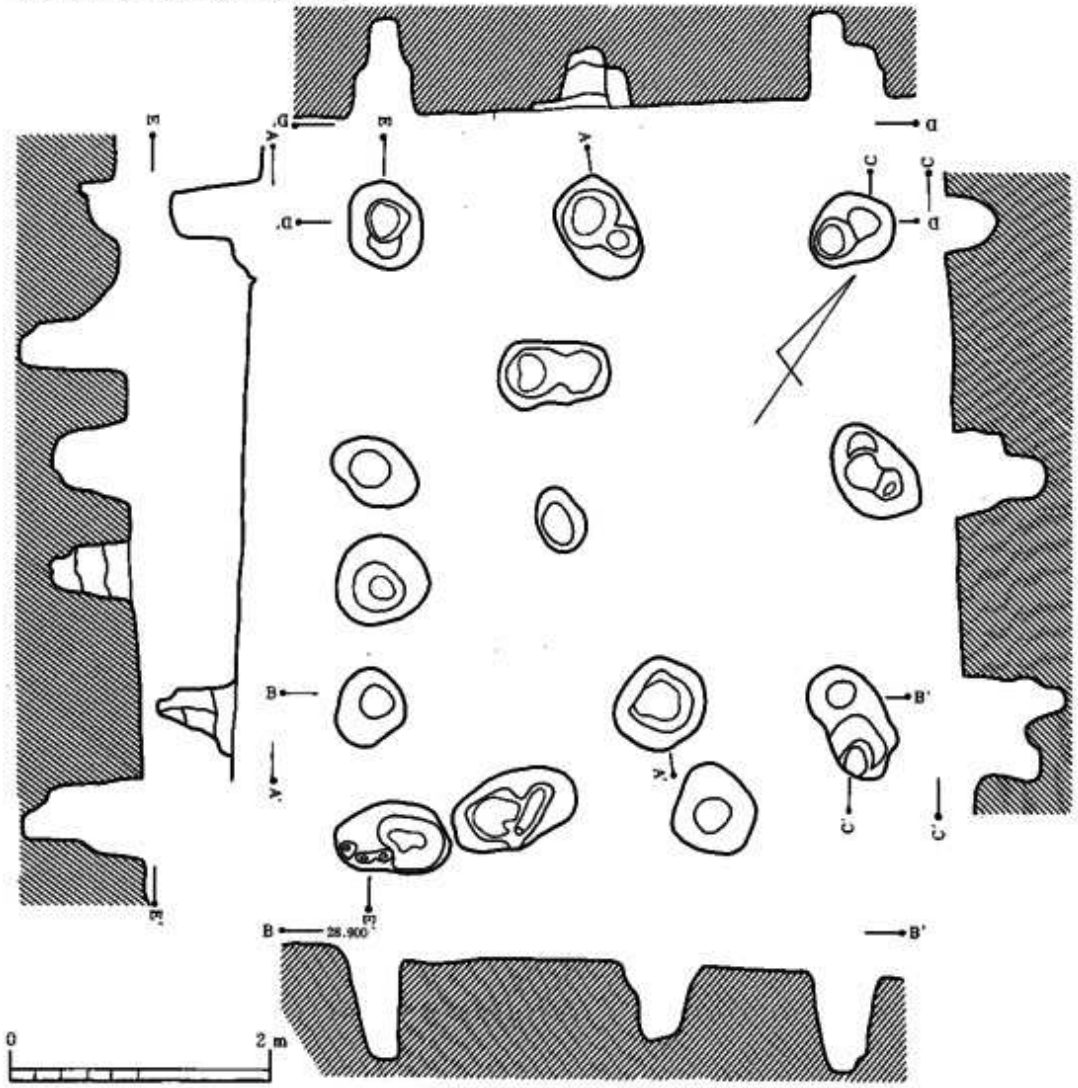

第94図　第１号掘立柱建物跡実測図

**第２号掘立柱建物跡**（第95図）

本掘立柱建物跡は、6C−b，dの両グリッドにまたがり、第１号掘立柱建物跡と第５号住居跡との間に位置する。また北側には第６号住居跡がある。

２間（3.6m）×２間（3.6m）のほぼ正方形の建物である。柱間は南北方向が1.8ｍ等間、東西方向は北側で1.8m等間、南側は2.1mと1.5mとそろわない。主軸方位はＮ－1°－Ｅを測る。

柱痕は不明瞭であり、一部の柱は抜き取り痕跡を持つ。掘り方は、径50～80cmの不整形を呈し、深さは40cm～90cmを測る。




**第95図　第２号掘立柱建物跡実測図**

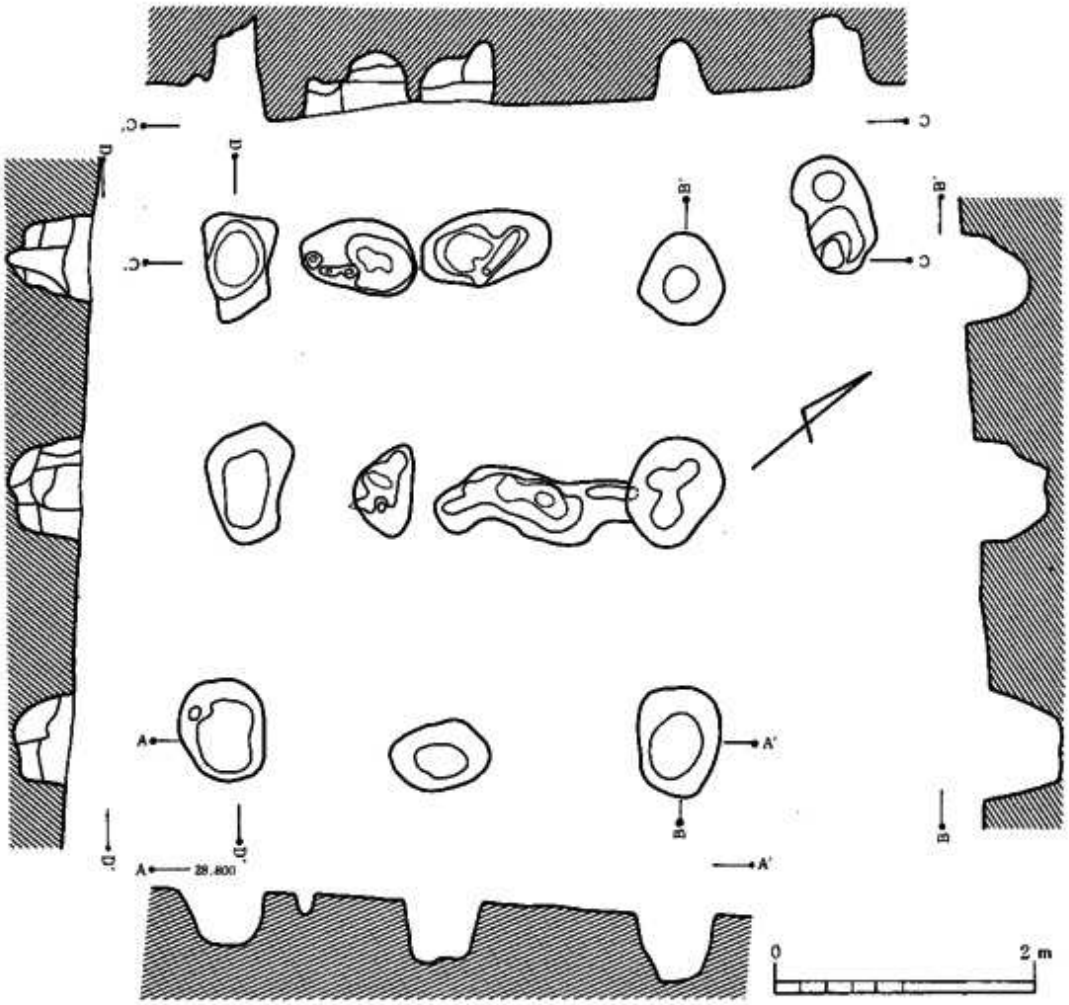
**第３号掘立柱建物跡**（第96図）

本掘立柱建物跡は６Ｃ－ａグリッドに中心を持ち、第１号住居跡に隣接して東に位置する。

新旧の関係は、重復部分が少ないため明確ではない。

2間（3.6m）×2間（3.6m）の正方形の建物である。柱間は南北1.8m等間、東西1.8m等間である。建物中央にある東西に並ぶ2柱穴は、東西方向での柱筋は通っており東柱と考えられる。主軸方位はN－9°20′－Eを測る。

柱痕は明瞭に認められた。掘り方は、径50～80cmの不整形を呈し、深さ40～60cmを測る。




**第96図　第3号掘立柱建物跡実測図**

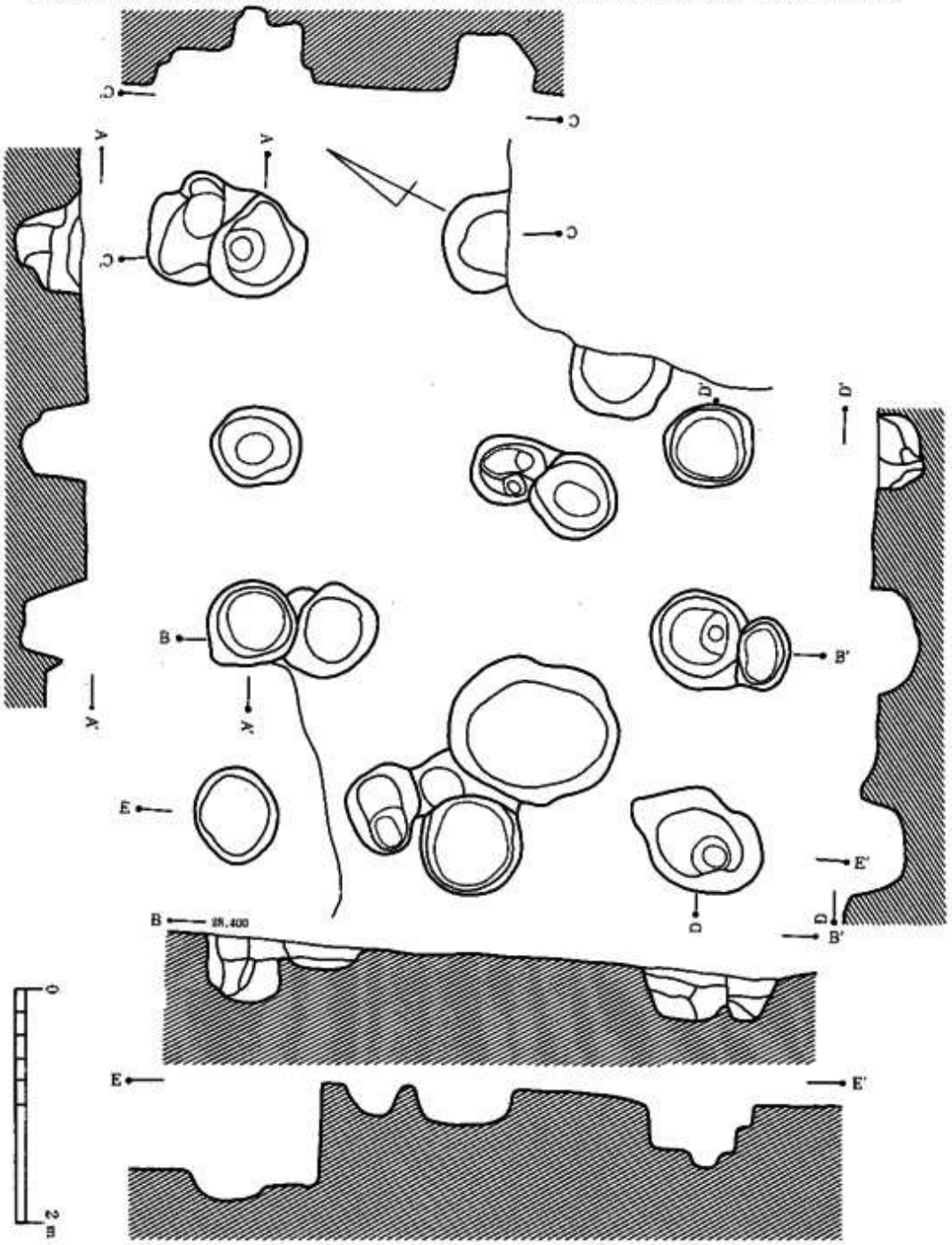
**第4号掘立柱建物跡**（第97図）

本掘立柱建物跡は7C－cおよび7C－dグリッドに中心を持ち、北西柱穴を第5号竪穴住居跡に、南東柱穴を第3号竪穴住居跡のプランのなかに持つ。本掘立柱建物跡の存在に気がついたのが竪穴住居の調査後と遅れたため、3号住居跡との切り合い関係は不明である。また第

5号住居跡との関係は、北西柱穴を竪穴住居の床面下で確認しており、本掘立柱建物跡の方が古い。

東西棟3間（4.8m）×2間（4.2m）の側柱建物である。柱間は桁行1.6m等間、梁行は2.1m等間である。主軸方位はN－87°50′－Eを測る。

柱痕は明瞭に認められた。掘り方は、径70～90cmの円形を呈し、深さ30～100cmを測る。



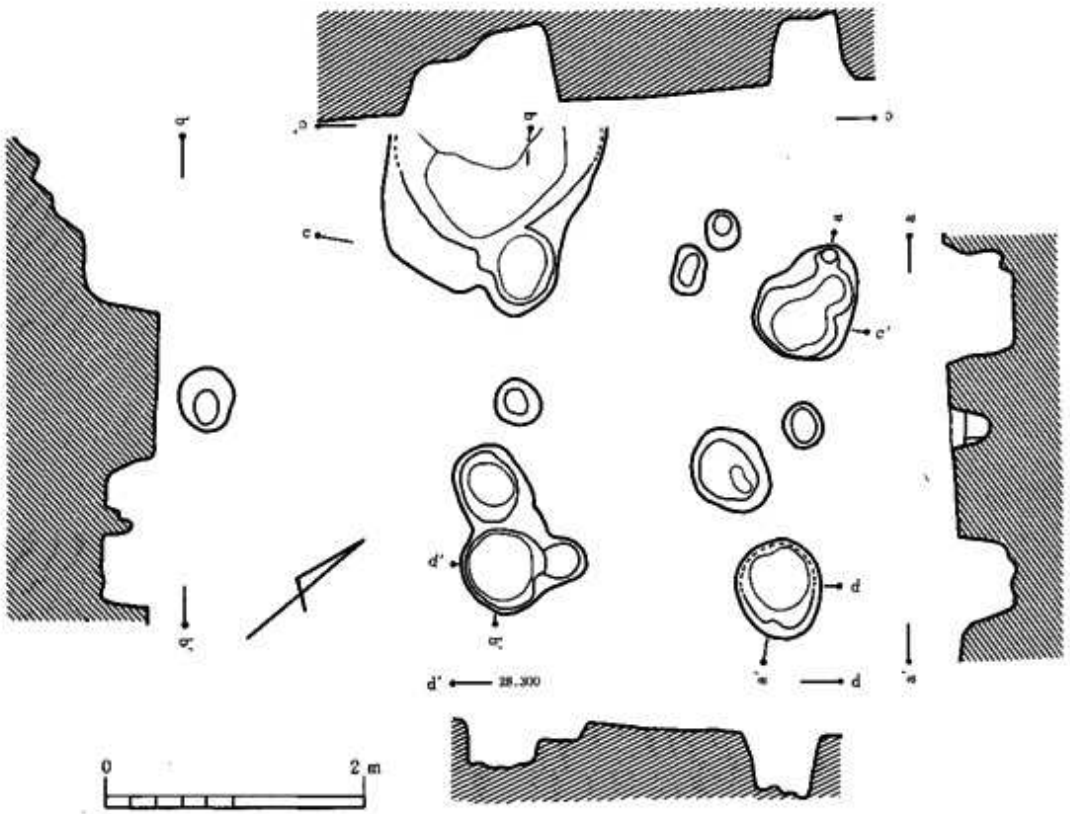

**第97図　第4号掘立柱建物跡実測図**

**第５号掘立柱建物跡**（第98図）

本掘立柱建物跡の位置は第16号住居跡から北へ３ｍほど離れ、第12号住居跡の西壁とは50cmほどの間隔で平行して接し、６Ｄ－ｄグリッドに位置する。北西の柱穴には一部撹乱がおよんでいる。

２間（2.1ｍ）×１間（2.1ｍ）の正方形の側柱建物である。南北方向では中間の位置に柱間寸法がやや不揃いではあるが、小柱穴が認められる。主軸方位はＮ－2°30′－Ｗを測る。

柱痕は、不明瞭である。掘り方は、４隅の柱穴は径60cm前後の不整の円形を呈し、深さ40～60cmを測り、しっかりとした掘り込みを持つのに対し、小柱穴としたものは径30cm前後、深さ30cm前後と貧弱な掘り込みである。（倉田義広）




**第98図　第５号掘立柱建物跡実測図**

**第６号掘立柱建物跡**（第99図）

４Ｅ－ｄグリッドに中心を持ち、第29号住居跡・第33号住居跡を切っているが、南側は撹乱のため柱穴が一部壊されている。

２間（3.6m）×２間（3.2m）の側柱建物である。柱間は桁行1.8m等間・梁行は1.6m等間である。主軸方位はＮ－12°－Ｗを測る。

柱穴は、径60～80cmの不整な円形を呈し、深さは40～50cmを測る。

遺物は甕１点・坏２点の計３点が出土している。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>甕 | 口径(15.8) | 頸部は「く」字状に屈曲して口縁部に至る。胴部上半縦方向のヘラ削り。 | 石英粒・長石粒を多く含む。 | 良好 | 7.5YR<br>4/8<br>赤褐 | 胴部上半1/3残存 |
| 2 | 須恵器<br>坏 | 口径(12.8)<br>器高 4.0<br>底径 8.0 | 底部から直線的に立ち上り口縁部に至る。体部下端は手持ちヘラ削り。底部は全面手持ちヘラ調整。 | 大粒の長石粒を多く含み粗い | 良好 | N<br>7/1<br>灰 | 体部1/3残存 |
| 3 | 土師器<br>坏 | 底径 7.0 | 体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後外周部回転ヘラ調整。 | 石英粒・長石粒を多く含む | 良好 | 7.5YR<br>4/6<br>褐 | 底部のみ |

**第７号掘立柱建物跡**（第100図）

５Ｄ－ｃグリッドに中心を持ち、第25号住居跡・第28号住居跡を切って建られている。

２間（3.6m）×２間（3.6m）の側柱建物である。柱間は桁行・梁行共に1.8ｍを中心としているが、一部不揃いである。主軸方位は北を測る。

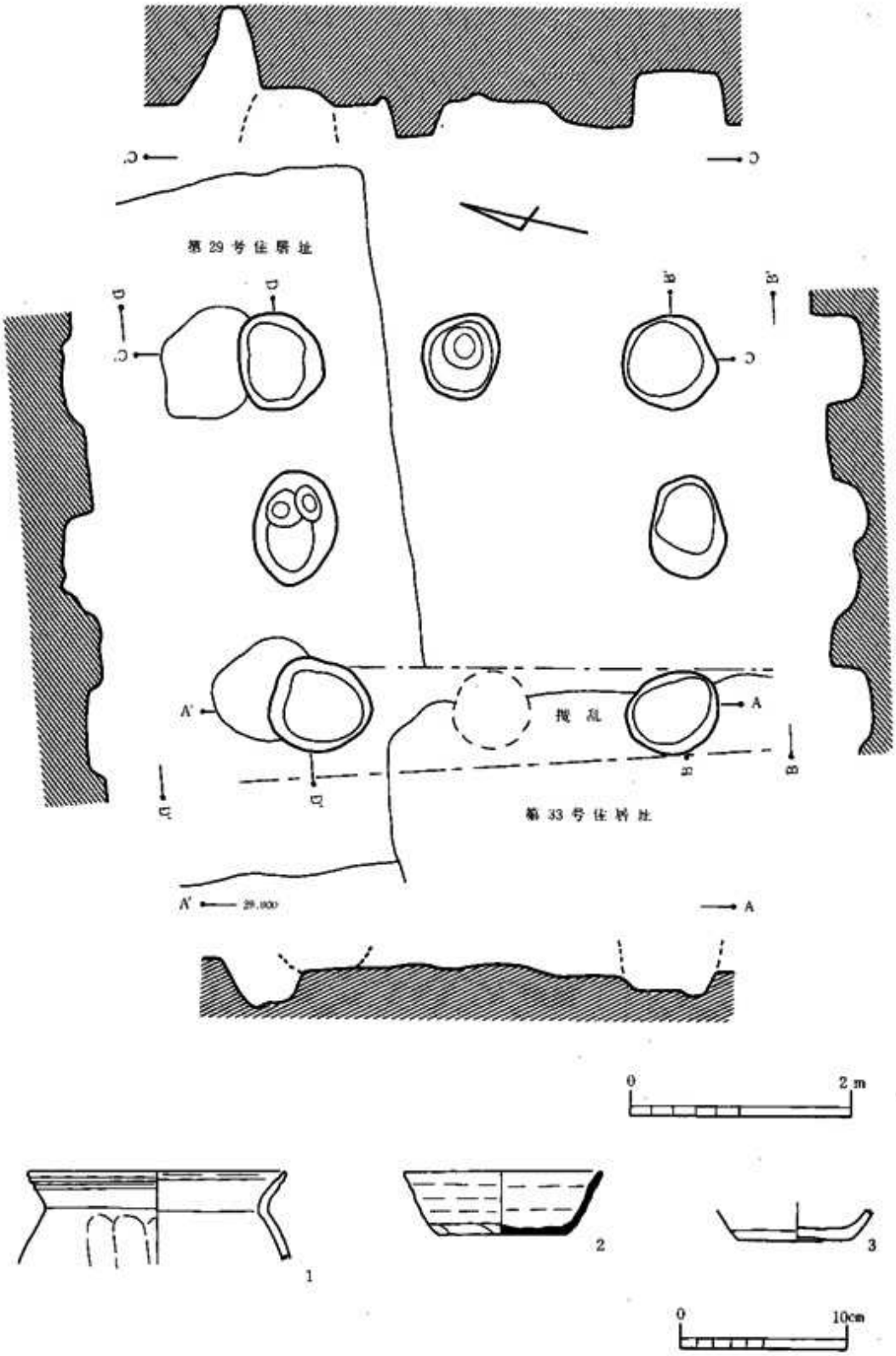
柱穴は径50～90cmの不整な円形を呈し、深さは50～90cmを測る。

遺物は北西ピットより武蔵型の甕が一点出土している。

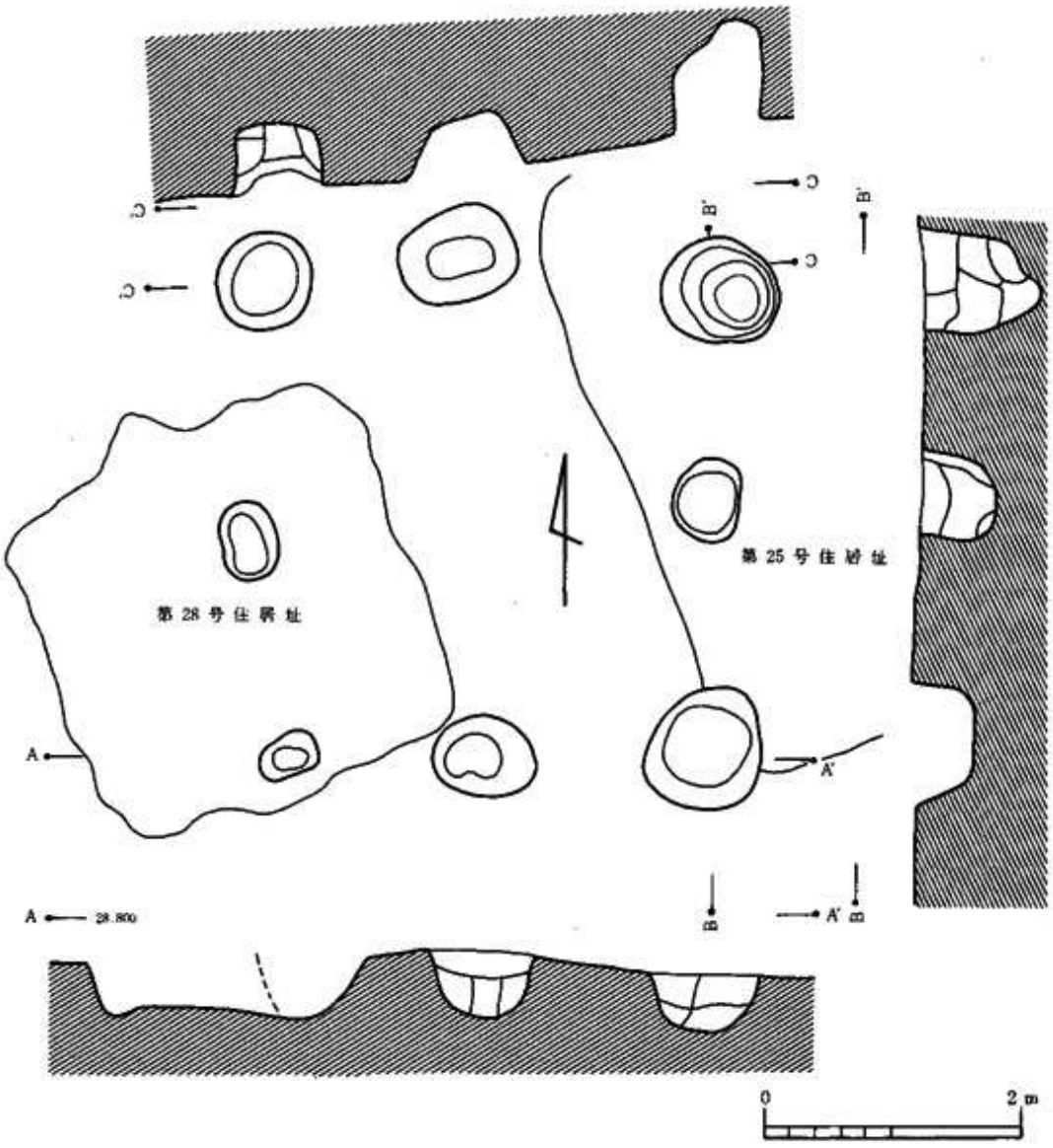
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>甕 | 口径 21.0 | 口縁部と胴部上位に最大径をもち、頸部は「コ」字状に屈曲する。胴部上半は縦・中位は横・下半は斜方向のヘラ削り。 | 細かい鉱物粒を多く含み砂質 | 良好 | 7.5YR<br>4/8<br>赤褐 | 武蔵型甕<br>胴部上半のみ |

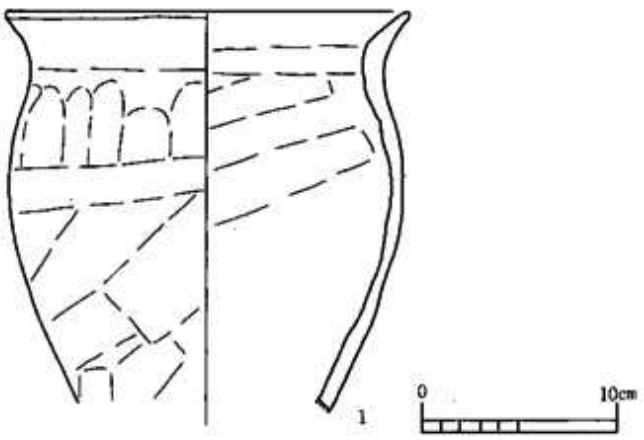
**第８号掘立柱建物跡**（第101図）

５Ｄ－ａグリッドに中心を持ち、第23号住居跡・第43号住居跡を切って建てられており、第




**第99図　第6号掘立柱建物跡と遺物実測図**




**第100図　第7号掘立柱建物跡と遺物実測図**

9号掘立柱建物跡・第10号掘立柱建物跡に切られている。

2間(3.0m)×2間(3.0m)の側柱建物で、東側に一面の庇が付くと思われる。柱間は桁行・梁行共に1.5m等間である。主軸方位はN－79°－Eを測る。

柱穴は径60～80cmの不整な円形を呈し、深さは30～50cmを測る。

**第9号掘立柱建物跡**（第101図）

第8号掘立柱建物跡の東側に位置し、同遺構を切って建てられている。

2間(3.6m)×2間(3.6m)の側柱建物である。柱間は桁行・梁行1.6m～2.0mで、2本の柱穴が撹乱により壊されている。主軸方位はN－52°－Eを測る。

柱穴は径30～50cmの不整な円形を呈し、深さ50～80cmを測る。

**第10号掘立柱建物跡**（第101図）

第9号掘立柱建物跡の西側に並例するように位置し、第22号住居跡・第29号住居跡を切って建てられる。

2間(3.5m)×2間(3.5m)の側柱建物である。柱間は桁行・梁行共に1.75m～2.0mである。主軸はN－55°－Eを測り、北側の柱穴を1本欠いている。

柱穴は径30～50cmの不整な円形を呈し、深さ50～100cmを測る。

**第11号掘立柱建物跡**（第102図）

第27号住居跡を切った状態で検出されたものであるが、継がる柱穴は検出されなかった。

柱穴は径80cmの不整な円形を呈し、住居跡床面から50cm、掘り込み面から1.10mを測る。

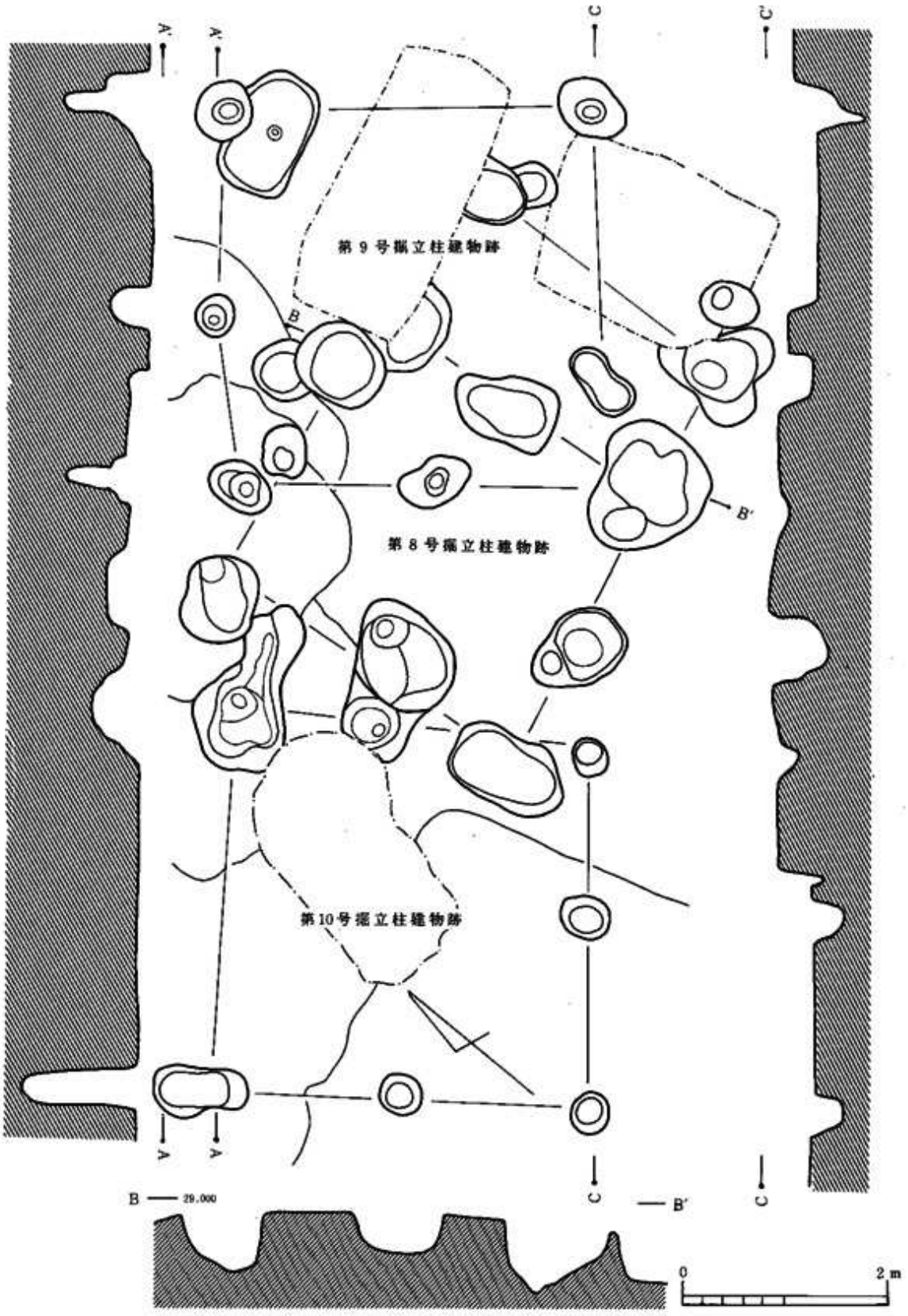
遺物は第102図の長頸瓶の他に第60図9の坏も本建物跡に伴うものと思われる。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 須恵器<br>長頸瓶 | 底径 12.6 | 「ハ」字状の高台を有する底部から緩く立ち上る。内外面に自然釉。 | 緻密 | 良好 | 5YR<br>4/8<br>赤褐 | 胴部下半1/3残存<br>内面5YR4/4暗オリーブ |

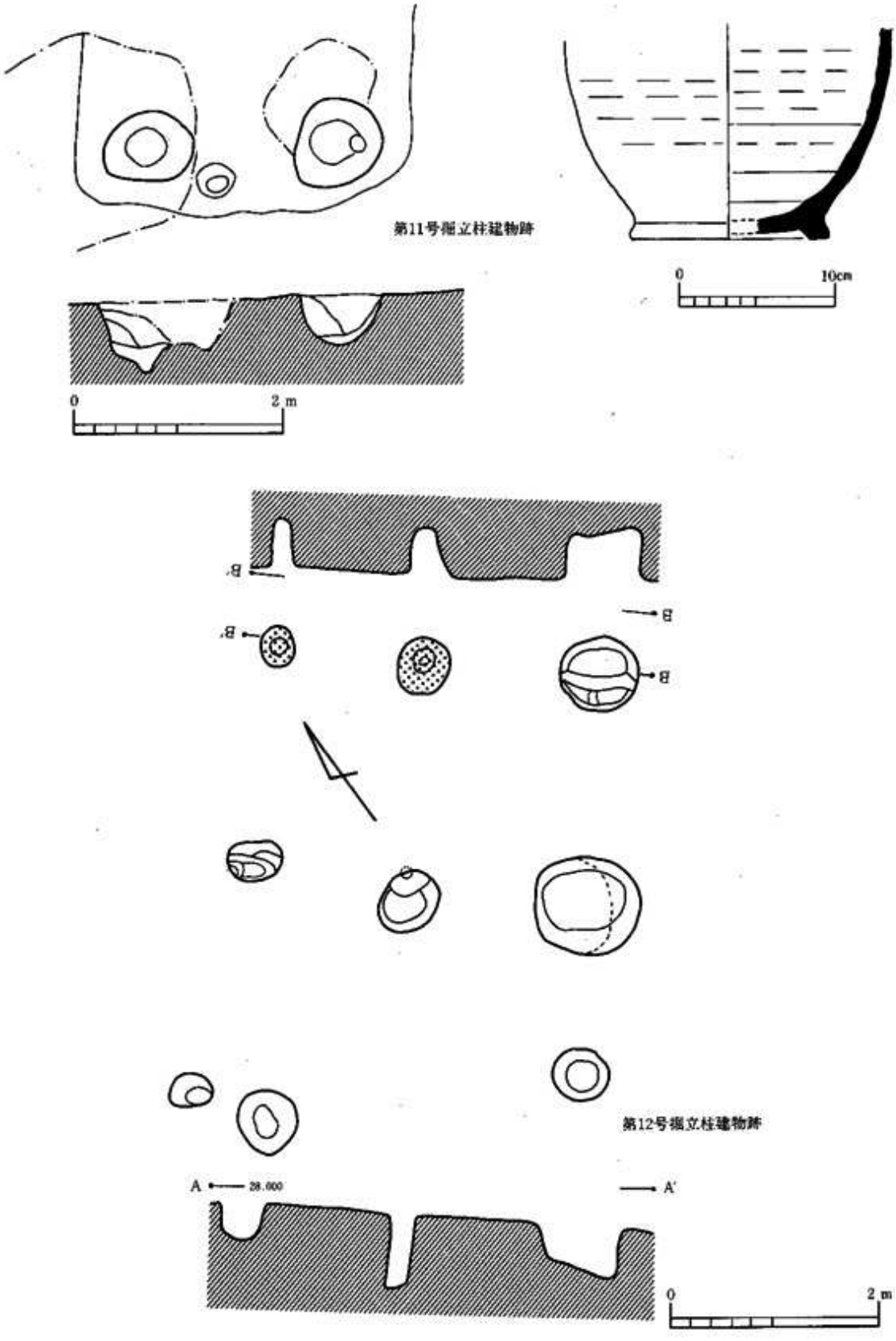
**第12号掘立柱建物跡**（第102図）

5F－cグリッドに中心を持ち、第11号土壙の東側に位置する。

東西棟桁行2間(3.2m)×梁行1間(2.1m)の側柱建物で、桁行の柱間は1.6mである。主軸方位はN－43°－Wを測る。




**第101図　第8・9・10号掘立住建物跡実測図**




**第102図　第11・12号掘立柱建物跡実測図**

柱穴は径30～70cmの不整な円形を呈し、深さ30～70cmを測る。なお、西側の柱側からはキサゴを主体としてカガミガイ・アサリ等により構成される貝ブロックが、真中の柱穴からは中型のハマグリを主体としてアサリ・シオフキ等により構成される貝ブロックが検出される。

**第13号掘立柱建物跡**（第103図）

6Ⅰ－aグリッドに中心を持ち、第46号住居跡を切って建てられている。

2間(3.0～3.3m)×2間(3.0～3.5m)で、柱間は桁行・梁行共に1.2m～1.8mと一定しない。主軸はN－20°－Wを測る。

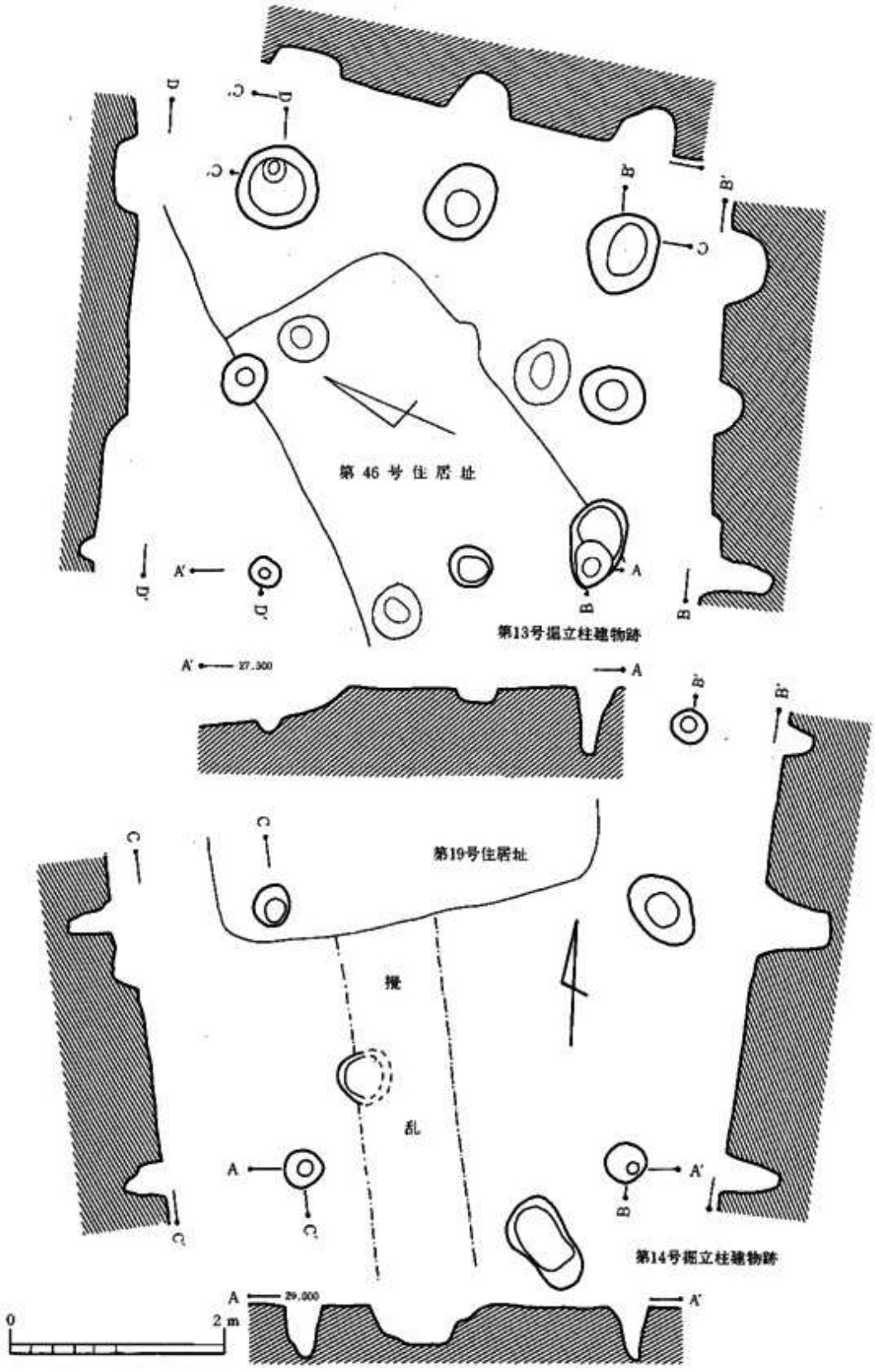
柱穴は径30～70cmの不整な円形を呈し、深さは30～70cmを測る。

**第14号掘立柱建物跡**（第103図）

4D－aグリッドに中心を持ち、第19号住居跡を切って建てられている。

1間(3.1～3.6m)×1間(2.4m)で、主軸はN－90°－Wを測る。

柱穴は径30～40cmの不整な円形を呈し、深さは30～50cmを測る。　（田中英世）




**第103図　第13・14号掘立柱建物跡実測図**

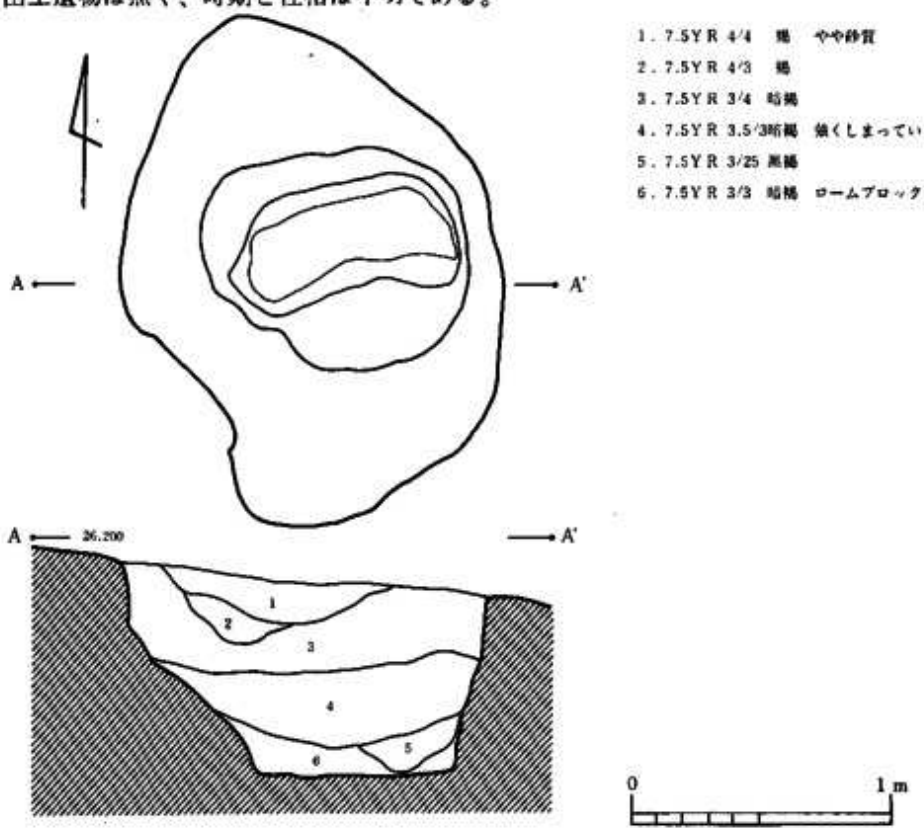
## 3．土　壙

土壙は第１次調査部分で３基が、また第２次調査部分で12基が検出された。いずれも時期は古墳時代から平安時代にかけての所産である。性格を伺えるものは少ないが、第11号土壙は人骨と共に鉄鏃が出土しており、戦死者等の墓壙と考えられる。

### 第１号土壙（第104図）

本土壙は、７Ｆ－ｂグリッドに位置する。規模は上面での南北長1.5×東西長2.0ｍ、底面の南北長0.2×東西長0.9ｍ、深さ0.8を測り、上面でのプランは不整形で、底面では不整な長方形を呈する。長軸方位はＮ－76°30′－Ｅをとる。

出土遺物は無く、時期と性格は不明である。

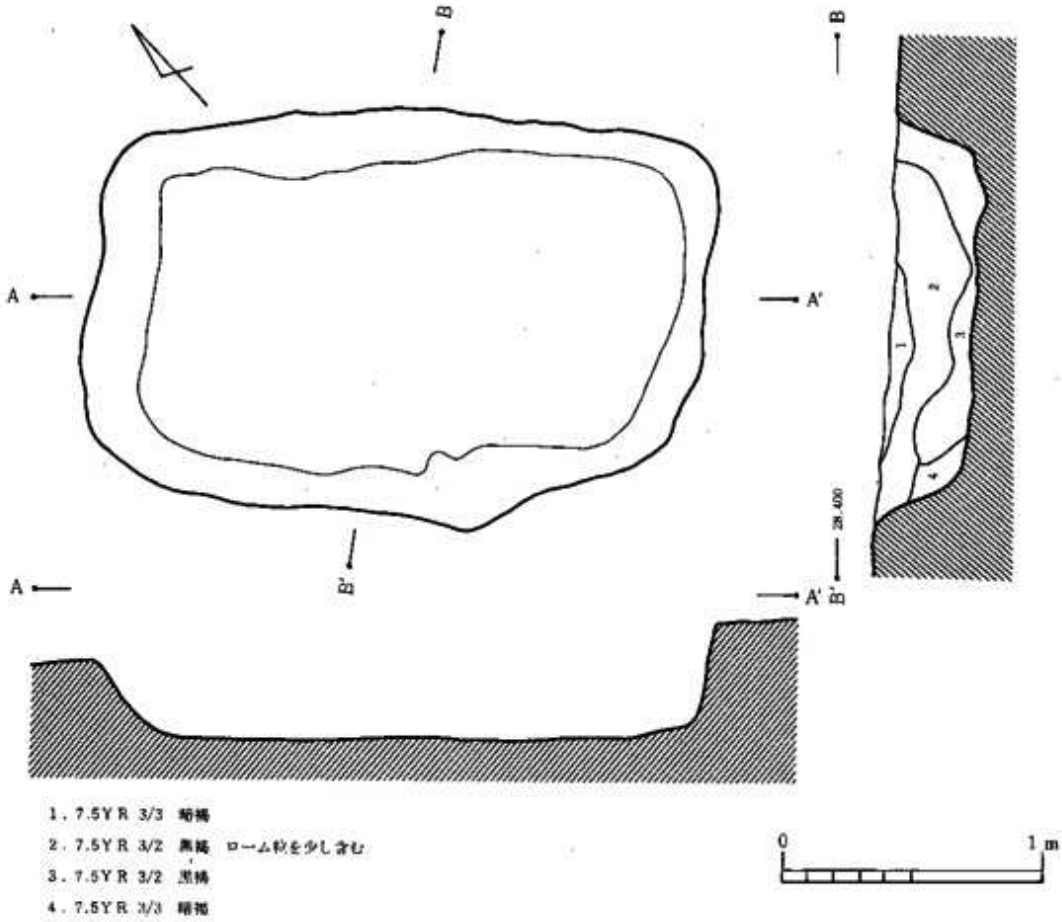



第104図　第１号土壙実測図

### 第２号土壙（第105図）

本土壙は６Ｉ－ｂグリッドに中心を持つ。規模は、南北長2.3×東西長1.6ｍ、深さ0.3ｍの長方形を呈する。長軸方位はＮ－49°－Ｗである。

出土遺物は無く、時期と性格は不明である。




**第105図　第２号土壙実測図**

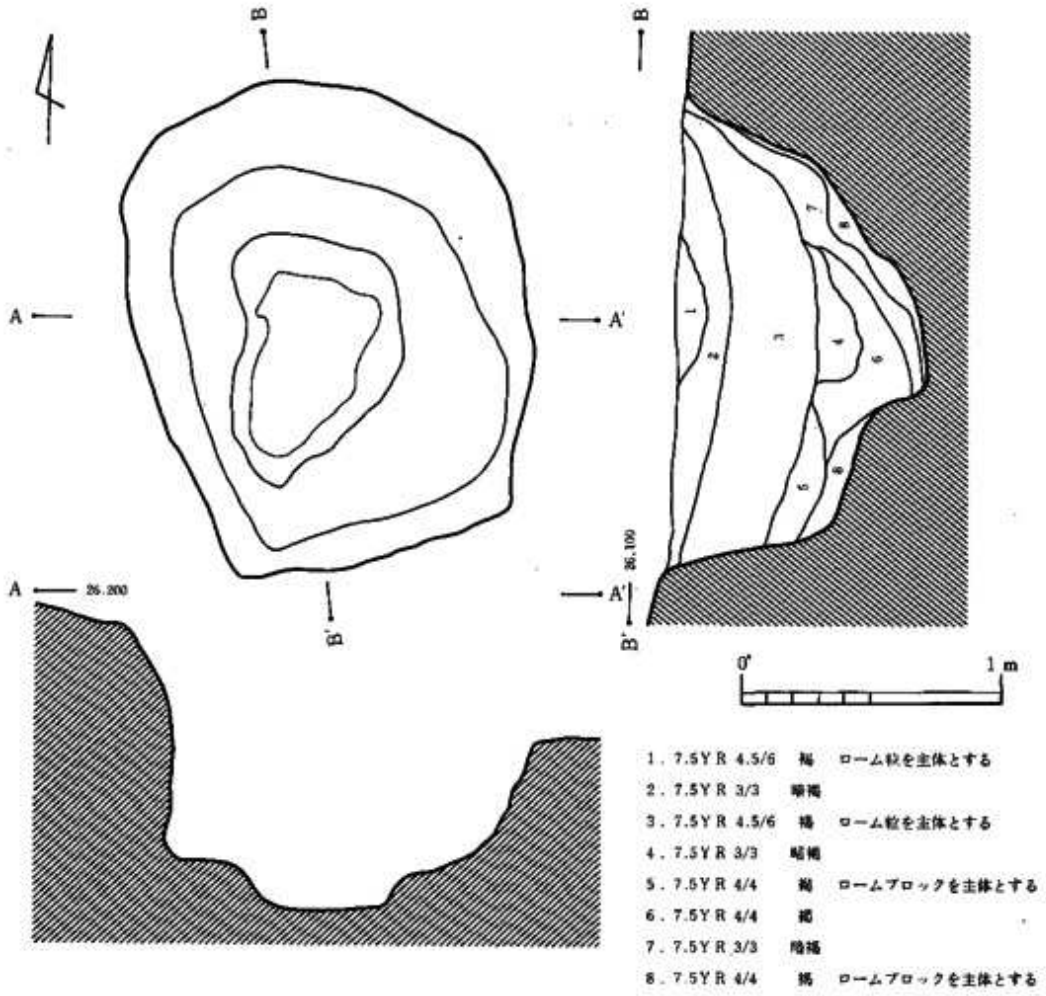
**第３号土壙**（第106図）

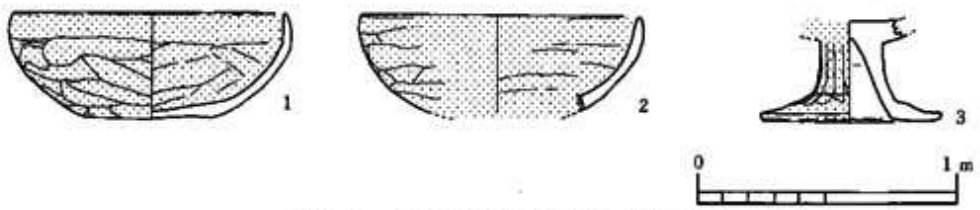
本土壙は、８Ｉ－ｂグリッドに位置する。

規模は、南北長1.9ｍ×東西長1.5ｍ、深さ1.0ｍを測り、上下２段の掘り方を持ち、上面は不整方形、下面は不整形である。長軸方位はＮ－23°30′－Ｅである。

出土遺物は土師器杯２点と高杯脚部１点である。杯と脚はいずれも赤彩がほどこされ、古墳時代後期のものである。　（倉田　義広）

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>坏 | 口径 14.2<br>器高 5.5<br>底径 6.3 | 小径の底部から内反気味に立ち上がった体部は、口縁部でわずかに内傾する。ロクロ未使用。体部の外面は箆削り。体部および底部内面は箆撫で。 | | 良好 | 2.5YR<br>4/6<br>赤褐 | 内外面赤彩<br>完形 |
| 2 | 土師器<br>坏 | 口径(14.5)<br>現存高 5.1 | 内反気味に立ち上がった体部は、口縁部で直立する。ロクロ未使用。体部外面は箆削り。体部内面箆撫で。 | 内色砂粒・石英粒・小石 | 良好 | 2.5YR<br>4/8<br>赤褐 | 内外面赤彩<br>1/2残存 |




**第106図　第３号土壙と遺物実測図**

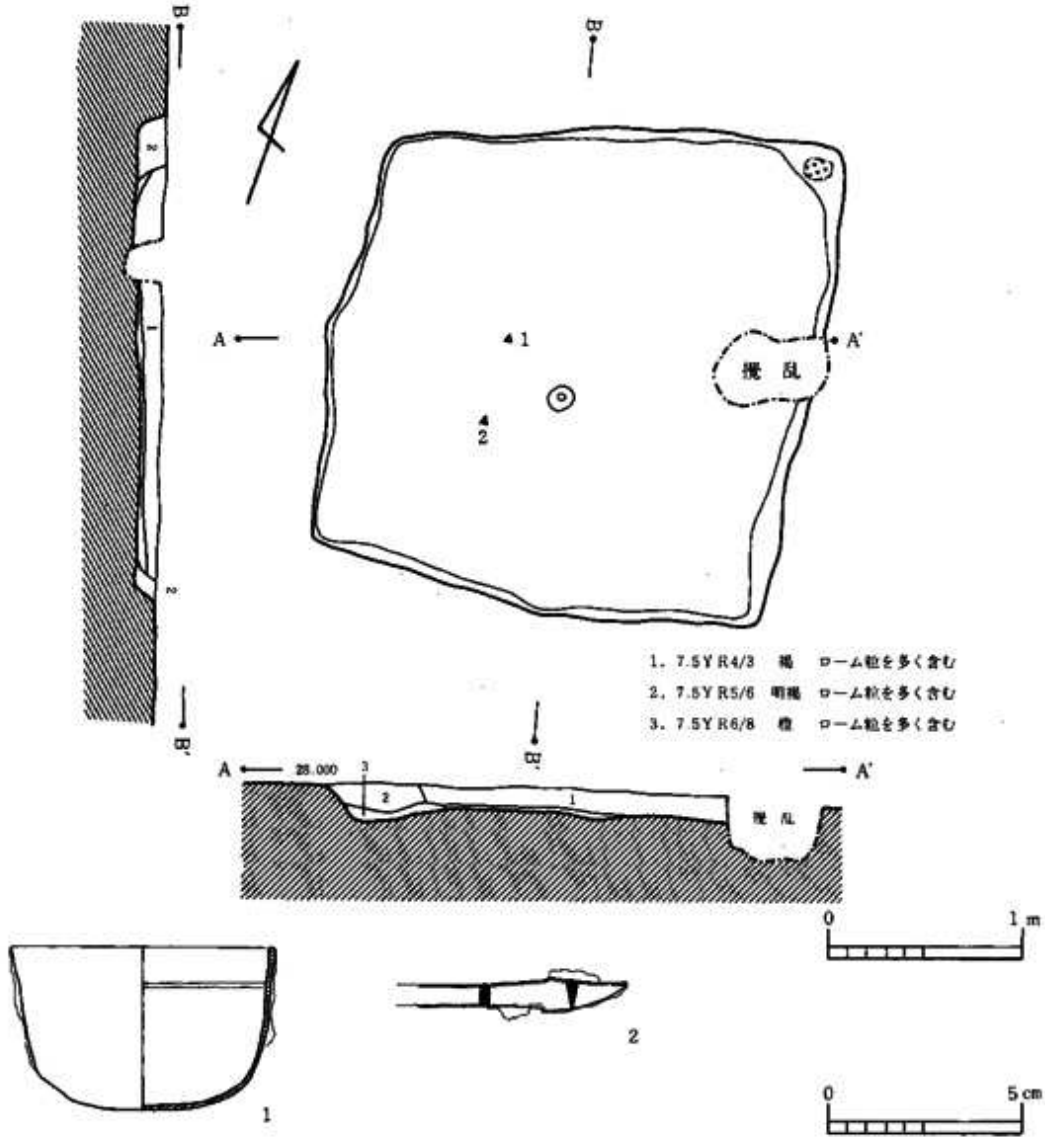
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | 土師器<br>高坏 | 現存高 5.2<br>底径 9.4 | 底面と脚部内面との境に稜をもつ。 | 赤褐色粒 | 良好 | 10R<br>4/6<br>赤 | 内面赤彩<br>坏部を欠損 |

**第４号土壙**（第40図）

第21号住居跡の西側に隣接しており、住居跡により切られ規模・形状は不明であるが、方形をなしていたと思われる。壁高は20cmで壁は明瞭であった。出土遺物はない。

**第５号土壙**（107図）

埋没谷の４Ｇ－ｄグリッドより検出され、3.8ｍ×3.7ｍの方形を呈し、壁高は20cmを測り主軸はＮ－17°－Ｗをとる。当初住居跡として調査したが、カマド・柱穴等が認められず土壙とした。竪穴状遺構と呼ぶべきものであろう。床面はローム面まで達しておらず、中央部には部分




**第107図　第５号土壙と遺物実測図**

的な竪固な面が認められたが、周辺部は軟弱で壁の立ち上がりも不明瞭であった。遺構内からは鉄椀１点・鉄鏃１点が出土している。第11号土壙と関係するものと思われる。

No.１の鉄椀は径6.8cm・器高4.2cm、No.２は有茎片刃箭式の鉄鏃で刃長2.3cm・厚さ0.3cmを測る。

**第６号土壙**（第108図）

第39号住居跡の床面下より検出されたもので、上面は撹乱を受けて住居跡との新旧関係は不明である。規模は3.8ｍ×3.7ｍの円形を呈し、壁高が90cmを測る円筒形をなす。遺構内からの遺物は出土はみられず、覆土も暗褐色土をベースとしている。他の土壙の形状等の相異から縄文時代の貯蔵穴の可能性も考えられる。

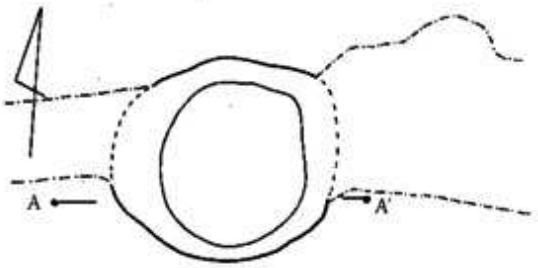
**第７号土壙**（第108図）

第24号住居跡床面の西側から検出されたもので、規模は1.3ｍ×0.7ｍの楕円形をなし、主軸はＮ－83°－Ｅをとる。壁高は住居跡床面から50cmを測り、覆土内には焼土層の混入が認められる。遺構内からは坏２点・甕１点が出土しており、No.１は南壁に貼り付いた状態で、No.２は底面上より出土している。No.３・No.４の甕は同一個体と思われる。なお本土壙は住居跡の掘り込みを考慮すれば深さは90cmとなる。

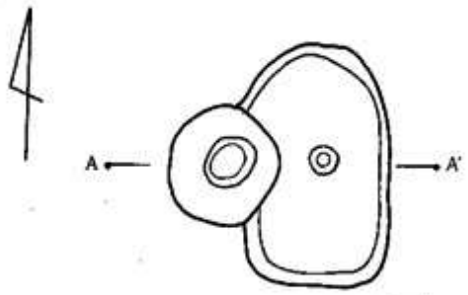
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL-46 | 須恵器<br>坏 | 口径 13.6<br>器高 4.3<br>低径 7.4 | 底部から直線的に立ち上り、口縁部に到る。体部下端は手持ちヘラ削り。底部はヘラ切り後全面手持ちヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み粗い | 良好 | 5Y<br>7/2<br>灰白 | 完形 |
| 2 | 土師器<br>坏 | 口径(13.4)<br>器高 4.0<br>低径( 6.8) | 上底気味の底部から内彎気味に立ち上がり、口縁は小さく外半する。体部下端は回転ヘラ削り。底部は全面手持ちヘラ調整。 | 大粒の石英粒・鉱物粒を多く含み粗い | 良好 | 5YR<br>5/8<br>明赤褐 | 体部1/5残存 |
| 3 | 須恵器<br>甕 | 底径 7.6 | 小径な底部より内彎気味に立ち上がる。 | 大粒の石英粒を多く含み粗い | 良好 | N<br>5/<br>灰 | 底部残存 |

**第８号土壙**（第109図）

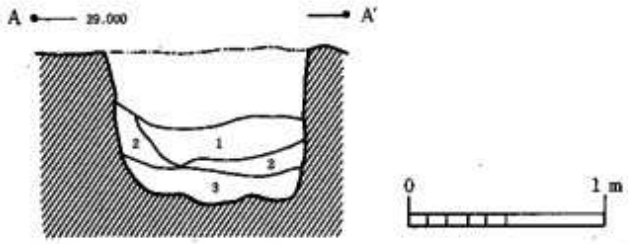
第22号住居跡の北側に位置し、規模は径1.2ｍ、壁高0.7ｍの擂鉢上を呈する。第22号住居跡のカマドを壊して作られたと思われ、覆土には砂質粘土が混入する。遺構内からは甕１点・坏

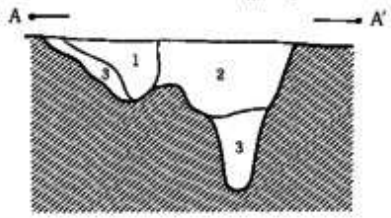



第６号土壙



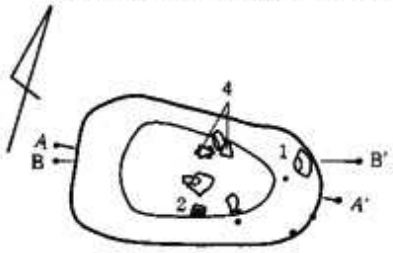

第13号土壙



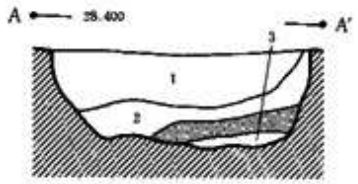



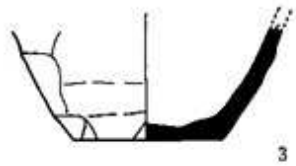

〈第13号土壙〉
1：7.5Y R3/4：暗褐：1cm大のローム・ブロックを含む
2：7.5Y R3/4：暗褐：5cm大のローム・ブロックを含む
3．7.5Y R3/3：暗褐：1cm大のローム・ブロックを含む

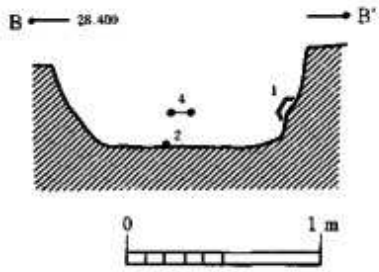
〈第６号土壙〉
1：7.5Y R3/3：暗褐：1cm大のローム・ブロックを含む
2：7.5Y R3/2：黒褐：5mm大のローム・ブロックを含む
3：7.5Y R3/4：暗褐：2cm大のローム・ブロックを含む

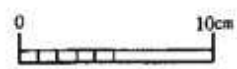



第７号土壙






〈第７号土壙〉
1：7.5Y R4/4：褐：ローム粒を多く含む
2：7.5Y R4/3：褐：焼土粒を多く含む
3：7.5Y R4/6：褐：ローム粒を多く含む

**第108図　第６・７・13号土壙と遺物実測図**

3点の他に刀子1点・鉄鏃1点が出土しているが、いずれも砂質粘土下の黒褐色土からの出土である。No.5の刀子は刃長4.0cm・刃幅1.1cm・厚さ0.2cm・No.6は有茎腸抉三角形式の鉄鏃で刃長2.5cmを測る。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>甕 | 口径(15.0) | 最大径を躯部上半に持ち、口縁部は小さく外に開く。胴部上半は縦のヘラ削り。下半は縦のヘラ削り後、横のヘラ削り。 | 細かい石英粒・鉱物粒を含む | 良好 | 2.5YR<br>4/8<br>赤褐 | 胴部上半1/3残存 |
| 2<br>PL-46 | 土師器<br>坏 | 口径(12.6)<br>器高 3.8<br>底径( 6.0) | 底部から内彎気味に立ち上がり口縁部は小さく外反する。体部下半は回転ヘラ削り。底部は切り離し不明。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み粗い | 堅良好 | 7.5YR<br>3/3<br>暗褐 | 体部1/4残存 |
| 3<br>PL-46 | 土師器<br>坏 | 口径 13.0<br>器高 4.1<br>底径 7.4 | 底部から内彎気味に立ち上り口縁部は小さく開く。体部下端は回転ヘラ削り。器壁は1cmと厚い。底部は回転糸切り後外周部回転ヘラ調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含む | 良好 | 2.5YR<br>4/8<br>赤褐 | 完形 |
| 4<br>PL-46 | 土師器<br>坏 | 口径(12.6)<br>器高 3.4<br>底径 6.4 | 底部から内彎気味に立ち上り口縁は小さく外反する。体部下半の調整は不明。底部は回転糸切り後、外周部回転ヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み砂質 | 堅良好 | 7.5YR<br>6/8<br>橙 | 底部・体部1/3残存 |

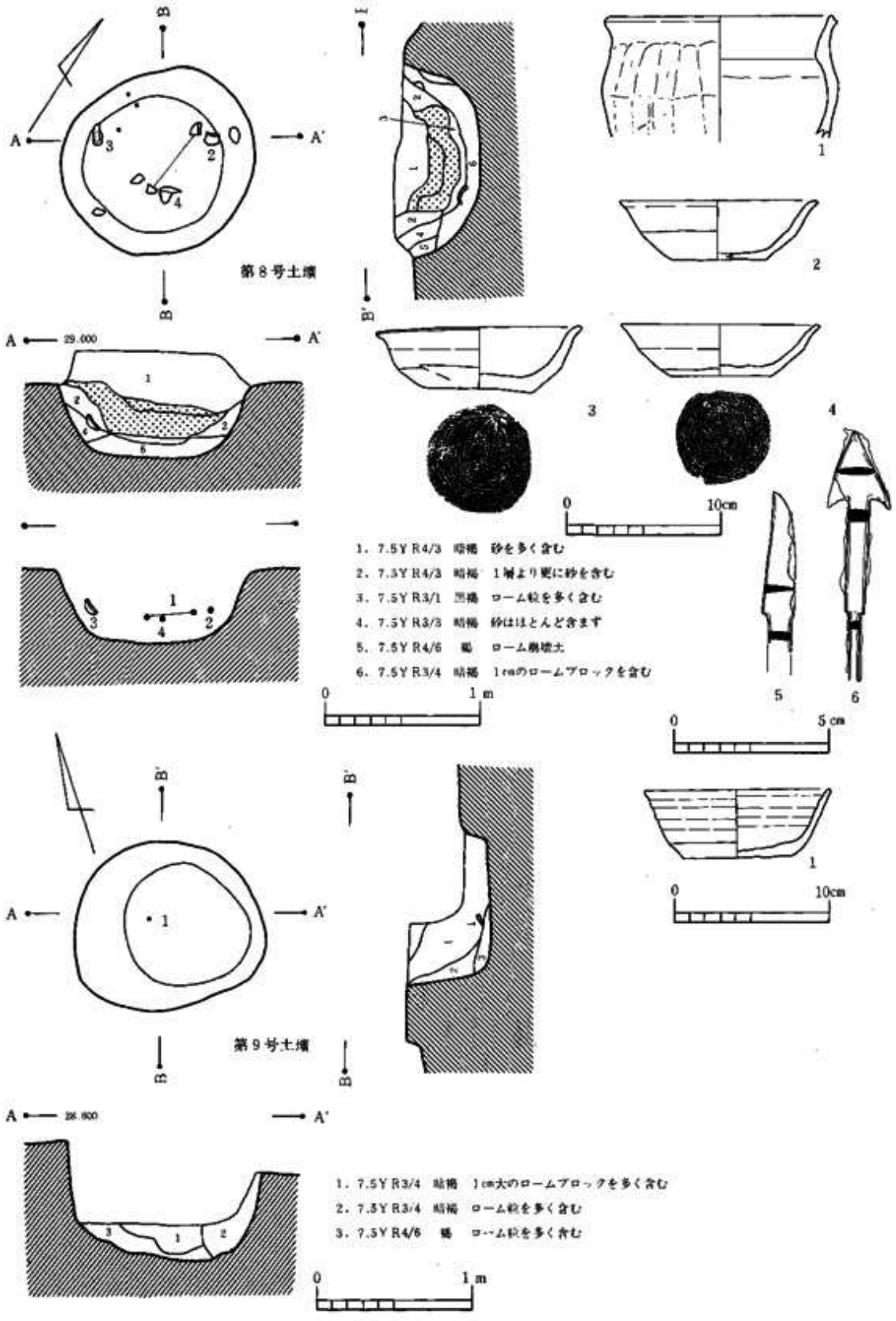
**第9号土壙**（第109図）

第37号住居跡北西隅に位置し、住居跡を切ってつくられている。規模は1.3m×1.1m、壁高80cmの円筒状を呈し、上面は攪乱を受けている。遺構内からは坏が1点出土しているのみである。

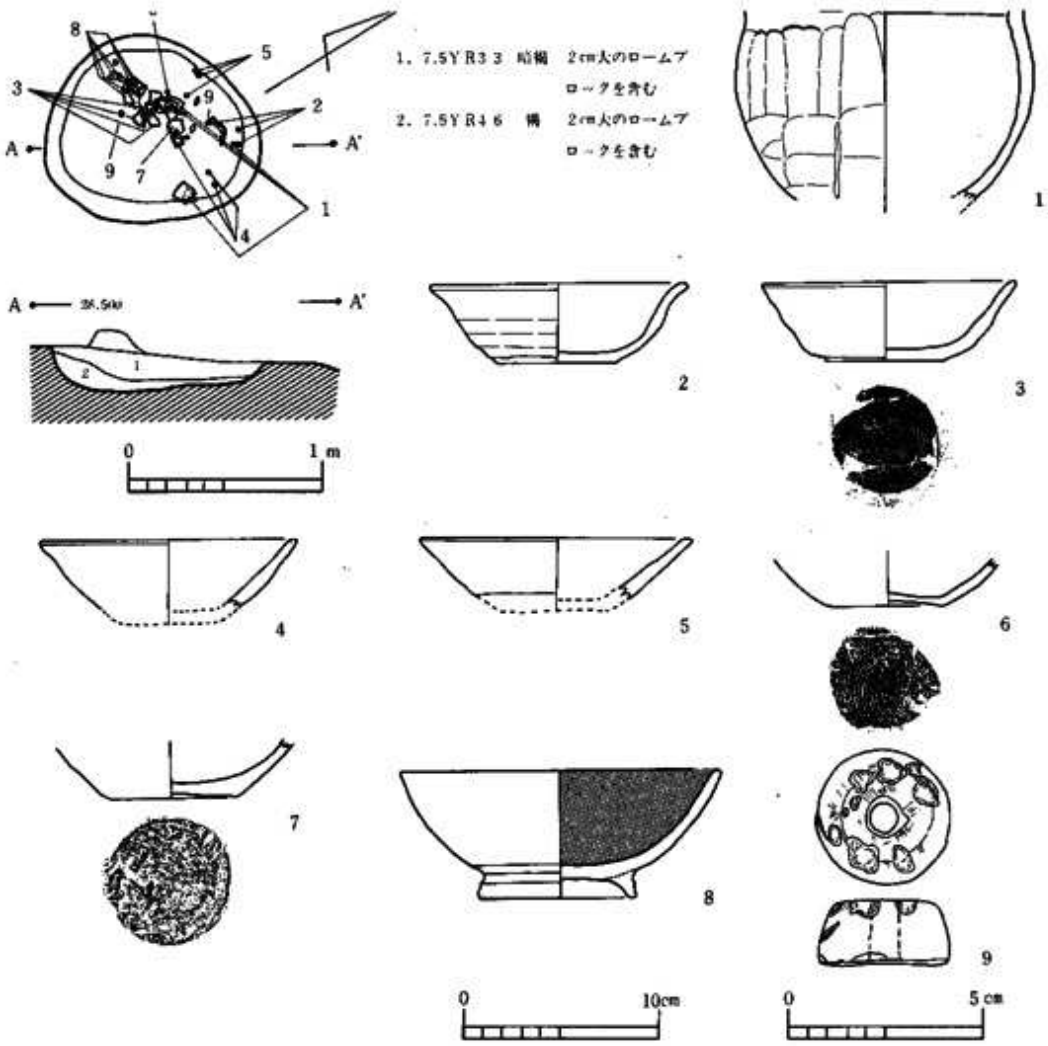
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>坏 | 口径(12.0)<br>器高 4.5<br>底径( 6.6) | 底部より内彎気味に立ち上り口縁部は直線的に開く。体部下半は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後、外周部回転ヘラ調整。 | 石英粒・長石粒を多く含む | 良好 | 7.5YR<br>6/8<br>橙 | 体部1/3残存 |

**第10号土壙**（第110図）

第33号住居跡覆土内から検出されたもので、住居跡覆土内にみられる焼土を切って作られている。規模は径1.0mの円形を呈し、検出面からの深さは25cmであるが、住居跡の掘込面から




**第109図　第８・９号土壙と遺物実測図**




**第110図　第10号土壙と遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL-46 | 土師器<br>甕 | 口径(15.4) | 最大径を口縁部と胴部に持ち口縁部は「く」字状に外反する。胴部上半は縦のヘラ削り。下半は横のヘラ削り。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み粗い | 良好 | 10YR<br>5/8<br>黄褐 | 胴部上半2/3残存 |
| 2<br>PL-46 | 土師器<br>坏 | 口径 13.2<br>器高 4.0<br>底径 6.2 | 底部より内湾気味に立ち上り口縁部は緩く外反する。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後全面回転ヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み粗い | 良好 | 10YR<br>5/8<br>黄褐 | 口縁部一部欠損 |
| 3<br>PL-46 | 土師器<br>坏 | 口径 12.8<br>器高 4.0<br>底径 6.0 | 底部より直線的に立ち上り、口縁部に至る。底部は回転糸切り後外周部手持ちヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を含み粗い | 極良好 | 2.5YR<br>5/8<br>明赤褐 | 完形 |
| 4 | 土師器<br>坏 | 口径(13.0) | 底部より直線的に開いて口縁部に至る。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み粗い | 極良好 | 2.5YR<br>4/8<br>赤褐 | 体部上半1/2残存 |

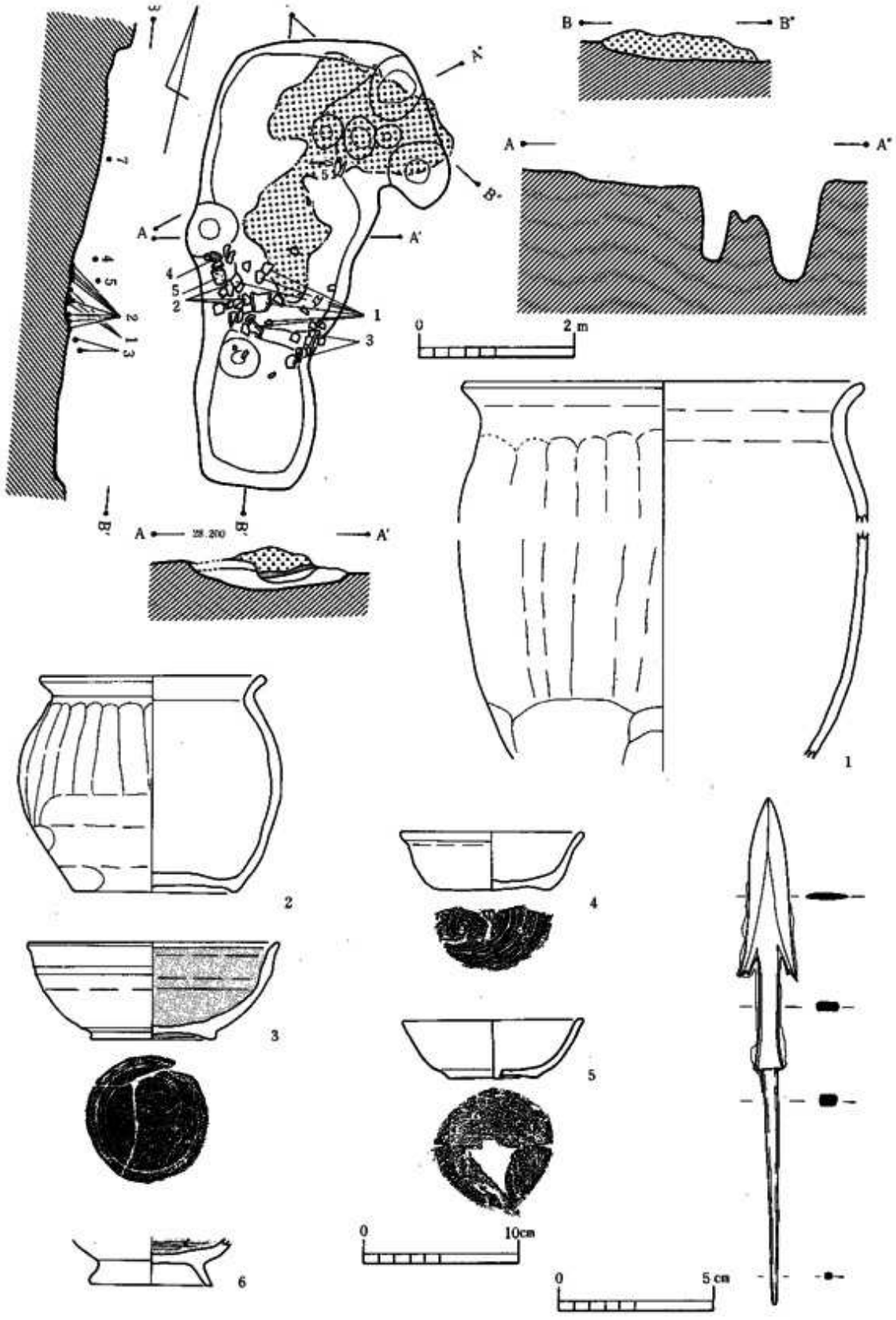
| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | 土師器<br>坏 | 口径(14.0) | 底部より直線的に至る。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み粗い | 極良好 | 10YR<br>4/6<br>褐 | 体部上半1/2残存 |
| 6 | 土師器<br>坏 | 底径 6.4 | 底部より内湾気味に立ち上る底部回転糸切り後外周部手持ヘラ調整。 | 石英粒・長石粒を多く含み砂質 | 良好 | 2.5YR<br>5/8<br>明赤褐 | 底部のみ |
| 7 | 土師器<br>坏 | 底径( 7.0) | 底部より内湾気味に立ち上る底部は回転糸切り後無調整。 | 石英粒・長石粒を多く含み砂質 | 良好 | 2.5YR<br>5/8<br>明赤褐 | 底部のみ |
| 8<br>PL- 46 | 土師器<br>高台付<br>椀 | 口径 16.2<br>器高 6.6<br>底径 8.0 | 「ハ」字状の高台を貼付けた底部より半円状に立ち上りロ縁に至る。底部は回転ヘラ切り後全面回転ヘラ調整。内面は黒色磨研。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み粗い | 良好 | 2.5YR<br>4/8<br>赤褐 | 完形 |

は90cmを測る。遺物は甕1点・坏4点・高台付椀1点・石製紡錘車1点の6点が出土している他、回転糸切りの底部破片が多く出土している。

**第11号土壙**（第111図）

埋没谷の5F－cグリッドから検出されたもので、長軸2.9m・短軸1.0mの不整形を呈し、深さ10cmを測り、主軸はN－20°－Wをとる。北側から人間の大腿骨と思われる部分に鉄鏃が刺さった状態で検出されており、その上を貝層と灰層が覆っていた。底面はソフトローム上面で明確ではなく、壁も不明瞭である、貝ブロックはキサゴを主体としたもので、その他に大型のハマグリ・アサリ・ニナ・ツメタガイを含んでいる。周辺には貝ブロックを伴うピット群が点在する他、西側に位置する第12号掘立柱建物跡にも貝ブロックが存在し、これらは一連の遺構と思われる。遺物は中央部の西側に集中的に見られ、甕2点・坏3点・高台付坏1点・鉄鏃1点の他に周辺グリッドから更に若干の遺物が出土している。鉄鏃は棘箆被柳葉型式で、全長16.3cm・刃長5.8cm・刃幅1.3cm・箆被4.0cmを測る完形である。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>甕 | 口径(26.0) | 最大径を口縁部と胴部上半に持ち、口縁部は緩く開く。胴部上半は縦のヘラ削り。下半は横のヘラ削り。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み粗く砂質 | 良好 | 7.5YR<br>5/8<br>明褐色 | 胴部1/4残存 |
| 2<br>PL- 47 | 土師器<br>甕 | 口径 14.2<br>器高 14.0<br>底径 10.2 | 最大径を胴部中央に持ち、口縁は短く「く」字状に開き底部は上底となる。胴部上半は縦のヘラ削り。下半は横のヘラ削り。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み粗く砂質 | 良好 | 7.5YR<br>6/6<br>橙 | 胴部1部欠損 |



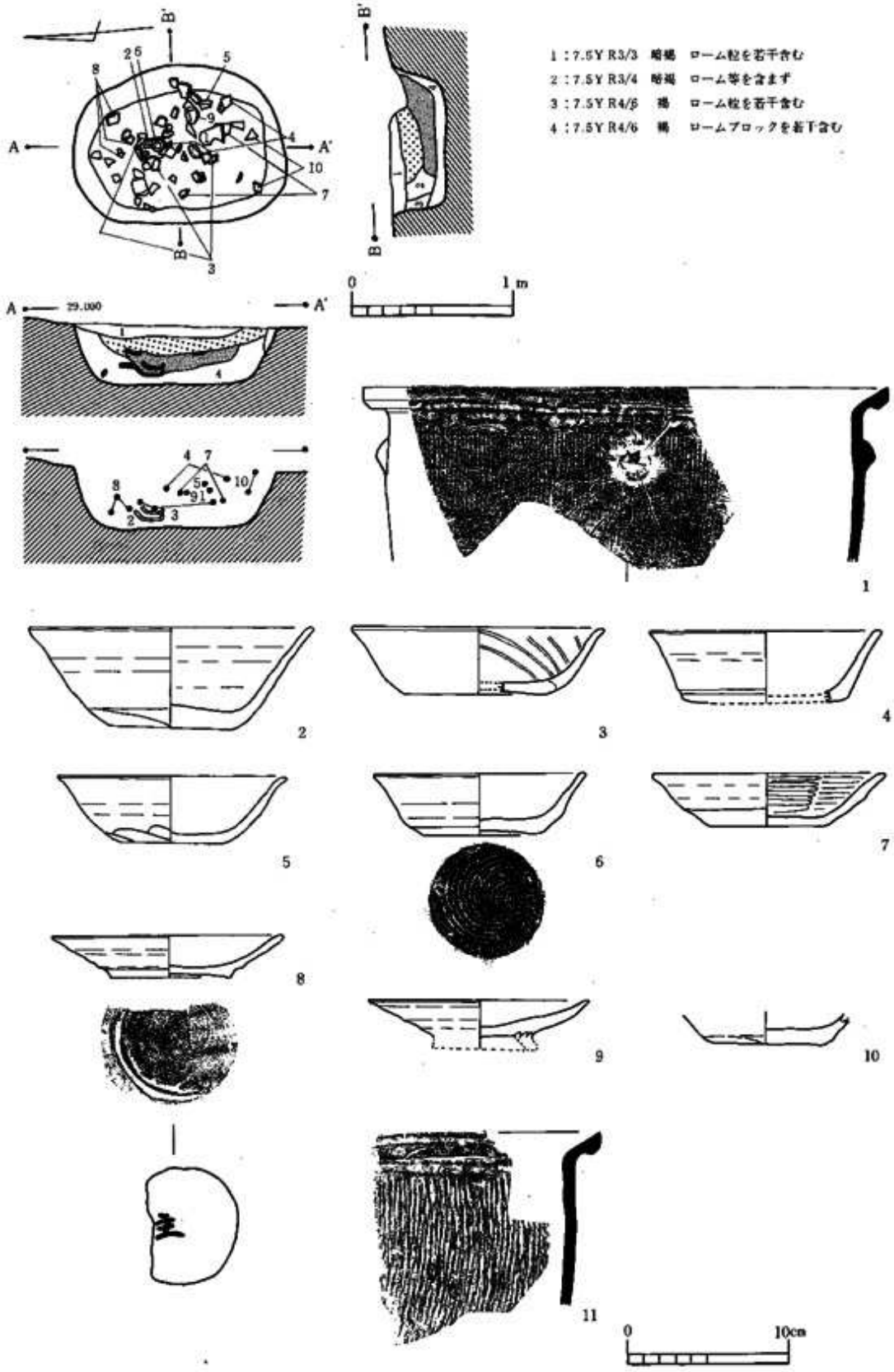

**第111図　第11号土壙と遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3<br>PL- 47 | 土師器<br>坏 | 口径(16.0)<br>器高 6.3<br>底径 8.0 | 上底の底部から内湾気味に立ち上り、口縁部は緩く外反する。体部下端を削り、高台状にする。底部は回転糸切り後外周部回転ヘラ調整。内面は黒色磨研。 | 微粒の長石粒を若干含むも粒子細 | 良好 | 7.5YR<br>4/6<br>明赤褐 | 底部・体部1/2残存 |
| 4<br>PL- 47 | 土師器<br>坏 | 口径(11.8)<br>器高 3.8<br>底径( 7.4) | 底部より直線的に立ち上りロ縁部に至る。底部は回転糸切り後無調整。 | 細かい長石粒・金雲母粒を含む | 極良好 | 7.5YR<br>5/5<br>明褐 | 体部1/2残存 |
| 5 | 土師器<br>坏 | 口径(11.7)<br>器高 3.7<br>底径( 5.4) | 底部より屈曲を持って立ち上り、直線的に開く。底部は回転糸切り後無調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を含み粗い | やや不良 | 5YR<br>5/8<br>明褐 | 体部1/2残存<br>歪みが著しい |
| 6 | 土師器<br>高台付<br>坏 | 底径 7.8 | 「ハ」字状の高台を貼り付け、体部は緩く内湾気味に立ち上る。底部は回転ヘラ切り。内面は黒色磨研。 | 石英粒・長石粒を多く含み粗い | 良好 | 7.5YR<br>6/6<br>橙 | 底部のみ残存 |

**第12号土壙**（第112図）

5C－dグリッドより検出されたもので、規模は2.6m×2.0mの楕円形を呈し、壁高は70cm、主軸は北をとる。覆土内には砂層および焼成を受けた砂の混入がみられ、甕1点・坏5点・皿2点・高台付皿2点が砂層から出土している。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>PL- 47 | 須恵器<br>甕 | 口径(33.0) | 直線的な胴部から口縁部は「く」字状に開く。外面縦のタタキ。 | 大粒の鉱物粒を多く含む | 極良好 | 5YR<br>4/8<br>赤褐 | 胴部上半1/6残存 |
| 2<br>PL- 47 | 土師器<br>坏 | 口径 17.6<br>器高 6.3<br>底径 7.6 | 厚い底部より直線的に開き口縁部に至る。体部下端は手持ちヘラ削り。底部は回転ヘラ切り後全面手持ちヘラ調整。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み砂質 | やや不良 | 5YR<br>4/8<br>赤褐 | 口縁部一部欠損 |
| 3<br>PL 47 | 土師器<br>坏 | 口径(15.4)<br>器高 4.2<br>底径( 8.8) | 底部から内湾気味に立ち上り口縁部は緩く外反する。内面に薄い暗文が施され、丁寧な磨きが行なわれる。 | 細かい石英粒・長石粒を多く含み砂質 | 良好 | 7.5YR<br>4/6<br>褐 | 体部1/2残存 |
| 4<br>PL- 47 | 土師器<br>坏 | 口径(14.2)<br>器高 4.6<br>底径(10.0) | 底部から直線的に立ち上り、口縁部は小さく外反する。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含む | 良好 | 7.5YR<br>3/3<br>暗褐 | 体部1/4残存 |
| 5<br>PL- 47 | 土師器<br>坏 | 口径(13.0)<br>器高 3.8<br>底径 7.1 | 底部から直線的に立ち上り、口縁部は小さく外反する。体部下端は回転ヘラ削り。底部回転糸切り後外周部回転ヘラ調整。 | 大粒の石英粒・長石粒を多く含み粗い | 良好 | 7.5YR<br>4/6<br>褐 | 口縁部1/3欠損 |




**第112図　第12号土壙と遺物実測図**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6 | 土師器皿 | 口径(14.4)<br>器高 3.3<br>底径( 6.6) | 底部から直線的に開き口縁部に至る。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転ヘラ切り後全面回転ヘラ調整。 | 石英粒・長石粒を多く含み粗い | 良好 | 7.5YR<br>4/8<br>赤褐 | 底部1/2・口縁部1/6残存 |
| 7 | 土師器皿 | 口径(14.4)<br>器高 2.6<br>底径 7.2 | 上底風の底部より直線的に開く。底部は回転糸切り後無調整。内面は丁寧な磨き。 | 細かい鉱物粒を若干含むも緻密 | 良好 | 7.5YR<br>4/6<br>褐 | 体部1/2残存<br>底面に墨書 |
| 8 | 土師器高台付皿 | 口径(13.2) | 内彎気味に立ち上り、口縁部は尖がる。底部は回転ヘラ切り。 | 大粒の石英粒・長石粒含み砂質 | 良好 | 10YR<br>3/4<br>暗褐 | 体部2/3残存<br>底面に墨書 |
| 9 | 土師器高台付坏 | | 直線的に大きく開く。底部は回転ヘラ切り。 | 石英・長石粒を多く含む | 良好 | 7.5YR<br>4/6<br>褐 | |

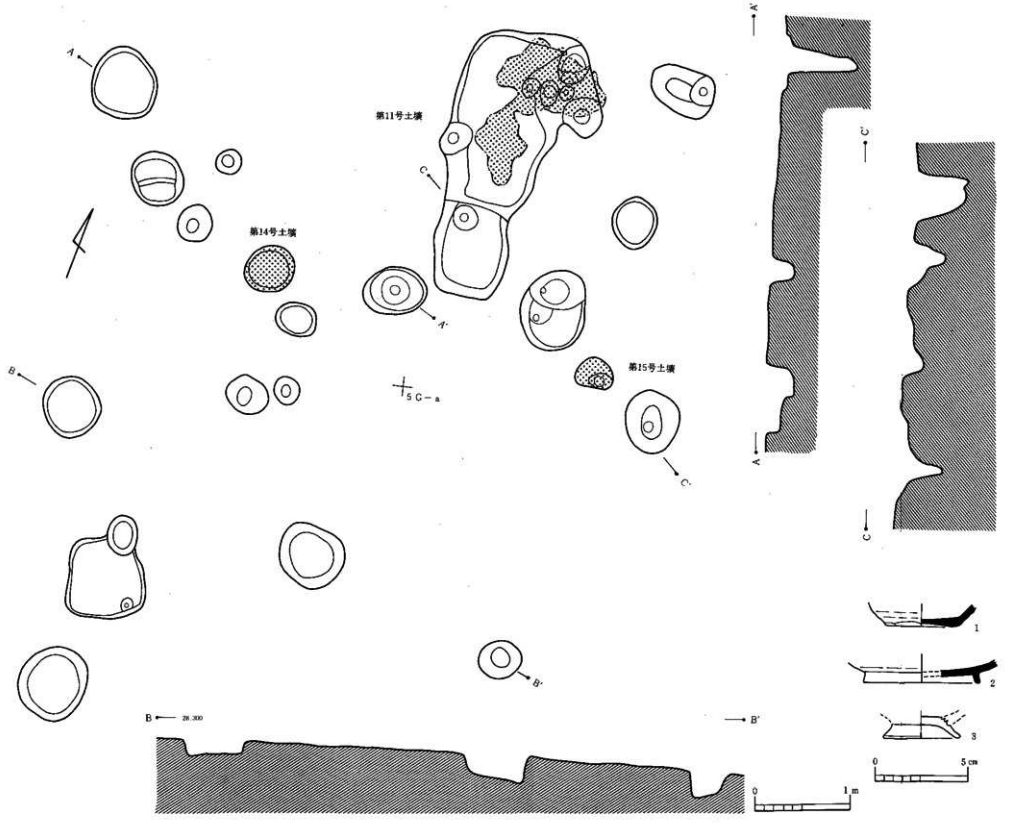
**第13号土壙**（第106図）

第43号住居跡の東側に位置し、第９号掘立柱建物跡の柱穴に切られている。規模は1.20ｍ×0.76ｍの楕円形をなし、主軸はＮ－17°－Ｗをとる。壁高は40cmを測り、床面に径15cm・深さ40cmの小ピットを有する。遺物の出土はみられない。

**５Ｇ－ａグリッド土壙群**（第113図）

第11号土壙の南側から、不定形なピット群が検出された。このうち貝ブロックを包蔵するものを第14号土壙・第15号土壙として捉えた。第14号土壙は径50cm・深さ12cmで、カガミガイを主体としており、第15号土壙は径40cm・深さ35cmで、キサゴを主体としてアサリ・カガミガイを含んでいる。周辺からは坏１点・高台付坏２点が出土している。　　（田中　英世）

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 須恵器坏 | 底径( 8.0) | 体部下端は手持ちヘラ削り。底部は回転ヘラ切り後、全面回転ヘラ調整。 | 大粒の長石粒を多く含み粗い | 良好 | ５ＢＧ<br>6/1<br>青灰 | |
| 2 | 須恵器高台付盤 | 底径(12.4) | 「ハ」字状の高台を貼り付ける。底部は回転ヘラ切り。 | 細かい鉱物粒を多く含むも緻密 | 良好 | ５ＢＧ<br>5/1<br>青灰 | |
| 3 | 土師器台付瓶 | | 「ハ」字状の脚部を有する。 | 細かい鉱物粒を多く含む | 良好 | ５ＢＧ<br>4/6<br>褐 | |




第113図　5G－aグリッド土壙群実測図

## 4．溝　跡

溝跡は、3条が検出された。いずれも時期と性格は不明である。

**第1号溝跡**（第114図）

本溝跡は5C－bから5C－d、6C－dグリッドにかけて検出された。1号掘立柱建物跡と1号住居跡の西側に位置する。

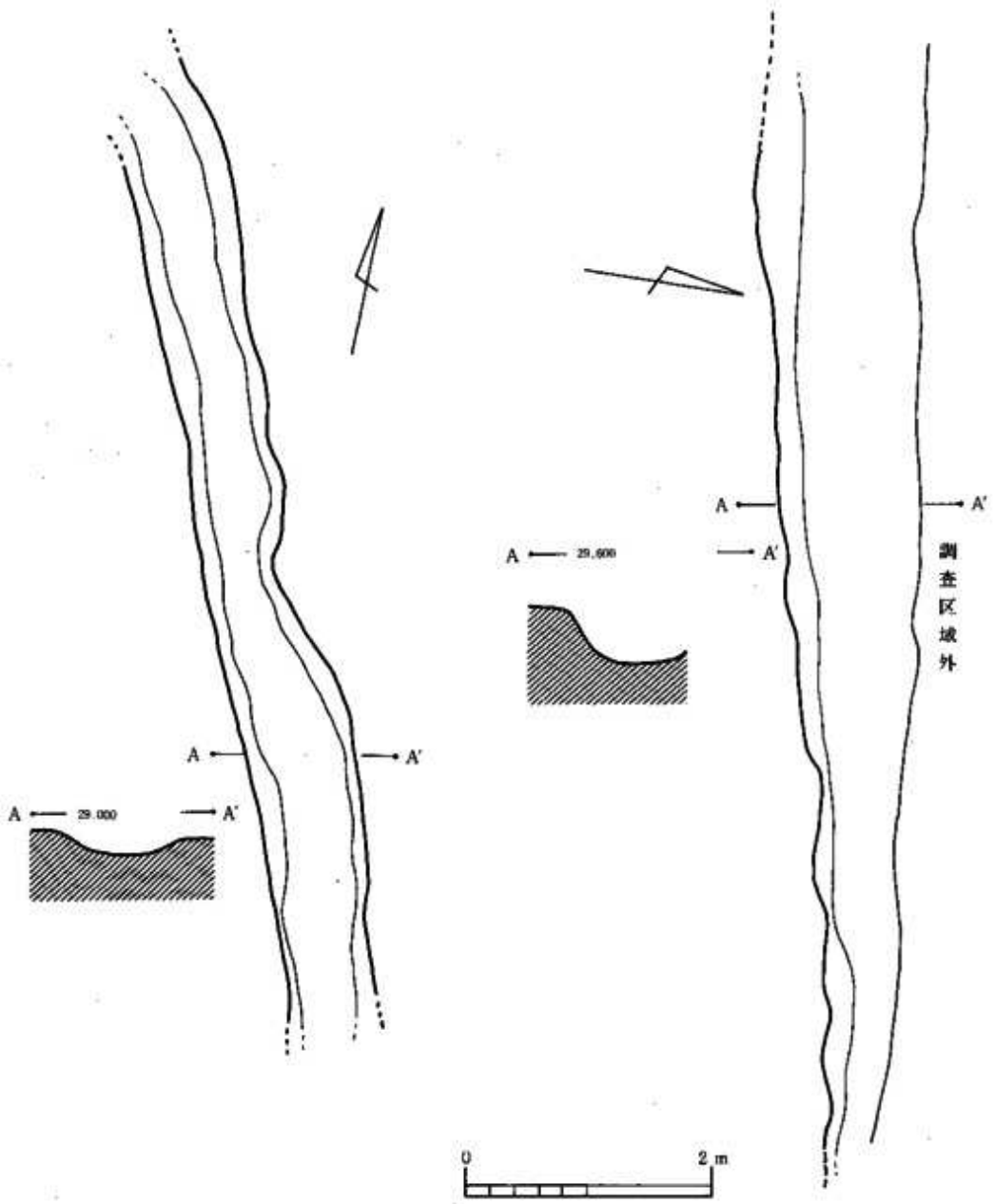
検出された範囲では長さ0.8m×幅0.9m、深さ0.1m前後を測る。断面は緩いU字状を呈し、ソフトローム中に掘り込まれている。底面は軟弱である。時期及びに性格は不明である。

**第2号溝跡**（第115図）

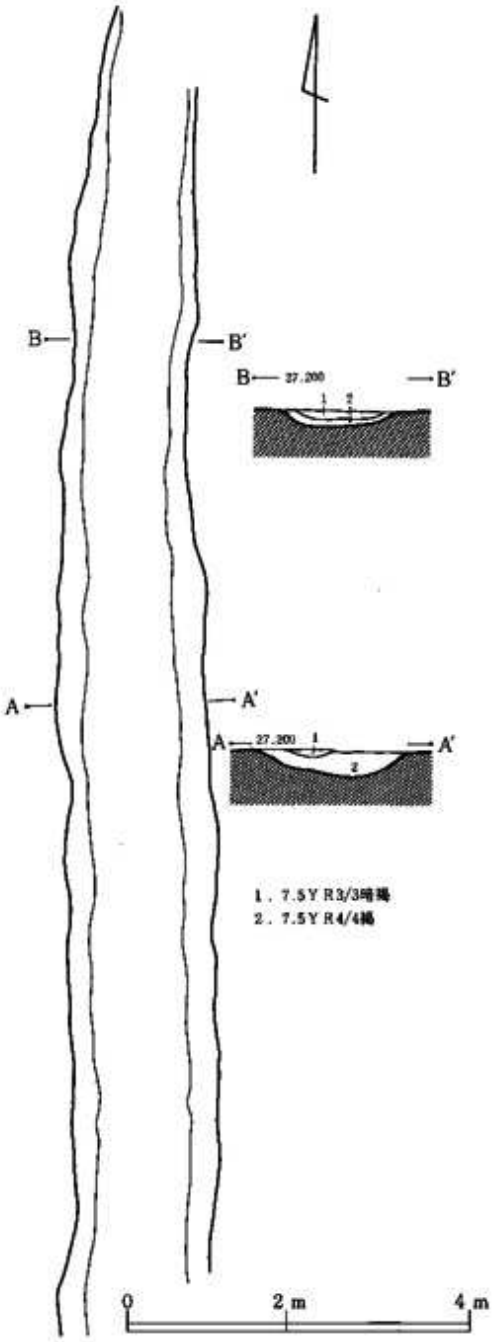
本溝跡は、6H－bから6I－bグリッドにかけて検出された。46号住居跡とそれを壊して構築された13号掘立柱建物跡をも切って掘り込まれている。検出された範囲での長さ15.1×幅1.5（南側）～1.1m（北側）、深さ0.3m～0.2mを測る。断面は緩いU字状を呈し、ソフトローム中に掘り込まれている。底面は軟弱である。時期及びに性格は不明である。

**第3号溝跡**（第115図）

本溝跡は、6B－cと6B－dグリッドにかけて検出された。北側が調査区域外にかかり、詳細については不明な点が多いが、一応溝跡として報告する。長さ9.5m、深さ0.5mを測る。底面はハードロームまで掘り込まれ堅固である。（倉田　義広）




第114図　第１・３号溝跡実測図




**第115図　第２号溝跡実測図**

# V　ま　と　め

今回の立木南遺跡の調査では、Ⅰ次とⅡ次を合わせて約2,800㎡という狭い範囲での調査にもかかわらず竪穴住居跡47軒、掘立柱建物跡14棟ほか多数の遺構を検出することが出来た。とはいえ台地全体からすれば、ほんのわずかな範囲での調査であり遺跡全体を窺うことは到底不可能であり、若干の調査所見を記してまとめに変えたい。

竪穴住居跡の時期区分では、五領期としうる住居跡は44住、45住、46住、47住の4軒、ついで和泉の時期を欠いて鬼高期が16住、26住、32住の3軒、奈良時代が4住、11住、15住、25住、28住、31住、33住、37住、41住、42住、42住の10軒、平安時代は2住、3住、5～10住、12～14住、21～24住、27住、30住、34～36住、39住、40住の21軒と大まかに区別出来ると考える。他に出土資料の少なさから時期の比定が困難なものに1住、17～20住、38住、43住の8軒がある。

掘立柱建物跡は都合13棟が検出されたが、柱穴内からの良好な遺物の出土例が少なく、有るものについても遺構の年代を直接示すものとは限っておらず遺構の時期比定を困難なものとしている。また平面形態や配置の規則性から年代観を云々するには条件が不十分であり、ここでは概ね竪穴住居と同様、奈良から平安時代にかけての所産と考えたい。

土壙は3号土壙が鬼高期、10～15号土壙はいずれも平安時代の所産である。

溝跡については、時期不明である。

以上の結果からすれば、本調査区内における集落の形成は、古墳時代前期にはじまり、中期に一部欠落の期間を経て、後期から奈良・平安時代につながる。その中でも特に集落としてのまとまりを持つのは奈良から平安時代にかけての時代であった事が明らかになった。

しかし、このことが台地上に広がる遺跡全体を通しての傾向なのか、あるいは今回の調査区内での偏った例なのかは、現時点で結論が出せないことは冒頭に述べた通りであり、今後の調査例が増えることを待つしかない。

遺物については、奈良時代から平安時代にかけての住居跡において、土器に占める須恵器の割合が著しく増減している。須恵器の比率は、奈良時代中頃から高まり始め、平安時代前半には盛期を迎え、その後急速に減少することが指摘出来る。この須恵器の主体をなすものはいずれも周辺地域で生産された製品であり、この地域での須恵器生産の一端を示すものと考えられるが、このことについても今後の土器生産遺跡側での実態の解明が期待されるところである。

（倉田義広）

参考文献


| | | |
|---|---|---|
| 後藤　和民 | 「千葉市加曽利町兼坂古墳発掘調査概要」<br>『貝塚博物館紀要　創刊号』所収 | 1968 |
| 後藤　和民 | 「千葉市加曽利町新山古墳群発掘調査概要」<br>『貝塚博物館紀要　創刊号』所収 | 1968 |
| 三森　俊彦 | 「聖人塚古墳」　『京葉』所収 | 1973 |
| 千葉市史編纂委員会 | 『千葉市史　原始古代中世編』 | 1975 |
| 史館同人 | 「シンポジウム資料　房総における奈良・平安時代の土器」 | 1983 |
| 長谷川真也 | 「田向南遺跡発掘調査報告書」<br>『千葉市文化財調査報告書第８集』所収 | 1984 |
| 千葉市教育委員会 | 『千葉市埋蔵文化財分布地図〈改訂版〉』 | 1984 |
| ㈱千葉県文化財センター | 『千葉県文化財分布地図(2)』 | 1986 |
| 房総歴史考古学研究会 | 『房総における歴史時代土器の研究』 | 1987 |

**(住居址)**

| No. | 検出グリッド | 規模 | 主軸方位 | 備考 | 旧No. |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 6C－C | 3.1 ×4.2－0.3 | N－15°10′－W | | 1 |
| 2 | 6E－a・b | 3.2 ×3.2－0.3 | N－29°30′－E | | 2 |
| 3 | 7D－d | 4.75×4.5－0.8 | N－19°30′－E | | 3 |
| 4 | 8E－a | 5.3 ×4.9－0.8 | N－19°30′－E | | 4 |
| 5 | 6C－a・c | 2.5 ×2.5－0.5 | N－11°30′－E | | 5 |
| 6 | 6C－b<br>7C－a | 2.2×3.5－0.6 | N－74°30′－W | | 6 |
| 7 | 6E－d<br>7E－c | 3.1 ×2.7－0.6 | N－ 9°30′－E | 15号住居より新 | 7 |
| 8 | 8D－c・d | 2.5 ×3.7－0.6 | N－24°50′－E | 9号・10号・11号・13号・18号住居より新 | 8 |
| 9 | 8D－C・d | (1.0)×3.4－0.15 | N－39 | | 9 |
| 10 | 8D－a・c | 4.0 ×3.9－0.65 | N－ 7°50′－W | 17号・18号住居より新 | 10 |
| 11 | 7D－c<br>7E－a | 4.7 ×4.1－0.5 | N－ 8° －E | 8号・12号住居より旧 | 11 |
| 12 | 7D－a・c | 2.7 ×2.7×0.26 | N－ 5° －E | | 12 |
| 13 | 6D－d<br>7E－c | 2.6 ×2.6－0.35 | N－ 5°15′－W | 11号住居より新 | 13 |
| 14 | 6E－c・d | 3.5 ×3.6－0.45 | N－14°30′－W | 15号・16号住居より旧 | 14 |
| 15 | 6E－d | 4.8 ×4.8－0.50 | N－ 2°30′－W | 16号住居より新 | 15 |
| 16 | 6E－a～d | 7.5 ×7.0－0.6 | N－ 5°30′－W | | 16 |
| 17 | 8D－a・c | 4.6 ×5.7－0.9 | N－ 3°30′－W | 8号・9号・10号住居より旧、18号住居より新 | 17 |
| 18 | 8E－a・c | (2.0)×6.0－0.75 | N－10° －W | | 18 |
| 19 | 4C－c | 3.6 ×3.6－0.2 | N－30° －W | 20号住居跡より新 | 19 |
| 20 | 4C－c | 5.0× 4.9－0.28 | N－33° －W | | 20 |
| 21 | 5C－b | 3.5 ×3.6 | N－14° －W | | 41 |
| 22 | 4D－b | 2.4 ×2.4－0.15 | N－ 0° －W | 23・43・44号住居より新、11号土壙より旧 | 22 |
| 23 | 4 －b | 2.7 ×2.6－0.15 | N－88° －W | | 23 |
| 24 | 5D－b | 3.1×2.9－0.4 | N－69° －E | 25号住居・10号土壙より新 | 25 |
| 25 | 5D－d<br>6D－c | 4.9 ×4.9－0.7 | N－28° －W | | 24 |
| 26 | 4D－c | 6.3 ×5.2－0.4 | N－16° －W | 30号住居・6号・10号掘立より旧 | 26 |
| 27 | 5D－c | 3.7×3.1－0.6 | N－85° －W | 28号・29号住居より新、10号掘立より旧 | 28 |
| 28 | 5D－c・d | 3.3 ×2. 9－0.7 | N－34° －W | 7号掘立より旧 | 27 |
| 29 | 5D－c | 3.0 ×2.9－0.6 | N－10° －W | | 33 |
| 30 | 5E－c | 3.8 ×3.3－0.6 | N－ 5° －W | 31号住居より新 | 37 |
| 31 | 4E－d<br>5E－c | 4.6 ×4.0－0.6 | N－ 7° －W | 32号住居より新 | 31 |
| 32 | 4E－d<br>5E－c | 7.6 ×6.0－0.8 | N－45° －W | | 30 |
| 33 | 4E－a | 6.2 ×6.1－0.66 | N－11° －W | | 32 |
| 34 | 5F－a | 3.1 ×3.2－0.28 | N－69° －E | | 34 |
| 35 | 4F－b・d | 3.7 ×3.2－0.26 | N－79° －E | | 35 |
| 36 | 4F－a | 2.9 ×2.9－0.46 | N－62° －E | | 29 |
| 37 | 5E－d | 5.7 ×5.7－0.6 | N－15° －W | | 38 |
| 38 | 5E－d | 5.0 ×4.4－0.6 | N－15° －W | 38号住居貼り床下 | 38 |
| 39 | 4C－d | 3.6 ×3.2－0.1 | N－14° －E | 40号住居より新 | 21 |
| 40 | 4C－d | 2.9 ×2.2－0.1 | N－10° －E | 41号住居より新 | 50 |
| 41 | 4C－d<br>5C－c | 4.2 ×4.0－0.48 | N－17° －W | 42号住居より新 | 43 |
| 42 | 5C－a・b | 4.6 ×4.0－0.15 | N－17° －W | | 42 |
| 43 | 5D－a | | | 42号住居より旧 | |

| No. | 検出グリッド | 規模 | 主軸方位 | 備考 | 旧No. |
|---|---|---|---|---|---|
| 44 | 5F－d<br>5G－b | 3.8×3.7－0.3 | N－70°30′－E | | 36 |
| 45 | 3G－b<br>4G－a | 5.0×4.9－0.4 | N－28°－W | | 45 |
| 46 | 5I－b<br>6I－a | 4.5×4.4 | N－28°－W | | 47 |
| 47 | 4H－a～d | 9.3×9.2－0.45 | N－0°30′－E | | 48 |

〈掘立柱建物跡〉

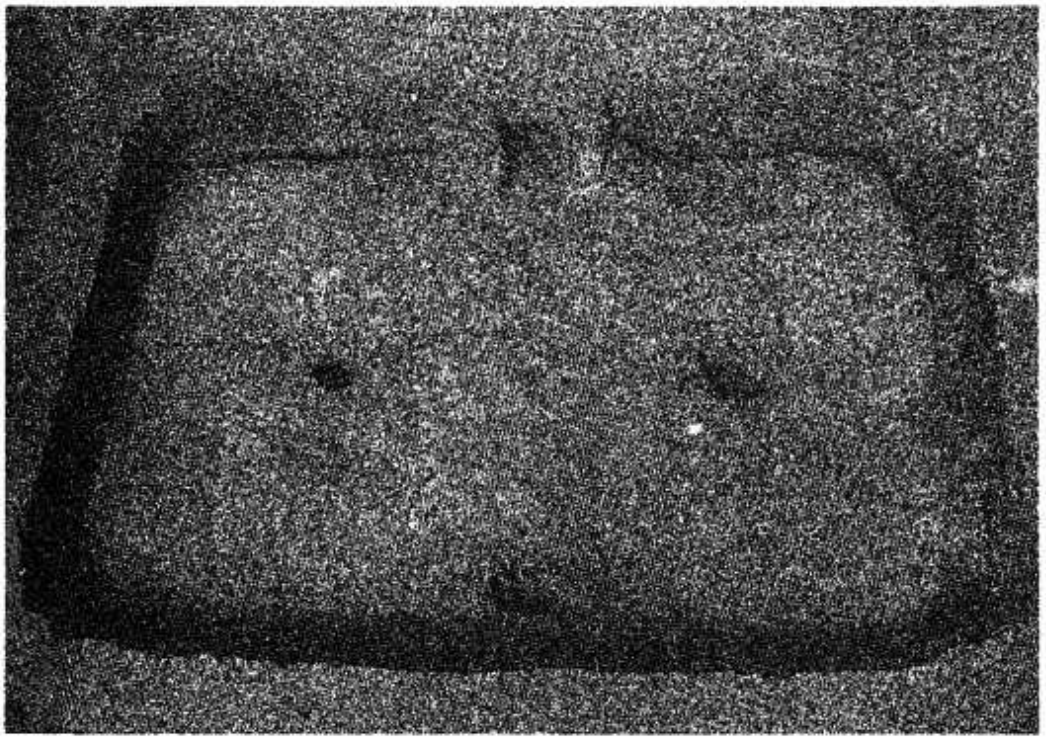
| No. | 検出グリッド | 規模 | | 主軸方位 | 備考 | 旧No. |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 6C－a | 3間×2間 | 4.8×3.3 | N－62°－E | | 1 |
| 2 | 6C－b・d | 2間×2間 | 3.6×3.6 | N－1°－E | | 2 |
| 3 | 6C－d | 2間×3間 | 3.6×3.6 | N－9°20′－E | | 3 |
| 4 | 7C－c・d | 3間×2間 | 4.8×4.2 | N－87°50′－E | 5号住居より旧 | 4 |
| 5 | 6D－d | 2間×1間 | 2.1×2.1 | N－2°30′－W | | 5 |
| 6 | 4E－b | 2間×2間 | 3.6×3.2 | N－12°－W | 29号・33号住居より新 | 25 |
| 7 | 5D－c | 2間×2間 | 3.6×3.6 | N－0°－E | 25・28号住居より新 | 21 |
| 8 | 5D－a | 2間×2間 | 3.0×3.0 | N－79°－E | 23号・43号住居より新、9号・10号掘立より旧 | 27 |
| 9 | 5D－a | 2間×2間 | 3.6×3.6 | N－52°－E | 13号土壙よりも新 | 28 |
| 10 | 4D－a～d | 2間×2間 | 3.5×3.5 | N－55°－E | 26号住居よりも新 | 23 |
| 11 | 5D－d | —— | —— | | 27号住居より新 | 22 |
| 12 | 5F－c | 2間×1間 | 3.2×2.1 | N－43°－W | 貝ブロック | 27 |
| 13 | 6I－a | 2間×2間 | 3.3×3.5 | N－20°－W | 46号住居よりも新 | 26 |
| 14 | 4D－a | 1間×1間 | 3.1×2.4 | N－90°－W | | 24 |

〈土　壙〉

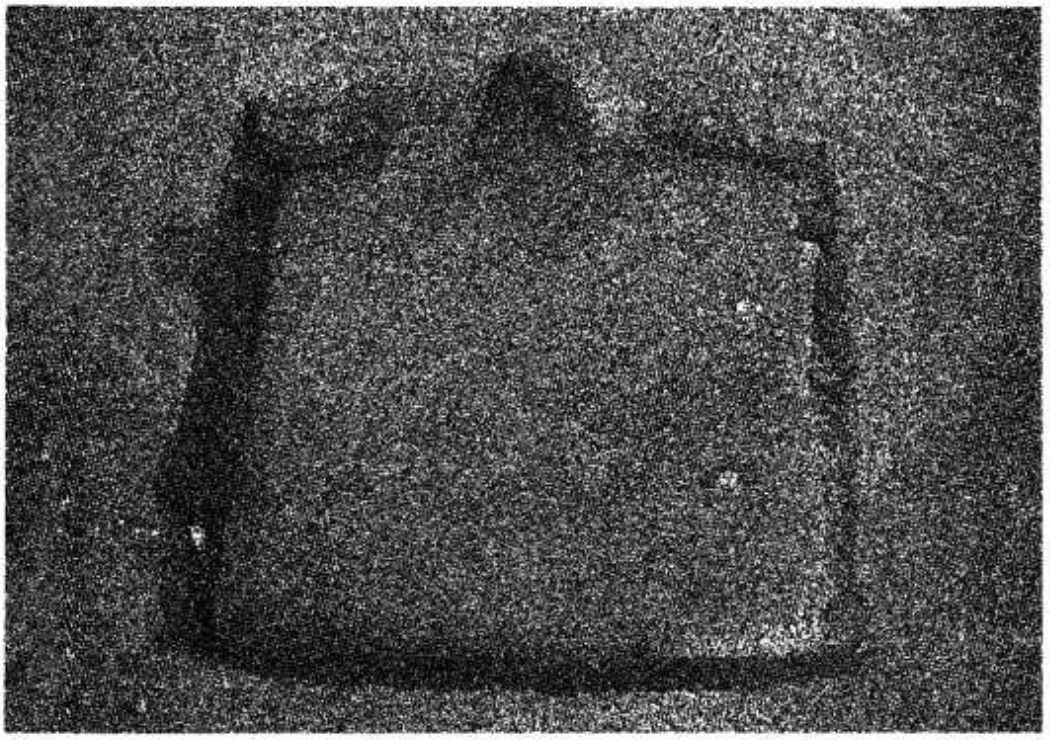
| No. | 検出グリッド | 規模 | 主軸方位 | 備考 | 旧No. |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 7F－b | 1.5×2.0－0.8 | N－76°36′－E | | 1 |
| 2 | 6I－b | 2.3×1.6－0.3 | N－49°－W | | 2 |
| 3 | 8I－b | 1.9×1.5－1.0 | N－23°30′－E | | 3 |
| 4 | 5C－a | ———— | ———— | 21号住居より旧 | 42住 |
| 5 | 4G－d | 3.8×3.7－0.2 | N－17°－W | 鉄鏃・鉄滓出土 | 46住 |
| 6 | 5C－d | 3.8×3.7－0.9 | ———— | | 9 |
| 7 | 5D－d | 1.3×0.7－1.2 | N－83°－E | 24号住居より旧 | 10 |
| 8 | 5D－a | 1.2×1.2－0.7 | ———— | 22号住居より新、鉄鏃出土 | 11 |
| 9 | 5E－d | 1.0×1.0－0.1 | ———— | 37号住居より新 | 9 |
| 10 | 4E－a | 1.0×1.0－0.9 | ———— | 33号住居より新 | 12 |
| 11 | 5F－c | 2.9×1.0－0.1 | N－20°－W | 人骨・鉄鏃出土 | 14 |
| 12 | 5C－d | 2.6×2.0－0.7 | N－0°－E | | 15 |
| 13 | 5D－a | 1.2×0.76－0.4 | N－17°－W | 9号掘立より旧 | 13 |
| 14 | 5G－a | 0.5×0.5－0.12 | | 貝充填 | 18 |
| 15 | 5G－a | 0.4×0.4－0.35 | | 貝充填 | 19 |
| 16 | 5G－a | | | | 20 |

# 図　版　目　次

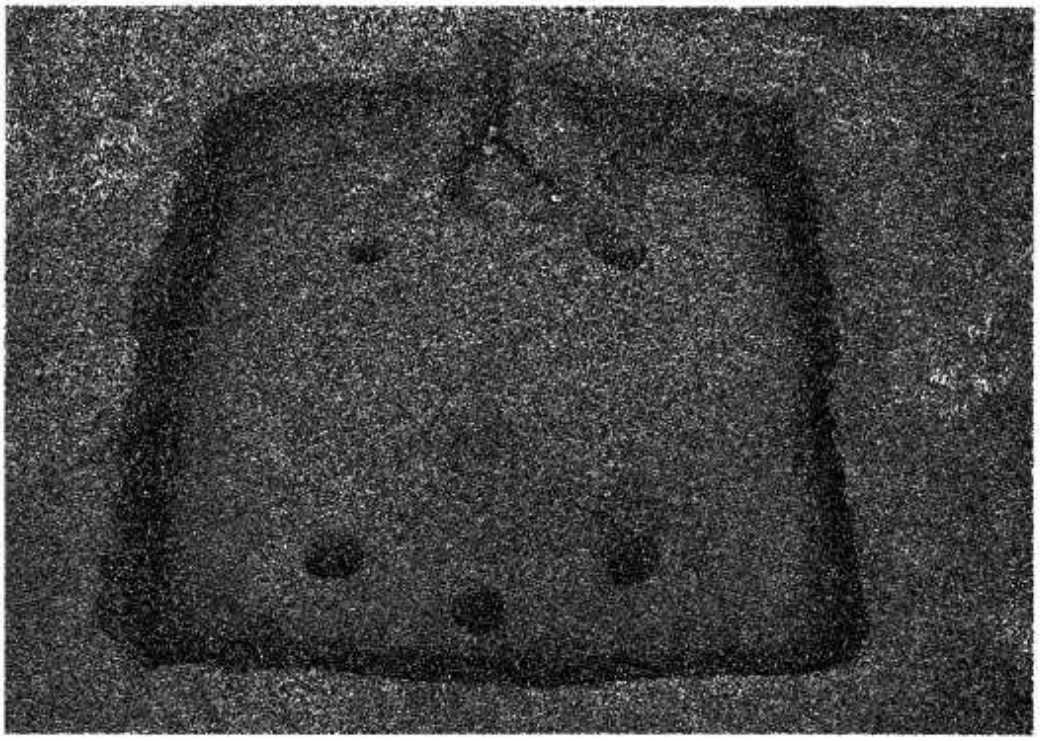
PL2



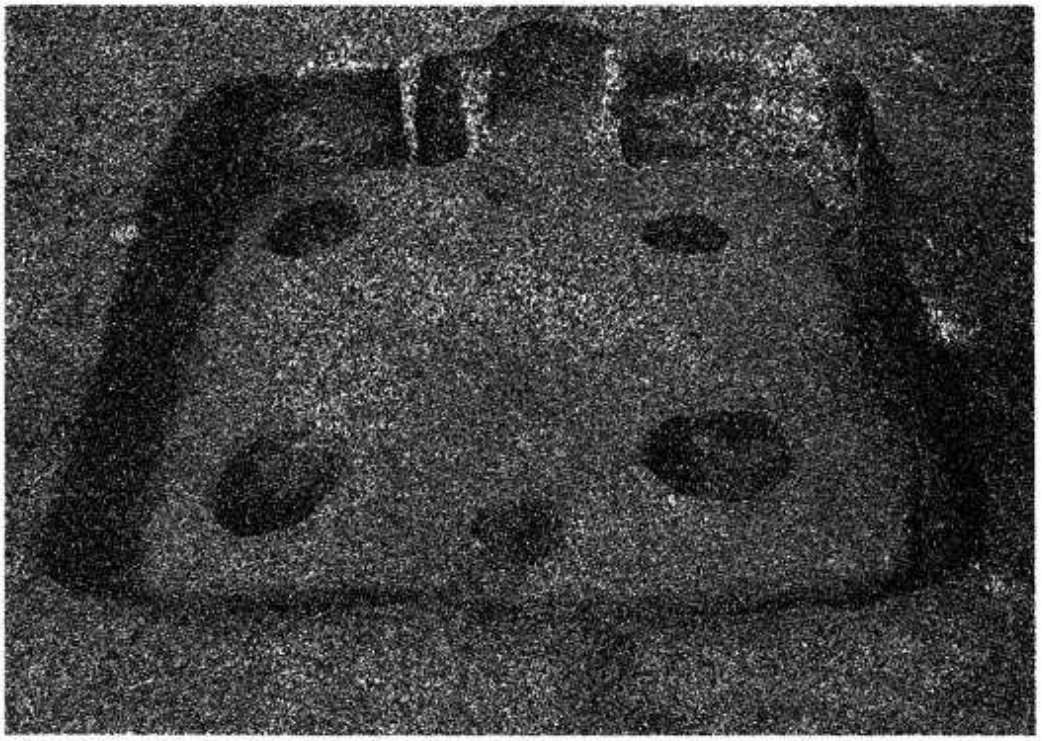
第1号住居跡



第2号住居跡

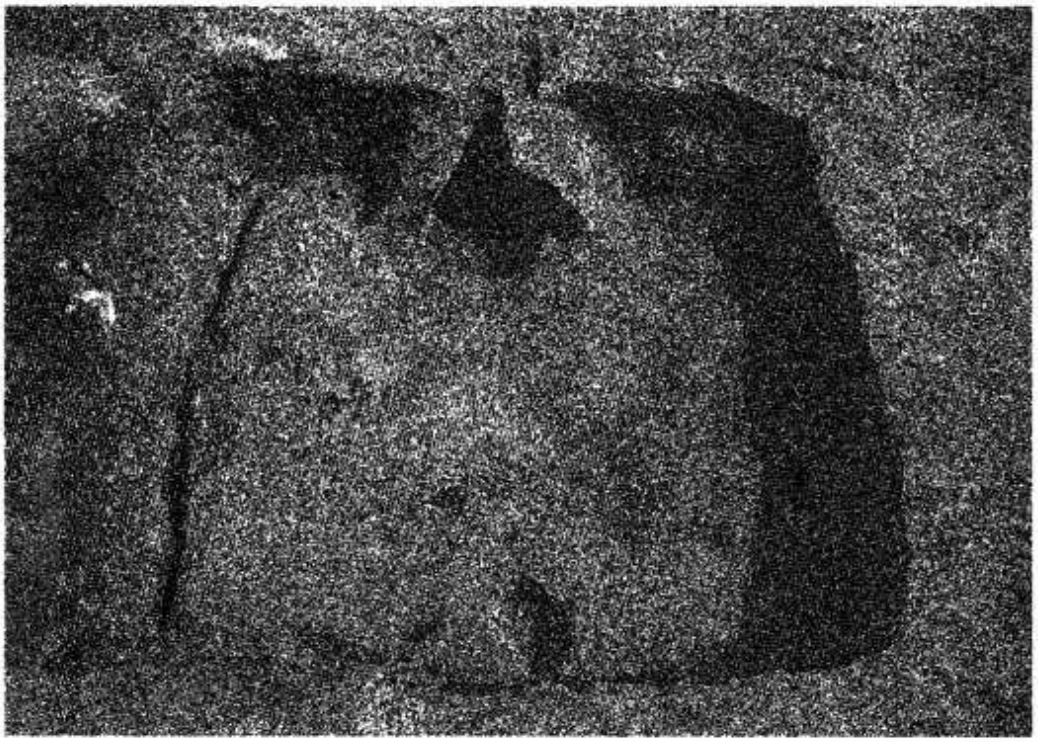


第3号住居跡

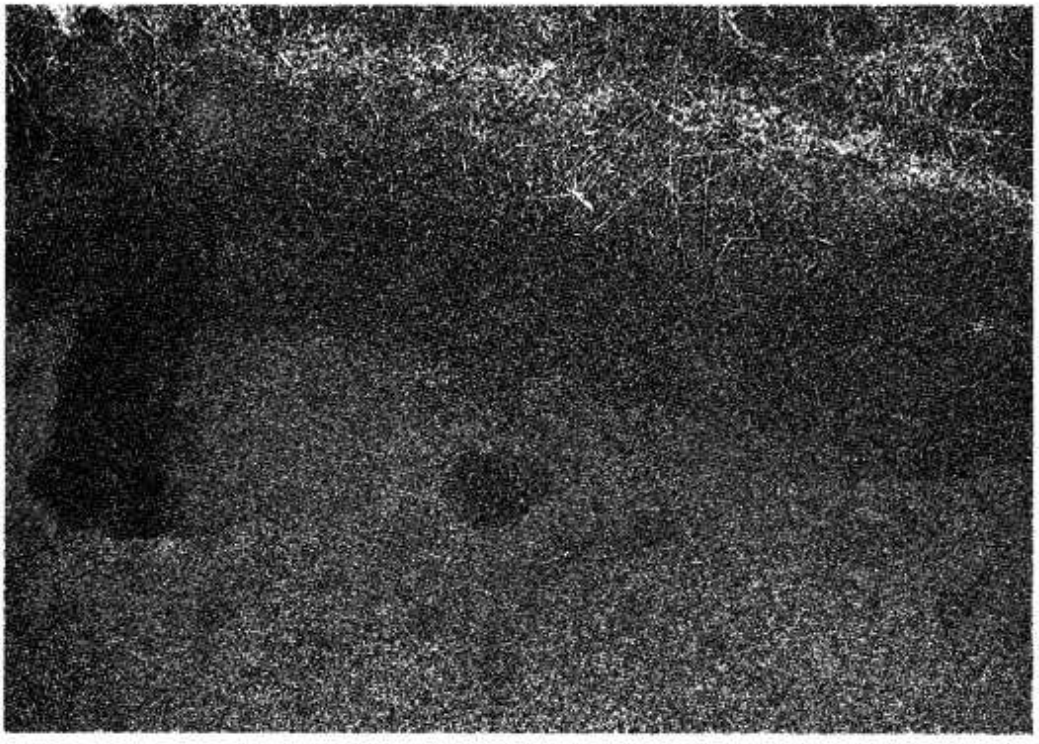


第4号住居跡

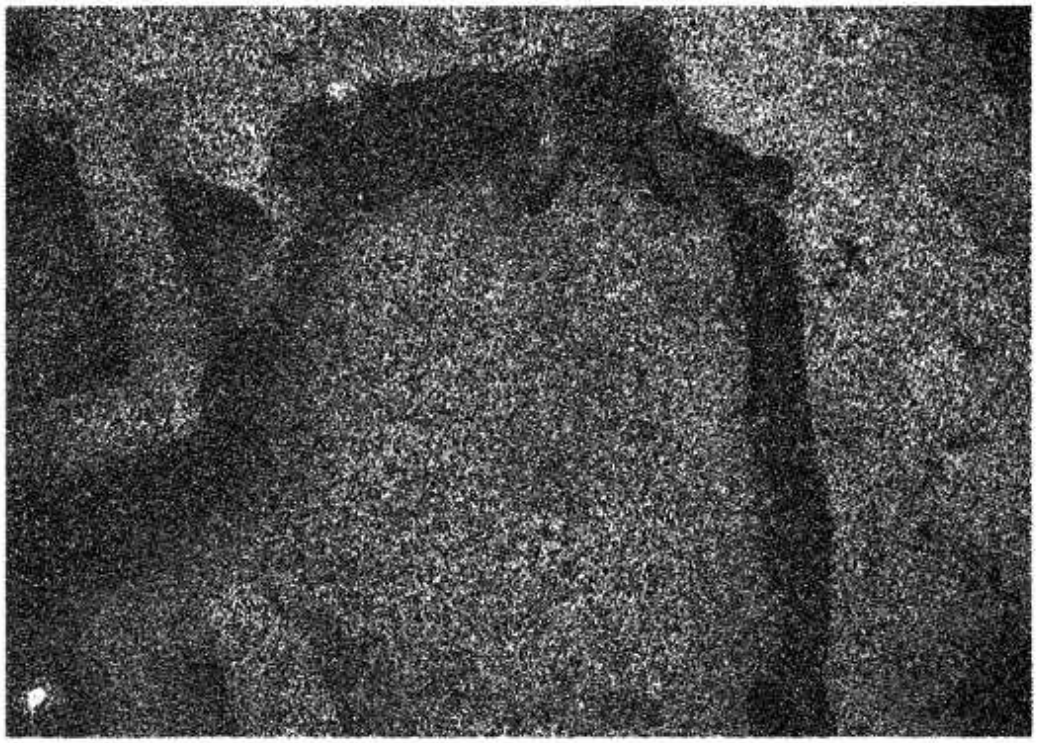
PL4



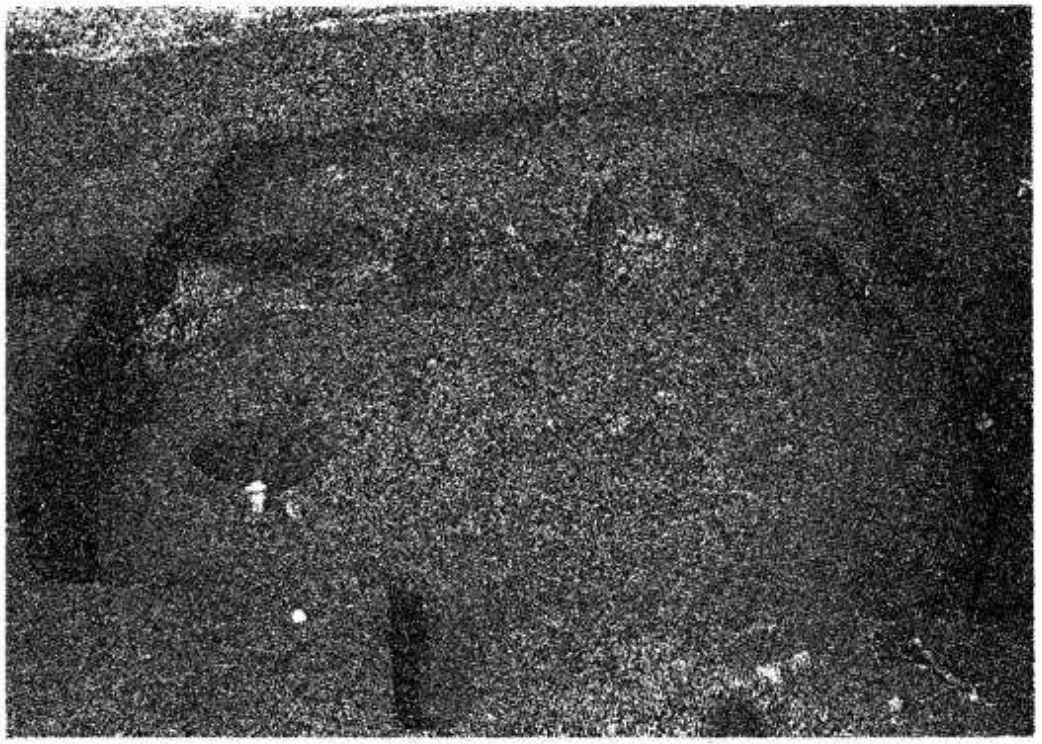
第5号住居跡



第6号住居跡

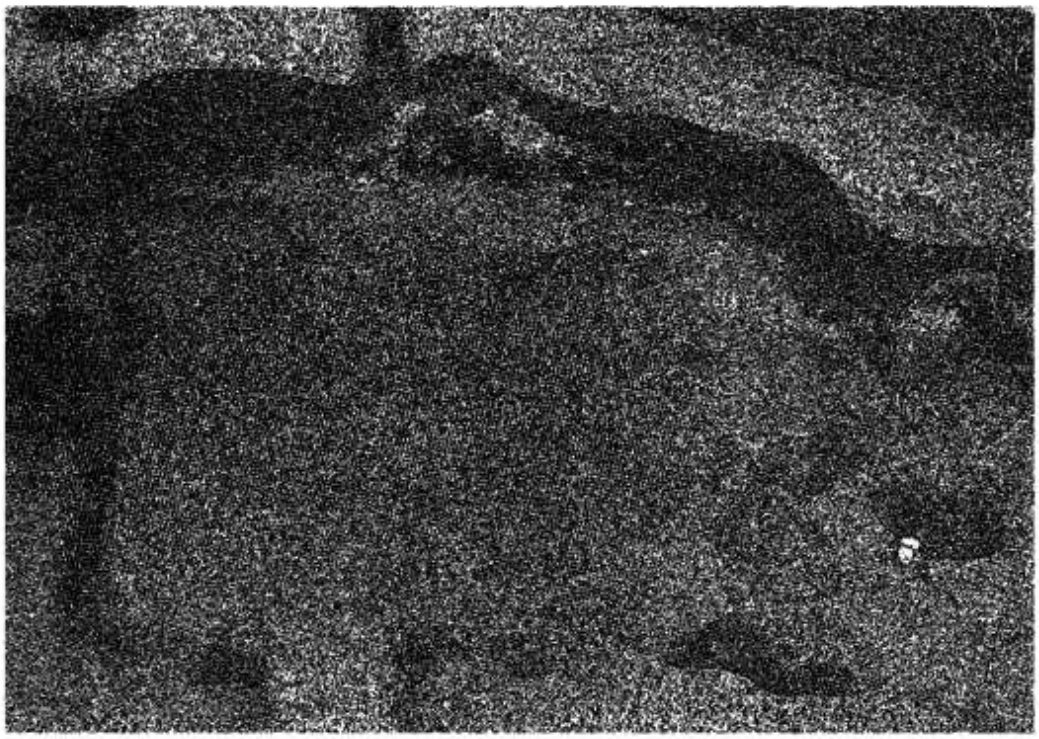


第7号住居跡

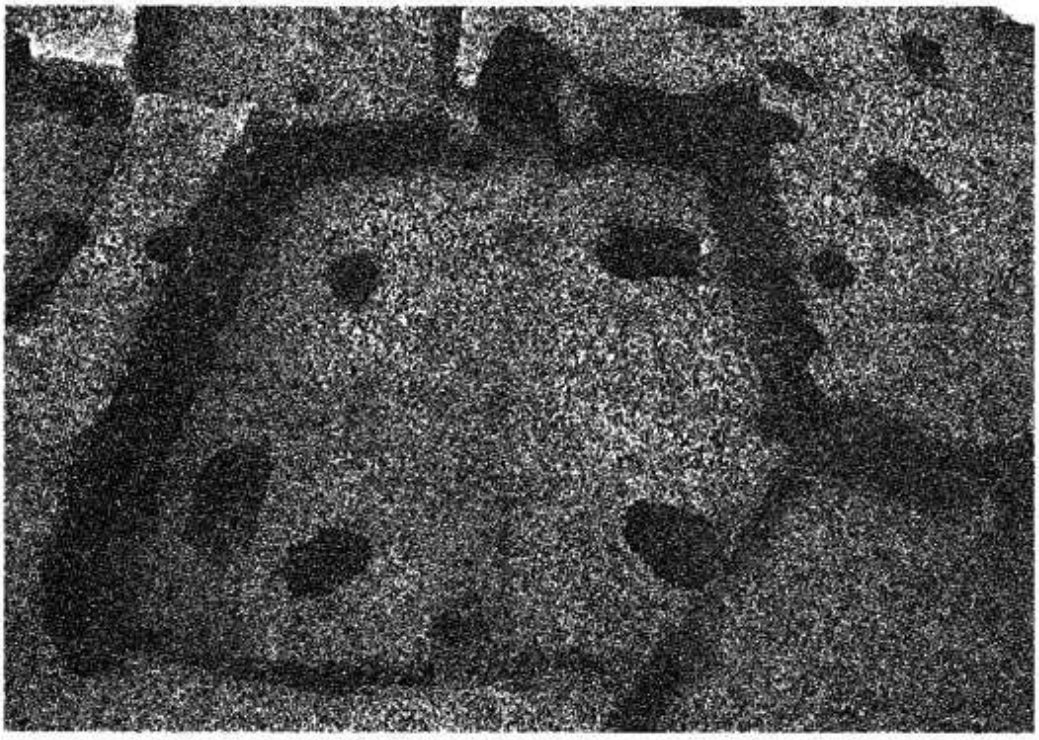


第8号・第9号竪穴遺構

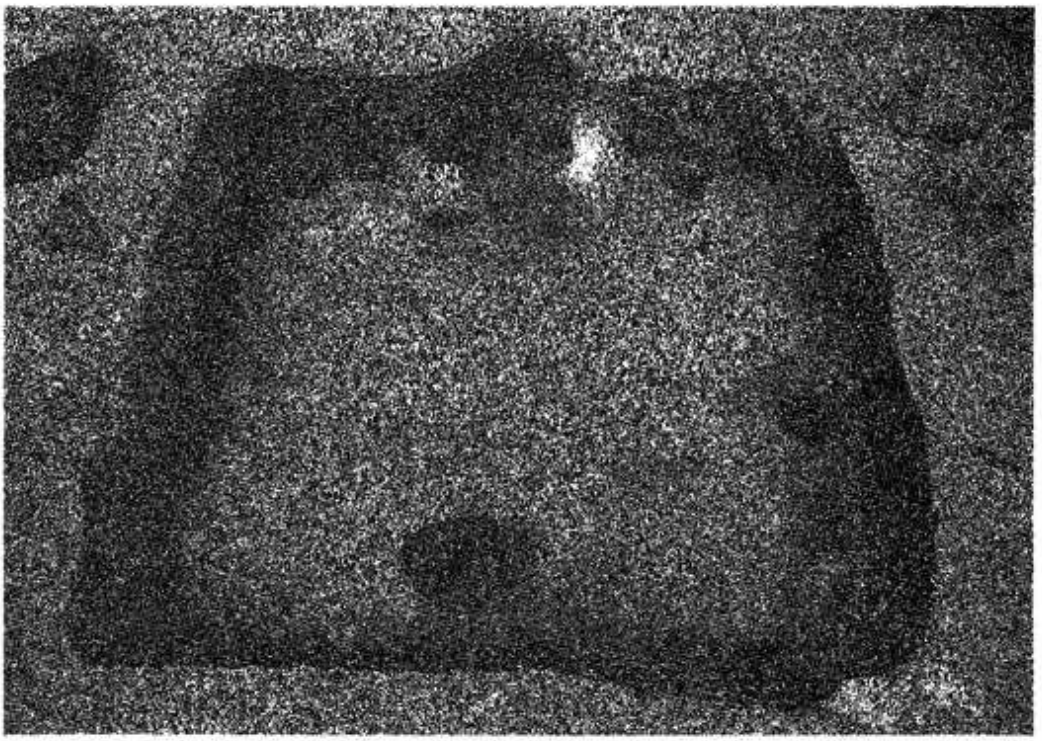
PL6



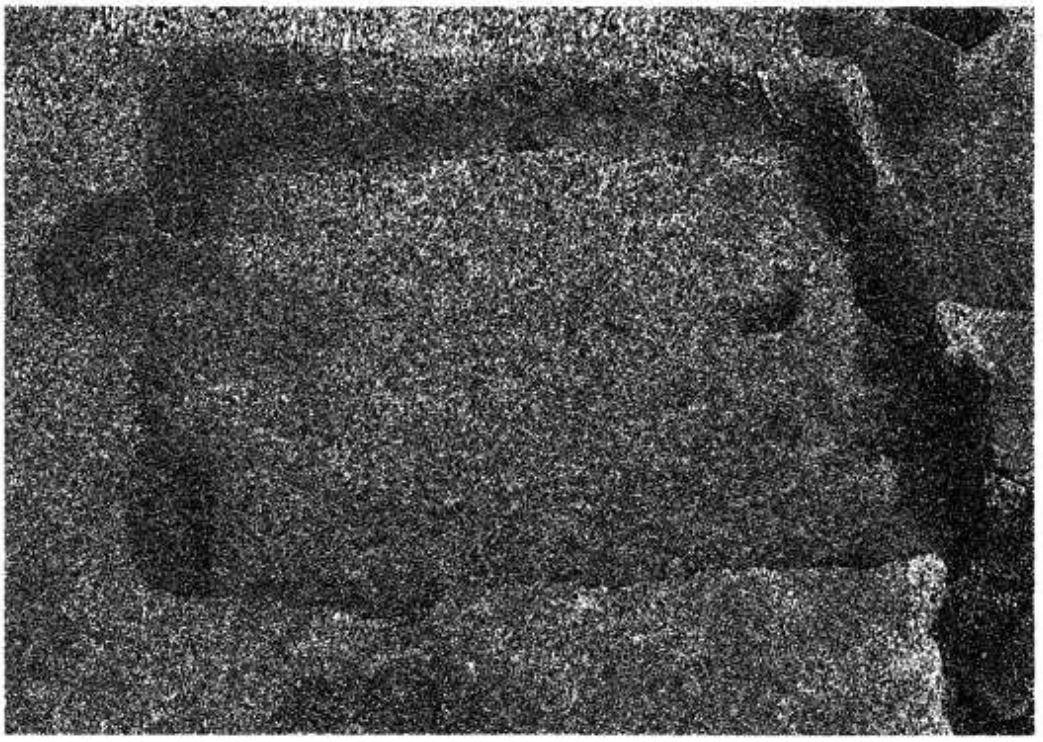
第10号住居跡



第11号住居跡

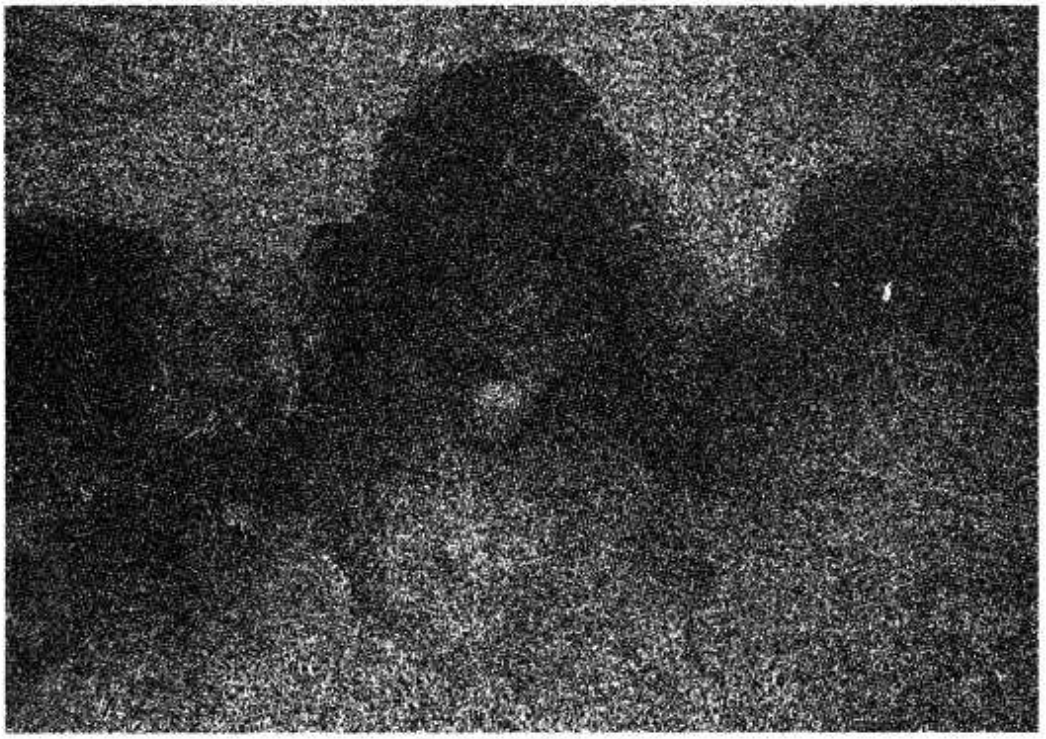


第12号住居跡



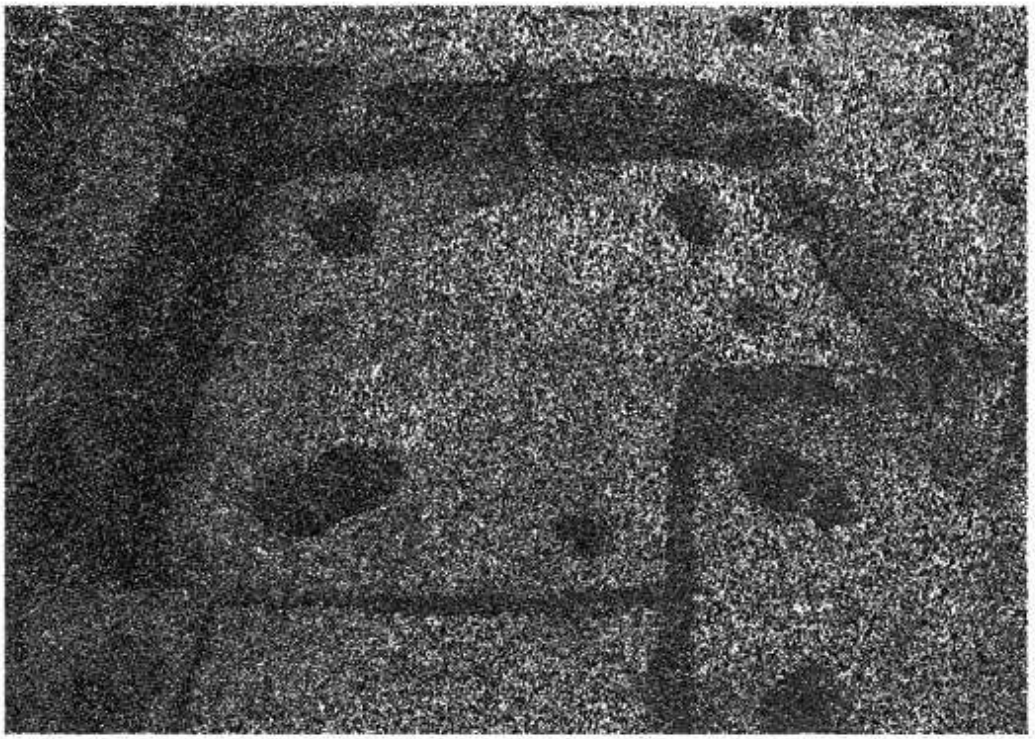
第13号住居跡

PL8

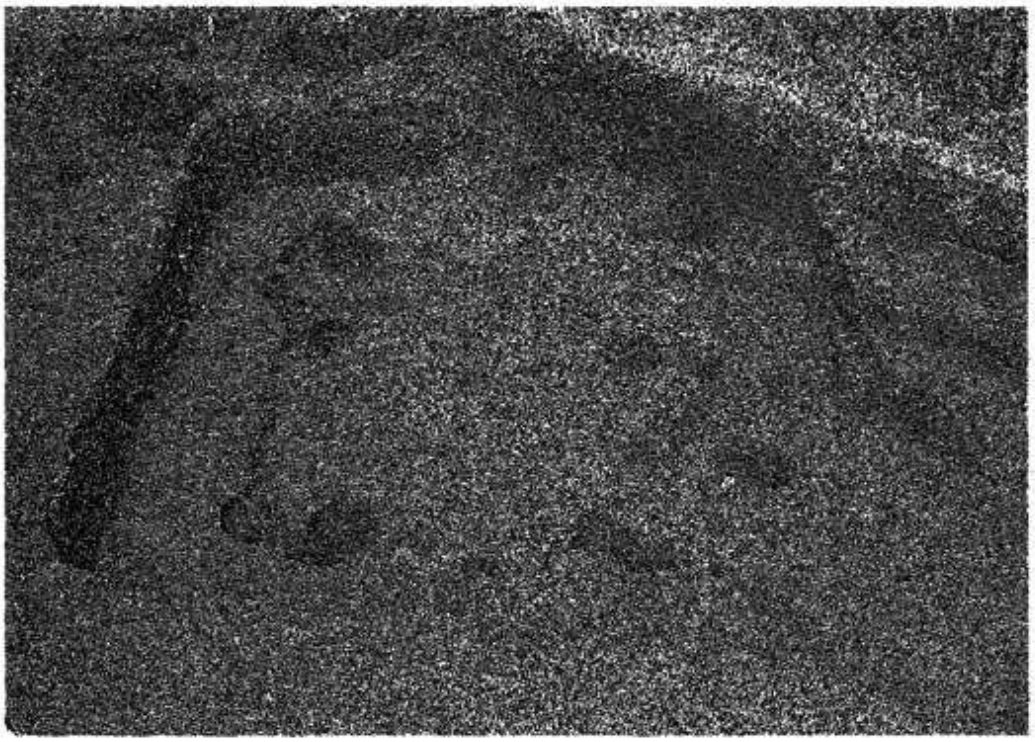


第14号住居跡カマド

第15号住居跡カマド

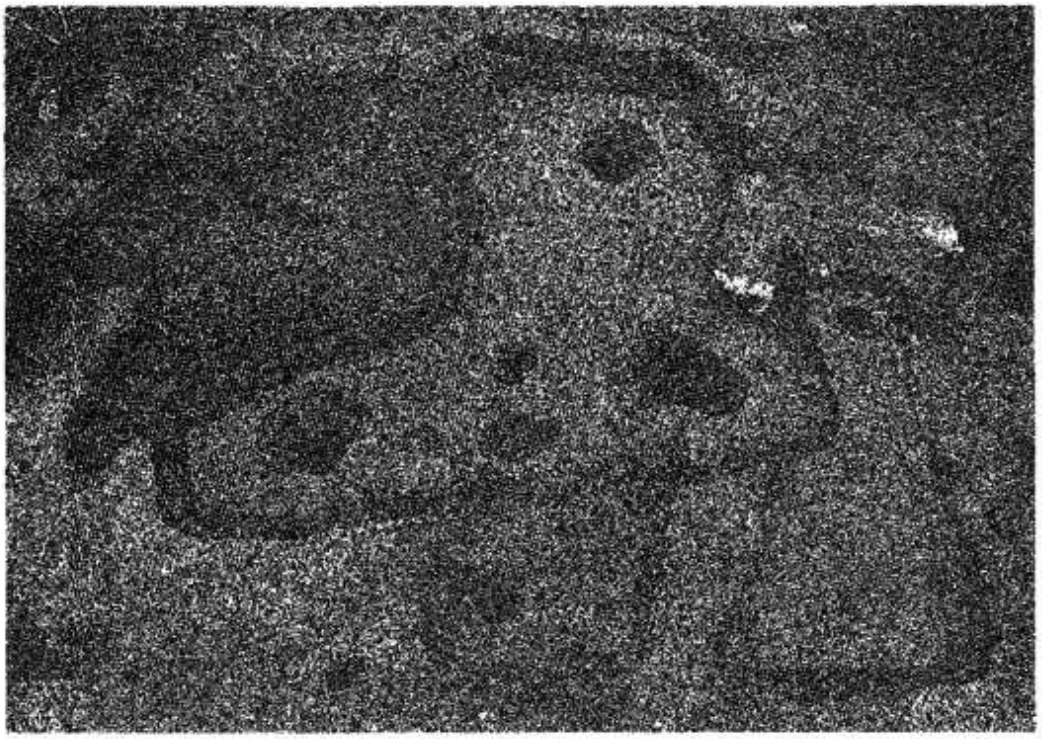


第16号住居跡

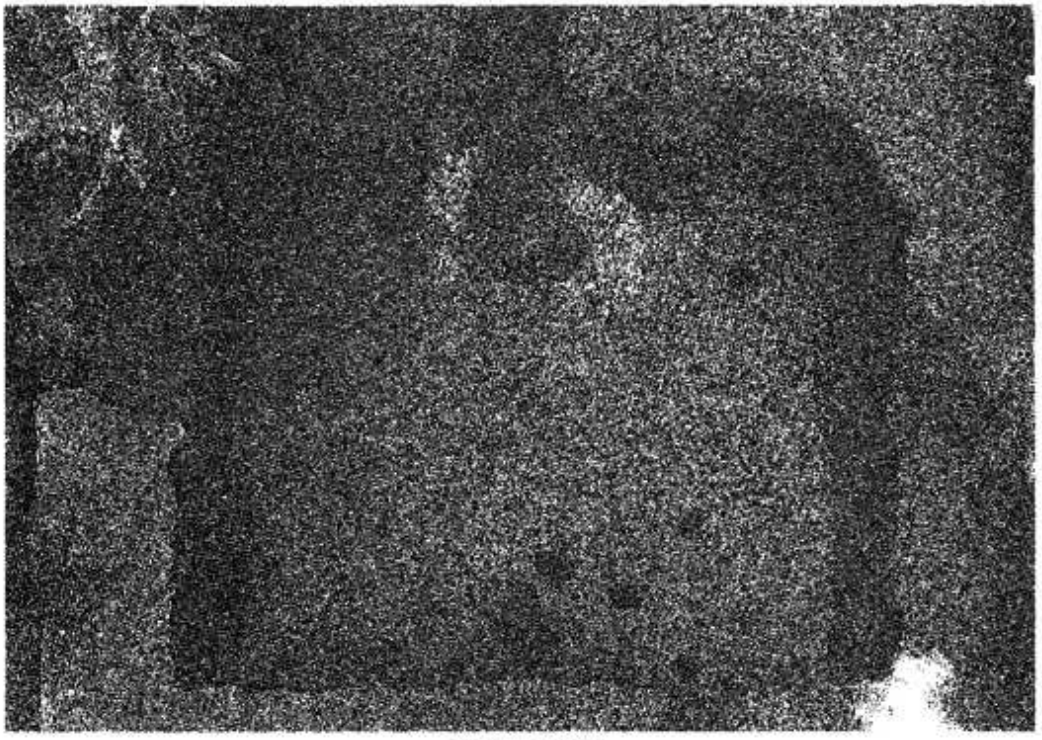


第17号・第18号住居跡

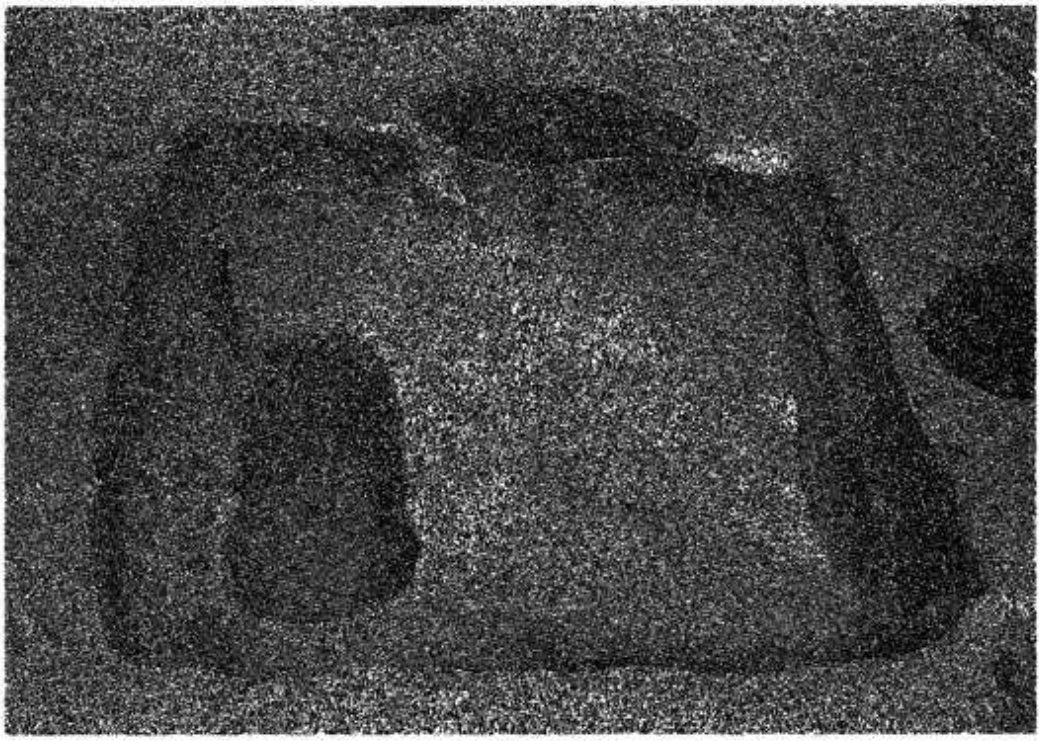
PL10



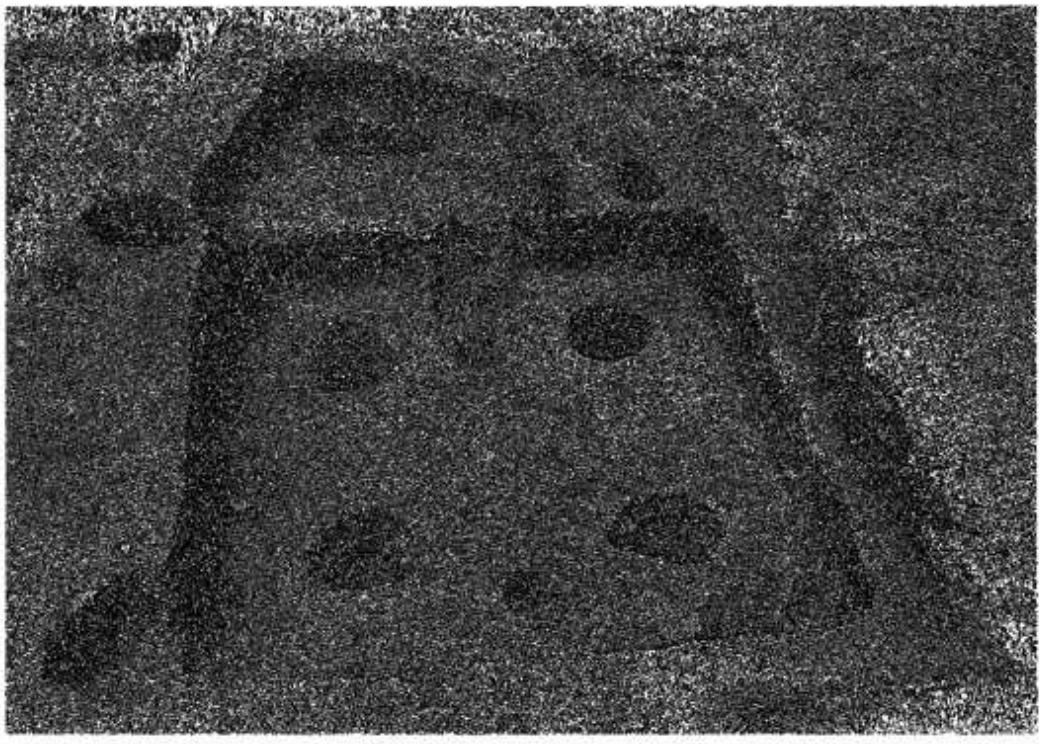
第19号・第20号住居跡



第21号住居跡

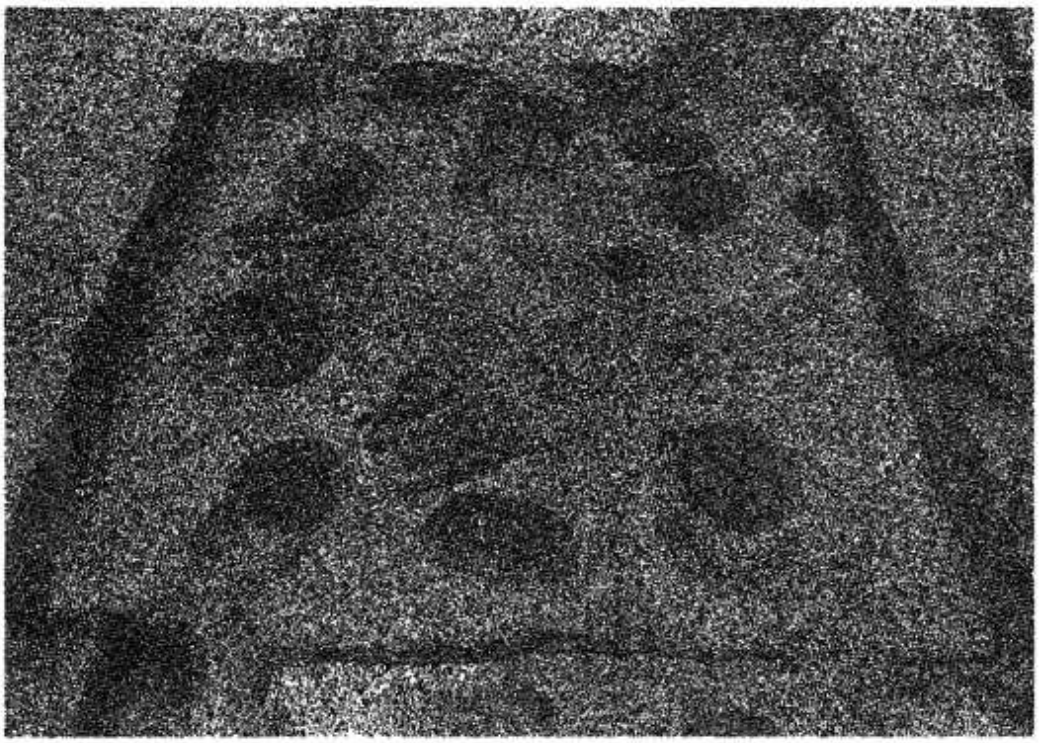


第24号住居跡

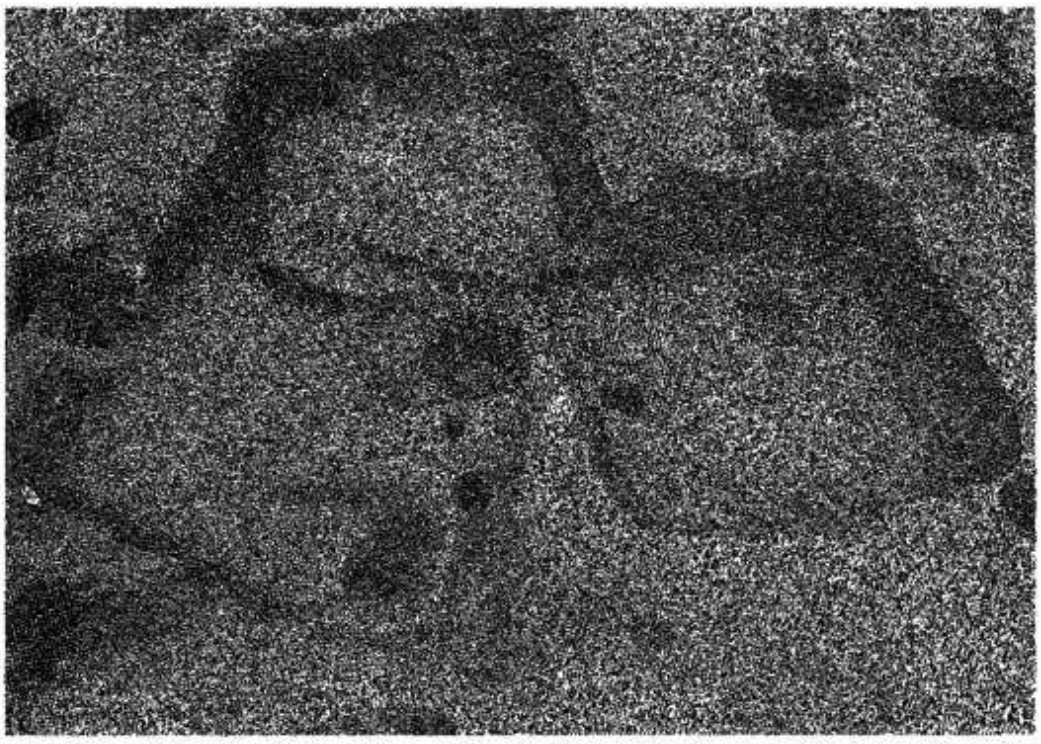


第25号住居跡

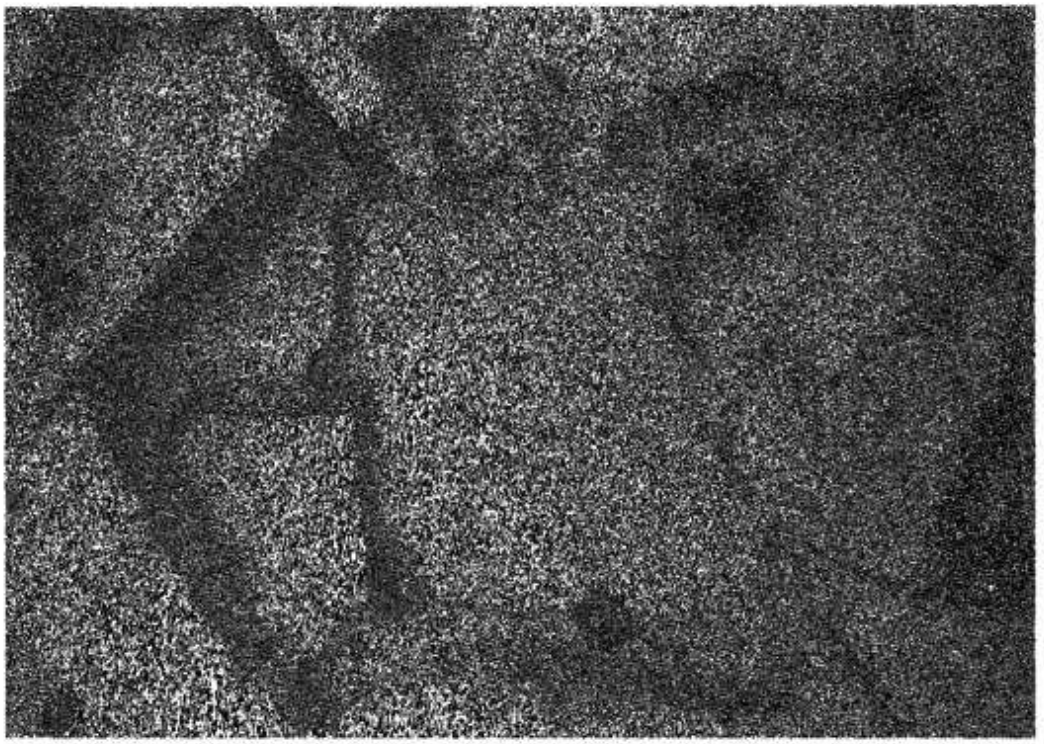
PL12



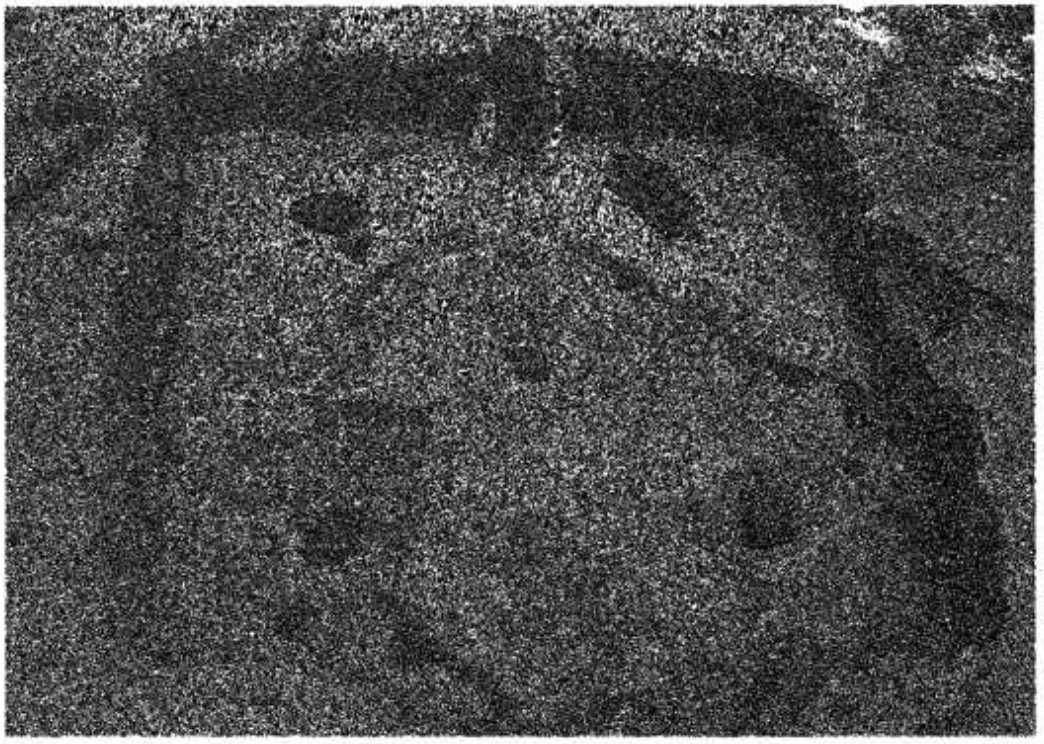
第26号住居跡



第27号・第28号・第29号住居跡

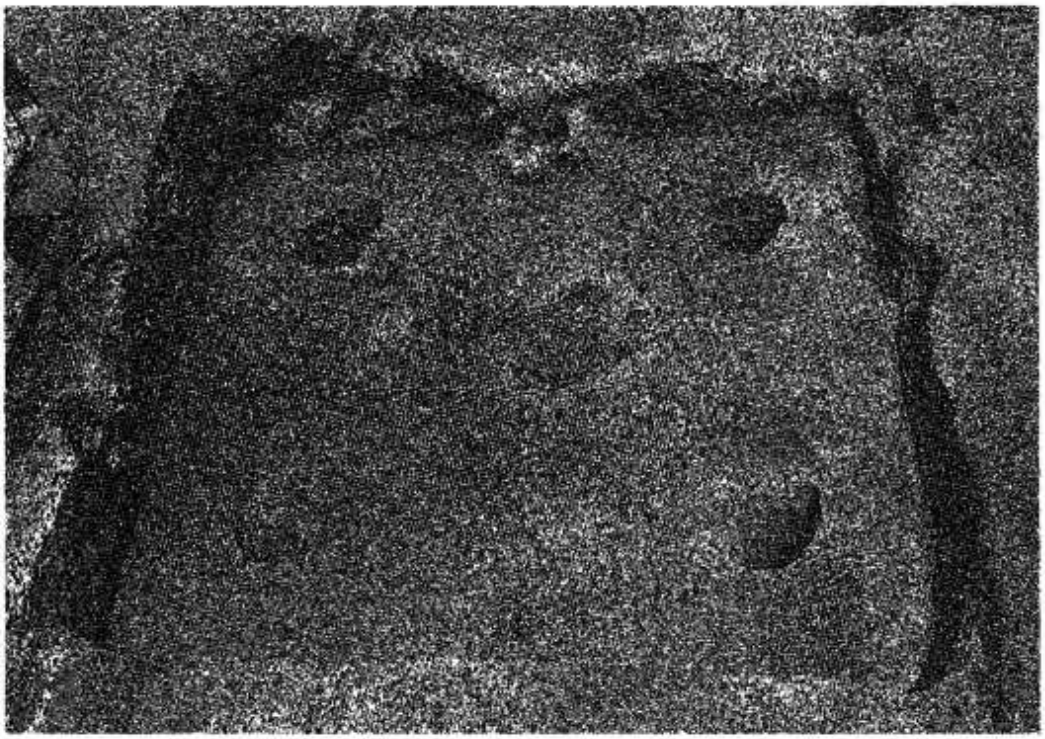


第30号住居跡

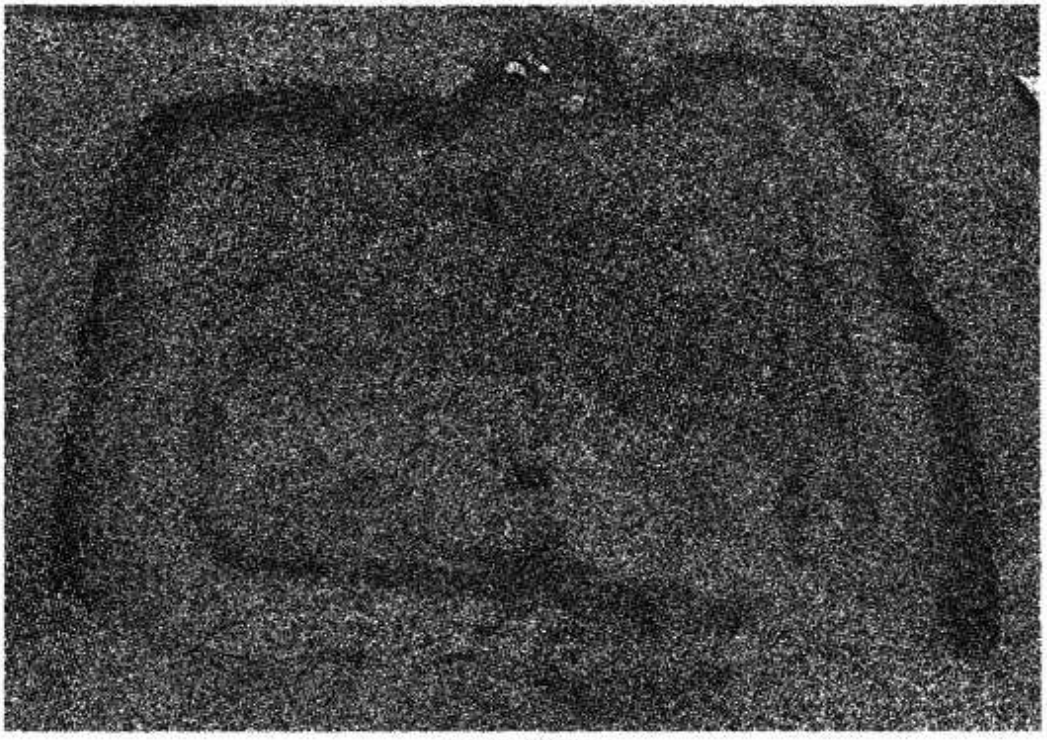


第30号・第31号・第32号住居跡

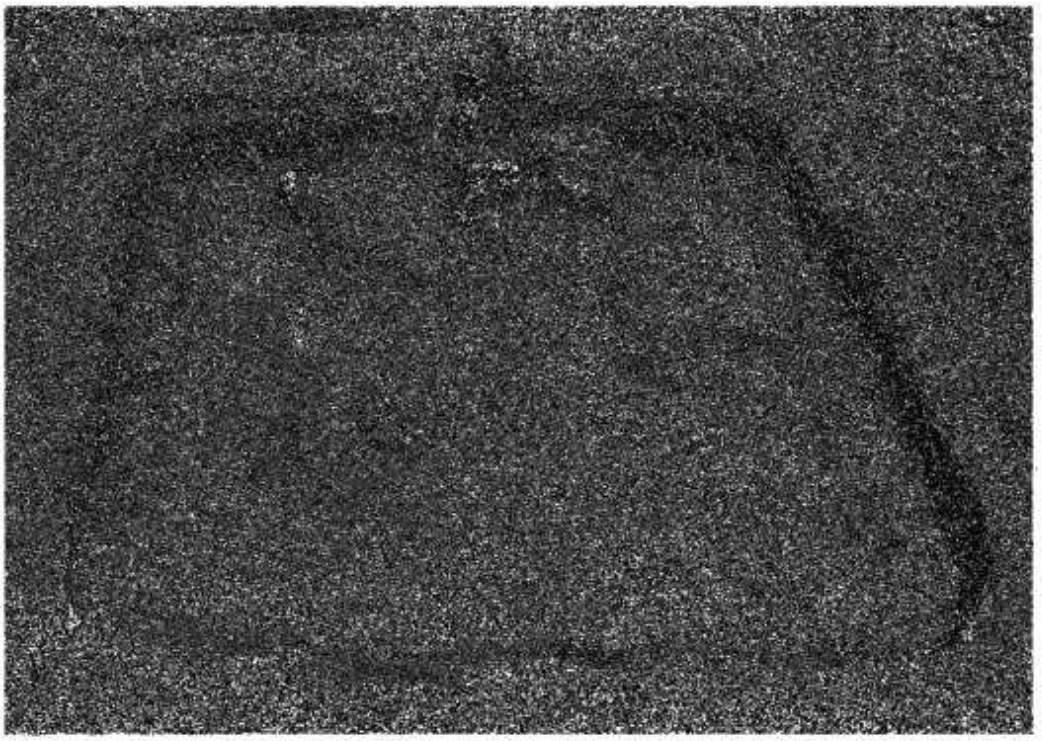
PL14



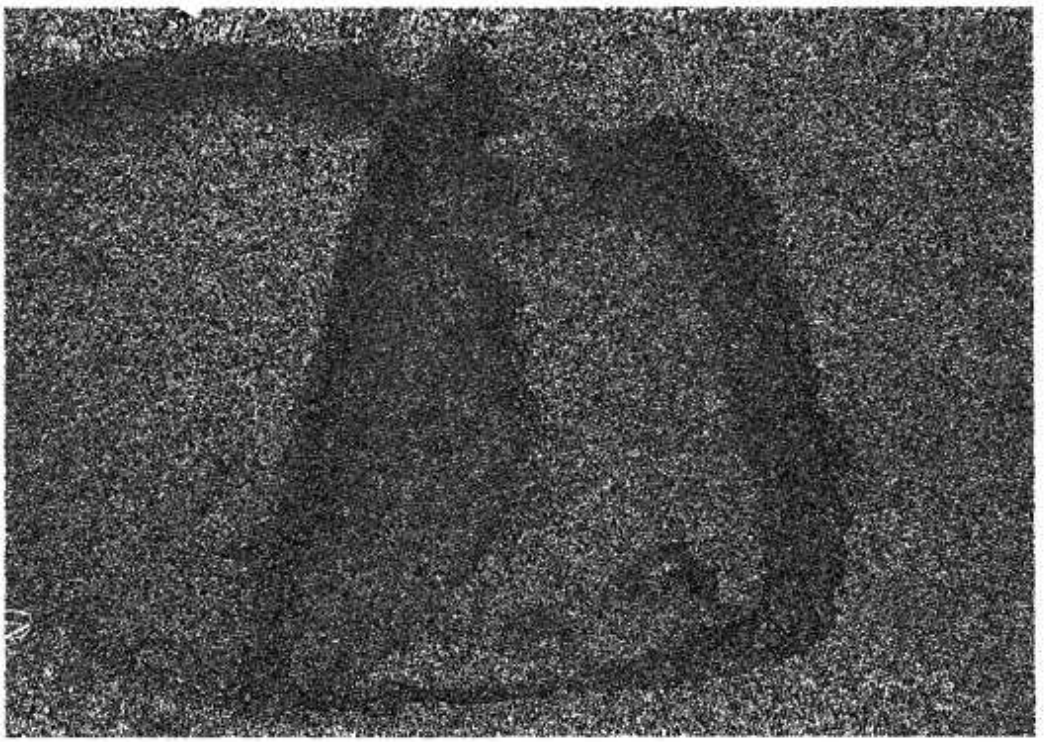
第33号住居跡



第34号住居跡

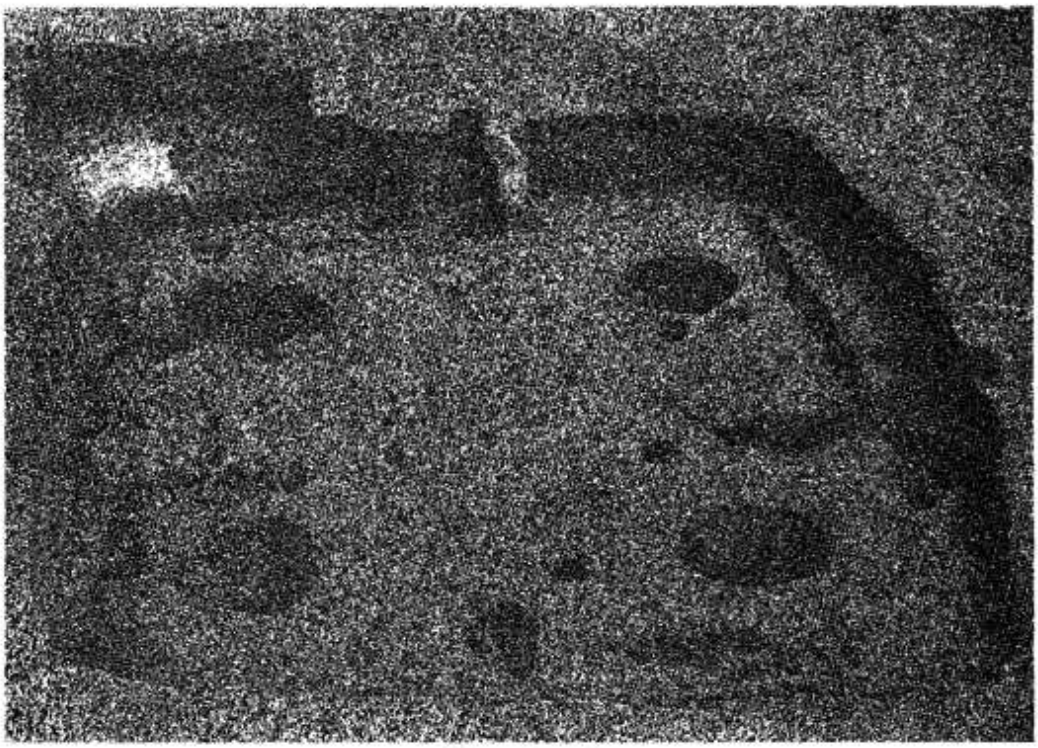


第35号住居跡



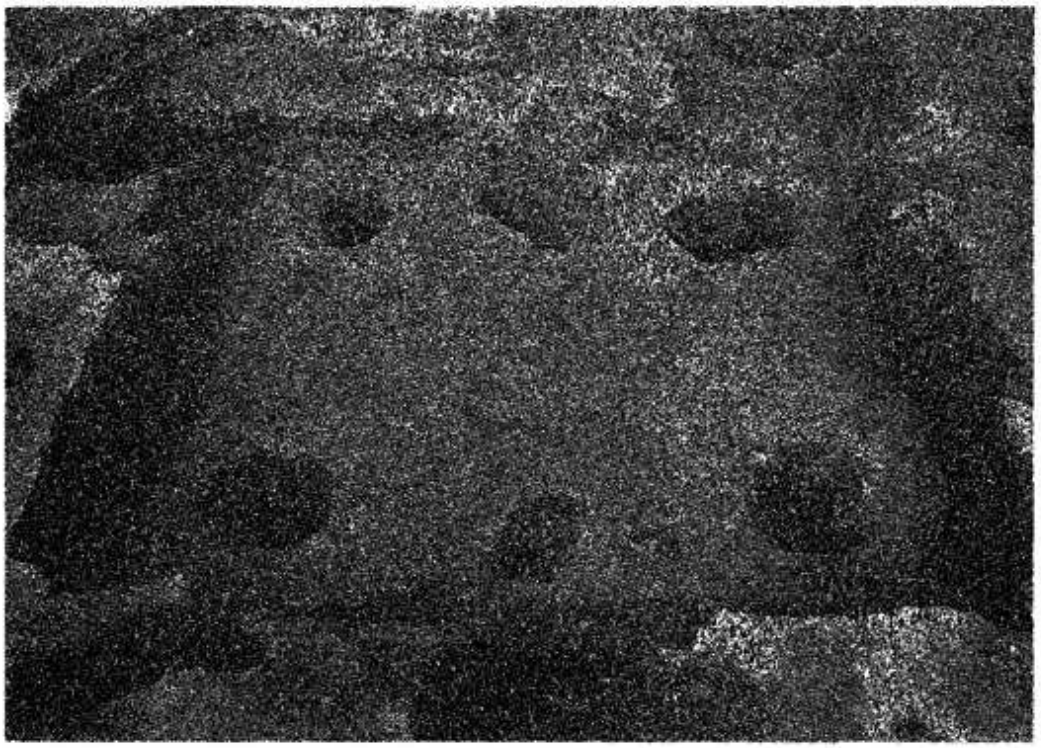
第36号住居跡

PL.16

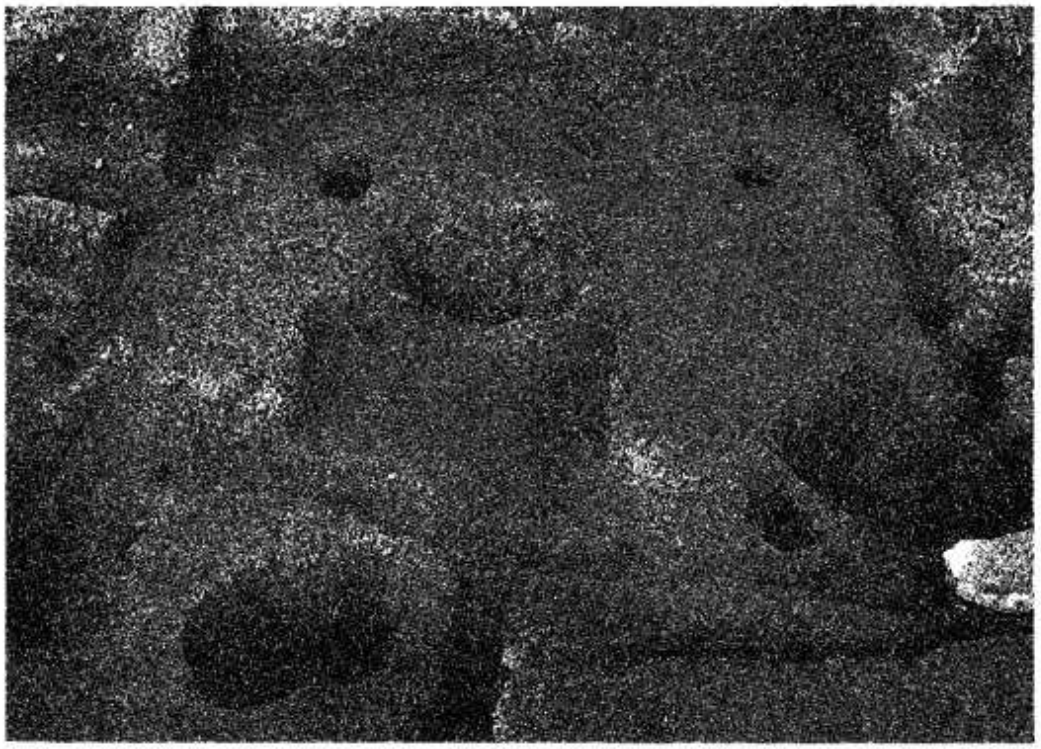


第37号住居跡

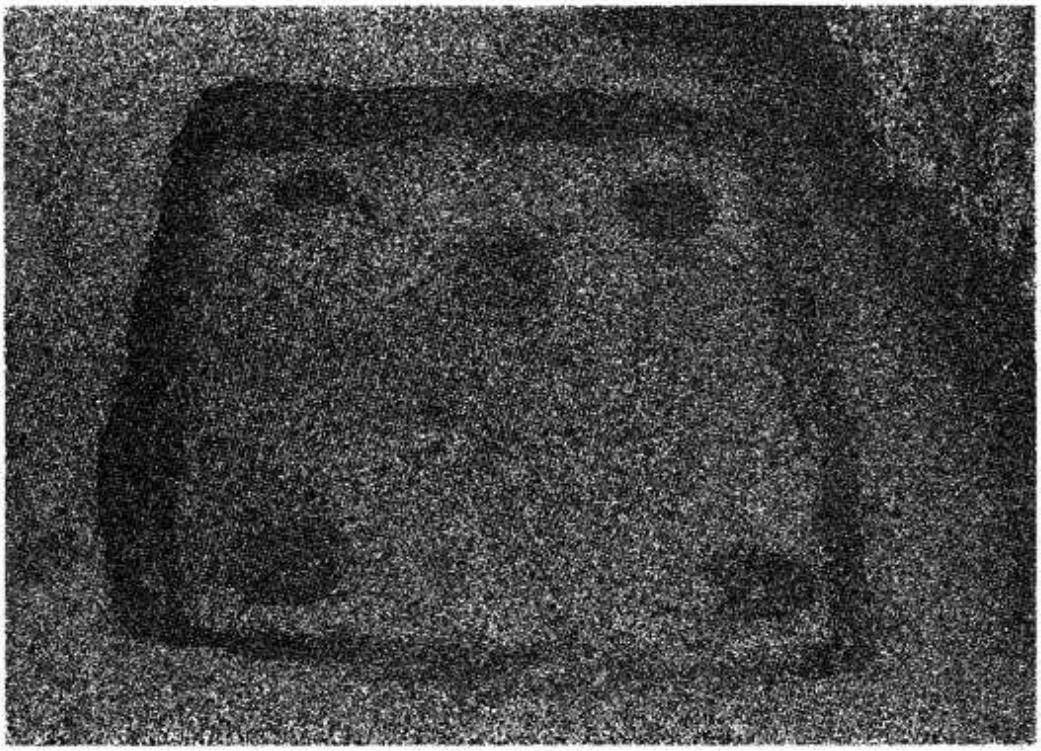
第38号・第39号住居跡



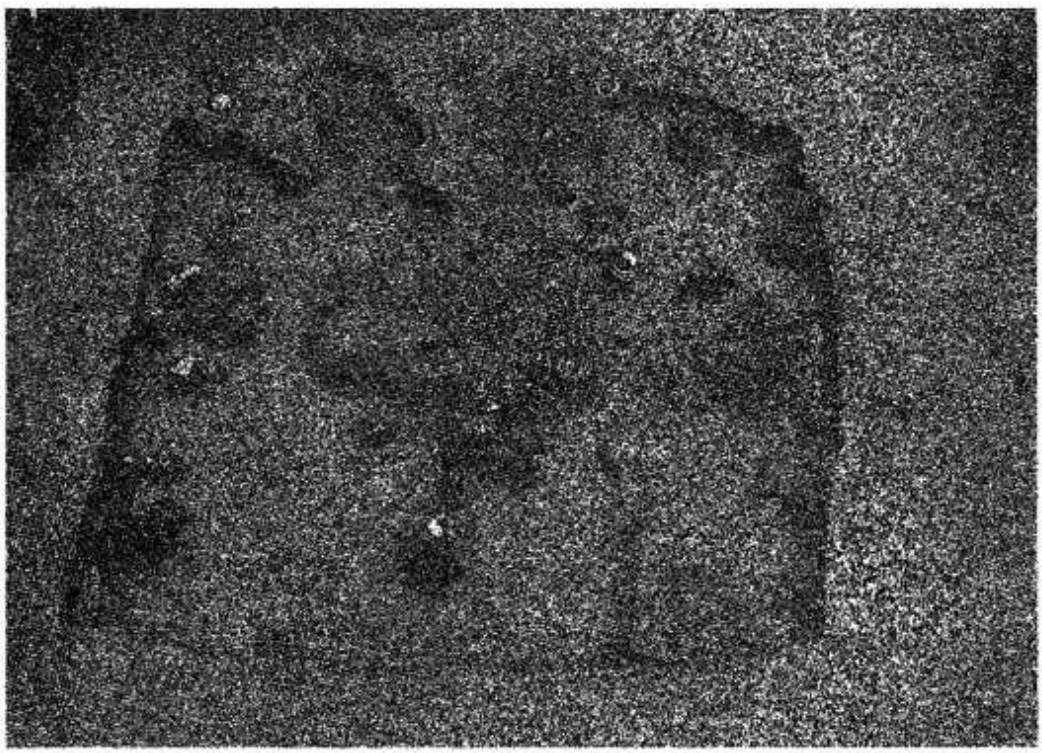
第40号・第41号住居跡



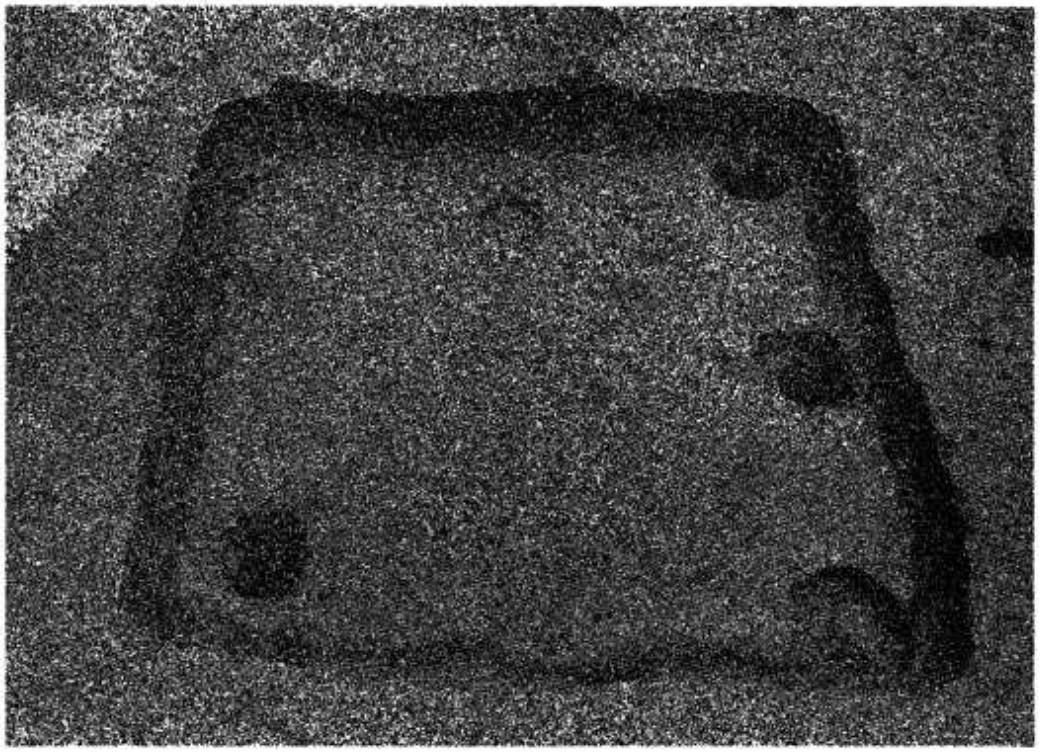
第42号住居跡



第44号住居跡



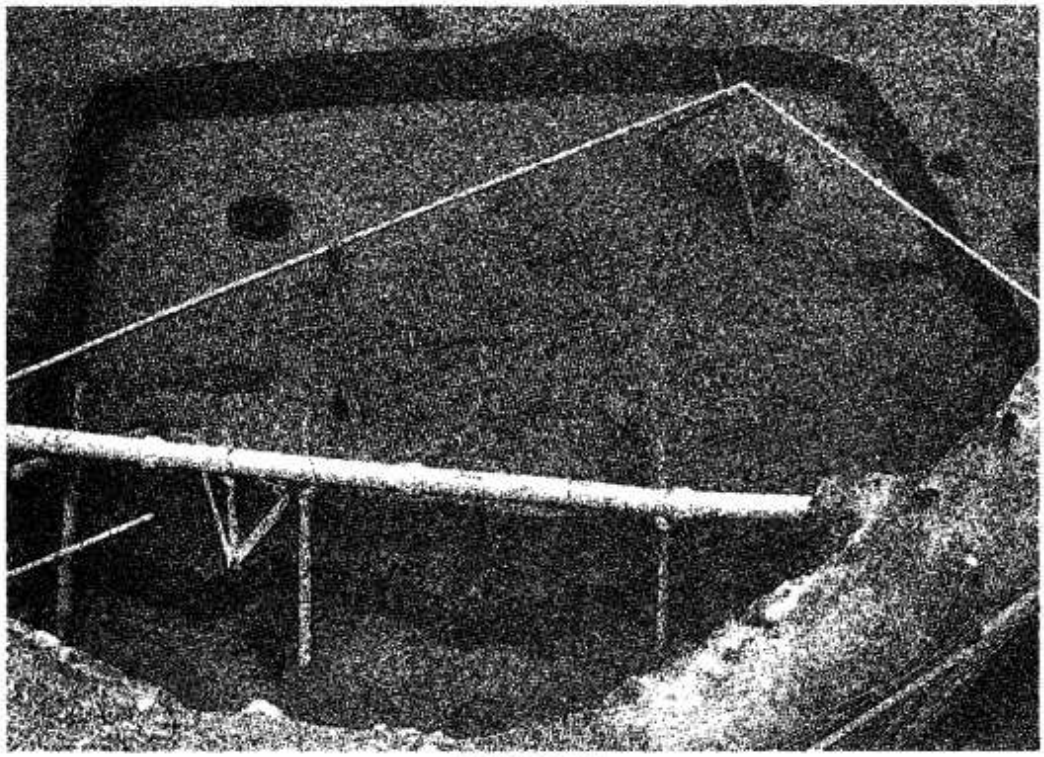
第44号住居跡遺物出土状況



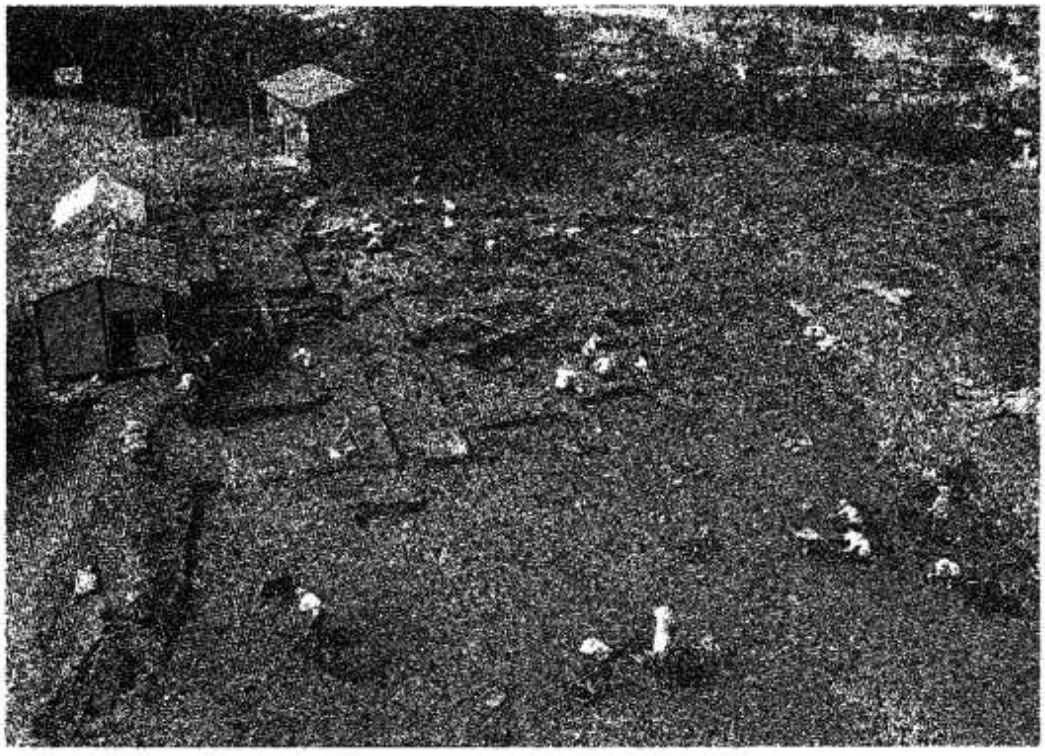
第45号住居跡

第46号住居跡

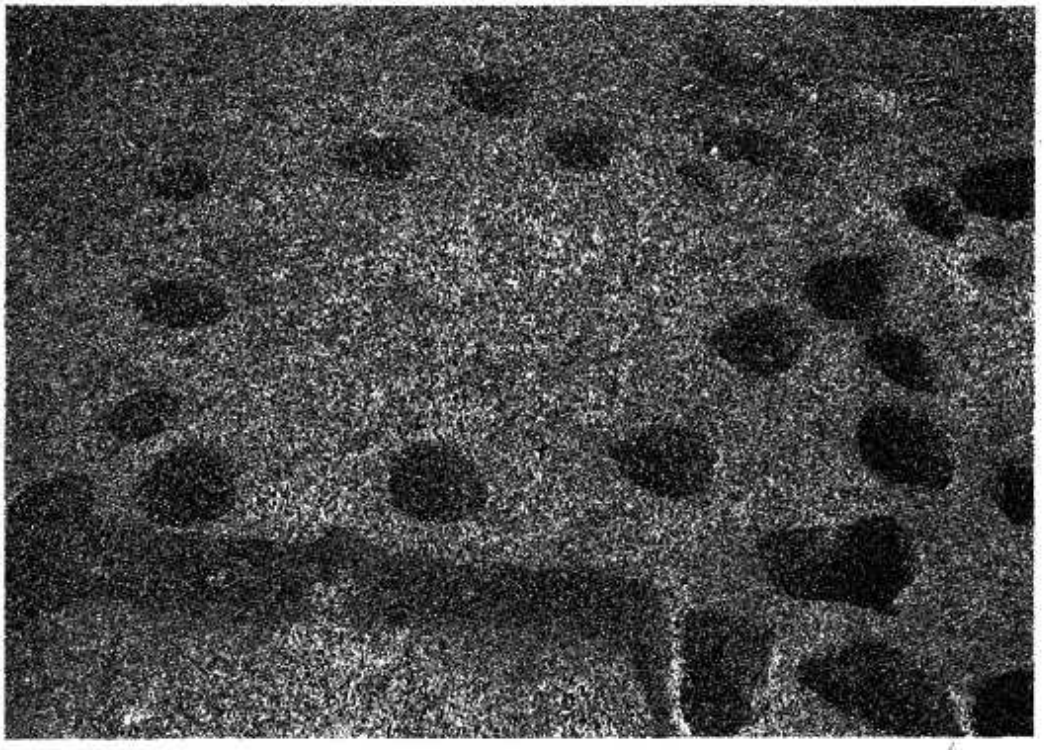
PL20



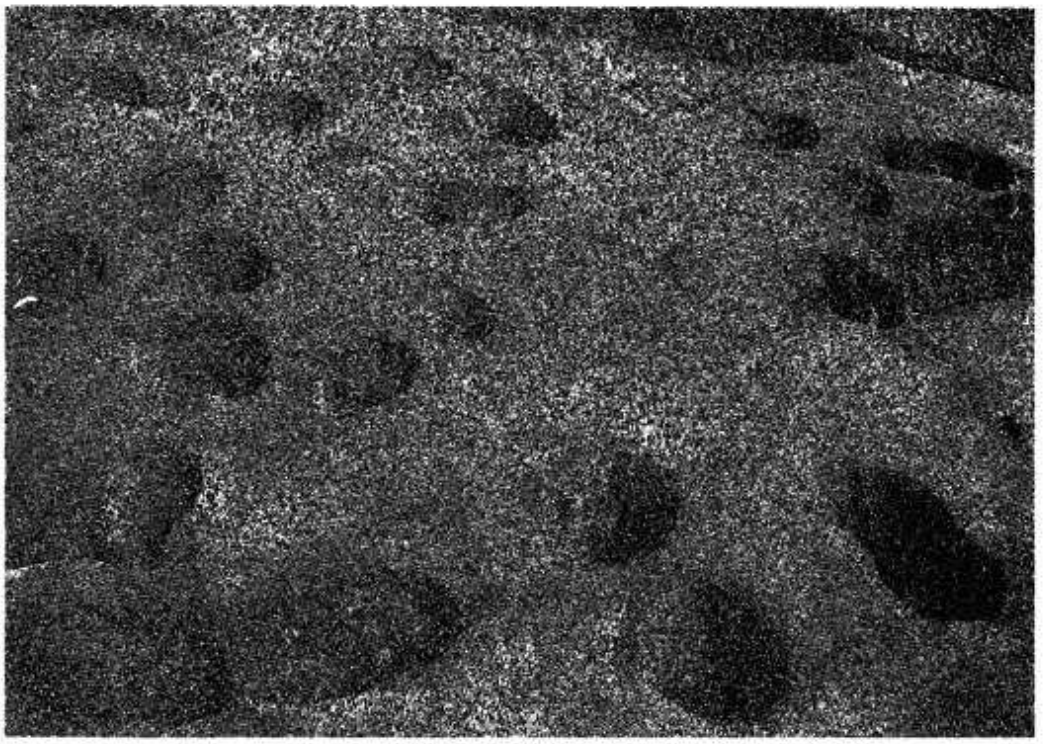
第47号住居跡



第II次調査風景

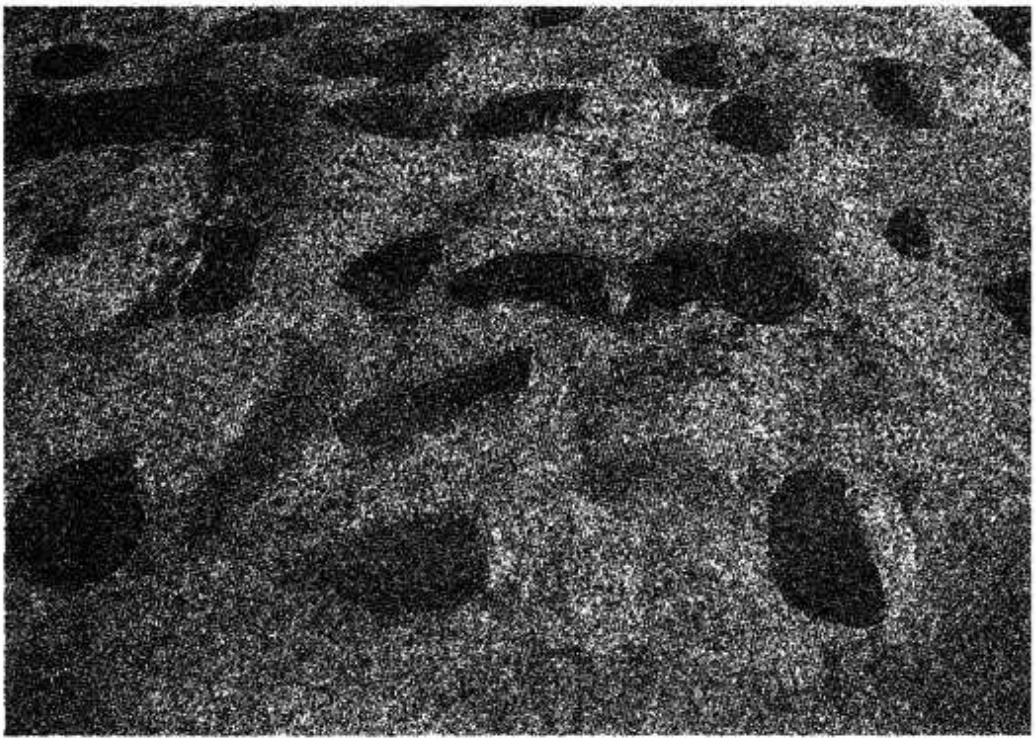


第1号掘立柱建物跡

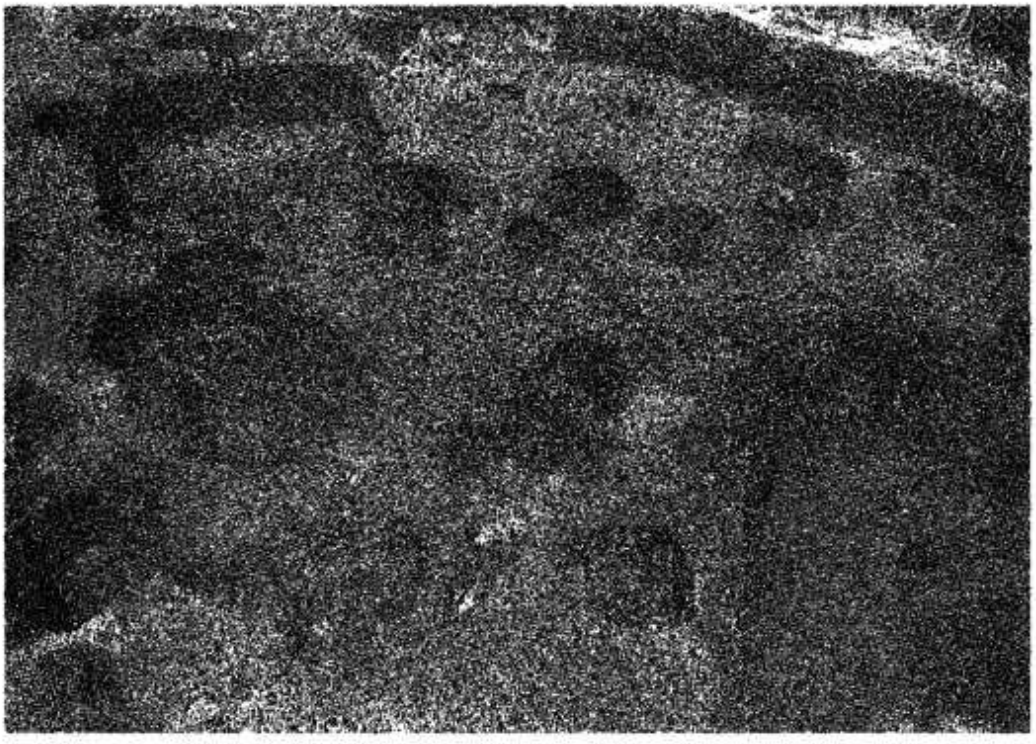


第2号掘立柱建物跡

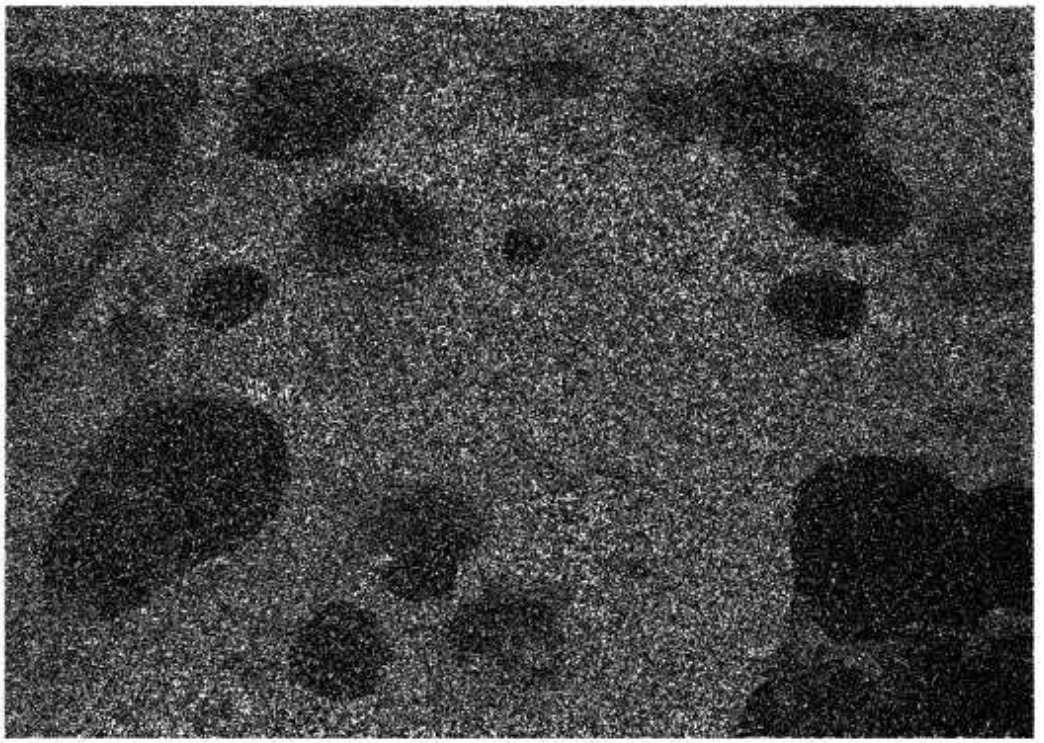
P L 22



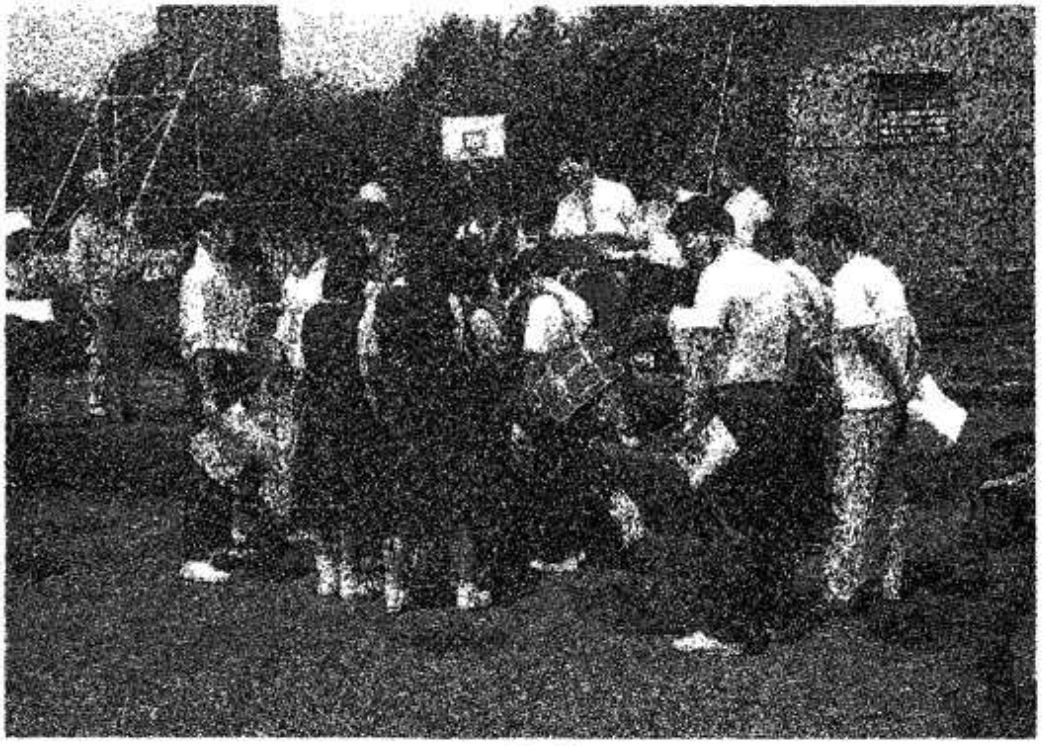
第３号掘立柱建物跡



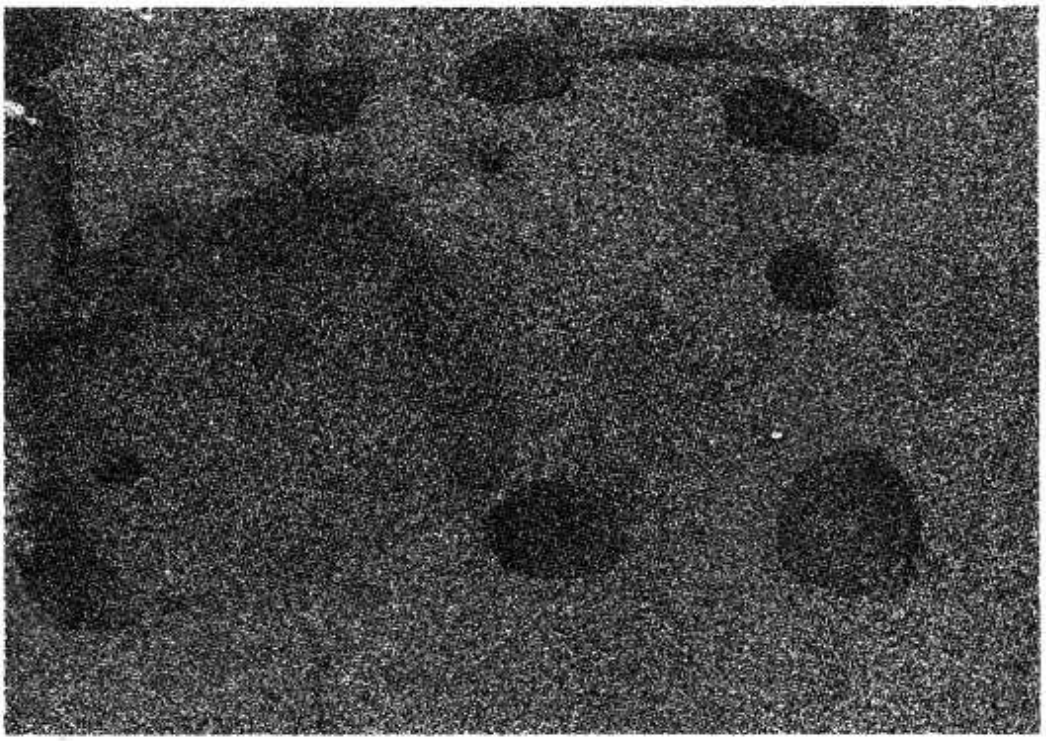
第４号掘立柱建物跡



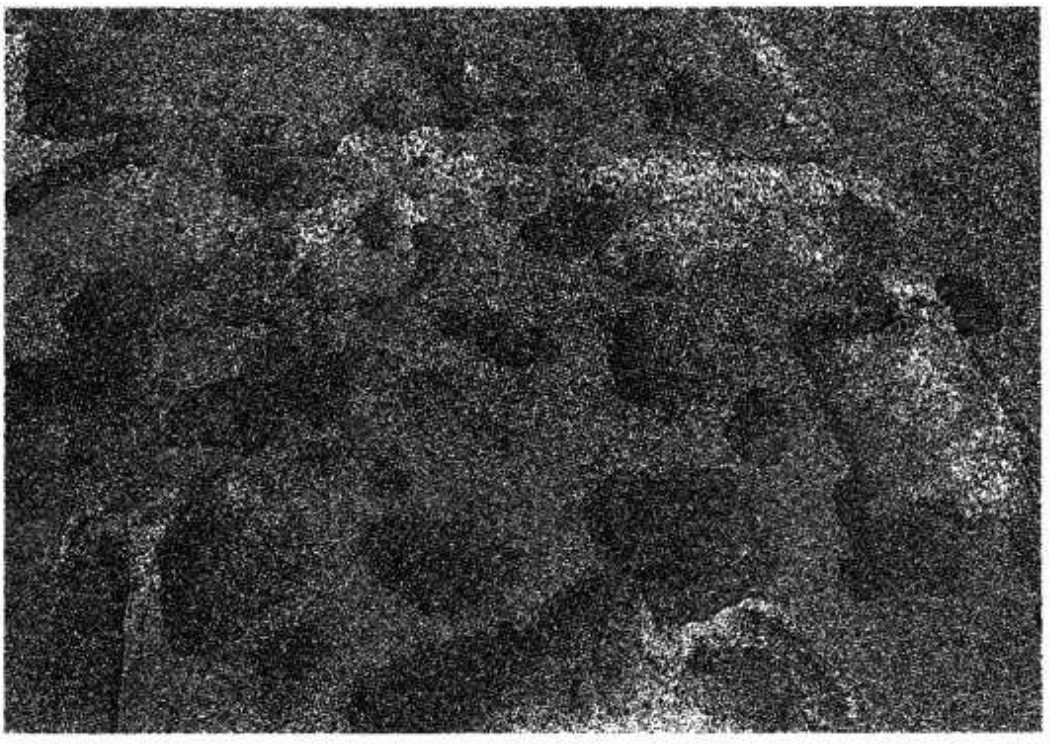
第５号掘立柱建物跡



見学会風景

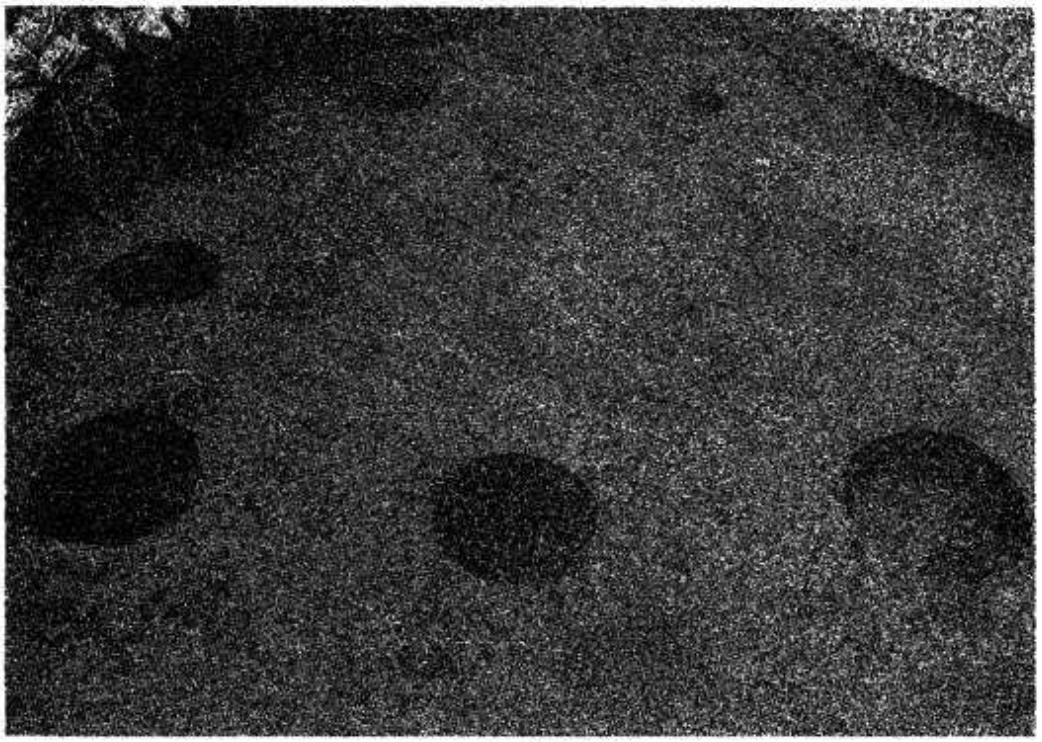


第７号掘立柱建物跡



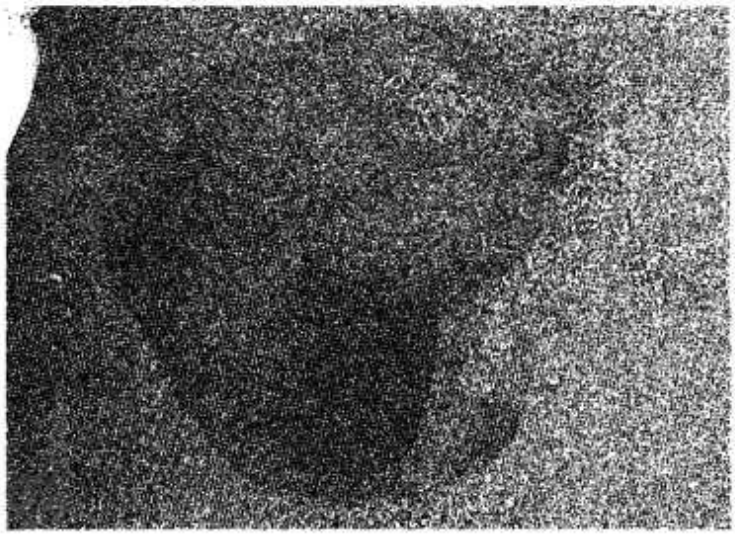
第８号・第９号・第10号掘立柱建物跡

第12号掘立柱建物跡

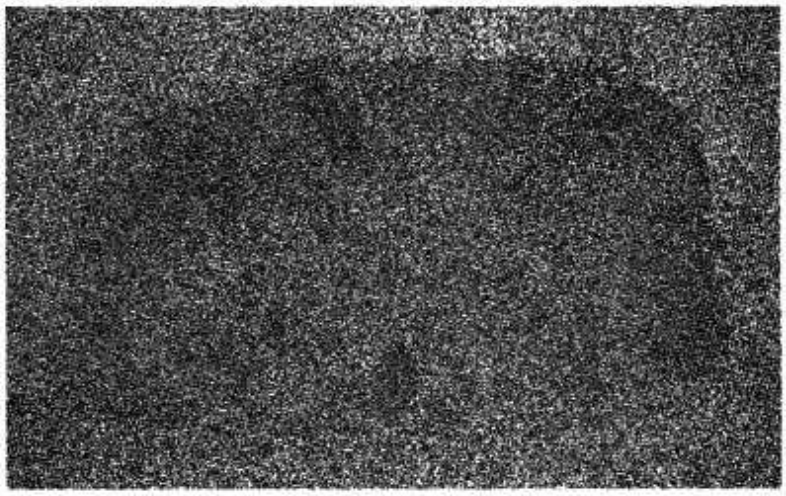


第13号掘立柱建物跡

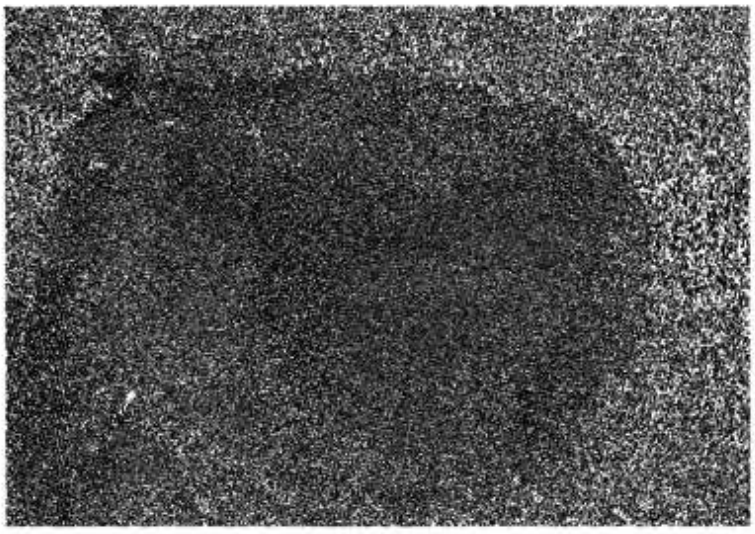
PL26



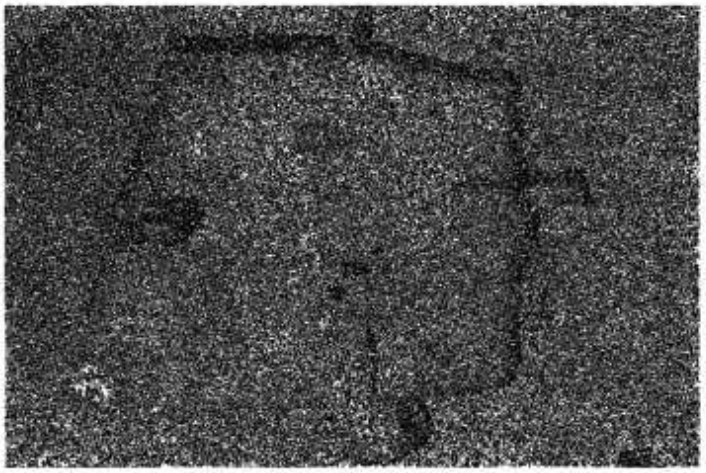
第１号土壙



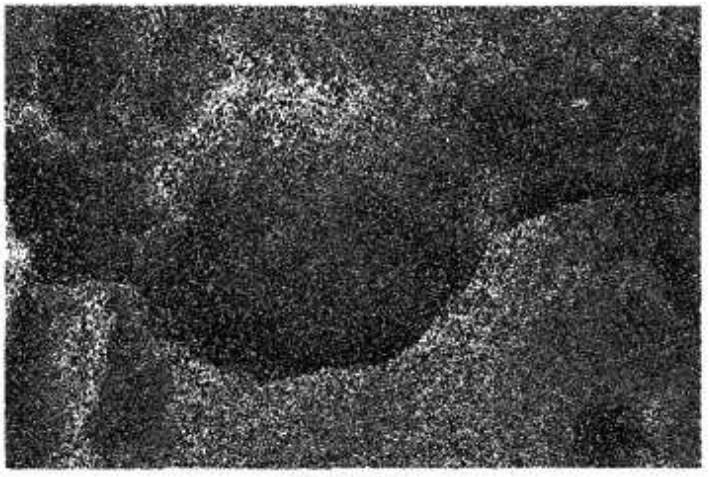
第２号土壙



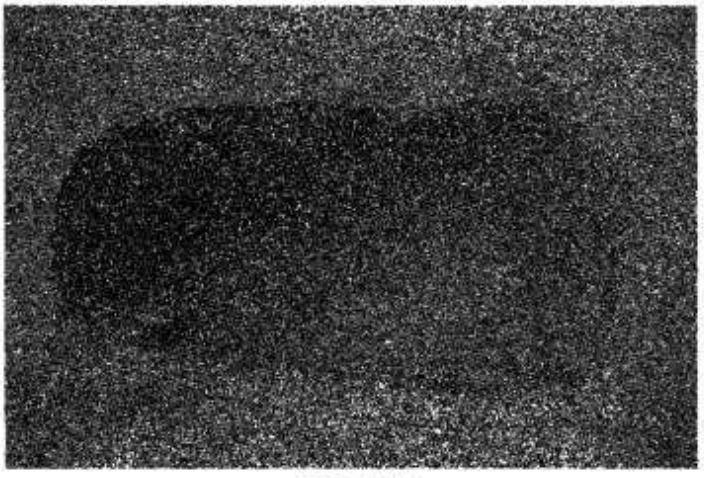
第３号土壙



第5号土壙

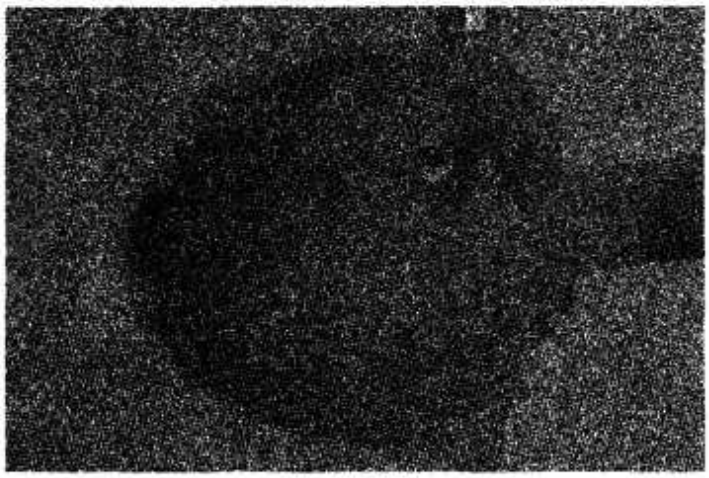


第6号土壙

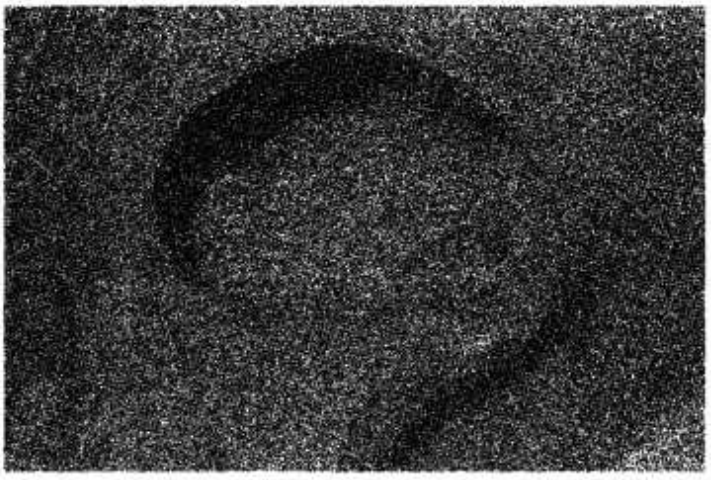


第7号土壙

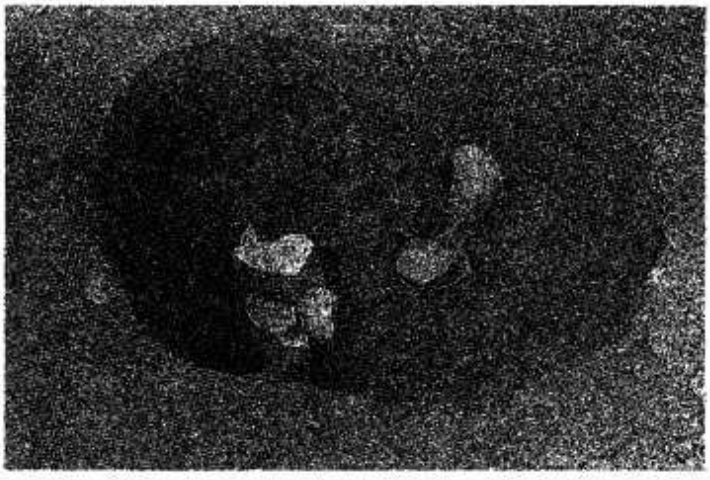
PL28



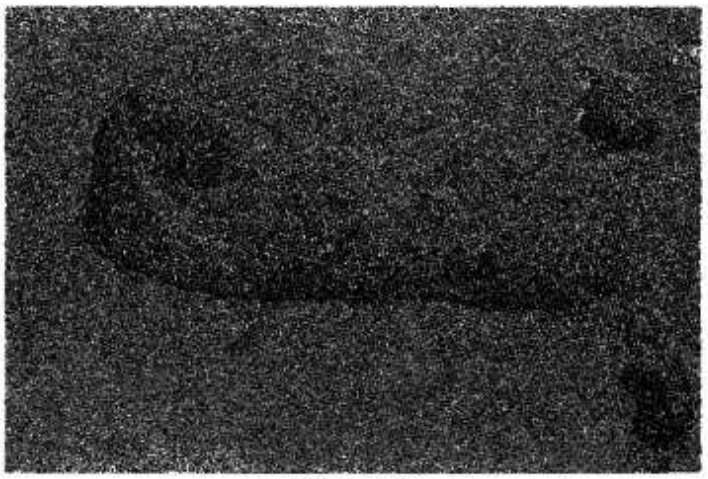
第8号土壙



第10号土壙

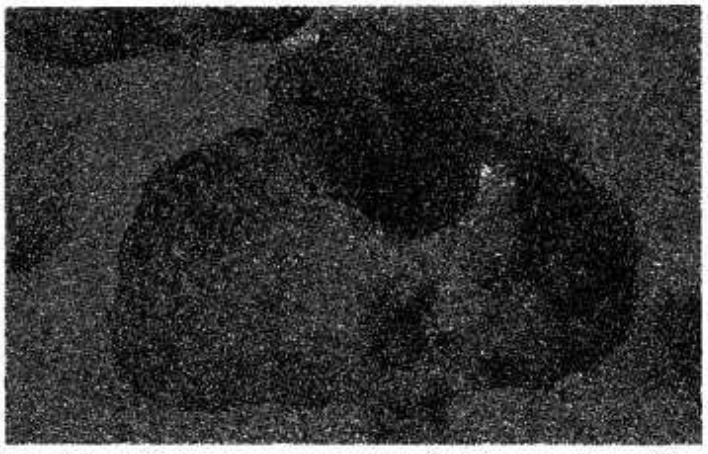


第12号土壙



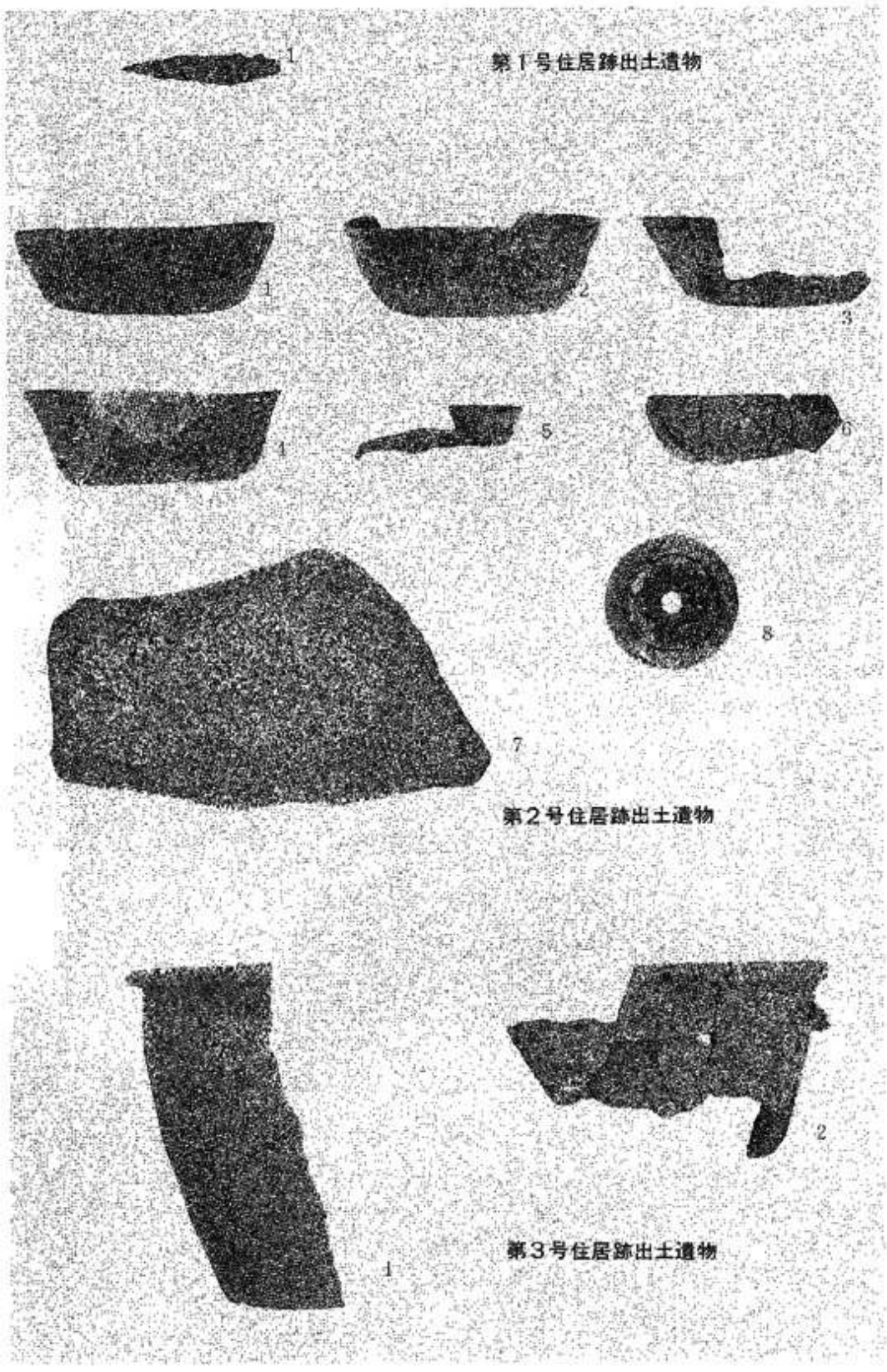
第11号土壙

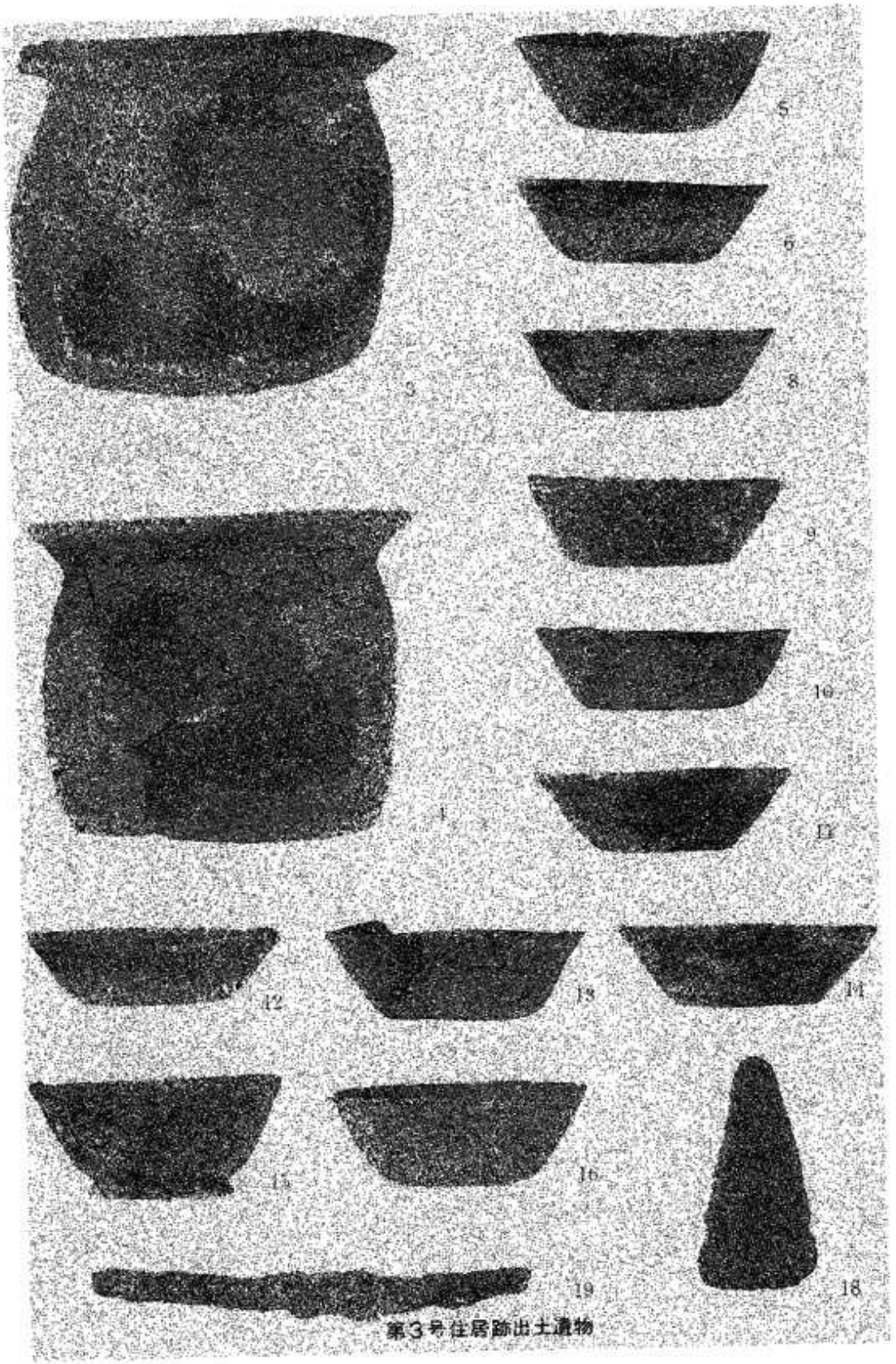
第11号土壙遺物出土状況



第13号土壙

PL30

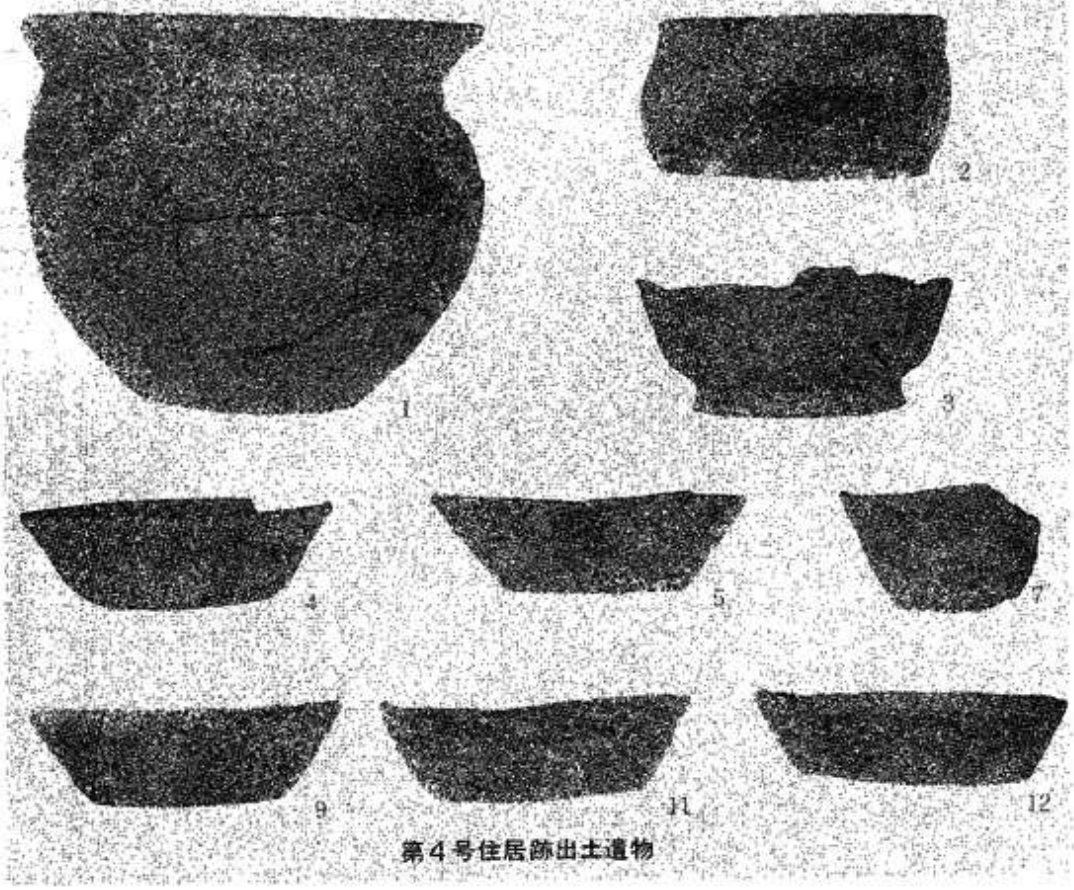




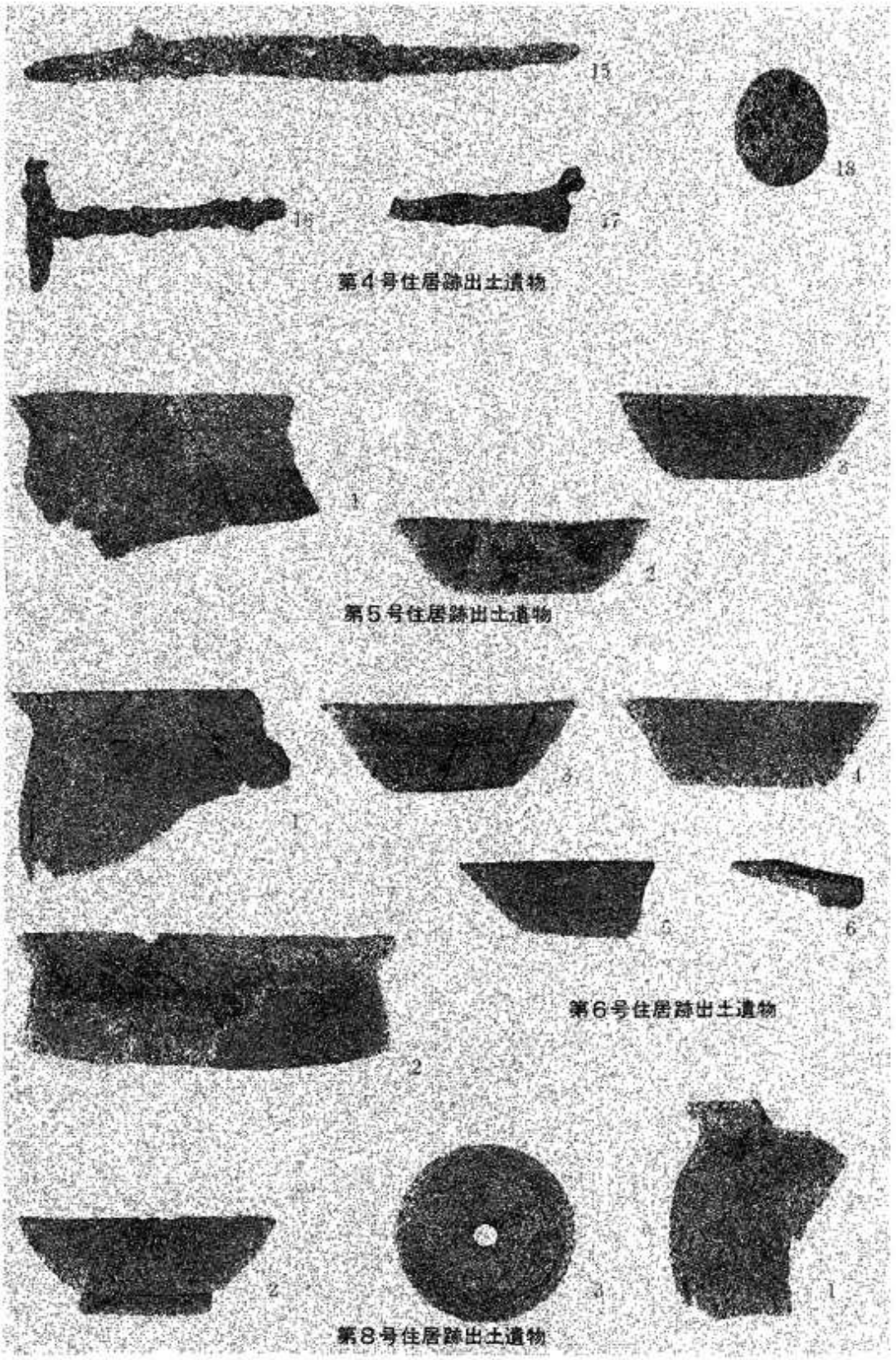

第3号住居跡出土遺物

PL32

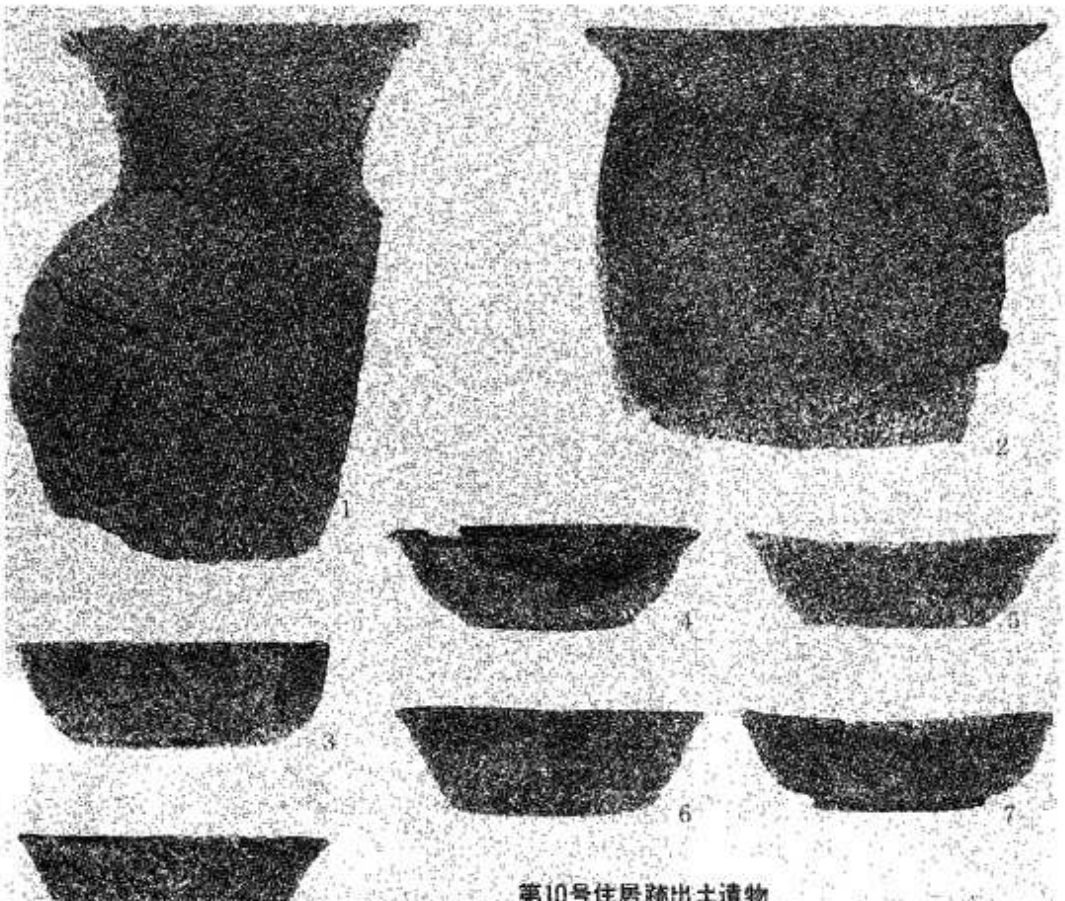
第3号住居跡出土遺物



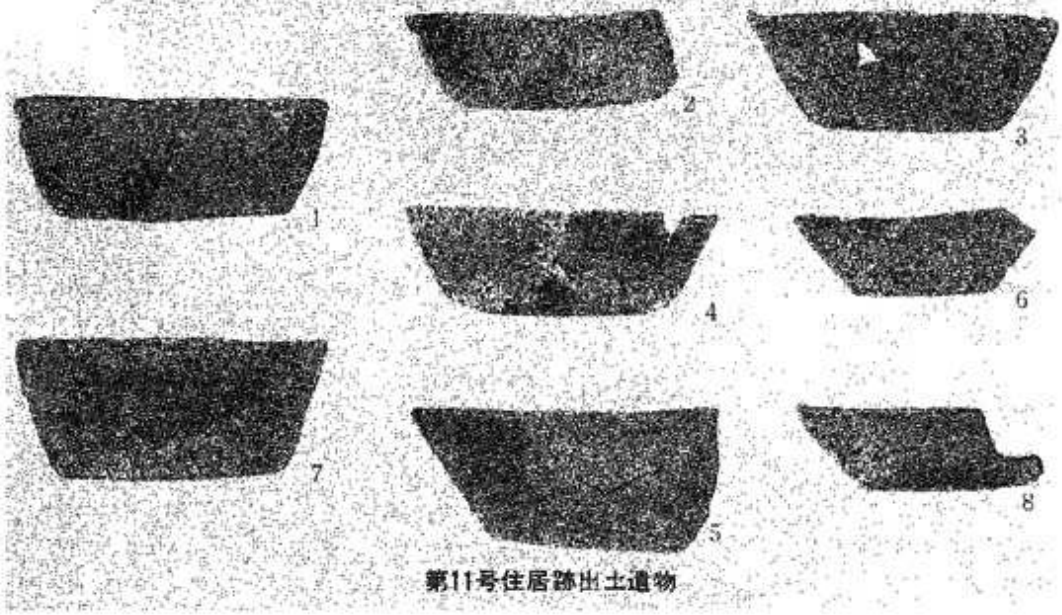

第4号住居跡出土遺物


15
18
16
17
第4号住居跡出土遺物
1
3
2
第5号住居跡出土遺物
1
3
4
5
6
第6号住居跡出土遺物
2
2
3
1
第8号住居跡出土遺物

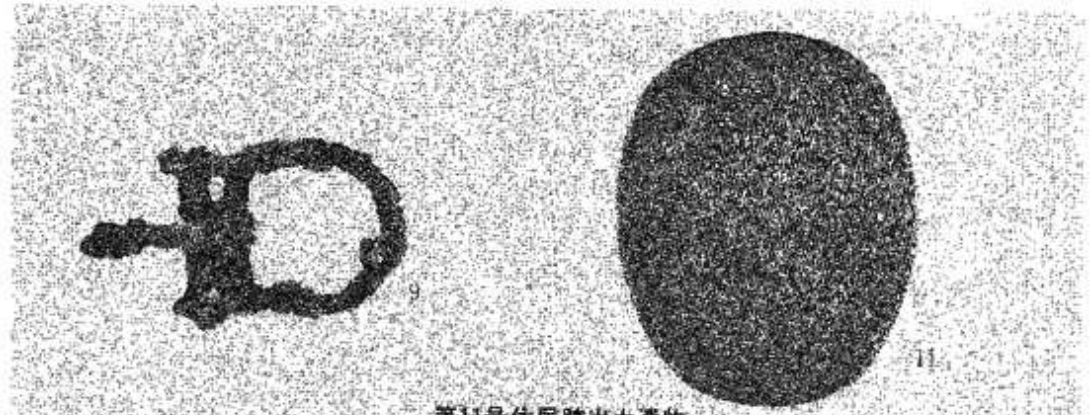
P L.34



第10号住居跡出土遺物

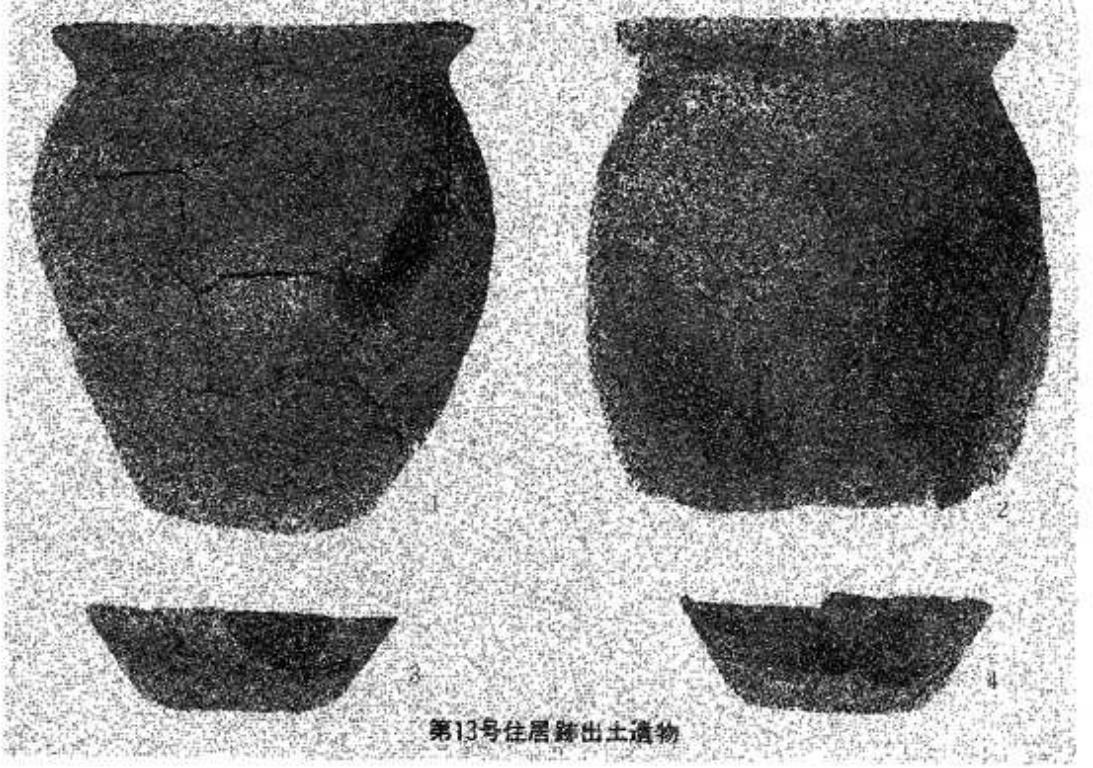


第11号住居跡出土遺物

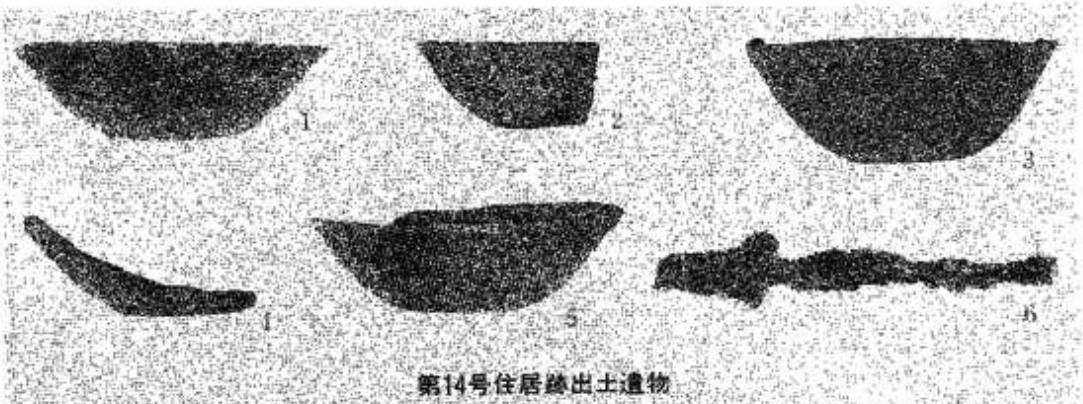


第11号住居跡出土遺物

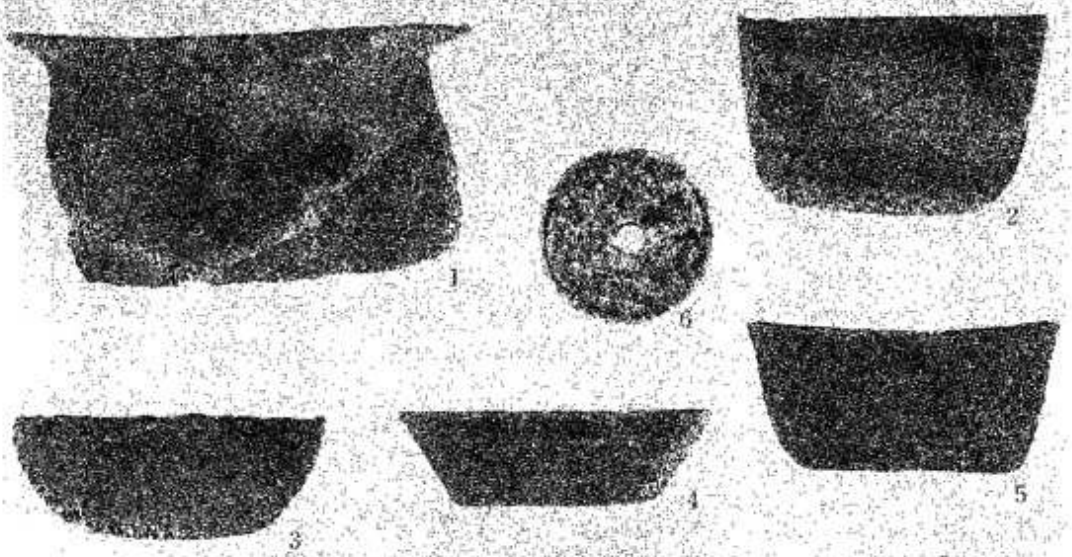
第12号住居跡出土遺物



第13号住居跡出土遺物

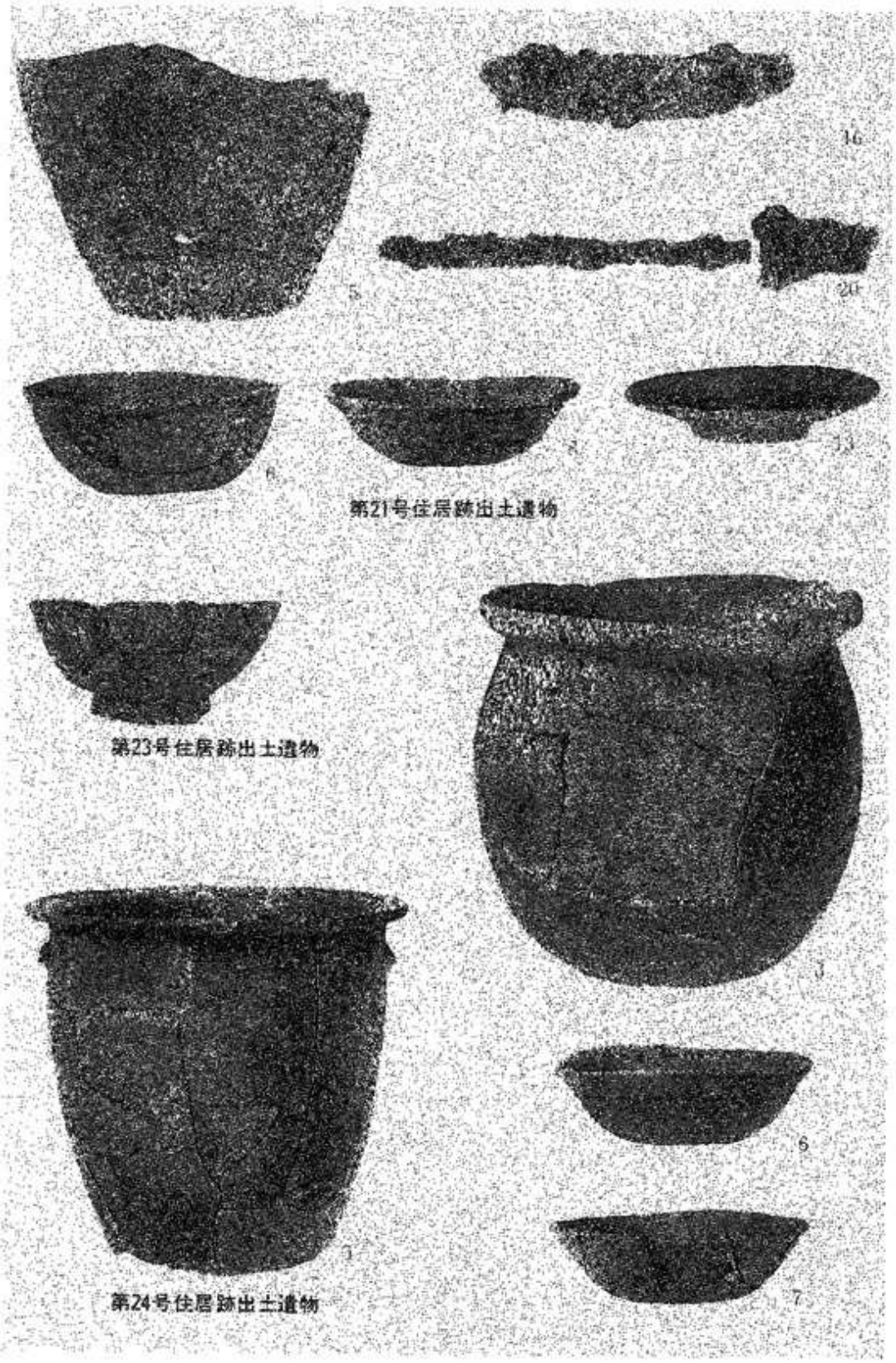


第14号住居跡出土遺物



第15号住居跡出土遺物

第16号住居跡出土遺物




第21号住居跡出土遺物



第23号住居跡出土遺物













第24号住居跡出土遺物

PL38

第25号住居跡出土遺物

第26号住居跡出土遺物

第28号住居跡出土遺物

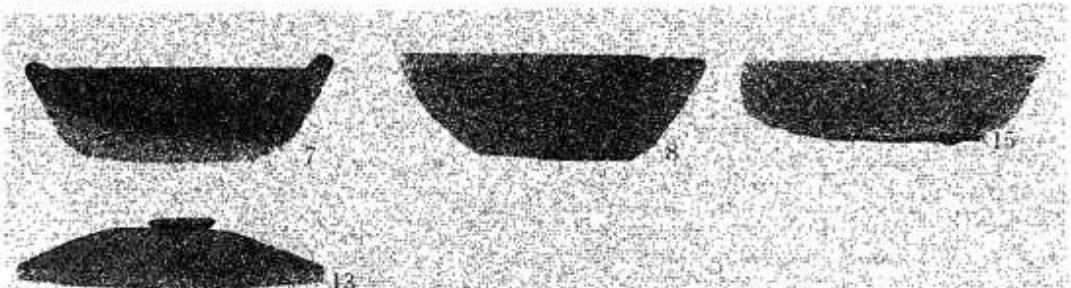
第27号住居跡出土遺物

第31号住居跡出土遺物

第32号住居跡出土遺物

第33号住居跡出土遺物

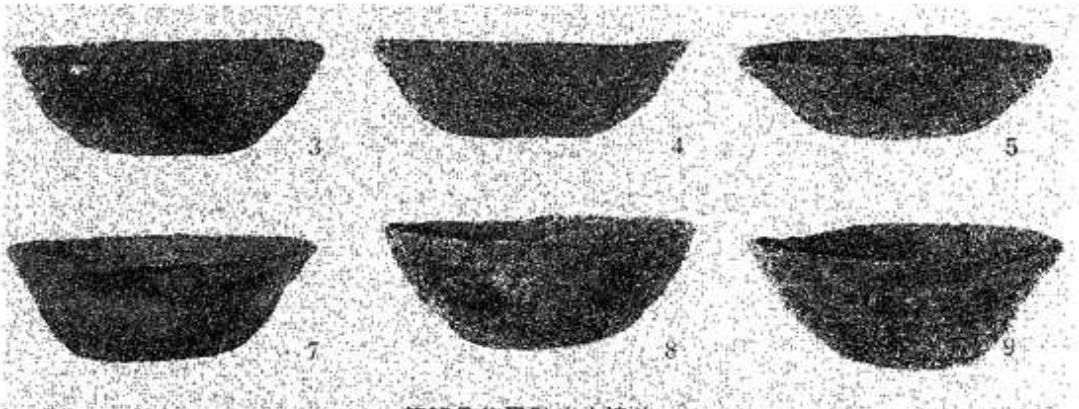
PL40



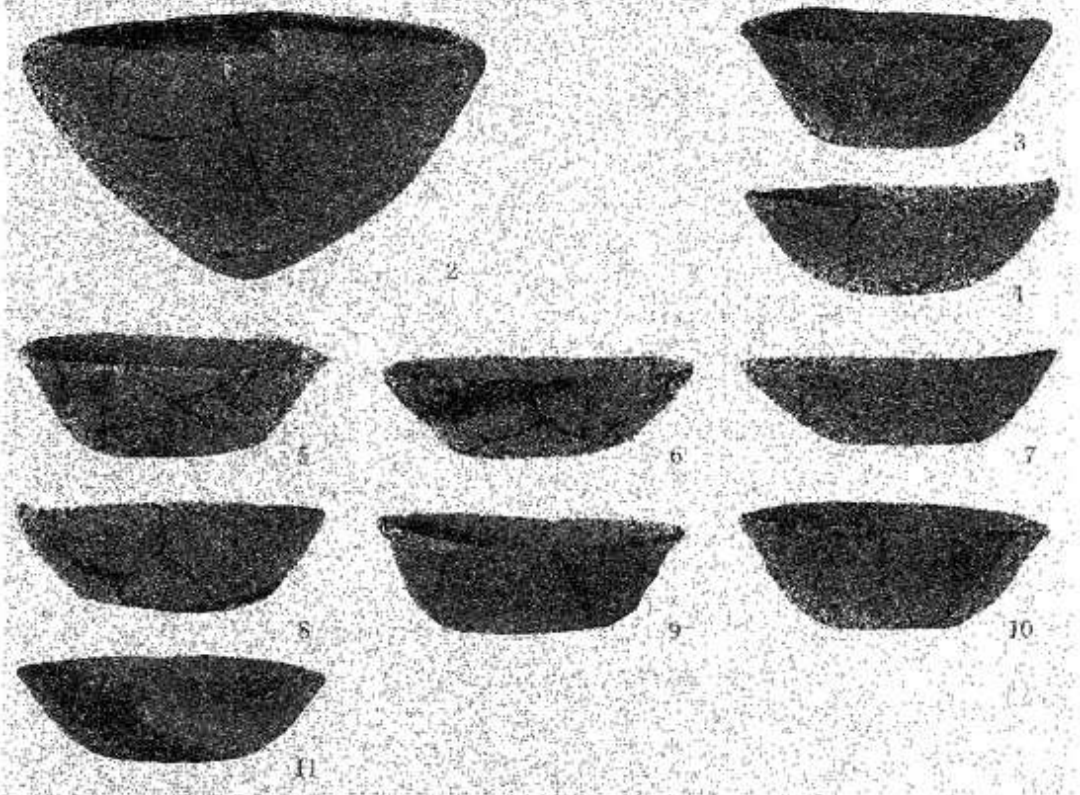

第33号住居跡出土遺物

第34号住居跡出土遺物

第35号住居跡出土遺物



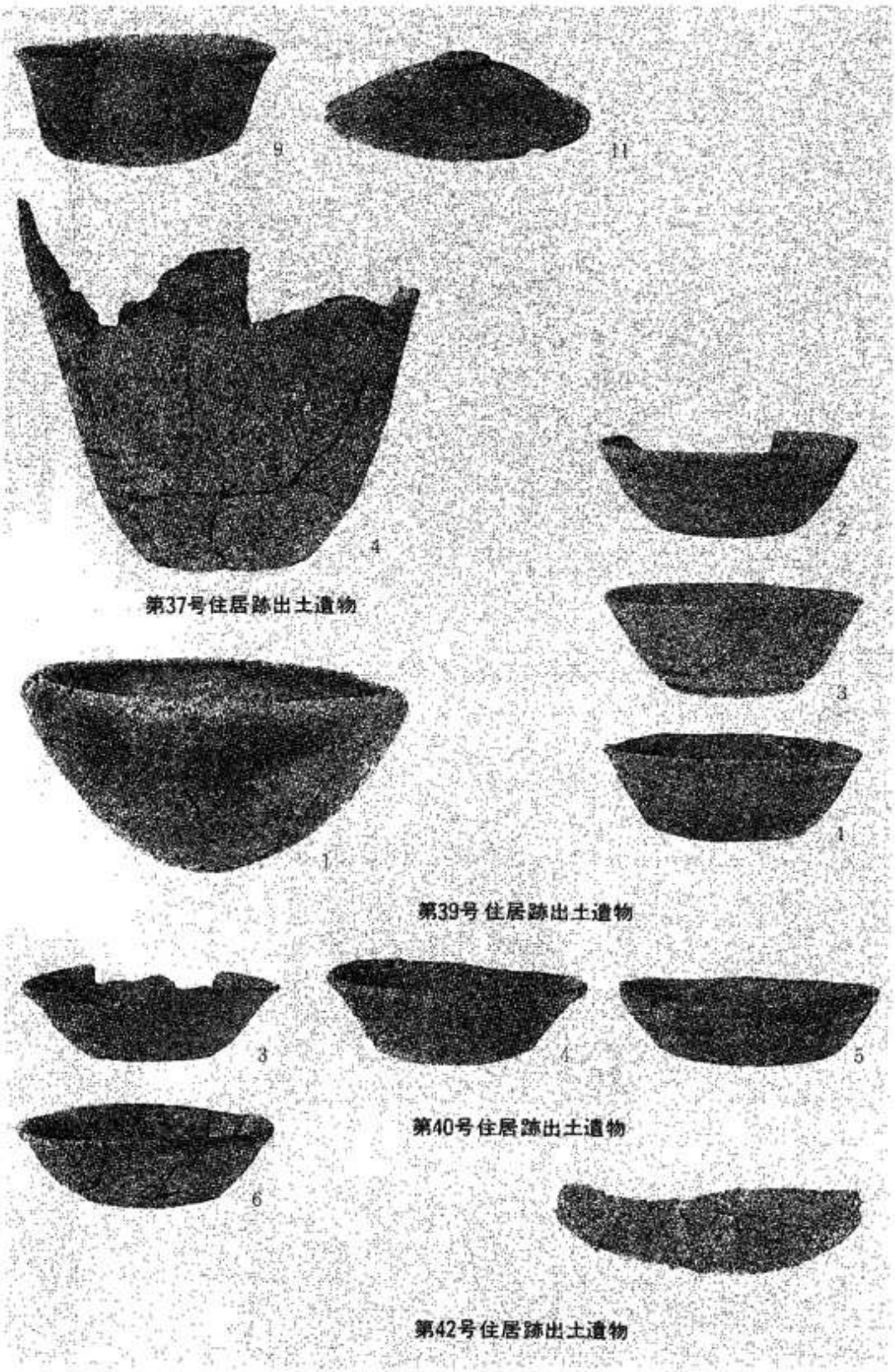
第35号住居跡出土遺物



第36号住居跡出土遺物

第37号住居跡出土遺物

PL42

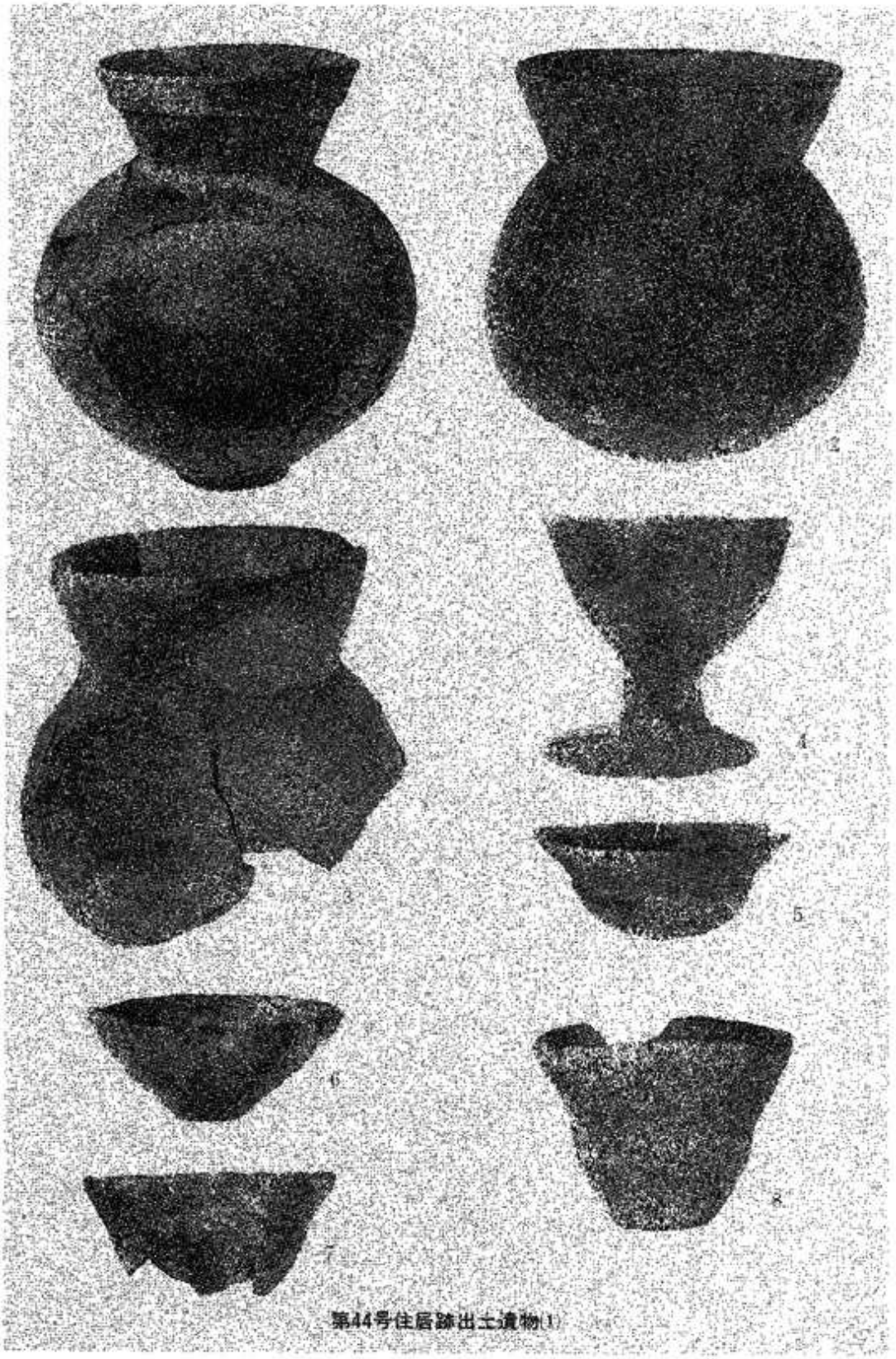



第37号住居跡出土遺物

第39号住居跡出土遺物

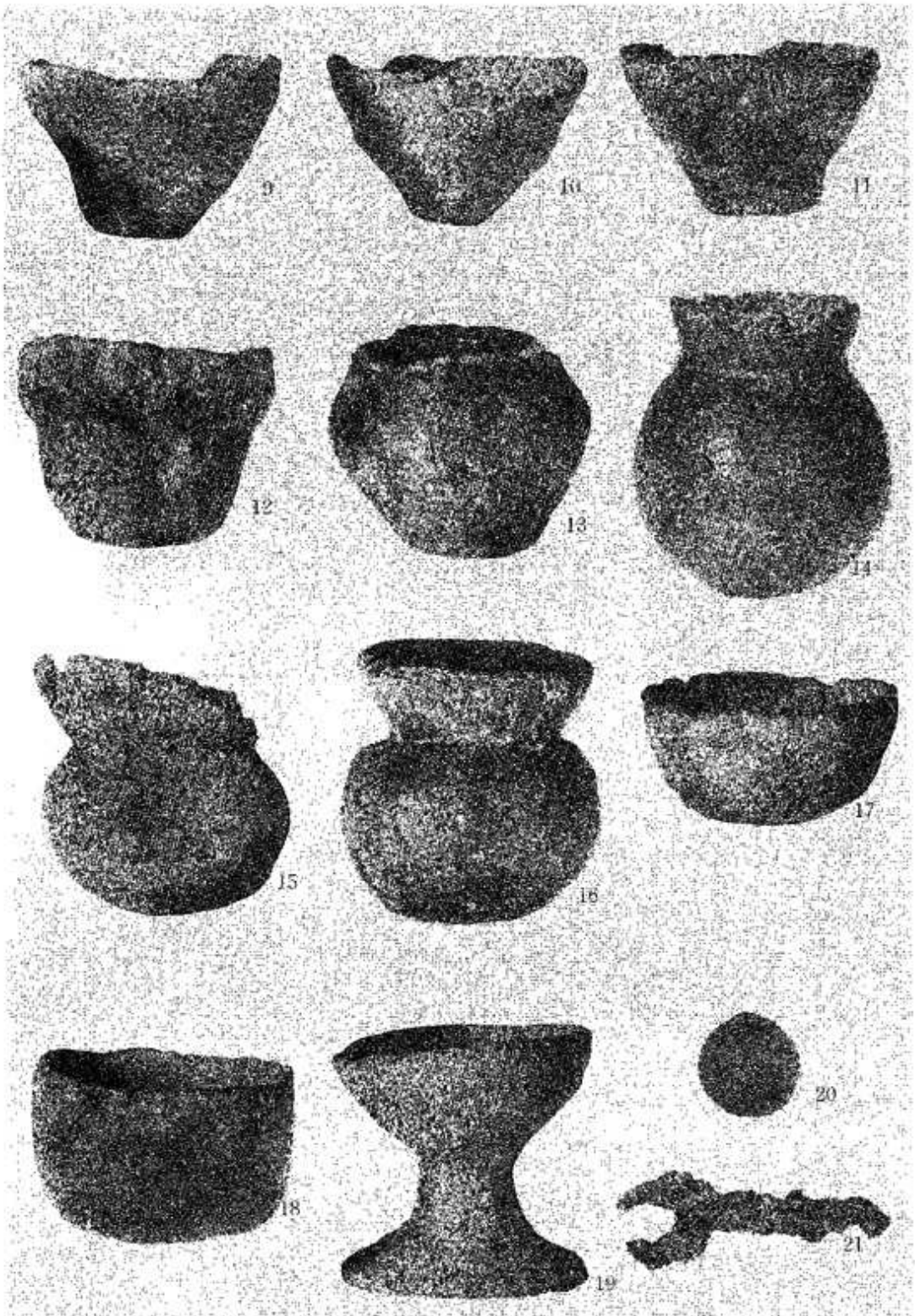
第40号住居跡出土遺物

第42号住居跡出土遺物

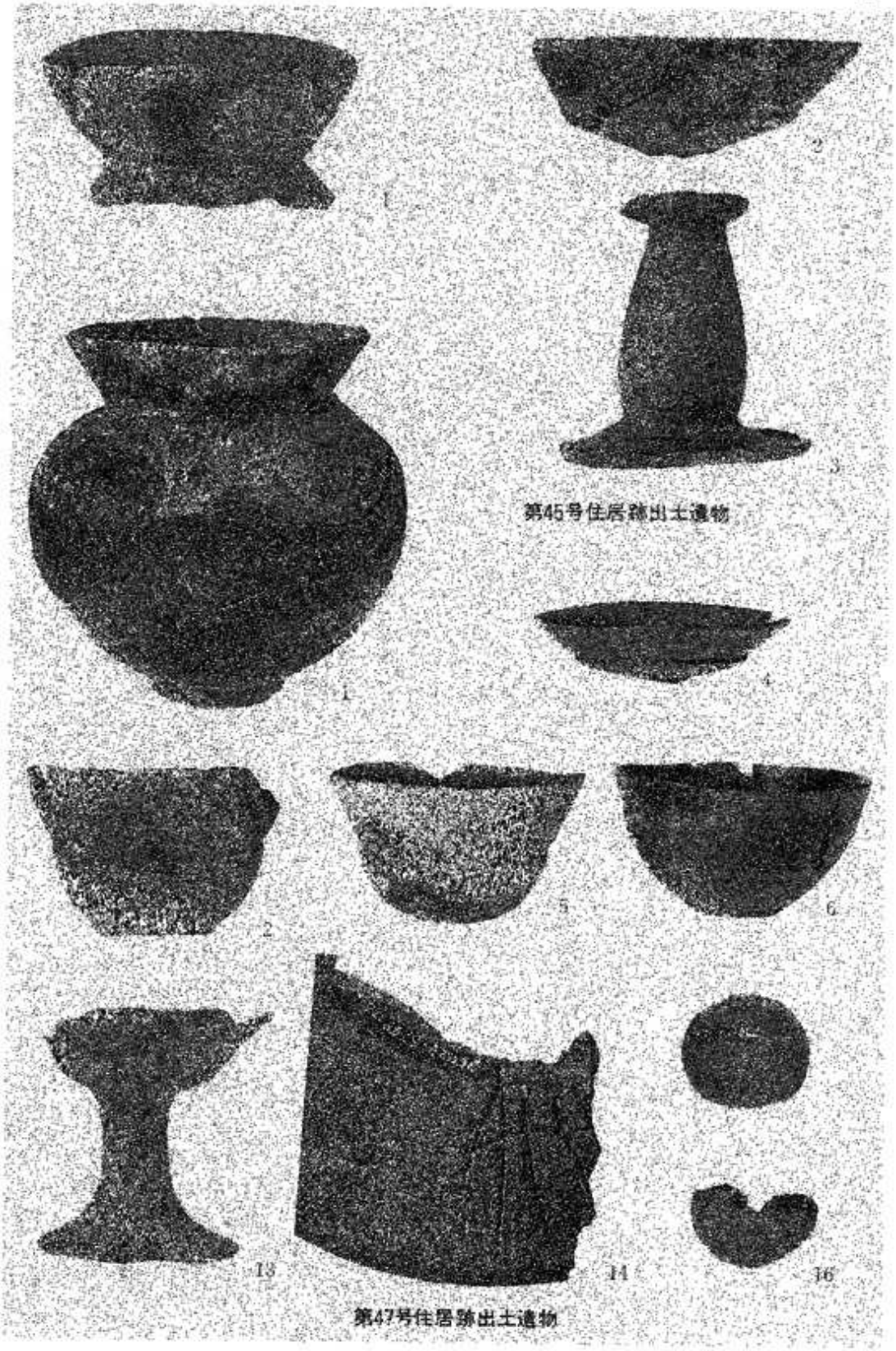


第44号住居跡出土遺物(1)

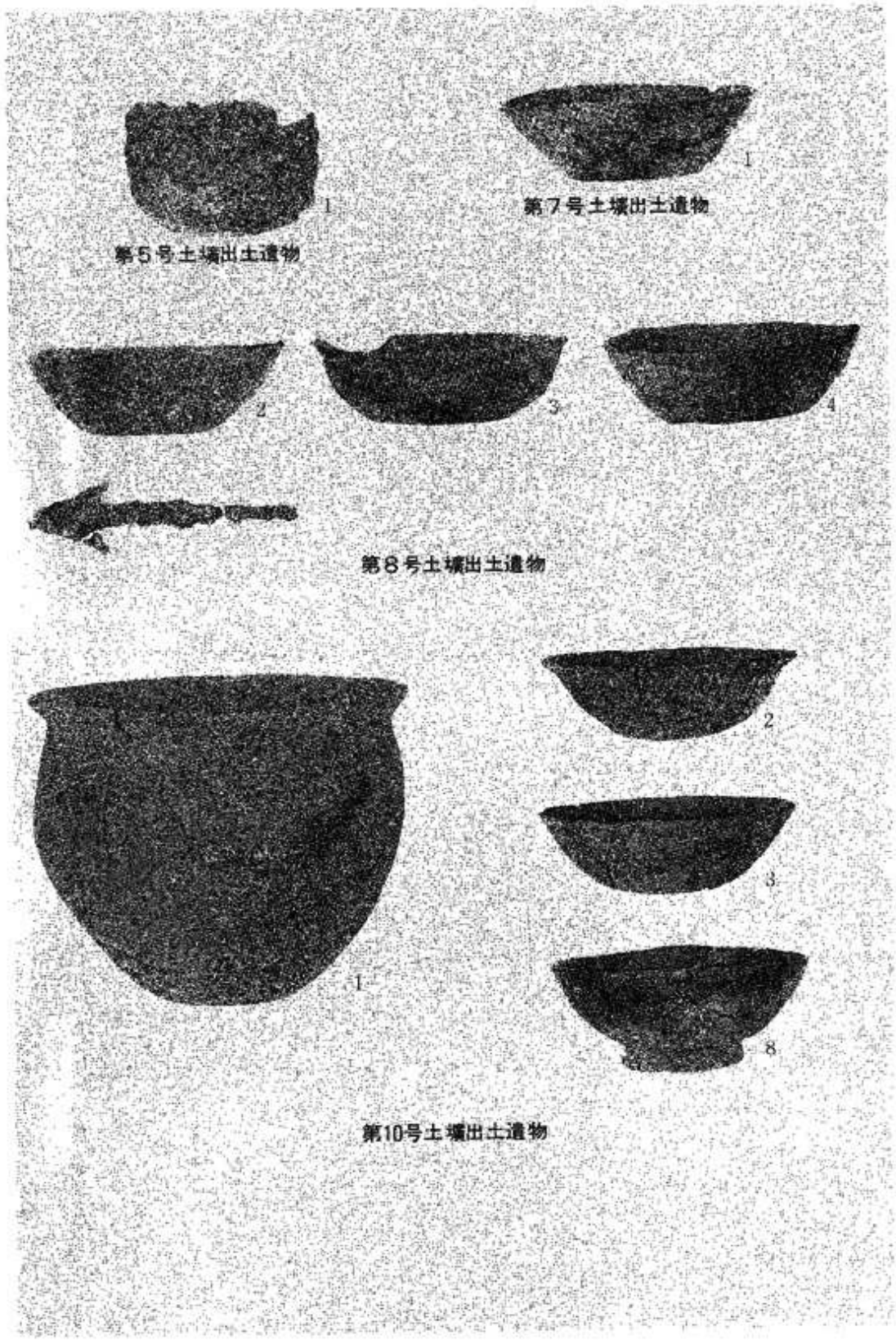
PL44

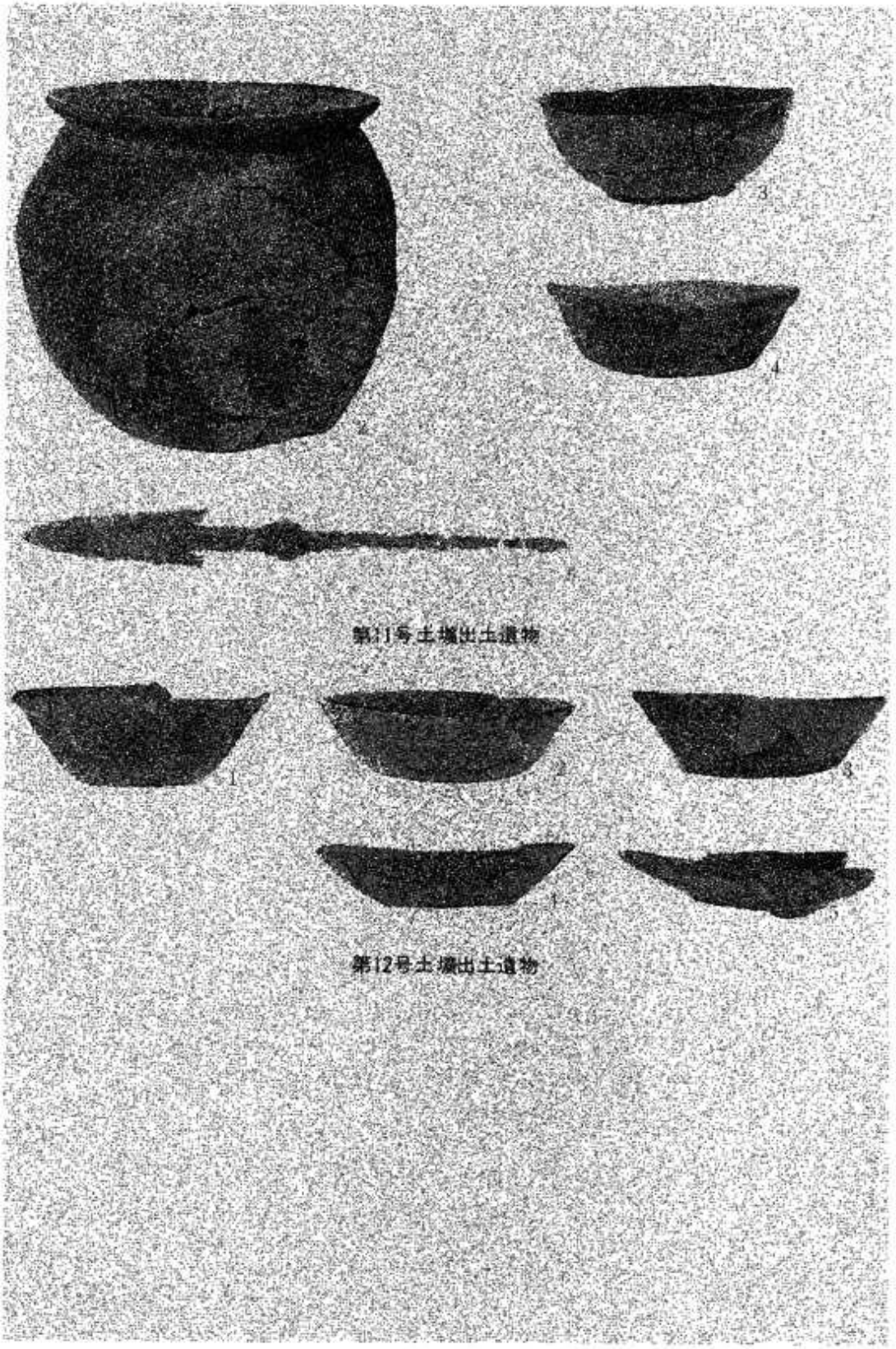



第44号住居跡出土遺物(2)


1
2
3
第45号住居跡出土遺物
1
4
2
5
6
13
14
16
第47号住居跡出土遺物

PL46





第11号土壙出土遺物

第12号土壙出土遺物

# 立 木 南 遺 跡

昭和63年3月31日　発行

発 行　千 葉 市 教 育 委 員 会

千葉市千葉港2－1

財団法人 千葉市文化財調査協会

千葉市南生実町1210番地

印 刷　株式会社 弘 報 社 印 刷

千葉市古市場町474－268